

---

# 琥珀色の風

徳次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

琥珀色の風

### 【Nコード】

N0077D

### 【作者名】

徳次郎

### 【あらすじ】

内向的な性格の為クラスでも存在感の薄い五十嵐優子は高校二年生。しかし、脳内を駆け巡る彼女の思考はちよつと過激で挑発的だ……そんな彼女に思いもかけない事件が起きる。校内イチのモテ男が向こうから電話をしてきたのだ……何かが動き出し、優子の学校生活は周囲との関わりが変わってゆく。

## ブローグ 第1話 (前書き)

本作は意図的に情景描写を減らしてセリフや思考での表現を多くしています。

誰にでも読み易い趣向と、早いテンポを意識しています。

ダッシュ( )で始まるのは、全て主人公である優子の思考です。

## プロローグ 第1話

校舎の窓から午後の淡い陽差が注いでいた。

昼休みの喧騒が校舎内に響き渡り、行き交う生徒たちの隙間を満たしてゆく。

階段の踊場の窓から注ぐ光は、二日前にワックスをかけたばかりの床を虚ろに照らしていた。

キュツという音が微かに響いた。リノリウムの床に上履きの靴底が擦れた音だった。

「きゃっ」

五十嵐優子は階段の踊場から廊下へ出る角で、誰かとぶつかった。人影が微かに見えて身をかわそうと身体を捻ったが、相手は余所見をしていたのか、彼女はまともに相手の肩の辺りに顔をぶつけて手に持っていたものを床に落つこととした。

ちよつと何処見てんのよ、まったく。ちゃんと前見て歩けての。だいたいこっちは身体半分避けてんだから、あんたが残りの半分避けなかったらぶつかるに決まってるじゃないの。

お陰で、次の授業で使う教材、床に落としちゃったじゃないの。もう、どうしてくれるのよ。

しかし、彼女はそんな言葉を口には出さない。

優子は眉根を寄せて一瞬顔をしかめた。

それはほんの一瞬で、相手がその表情に気付く間もない。

「ごめん、大丈夫だった？」

ぶつかった相手は同じクラスの高森忍。学年イチの秀才にしてスポーツ万能。当然、モテ男度も学年、いや校内TOPレベルだった。同級生に限らず、上級生や下級生からも憧れの的だ。

バスケットでは並外れた運動神経を駆使して、172センチの身長ながら周囲のノッポ連中を当惑させる。

忍は優子が落とした教材を拾う為に身体を屈めた。

「うん。平気よ。あたしこそボーっと歩いていて……」  
かがんだ忍を見下ろすように彼女が言った。

彼は拾い上げた教材を優子の手の上に乗せると  
「はい。何処も壊れていないようだね。よかった」

そう言って目を細め微笑んだ。

スポーツをやっているにしては少し細い首筋……それに程よく尖った顎先。

笑うと出来る目尻の小さなシワ。たいした光源も無いのに輝く白い歯。

鼻の上で長い前髪がサラリと揺れる。

そんな笑顔があたしに通用するかつつの。それで何時でも乗り越えられると思ったら大間違いなんだよ。

「あ、ありがとう……」

優子は小さく俯きながら、小声で応えた。

「五十嵐は偉いな。何時も教材とか運んで、真面目だよ。うん」

「……クラス委員……だから……」

そう思っただったら、少しは手伝えっの。だいたいあんたに褒めてもらったり哀れんでもらう筋合いはないんだよ。

「おい、忍、早く来いよ」

廊下の向こうで声がした。クラスの男子が忍を呼んでいた。

「じゃあ、頑張って」

忍は小さく手を上げると、小走りに仲間のところへ去っていく。

優子は一瞬彼を目で追うと、直ぐに視聴覚室へ向って歩き出した。

五十嵐優子 16 歳。

高校二年生の彼女は可もなく不可もないような普通の生徒だ。親しい友達があまりいないのは、彼女の存在感が薄いせいかもしれない。

話し声が小さい為、あまり人と話す事は得意ではない。いや、人と話すのが得意でない為に声が小さくなるのか……

そんな彼女がクラス委員なのは、他薦による投票結果で、つまりどうでもいい奴がクラス委員になったというわけだ。

当然のように男子のクラス委員もどうでもいいような奴だから、ほとんど話もしたことが無い。

しかも優子から見てもドン臭くて手際が悪いので、用事はほとんど彼女が一人でこなしていた。

もう一人のクラス委員である舟越を見ると、いつも優子は思ってしまう。

「まったく、使えない奴。いつもあたしが用事をこなしてるのに、お礼すら言った事が無い。」

6 時間目が終わった時、世界史の教師は宿題のレポートを集めて後で職員室へ持って来るようにクラス委員に言った。

レポートを集める優子は、結局男子の分も集めるはめになりながら自分の席でポケットとしている舟越を見る。

「なにあいつ。どういう思考回路で生きてんの？ 自分がクラス委員だって事解ってないのか？」

優子はひと通りみんなの分を集めると、舟越に近づいて手を差し出した。

「レポートは……？」

「ああ、俺忘れちゃってさ……」

舟越は完全に顔を上げようとはせず、少し太い声で言った。

優子に視線を向ける事は無く、正面の壁の辺りを見ている感じだ。

「つか、あんたも集める係りなんだよ。気付けよウストラボケ。」

クラス委員が二人いるのに、あたしだけがせつせと働いてるのが不自然だと思わないのか？

「そ、そう」

優子はそれだけ声に出すと、彼から離れて職員室へ向った。

優子は学校帰りも一人の事が多い。

もちろん全く友達がいらないわけではないが……

「優子、先に行っちゃうんだもん。軽く探しちゃったよ」

「ああ、一葉<sup>かずは</sup>」

「ああ、じゃないよ。どうしてそうやって一人で帰っちゃうかな。

優子は」

「だって、ぱっと見たらいなかったし」

「もう……」

一葉は息をついて肩をすくめる。

こんな具合に優子は一人でいる事に抵抗がないのか、自分から友達に声をかけて一緒に帰るような事もあまりしない。

「今日、お昼休みに高森とぶつかったんだって」

「な、なんで知ってるの？」

「男子が言ってたよ、優子が高森の肩にキスしたって」

「だ、誰よそんな事いうのは」

優子の身長は156センチしかないので、あの時忍の胸板というか、肩に顔がぶつかったのは確かだ。

ただ、キスというよりは、顔がめり込んだという感じが……

ざけんじゃねえよ。誰があんなすかした男の肩にキスなんてするか。だいたい、何で一葉まで楽しそうにしてんの？ 全然わかんない。

「ちよ、ちよつとぶつかっただけよ」

「でもさ、高森っていい二オイするよねえ」

優子のいいわけには興味が無いように、一葉は遠くの空を見上げ

て言った。

「そ、そう？ 別に何も匂わなかったけど」

そりゃ、あんたの思い込みだよ。なんでアイツだけいいニオイなわけ？ もしそうだとしたら、こじやれた香水でも着けてるんでしょ。そんなの、アイツの匂いでも何でも無いじゃん。香水の匂いじゃん。

「あんた鈍感だから、匂わなかったんじゃないの？」

一葉はそう言っ、あははと声を上げて笑った。

もちろん、本気で馬鹿にしているわけでは無いのだが……

なんで？ なんであんにそこまで言われなくちゃいけないの？ この色ボケ女。

「あはは……そ、そうかな」

優子は困惑した表情を隠すように、軽く声を出して笑って見せた。



## 第2話

優子は自宅玄関のドアを開けると、静かにローファーを脱いだ。小さい頃から共働きのので「ただいま」を言う習慣はない。

彼女の家はごく普通の小さな二階建ての一軒家で、さほど大きくない庭もついている。

父親は某乳製品メーカーで働き、母親は隣駅のスーパーでパートとして働いている。

「姉ちゃん、今晚は精のつくもの頼むぜ。俺、明日はガツチリ決めなくちゃならないからさ」

茶の間、いやこの家族はリビングと呼んでいるが……そこから弟の直樹が顔を出した。

き、決めるって、なによ……まさか……まさか、あたしがまだちゃんと手も繋いだ事無いつて言うのに、こんな弟に先を越されるっていうの。

だって、ち、中学生よ、まだ。いや、今時の中学生は進んでるって言うし……えええ！ そうなお。あたし、弟に先越されちゃうのぉ？

「あ、あんた何言ってるの？ 気色悪いこと言わないでよね」

「何が気色悪いんだよ。俺、明日はシュート2本決めるってみんなに誓ってきたんだぞ」

「し、シュート？」

「明日は新人戦の初戦だからな。気合入るぜ」

「なあんだ、サッカーの試合か」

紛らわしい言い方すんなよ、このガキ。

「他に何があるんだよ。ん？ 姉ちゃん、顔赤いぞ」

「うっさいわね」

優子は鼻を鳴らす勢いで直樹をひと睨みすると、階段を上がった。彼女が内気なのは家の外での事なので、家族の前ではそんな素振

りは一片のかけらもない。

弟の直樹は中学2年生。つまり、優子の家族は全部で4人だ。それと、小さな庭に黒毛の柴犬が一匹いるが、最近妙に太ってきた為、だれもそれが柴犬だと気付かない。

優子は制服を脱いでジャージの上下に着替えると、ベッドの上に横になった。

「はあ……」

訳も無く深い溜息をつく、と、一葉が言った言葉を思い出した。

高森忍とぶつかった時の事を思い出してみる。

やっぱり何か匂いがした記憶はない。心の何処かが舞い上がって、匂いを感じる事が出来なかったのだろうか……

思えばあんなに男子に接近する事なんて滅多に在ることではない。胸板と肩のゴツゴツした感触が蘇える。

ぜったい気のせいだよ。何にも匂わなかったよ。

しかしその時、脳裏にほんのりとライムの香りがした。

穂のかに汗ばんだように火照った爽やかで微かに甘い香り……

こ、これか？　これがアイツの匂いか？

優子は思わずベッドの上に飛び起きた。

「もう、どうでもいいや、そんな事」

大きく首を振った彼女の頬に、肩につかないほどの髪の毛が暴れてまとわり着いた。

窓の外が暮色に染まる頃、優子は夕飯の支度を始める。

母親の帰りが遅い時は、夕飯の仕度は彼女の仕事だ。中学の頃から自然にそういう役割になった。

何となく何時の間にかそうだったので、優子は文句をいうタイミングも外してしまった。

ちようどその時間になると、弟の直樹は佐助を連れて散歩に出か

ける。

部活のある日はもう少し遅い日もあるが、彼は夕飯前に必ず佐助を連れて散歩に行くのだ。

佐助とは、黒毛の太った柴犬の名前だ。

小学校の頃はろくに散歩をしなかった直樹だったが、中学に入って本格的に部活でサッカーを始めると、体力維持の為とか言って佐助の散歩をするようになった。

しかし、仕方無しに優子が散歩をしていた時に比べても走らせているはずなのに、どうして佐助が太るのかは家族全員の謎でもある。

母親は普段六時過ぎには帰ってくるが、父親が帰るのが八時頃なので、五十嵐家の夕食は自然にその時間になる。

「そうか、明日から中学総体の新人戦か」

父親の孝之助がビールを片手に機嫌よさそうに言う。といっても、彼の場合年がら年中機嫌はよく、のんびりしている。

「直ぐにレギュラーなんてすごいじゃないの」

母親の杏子きょうこはそう言って笑うと「頑張って、ホームラン打ってね」「母さん、直樹はサッカー部だよ」

父親が思わず笑う。

「あら、だって前にグローブ買ってあげなかったかしら」

直樹が箸を口に入れたまま、呆れた顔で「そりゃ、小3の時だろ」五十嵐家の会話はだいたいこんなものだ。

「ま、恥かかない程度に頑張るのね」

優子は味噌汁を啜りながら、ポツリと言った。

### 第3話

夕食後、優子は勉強机に向かい、古文のノートを広げていた。

古文の教師は、今時？　と思うほど小テストが好きで、度々自慢のマックで作った答案用紙で生徒たちに嫌がらせをする。

しかし、期末、中間考査のほとんどは同じ問題が出るので、考え方によっては楽な教科かもしれない。

明日もその小テストがあるので、優子はノートの文訳を頭に叩き込む。

彼女が平凡なのはテストの成績もそうで、悪くも無く、良くもない。

200人ほどの同学年の中でちょうど真ん中辺りで、女子だけで見ても、やっぱり真ん中なのだ。

彼女にしてみれば意外と勉強している気がするが、それで成績が並みというのはもしかして自分の頭の構造がヤバイのか？　と思つて見たりもする。

不意に携帯の着信音が鳴った。

通話の着信は何週間ぶりだろうか……

優子は真つ先にそんな事を思いながら携帯を手にする。

一葉からはよくメールが来るが、電話はほとんどない。

もちろん、アドレスのメモリには十数人の番号が入っているが、滅多に着信が来る事はないのだ。

液晶モニターには相手の名前が出ていない……

チツ、イタ電か？　それとも間違ひ電話？

知らない相手から電話がかかるほど、自分が社会的で無い事くらいは、優子自身が一番判っている事だ。

そう思っている間に、コール音は切れた。

「やっぱりね」

電話を何時までも取らないからコールが切れただけでごく当たり

前の事なのだが、彼女は何となく声に出してそう言った。

しかし、再び携帯の着信音が鳴る。

な、なによ。しつこいわね。ふん、だったら相手になってやる。エロオヤジ。

彼女の中では、もはや勝手に電話の相手はエロいオヤジになっていた。いた。

「もしもし」

わざとくぐもった声で電話に出る。

「あれ？ あ、あの……五十嵐優子さんの電話ですよ」

聞き覚えの在るム力つくほど爽やかな声が聞こえて、優子は気が動転した。

こ、こ、こ、こ、この声って……いや、似てるだけ？ それとも、電話機のせい？

「あの……もしもし？」

再び電話の声が聞こえた。

「五十嵐優子さんはいらっしゃいますか？」

「あ、あの……あたしですけど」

優子は何時のも学校での話し方に自然に切り替わる。

「ああ、俺。高森だけど。悪いね、こんな時間に」

電話の相手は間違いなく高森忍だった。

「うつん、別にいいけど……どうしたの？」

ヤベエじゃん。なにに。何で高森があたしの携帯知ってんの？ どうしてこんな時間にかけてくんの？ もしかしてあれ？

実は前から好きでしたとか、そういうノリなやつ？ 困るよ、そんな急に言われたって。

「実はさ……」

マジで？

「どうしたの……？」

「言い難いんだけど……」

ついにあたしにも春が来るの？ しかもこんなとびっきりの

春が、こんな秋晴れの夜に？

電話の向こうで彼は言った。

「明日、古文の小テストあるだろ」

「はあ？」

優子は、思わず気の抜けた声を出す。

脳内が一瞬真っ白になって、大急ぎで思考を再構築する。

こ、古文のテスト？ って明日の小テストだよな？ なんてそんな事であたしに電話するの？ 高森があたしに勉強の事で何の用？

「俺、学校にノートを忘れて来たみたいでさ、いま気付いたんだ。出来たらコンビニでノートのコピーもらえないかな」

な、なんであたしなの？ そんな事誰にだって頼めるじゃない。なんでそんな事であたしに電話してくるのよ。

「で、でも……」

優子は何時ものように小さな声で応える。

「ああ、実はさ、五十嵐の家って、ウチの一本先の通りなんだよ。大通りへ出る角にちょうどコンビニもあるしさ」

な、なによ。ビックリするじゃないの、もう。ていうか、近だけで電話よこすか？ 学校ではほとんど話した事もないのに。「駅向こうに安西の家が在るけど、ちょっとアイツには声かけ難くてさ」

浮かない声で忍は続けた。

安西ひとみは同じクラスで、女子の中では学年トップの成績をとっている。

男女合わせても、何時も忍の次なのだ。

ただ、イマイチ性格はよくない。

知らないよ、そんなの。あたしには声掛け易いつての？ 大人しくて影が薄いし、ちょうど近場で使い勝手がいいとも言っの？

「うん……いいよ」

優子は再び小声で言った。

ああ、もう。そう言うしかないじゃん。しょうがないじゃん。けちんぼ星人にはなりたく無いじゃん。

「サンキュウ、助かるよ。じゃあ、これから五十嵐の家まで行くから」

「えっ、今すぐ？」

「ああ、だって歩いたって5分もかからないぜ。すぐ行くよ」

忍は明るい声でそう言うと言電話を切った。

「ちょ……」電話はもう切れていた。

な、なんでそんなに早いよ。意外とせっかちなの？ もう、なんで今すぐなのよ。

優子は着替える為に慌てて携帯のボタンを押した。

ああああああ！ しまったあ………電話帳に登録するんだった……せつかく向こうから電話が来たのに。一葉に自慢できたかも知れないのに。もちろん用事の内容はごまかしてさ。

携帯を見つめた優子は、ひとつ息をつく

「まっ、いいか」

そう呟きながら、ジーンズに履き替える為にジャージを脱いだ。

## 第4話

秋晴れの夜空に浮かぶ弦の月が、住宅街を明るく照らしていた。

優子はノートを手に門扉の前に出た。

一瞬黒い人影にギョツとして息を飲む。が、それが高森忍の影と気付いてホッと溜息をもらした。

「よお、悪いな。ちょっとそのコンビニでコピーとってくるよ」

「あ、あたしも……あたしも行つていい？」

「えっ？ あ、ああ。もちろん」

優子は忍と一緒に大通りまでの距離を歩き出す。

大通りといつてもたいした通りでもないし、距離にしても200メートルもない所に在る。

高森忍は中肉中背だが、もしかしたら少し着痩せするタイプかもしれない。額にかかる黒髪はサラサラと風に舞って、不良とかツツパツているとか、そんな感じは全くないのだが、何処か硬派な香りがする。

それで、成績優秀なものだから、周囲の女共は放っておかない。

それにしても、高森忍の家がウチの近所だったなんて初耳だったな。こんなに直ぐに来たんだから、近いのは本当なんだ。

「登校の時はあまり、ていうか会ったことないよな」

隣で自分を見つめる彼の瞳に、一瞬優子は魂が吸い寄せられるような気がして思わず目をそらした。

学校ではそんな事感じたことが無い。

優子は慌てて自分の心の中で小首を振る。

「えっ、うん。そうね……」

そうだよ。なんで会った事ないんだ？ あ、そうか、コイツは部活だから朝早いんだ。でも試験の時とか……あ、あたしが何時もぎりぎりに行くからか。

「朝は何分の電車に乗ってんの？」



「えっ？」

「電車さ、試験の時にも会った事ないよな、五十嵐とは」

「あ、あたしは……7時58分のやつ」

「7時58分？　じゃあ、もうギリギリだな」

忍はそう言つて、笑つた。

学校は8時25分までが登校時間だ。7時58分の電車に乗つて学校まで20分弱。そこから学校まで足早に歩いて5分ほどだ。

な、なによ、そんなに可笑しい事ないでしょ。あたしは低血圧で朝は苦手なのよ。

「高森くんは、何時も何分のに？」

「俺は6時45分のやつさ、何時もはね」

早ッ。あたし、まだ布団の中じゃん。

「は、早いね……ずいぶん」

「朝練あるからな。試験の時はゆっくり行けるからいいよ。7時42分のに乗れば、充分間に合うしな」

なによ、58分のだって小走りすれば余裕なんだからね。時間は有効に使うべきじゃない。

そんな会話をしながらコンビ二に着いた二人は、コピー機の前に陣取つて、忍はノートのページを台の上に合わせて機会に小銭を入れる。

3ページほどなので、コピーは直ぐに終わった。

「五十嵐つて、意外と字がキレイなんだな」

忍はコピー用紙に転写された優子の文字を眺めた。

「そ、そうかな」

どういう意味よ、それ。いったいあたしをどういうイメージで見てるわけ？

「あ、ちよつと待ってる」

忍はそう言つてレジの方へ行くと、缶コーヒートココアを買ってきた。

「ほら、一応お礼な」

彼はそう言つて、ホットココアを優子に渡す。

「あ、ありがとう……」

「でもよかったよ。五十嵐って、もっと話にくいのかと思ってた。意外と話すんだな」

なんだ、そりゃ。あたしは根暗女じゃないっつーの。そりゃあ、ちよつと気が弱いし、知らない人と話すのは苦手だけどさ。

「そう？ 知らない人と話すのが、ちよつと苦手かな……」

「俺は知らない人じゃないって事か」

「えっ？」

「いや、ほら。あんまり教室でも話したことないし。でも、意外と普通に話してるから」

「そ、そうかな」

そうかなってなんだよ、もう、あたしつてば。こんな会話が普通か？ 普通のあたしがどう映ってるんだ？

二人は店をでると、一緒に缶のプルタブを引いた。

「あつたかい……」

優子は思わずそう呟いてココアの缶に口を着けた。

自然に笑みがこぼれる。

「五十嵐って、ジーパン履くと意外にスタイルいいんだな」

優子は思わずココアを噴出しそうになって慌てて飲み込んだ。

「な、なに？ いきなり……」

どういうタイミングで言つてんだよ、もう。それともなにか、あたしのお尻にムラムラしたりするの？

「いや、何となくさ。五十嵐の私服って初めて見た気がして」

いいや。あんたが気付かないだけだよ。修学旅行は自由行動の日、私服だったじゃん。あんたの眼中にあたしがいなかったっただけでしょ。

「そういえば、修学旅行で見たか」

み、見たのか？

「そ、そういえば、自由行動は私服だったもんね……」

優子は俯いた顔を上げたが、隣に忍の姿はなかった。

慌てて振り返ると

「じゃあ俺、こっちだから。ノート、サンキュウな」

直ぐ後で、忍が笑みを浮かべて手を上げた。

なんだよ、話し振っておいてほったらかし？ 結局あたしは

その程度の女か。

「うん、いいよ、こんな事くらい」

優子も慌てて笑顔を作って「じゃあね」と小さく手を振った。

月影に照らされる自分の笑顔は、何時もの2割増しのような気がした。

## 第5話

カーテン越しに、微かな月明かりが透けていた。

小さな虫の音が、窓を通り抜けて部屋の暗がりに染み渡る。

どうしてこんなに胸がドキドキするんだろう。

その夜、優子は布団の中で目を瞑ったまま、ふと考えていた。

何時ものように瞼は重いのに、胸の奥がキュツと締め付けられるように苦しくて、何だか鼓動が早く感じる。

男の子と並んで歩いたのは、おそらく中1の時以来だった。

中学校に慣れた頃になると、みんな形だけの彼氏彼女として付き合いだし、一緒に下校したりするのだ。

優子も他に漏れず、告白を受けて一緒に帰る彼氏を見つけた。

しかし、外での優子の口数の少なさは今に始まった事ではない。

たいしたボキャブラリーを持っているわけでもない中学生男子と一緒にいても、盛り上がるどころか、何時も沈黙の嵐だった。

付き合いだして直ぐに遊園地へ行ったりもしたが、たいした会話もないまま適当に乗り物に乗って帰ってきた。

男の子が何かを話しても、自分の事だったり、リアクションに困る事だったり。

もちろん、別に好きなわけでもないのでもんな相手の話に興味も湧かないし、なんだか疲れる男だと思った。

次の週、彼は人伝にとりあえず時間を置こうと言って来た。

……それって、あたしが振られた事になるの？

優子はこの頃から、男子に対して不信感を抱くようになり、会話さえあまり交わさなくなった。

それは高校へ入っても同じで、今更男子生徒と楽しく話す事など出来ないと思っていた。

それでも、何時かはステキな彼氏が出来ると、矛盾した期待を抱いたりもする。

でも、アイツといるのは、ちょっとだけ楽しかったな。  
優子は目を閉じたまま、布団を引っ張って頭まで被った。

\* \* \*

「昨日は有難うな。おかげで汚点をつけなくて済んだよ。五十嵐の字も凄く読み易かったしさ」

翌日の学校。4時間目の古文が終わった後、忍の方から優子に声をかけてきた。

周囲の視線が一斉に自分に注がれているような気がして、優子は思わず俯いた。

ば、バカじゃないの。なんで、こんなにイツパイ人のいる前で話しかけんのよ。みんな見てるじゃない。判ったから、早くあっち行つて。

確かに珍しい光景を見る視線が周囲から注がれていたが、別に全員が見ているわけでもない。内気な優子の過剰反応だ。

「う、うん……」

優子はそれだけ言うと、一葉の方へ歩いて、一緒に教室を出た。

「何？ 優子、高森と何か在ったの」

階段を下りながら一葉はすかさず訊いて来る。

「な、何でもないよ」

「ええ、だって、じゃあなんで高森から優子に話しかけるのよ。しかも、何であんたが逃げるように立ち去るわけ？」

彼女をよく知る一葉は、なんだか異常に興味を示している。

別に忍だつてクラスの大半の連中と会話は交わすのだが、男子とはほとんど雑談なんてしない優子に声がかかったと言うのが問題なのだ。

相手が高森忍とあつては、尚更興味を惹かれる。

ま、まずい。一葉は興味深々だよ……なんとかしらばつくて、この場の一葉の興味を他に逸らさなくちゃ。

「ああ、なんかさお腹減ったね。やっぱりテストで頭使ったから、何時もよりお腹がへるのかなあ……何たべようか」

一葉は何時に無く長ゼリフを吐く優子の顔をマジマジと横目で見つめた。

「あんた、昨日何があったの？ 白状しなさい」

彼女はそう言っつて優子の腕にガツチリと腕を絡めて密着してきた。「ちよつと痛いよ。っつていうか重いよ」

一葉は体重を優子に預けてもたれかかるように歩いた。

並んだ二人は自然に優子の方へ進路が傾くが、真っ直ぐ学食の購買へ進むには一葉を押し戻さなくてはいけない。

「じゃあ、正直に言いなさいよ」

「わかつたよ……もう」

優子と一葉は購買でサンドイッチと飲み物を買つと、校舎と体育館の間に在るベンチに腰掛けた。

優子はコーヒー牛乳のパックにストローを刺し込むと少しずつ吸いながら、昨日の出来事を一葉に話して聞かせた。

「へえ、高森の家つて、優子んちの近くなんだ」

1年の時からクラスが一緒の一葉も、優子の家には何度か行った事がある。

そして一葉はサンドイッチを頬張つて、無言のままそれを飲み込むと優子の肩に手を掛けた。

「でもさ……期待は禁物だよ」

「はあ？」

べ、別に期待なんかするか。だから言いたくなかつたんだよ。「高森がいくら普通の男子と違つてと言つても、おかしい方向に違つとは考え難いでしょ」

そりゃ、どういう意味だ？

「えっ？」

優子は一葉に向って怪訝そうな笑みを零した。

彼女は少々哀れみの笑顔で、優子の肩を再びポンポンと軽く二度叩くと

「あんたはただ便利に使われたただだって事。変な期待しちゃダメだよ」

きいー！　なんて失礼なやつ。あたしだって薄々は気付いてるんだから追い打ちかけるなつつうの。

「わ、判ってるよそんな事。誰も期待なんかしないよ」

「でもあれか、優子は元々男に興味ないんだもんね」

「う、うん……まあね……」

優子は食べかけのツナサンドを口に頬張った。

## 第6話

放課後の喧騒に揺られていた優子は、一葉に手を振ると電車を降りた。

学校の在る最寄の駅から電車に乗って一葉とは同じ方向になる。

彼女はもうひとつ先の駅なので、学校帰りは何時も優子が先に降りるのだ。

駅の小さなロータリーには喫茶店とファーストフード店などが並んでいて、道路を渡ると中規模のスポーツ用品店。その隣には大型ドラッグストアーや大型書店、ドーナツ屋もある。

その周辺が新しい商店街だ。

駅前の国道に沿って少し歩いてから通りを入ると、古い商店街を抜けて再び、今度は別の国道へ出る。

横断歩道を渡ると角には忍と来たコンビニが在り、優子はそのまま通りを住宅街へ入る。

家に着く手前の通りで、優子は足を止めた。

昨晚忍が手を振った場所だ。

そこから一本奥の通りへ抜けると、その何処かに彼の住んでいる家が在るのだ。

学校中の女子が何とか仲良くなろうとするほど人気の在る高森忍……もちろん、一部の女生徒は難癖をつけたり、または本当はもうタイプなくせに嫌いな振りをしたりもする。

優子と言えば、別に何とも感じない数少ない部類に入っていたのだろう。

ふううん、相変わらず人気あるのね……くらいにしか思っていなかったし、別に特別話をしてみたいなどと思ったこともない。

もちろん、一緒に歩きたいと思った事は無い。

そう、昨日までは……

彼女は通りの奥を少しの間見つめていた。



陽が短くなつたとはいえ、まだ夕暮れには時間があつたが、その通りは淡い琥珀色に染まっているように見えた。

家に着いて階段を上がろうとした優子に母親が後から声をかける。今日はパートが休みなのだ。

「優子、今日は直樹は疲れてるだろうから、佐助の散歩行つてあげたら」

「えええ、あたしも疲れてるう」

優子は思わず振り返つて直ぐに顔を曇らせて肩を落とす。

「何言つてるの、あんた部活もやってないんだから、少し運動しないとそのうち太るわよ」

「あたしは平気よ。お母さん似だもん」

優子の母親は確かに中年太りなど知らないかのように、痩せている。

「いいから、ね。後で行つてらっしゃい。佐助もあんたの事忘れちゃうわよ」

「わかつたよお」

優子はゆつくりと階段を上つた。

ジャージに着替えて部屋でゴロゴロと漫画を読んでいると、窓の外は緋色に染まり、あつと言う間に暗くなっていた。

「優子、散歩は？」

階下から、母親の声が聞こえた。

あつ、そうだ、忘れてた。

「今行くところだよ」

優子は慌てて部屋のドアを開けると、そう言いながらパタパタと階段を下りる。

ふと玄関先を見ると直樹のカバンが置いてあるのが見えた。

なんだ、直樹のヤツ帰ってるなら散歩行けつての。

リビングのドアを開けると彼の姿が見えたので

「なんだ、帰ってるなら……」

しかし、彼女は言葉を飲み込んだ。

直樹はソファアの上で身体を投げ出すようにいびきをかいて寝ている。部活の試合でだいぶつかれたのだろう。

台所からは母親が夕飯の仕度をする心地よい音が響いていた。

優子はそつとリビングのドアを閉めて玄関へ行った。

ま、たまにはあたしがしてやるか。佐助はマジであたしの事忘れる恐れもあるしね。

下駄箱の上に置いてある散歩用のリードとビニール袋や小さなシヤベルの入ったお散歩セットを持って外に出ると、丸くなっていた佐助が彼女の気配に気付いて起き上がった。

「散歩だよ、佐助」

喜んでパタパタと動き回る佐助を押さえ込みながら、首輪から鎖を外して散歩用のリードに付け替える。

「ほら、少しは大人しくしろ、もう」

佐助が待ちきれずに動き回るので、なかなかリードのフックが首輪に掛からない。

ようやくリードをつけて身体から手を放すと、佐助は一目散に門扉へ向って走り出した。

コロコロしてるくせに、犬ってよく走るよね。

住宅街は意外と街灯も多くそれほど暗さを感じない。近くの児童公園も水銀灯が何本も立っていて明るい。

住宅街をぐるりと回って、公園の横まで来た時、正面から歩いて来た誰かが声を発した。

「五十嵐か？」

それは、明らかに聞き覚えの在る声。

ヤバッ、あたしジャージだよ。しかも上下……なんで？ どうしてこんな所であうかな、もう。

「た、高森くん……」

「へえ、犬の散歩か」

「う、うん……」

うわっ、あたし手にウンコ持ってるよ……佐助のウンコ持ってる、高森と喋ってる……超最悪じゃん。

優子はさり気なく散歩用の道具を後ろ手に持った。

「い、今学校の帰り？」

「ああ、週末から総体の新人戦が始まるからね、少し遅いんだ」

忍は優子に近づいて足を止めた。

彼はバスケット部に所属して、その中では身長は高いほうではないのだが、1年の時からレギュラー入りしている。

「へえ、珍しい犬だね。なんて犬？」

忍はそう言っただけで、人懐っこい佐助の頭を撫でた。

「あ、あの……これ柴犬よ……ちょっと太ってるけど」

「えっ、ああ、ごめん。黒い柴犬もいるんだね」

フツ、気にしないで……佐助の犬種がわからないのは、別にあなただけじゃないから……

彼は後頭部をかきながら苦笑して立ち上がる。

「何時もこの辺散歩してんの？」

「ううん、何時もは弟が……」

「へえ、五十嵐ってお姉さんなんだ。ははっ」

な、なにそれ。あたしがお姉さんじゃ可笑しいのか？

「イメージじゃない？」

「まあね、五十嵐はお兄さんでもいそうだって、思ったよ」

なんだよ、それ。あたしって、そんな甘えん坊さんに見えるのか？

「俺んちこの公園の先なんだよ」

「あ……そうなんだ……」

優子は思わず辺りを見渡した。

反対側からぐりと回って来たので気付かなかったが、忍の家の通りを歩いていたのだ。

しかも、考えたら佐助の散歩をする時は何時もこのコースだ。

なんかやばいよ。まるであたし、高森の家の近くに來たくて佐助をつれてこの辺ウロウロしてるみたいじゃん……………ハッ、それってまるでストーリーカーじゃん。

「ぐ、ぐうぜんよ」

優子は困惑した笑みで言った。

あたしは中学の時からこのコースで佐助を散歩させてるんですからね。別に、あんたに会いたくてこの辺ウロウロしてるわけじゃないのよ。

「は？ なにが？」

忍は彼女の言葉の意味が判らなくて訊き返した。

「えっ、うつん。何でもない」

優子は思わず大げさに首を振る。

「そういえば、ここで中学の学区が分かれてるんだよな」

「えっ？ そうなんだ…………」

そうか、どうりで高森とは中学が違ったわけだ。

中学の学区がちょうどこの通りを堺に別れている為、これだけ近い距離に家がありながら、優子と忍は違う中学に通っていた。

「じゃあ俺、行くから。じゃあな」

「うつん…………おやすみ…………」

うわっ、うつかり言っちゃったよ。あたしっては何言ってるのよ。おやすみって言う時間じゃねえだろ。

優子が思わず俯くと

「ああ、おやすみ、またな」

忍の声が聞こえて、彼女はハッと顔を上げた。

彼はもう後姿で、街路灯に照らされた背中やしなやかに、ちょっぴり大きく感じた。

## 第7話

「おい、姉貴……何時まで豆腐もったままボーっとしてんだ？」

夕食時、直樹が言った。

優子が味噌汁に入っていた豆腐を箸の上に乗せたきりピクリともせずに、正面とも天井ともつかない何処かを見つめていたからだ。

優子は直樹に言われて慌てるようにその小さな豆腐の欠片を口へ運び込む。

「どうした、体調でも悪いのか？」

母親の杏子と話していた父親が、直樹の声に彼女を見た。

「えっ？　べ、別に」

「姉ちゃんが体調悪いなんて無いよ。きつと頭の具合が……」

そこで直樹の後頭部は優子の手で叩かれた。

「痛ってえ、危ないだろ。箸が刺さったらどうするんだよ」

「なんなら、グサツと刺そうか？」

「こらこら、優子もいい加減にしなさい」

父親が見かねてそう言くと、母親は

「そうよ、その箸漆塗りでけっこうイイヤツなんだから、壊さないでよ」

思わず直樹が箸で掴んだ肉じゃがの芋を落つこととして

「か、母さんそっちかよ？」

夜布団に入っても眠れるわけは無かった。

今まで何とも思っていなかった高森忍……

どれだけモテようが、どんな噂が立とうが、別に眼中に無かった。それは学校中の男子全てが優子にとっては同じで、興味を抱く異性などいなかった。

それなのに、昨晚からこの胸の高鳴りが静まらない。

おやすみって言ったよ。あいつ。どういっつもりだろう……  
いや、あたしの言葉にただ返したただだよ。きつと、律儀なんだよ。  
でも……学校中であいつに「おやすみ」って言われた女は他に  
いるのだろうか……もしかして、あたしだけ？

優子は益々興奮して鼓動が高鳴ると、いくら目を閉じても全く眠  
れる気配は無かった。

\* \* \*

「もう、何で起こしてくれないの？」

朝、ギリギリに起きた優子は階段を駆け下りて台所へ行くと、荒  
い物をしている母親に言った。

「起こしたわよ。あんたが今起きるって言うから……」

母親の杏子は苦笑した。

「姉ちゃん寝言でもそう言うからな」

「ウルサイ！」

優子に睨まれた直樹は、そそくさと鞆を持って玄関に向った。

「ごはん食べる？」

母親はのん気にそう言っただけで直樹の食器を片付ける。

「もう、そんな暇在るわけないでしょ」

優子はテーブルの上の牛乳をグラスに注ぐと、それを一気に飲み  
干して

「じゃあ、行くね」

「急ぐのはいいけど、気をつけてね。あんた、マヌケな所あるから」  
玄関へ向う優子の背中に、穏やかな杏子の声が聞こえた。

マヌケじゃない。せめてドジって言ってよ！

優子は仕方なく自転車を取り出して駅までペダルを踏んだ。

駐輪所は有料だが仕方が無い。周辺に適当に置く連中も多いが何時撤去されるか判らないし、盗まれる可能性も非情に高い。

頬を撫でる乾いた風がちよつとだけ心地よかったが、今の彼女にはそれを堪能する余裕など無い。

久しぶりに乗った自転車はさすがに早かった。

何時もは急いでも5分ちよつと掛かる道のりをあつと言う間に駆け抜ける。

ロータリーの入り口に在るプレハブで作った倉庫のような建物が駐輪場だ。

有料だけあってなかなかハイテクな装置を用いており、上下二段に自転車停められるようになっていた。

優子は自転車を止めると、係りの窓口で105円を払ってチケットを貰う。

その時線路沿いに電車が来るのが見えて、優子は全力で駅の階段を駆け上がる。

スカートが捲くれるのなんて気にしちやられない。

改札を抜けて今度は階段を駆け降りると、ホームに着いた電車が見えてドアが開いたところだった。

よし、ギリギリ間に合うぞ。偉いぞあたし。よく頑張った。

階段はほとんど人がいなかった。

優子は階段を下りる足を速めた……が、その時。

革が伸びて少し緩くなつたローファアの左が、突然足から脱げて宙に舞った。

ギャヤヤ ツ、なんでええええ？！

急に止まらない優子は、左足は靴下のまま階段を数段進んでから立ち止まる。

見事な弧を描いき、階段の傾斜に沿って下まで飛んでいくローファアを、彼女は呆然と見つめていた。





## 第8話

学校では朝のホームルームが始まっていた。

「ああ、今日は休みはいるか？」

優子のクラス。担任の柳原が少しゆっくりした口調で言った。  
一応ぐるりと教室を眺めると

「みんないるな」

柳原が出席簿にチェックを入れようとしたその時

「先生、五十嵐が来てませんけど」

声を出したのは高森忍だった。

「あつ、そうだ。優子いないや」

思わず気付かなかった一葉が言った。

教室は少しだけざわめきが起こった。それは、優子の席が空いているからではない。

最初にそれを指摘したのが、忍だったからだ。

中には気付いていても面倒だから言わない連中もいたし、本気で優子のいない事に気付かない生徒もいた。

一葉は、窓際の列の丁度真ん中にいる忍を見ていた。

「おお、そうか。あいつどうしたんだ？ 誰か知ってる者いるか？」

ざわめきは消えなかったが、だれも優子がない理由は知らない。

「まあ、いいか」

柳原はそう言うつと出席簿を閉じて、連絡事項は特に無いからと教室を後にした。

丁度柳原が廊下に出ると、優子がこそこそと立っている。

「なんだ、お前」

「あ、あの……駅で靴が……その……」

「五十嵐、遅刻1な。早く教室に入れ」

柳原は特に叱る様子も無くそう言って、廊下を歩いて行った。

はあ 遅刻だよ、やっぱり。理由言っても仕方ないしね。

優子は教室の後ろのドアをゆつくりと開けた。

一瞬クラス全員の視線を浴びる。

うわあああ！ だから遅刻なんていやなのよ。もう……

しかし、一部の生徒の視線は何だかおかしかった。

何時までも優子を目で追うような姿は、今までにない事だ。

な、なに。この刺さるような視線は。別に朝はクラス委員の仕事なんて無いし……なんかあたしヤバイ事したか？

優子は視線を気にしながら、真ん中より少し廊下寄りの列にある一番後ろの自分の席に着いた。

さすがに一葉も近づき難いほど、幾つかの視線は優子を見ている。その中には安西ひとみの視線も含まれていた。

直ぐに1時間目の授業が始まり、それが終わった休み時間、一葉が優子に近寄ろうとすると、それより早く安西が歩み寄っていた。

「珍しいよね、優子が遅刻するってさ」

「そ、そう？」

「だって、ギリギリでも何時もちゃんと来るじゃん」

「今日は、たまたま……ちょっとね」

な、なんであんながいきなり話しかけてくるわけ？ ほとんど喋った事ないじゃん。なにに、このクラスもいじめでも始めるのか？ 最初のターゲットはあたし？

優子は困惑して、座ったまま安西ひとみの姿を見上げた。

「忍と最近仲いいの？」

「はあ？」

なんだ、こいつ。なんでいきなりそんな事訊くのさ。

「ま、いいけど。少しくらい夢見れないと、学校も詰まんないもんね」

安西はそう言ってフツと笑うと、自分の席に戻っていった。

何あれ？ 意味解んない……なんで、あたしが学校で夢とか見ちゃうわけ？ 1時間目はちゃんと起きてたぞ。

2時間目が始まって直ぐに、優子に小さなメモが回って来た。それは一葉からのものだった。

優子は存在感が薄いだけで、別にみんなに嫌われているわけではないので、手紙やメモも普通に回ってくる。

優子は前に座る娘の背中に隠れるように、回って来たメモを開いてみた。

『高森とはどうなってるの？』

それだけ書かれていた。

な、何だ？ みんな何か知ってるのか？ 昨日高森と会った事を誰か知ってるの？

優子は首をすくめたまま、辺りを見回す。が、別にもう何時ものクラスの雰囲気だ。

ふと廊下側の列の真ん中辺りに座る一葉が振り返って優子を見ていた。

目が合ったので、優子は肩をすくめて首を傾げるジェスチャーをした。

メモ用紙には『イミフ』と書いて再び一葉にまわしてもらった。

その時前に座る武山睦実が振り返る。

「朝の出席のとき、高森が、あんたがいない事先生に報告してたよ。優子、最近高森と仲いいの？」

「そ、そんなわけないよ……」

なんだ？ なんで高森が？

「じゃあ、何で高森があんたがまだ来てないなんて言うのよ」

「そんなの……知らないよ」

つつか、そんな事他に誰か言ってくれる奴もいないのか？

そんなにあたしの存在は薄いのか？ でも、何で高森は言ってくれたんだろう……

優子は窓際の席にいる高森忍をこっそり見つめた。  
暗闇に消える彼の背中が蘇えた。

## 第9話 (前書き)

遅い帰り道。

優子はまたもや偶然高森忍に会う。

彼は信じられない言葉を口にするが……

## 第9話

放課後、家庭科実習のレポートを集めて職員室に持って行った帰り、体育館寄りの階段を使って教室に戻ろうとした優子は、二階の踊場で足を止めた。

この学校は、一階と二階の両方から体育館に出入りできる。

体育館の二階には、女子用の更衣室が在るからだ。

そして、その通路の先に妙な人ばかり。

溢れるようなレベルではないが、なんだか黒や茶色の頭が扉の窓ガラス越しにうごめいている。

理由は判っていた。

バスケット部が紅白戦をするらしいという情報は、自然と優子の耳にも届いていた。

二年の相手は事実上引退した三年だ。

もちろん高森を見に来る連中も多いが、三年にもこの学校TOPレベルのモテ男が二人いる。

こういう場では、普段そんな素振りを見せない連中もどつどつと彼らを眺める事ができるのだ。

どうせ、バスケットなんてろくに知らないくせに……

優子は肩をすくめると教室へ向う。

正面から一葉が来て

「ああ、優子。試合もうやってるのかな？」

もちろん、バスケットの事だ。

「知らない」

「ちょっと見てくるから、待っててね」

おいおい、これから一緒に買い物行く約束だろ。

体育館に向って走る一葉の背中を、優子は無言で見送った。

その日、学校帰りに久しぶりに一葉と買い物に出た優子は、日が暮れる頃に地元の駅に戻って来た。

一葉がバスケット部の試合を20分も見ていたので、その分出かけるのも帰ってくるのも遅くなったのだ。

小さな人波に紛れるように駅のロータリーを出て国道を渡ると、スポーツ用品店から忍が出てくるのが見えた。

一瞬足取りを緩める。

周囲の人の流れが彼女を追い越して四方に分かれてゆく。

優子は何故かとつさに気付かない振りをして歩くペースを戻すと、そのまま歩道を進んだ。

うわっ、あたし何こそそしてんの。でも、何て声かけたらいいか判んないし、こんな時は気づかない振りがいいよね。それがベストよね。

一緒に横断歩道を渡った小さな人波は散り散りになって、優子の前方に数人の人影があるだけで、彼女の周囲には誰の姿も無かった。「五十嵐い」

後から声が小走りで近づいて来る。

な、何であんたはわざわざ追いかけて来んのよ。別に一人で歩いて帰ればいいじゃん。

「あ、ああ。高森……今帰り？」

仕方無しに、優子は振り返って微笑む。

あっ、あたし今高森って呼び捨てにした？ でもいいよね。

同級生なんだしさ。

「ああ。五十嵐も今日は遅いんだな」

忍はそう言って、優子の隣に並んだ。

「うん、ちよっと友達と買い物」

「そうか」

そう言った後、忍は少しの間沈黙する。

ほらほら、話す事無いならあたしに並ぶなよ。間が持たないんだからさあ。あんたが話さなきゃ、あたしは話すこと無いんだよ。

「あ、あしたから試合？」

結局優子は、沈黙に耐え切れずに自分から声を出した。

「あ、ああ。見に来る？」

何であたしが区の総合体育館まであなたの応援に行くのさ。

「あ、あたし。あんまりバスケット解らないから……」

「そうか……」

優子が盗み見るように見上げると、忍は少し淋しげな笑みを零した。

な、なによ、それ。その哀愁を纏った笑みはなに？ まさかあたしに応援して欲しいってんじゃないでしょ？

どうせクラスの何人かは応援にいくだろうし女バスだっているんだし、それにあなた、他の学校からだって応援される事ぐらい知ってるんだからね。

「月曜は学校だろ？」

忍は正面に向き直って言った。

「う、うん。何か火曜を振り替えにするんだよね……運動部の為でしょ？」

「ああ、そうだろうね」

月曜日は本来祝日で学校は土曜日から3連休なのだが、運動部は新人戦大会の為休む事ができない。

そこで、月曜日に一般生徒の授業を行い振り替え休日を作るという学校側の配慮だ。

優子は忍と肩を並べながら、何だかよく判らない気分煽られて少々困惑していた。

忍が漂わせる雰囲気になんかを感じていたのだ。

なんだこの雰囲気は……何だか妙に気まずいような、甘酸っぱいような雰囲気……あたし超苦手なんですけど。

「火曜は、暇？」

「はあ？」

優子はあからさまに髪を振り乱す勢いで忍を見上げた。







## 第10話

「ねえ、明日里香たちと映画行くんだけど、優子も行かない？」

月曜日の学校。授業はあって無い様なものだった。

へたに授業を進めると運動部の連中も後で困る為、毎時間自習と教材のビデオ鑑賞で午前授業は終わる。

終業のチャイムが鳴って、一葉が優子に駆け寄ってきた。

「うん……えっ？ ダメだよ、あたし……」

「どうして？ 優子も観たいって言っただけだった？ あの映画」

「そ、そうだけど、明日はダメ」

「だからなんでよ」

「し、私用よ」

優子は机に手を突いて立つ一葉を見上げた。彼女は怪訝そうに優子を見つめる。

「最近、なあんか変よね。優子」

「そ、そうかな……」

なに、意外と観察されてんのか？ あたしの何が最近変なのかしら？

「まさか、高森と何かあったりして」

一葉はそう言っただけで意地悪な笑みを投げかける。

「何かって、何よ」

な、何気に鋭いのか、一葉。ここは何としてもシラを切り通さなくっちゃ。

「なあんて、そんなわけないよね」

あたしの何処がそんなわけ無いのさ。もう、馬鹿にして。でも、明日だっただけでどうなるか判んないし、そう思われてた方がいいか。

「そ、そうだよ。なんで高森が出てくるのよ」

「そっだよ。今頃試合は負けてんのに周囲にキヤーキヤー言われるんだろっな。高森のヤツ」

「そうなの？」

「ウチのバスケット部はそうらしいよ。試合に負けたくせに、『写真一  
緒に撮ってくださいあい』なんて事はしよっちゅうだって」

一葉は空いている優子の前の席に腰を下ろすと

「3年の先輩たちも意外とモテてたもんね」

「そんなにモテるんだ……」

「あんだ、もしかして男に興味が湧いてきた？」

一葉は目をぱちくりとさせて優子を見る。

「な、何でそうなるの？」

「ま、それっていい事じゃん」

一葉はそう言うのと立ち上がった。「あたしたちも帰ろう」

日が落ちて、窓の外は暗がり広がっていた。

優子はそわそわしながら、ジーンズに履き替えると佐助の散歩を  
しようと玄関へ降りる。

ちょうどその時玄関のドアが開いて直樹が入って来た。手には佐

助の散歩等リードが握られている。

「散歩、行ってきたの？」

「ああ、昨日で試合は負けちゃったから、身体もなまってるしね」

直樹はそう言いながらスニーカーを脱ぐと、洗面所へ行った。

せっかく佐助を連れて外を歩こうと思ったのに、ダメじゃん。

高森が帰ってるか調べようと思ったのに……

優子は高森から電話があるんじゃないかとそわそわしていたのだ。

しかし、何時まで経っても電話は鳴らない。

普通、出かける前の日くらい連絡よこすよね。それとも、待  
ち合わせ場所は決めたから、それでお終い？　だって何処に行くか  
も決めてないじゃないの？

優子は意味も無く玄関を出ると、門を出て通りを眺める。まるで  
高森の姿を探しているようにも見えるが、彼は普段この通りは使わ

ない。

一本奥の通りもそのまま国道まで延びているのだ。

な、何してんだあたし。別に明日が待ち遠しいわけでも高森に逢いたいわけでもないのに。

優子は急に我に帰ったかのように庭に入ると、散歩を終えて満足顔でご飯を食べる佐助をチラリと眺めてから玄関のドアを開けた。

夕飯を終えて部屋に戻ると、優子はふと考えた。

そうだ、明日は何着て行こう？ 何処に行くんだろ。ジーパンがいいのかな、それともワンピース？ 意外とミニスカが好みだった。えっ、何でアイツの好みなんて考える必要あんの？ ジーパンよ、動き易いジーンズに決まりじゃん。

その時携帯電話の着信が光った。音より早くその光を確認した優子は、ワンコール目で携帯電話を掴んでいた。

電話を開いて液晶を見ると、着信表示は番号だけが出ている。高森に違いない。

ダメダメ、直ぐに出たらまるであたしが待ち遠しく思ってた見たいじゃん。ここは少し引つ張ってから出るのよ。

彼女は5コール鳴っても出なかった。

すると、電話が切れた……

な、なんでよ。あんた切るの早過ぎでしょ。女の子は色々あって直ぐには出られない時があるのよ。10回はコールするのが普通でしょうが。こういう神経してるのよ。

優子は着信番号を見て、リダイヤルするべきか悩んだ。

いやいや、何であたしから電話しなくちゃいけないわけ。誘って来たのは向こうなんだからそんな義理ないでしょ。

すると再びコールが鳴る。

が、しかし、それは一葉からだった。液晶に名前が出ている。

どうしてこんな時に一葉が電話してくるのよ。何時もはメー

ルでしょ、あんた。

「はい……」

「ああ、優子？ 明日どうなった？」

「はあ？」

「いや、気が変わったかな。とか思ってたさ」

「な、何の気？」

「本当は用事なんて無いんでしょ」

「あ、あるわよ」

「なあんだ、本当の用事なんだ」

「なんで、いちいちウソの用事でもったいつける必要があんのよ。あたしはそんな姑息こそくじゃないっての。」

「あ、あのさ、ちよっと人から電話入るから、切るね」

「うん、判った。明日新宿で映画だからさ、時間できたら電話しないよ」

「う、うん。ありがとう」

優子はそれだけ言って、電話を切った。

ま、一葉も意外と友達思いなのかな。

## 第11話（前書き）

高森忍に突然誘われたデート。

困惑しながらも優子は断る事は出来なかった。

ついにその日の朝が来た……しかし彼女の体調は自身の邪魔をする

……

## 第11話

一葉の電話を切って直ぐに、再度携帯が鳴る。

こんなに連続で携帯に着信が来た事は初めてだ。

ま、まだよ。もう少し待ってから出るんだから。でも、あんまり待つとさつきみたいに切れても困るし。

優子は5回目のコールを聞いて通話ボタンを押した。

「ああ、高森だけど」

直ぐに彼の声が聞こえる。

「あ、ああ、うん……」

優子はさり気ない電話の出方がよく判らなくて、一瞬あたふたする気持ちを何とか落ち着けた。

「明日、行きたい場所決めた？」

「えっ、ううん」

何であたしが行き先決めんのよ。あんたと行きたい所なんて判るわけないでしょ。だいたいあんたが何処か行こうって言い出したんだから、あんたが決めなさいよ。

「た、高森の行きたいところでいいよ……」

「じゃあ、映画でも行く？」

「え、映画？」

映画はダメよ。一葉たちとバツタリあったらシャレにならないじゃないの。

「映画嫌い？」

「う、ううん。嫌いじゃないけど、他のが……いいかな」

ああ、もう。これじゃまるで、何処でもいいって言うておきながら、相手が言う事に反対するわがまま女みたいじゃん。でも、新宿じゃなければいいか。でも、新宿が嫌だって、なんか変だよな。

「し、渋谷なら映画でもいいけど……」

「ああ、別にいいよ。渋谷でも吉祥寺でも」



「じゃあ、後はまかせる……」

新宿だけ避けられれば、何処でもいいや。

「わかった、じゃあ明日10時な」

「う、うん。それじゃあ」

おやすみって言おうか。どうする？ 言ってもいい時間だね。でも何か、考えるとちよつと恥ずかしいじゃん。

そんな事を考える優子だったが、しかし……

「じゃあ」

そう言つて、忍は早々に電話を切った。

「あつ……」

優子は思わず携帯を見つめる。

もう、そんなにさつさと切らなくても……まあ、いいか。

小さく肩をすくめると、今度は忍の番号をちゃんとアドレス帳に登録した。

\* \* \*

もう直ぐ10月と言う事もあつて、空は晴れていたが風は心地よく乾いていた。

夏場に湿度の高い東京は、乾いた風が吹き始めると秋の香りを余計に感じるようになる。

窓から注いだ陽は、部屋の中を暖かく照らしてリビングのテーブルを白く光らせていた。

そんな清々しい朝にも関わらず、優子の心の中はどんよりとマジ曇りだった。

まるで、自分の中で灰色のブリキの太古が止め処なく音を立てているかのようだ。

うつうつ。神様はあたしを見放したのね……きつとそうに違

いない。ただでさえイミフな緊張感があるのに、よりもよって何で……何時もなら後2〜3日は後なのに……

優子はリビングのサイドボードの戸棚を開けて薬箱を取り出すと、鎮痛剤を握り締めた。

ああ、もう行きたくないかも。なんで生理痛の酷いこんな日に出かけなくちゃいけないの。しかも、何で初日からこんなにスベシャルチックな痛みが襲ってくるの？

優子は薬をシートから取り出して口へ放り込むと、グラスの水で喉に流し込んだ。

うう、ヤバイよ。どうしよう……高森に電話するかな。でも次なんてあるのか？ だいたいアイツはどういうつもりでこのあたしを誘ったんだか皆目検討がつかないし……ただの気まぐれだったら、次は無い。

優子は深く息をつくとソファに横になって天井を見上げ、少しの間瞼を閉じた。

下腹部のジンとした痛みを、頭のテッペンで感じる……

……

……

……携帯電話の音で優子は目を覚ました。

一瞬何が起きて、今自分が何処にいるのか、朝なのか午後なのか混乱した。

混乱しながらも、テーブルの上で鳴っている携帯を掴む。

「よお、寝坊？」

爽やかな声だった。

あれ？ 何だっけ？ ……あつ、今何時？

優子は壁に掛けられた時計を見る。

10時30分になるところだった。

ああ、あつ、薬飲んで、寝ちゃったんだ……

「ご、ごめん……今すぐ行くから」

「ああ、急がなくてもいいよ。待ってるから」

「う、うん……」

お腹はもう痛くなかった。

薬を飲んだのが9時過ぎだから、充分効いているのだろう。

優子は小さなバックと携帯を持って玄関に行くと、普段あまり履かないブーツを履いて外に出た。

今日履いたジーンズはこのブーツの踵に丈を合わせてあるから、他の靴では殿様のようになってしまうのだ。

これなら少しは高森の背に近づくかな。

優子は9月の強い陽差に照らされながら、コツコツと小気味よい音を立てて駅まで急いだ。

## 第12話

渋谷で映画を観た後の少し遅いお昼時、ファーストフードの店に入ると、優子の中に不安の兆候が見え始めていた。

朝に薬を飲んでから、既に4時間以上経っている。

ヤバイ、薬が切れてきた。薬持って来たっけ……？

席について直ぐ、優子はバックの中を漁る。

やっぱり持って来てない……急いで出たからだ。どうしよう

……めちゃくちゃピンチ。

不安の兆候は高まる一方だった。

とりあえずポーチを片手にトイレに立つ。

「ちよつと……」

「ああ」

優子が全てを言わないうちに、忍は声を返してくれた。

ヤバイよ。薬……

不安と共に、痛みはあつと言う間に身体の奥から湧き出てくる。

優子が席に戻ってくると、忍もトイレに立って行った。

周囲の席を埋め尽くすのは同世代が多い。誰もが楽しそうに話しているが、今の自分には無理な行為だと思った。

この空間で自分一人が不幸に向かって突き進んでいる気がする。

彼女は既にメニューを見る余裕がなくなっていた。

お腹が痛くてテーブルに突っ伏すしかない。

どうしよう……お腹痛い……薬がないとヤバイ。

優子は何時も薬で凌ぐタイプだ。それでも何時も以上に痛みが酷いような気がするの、何時もと違う環境のせいだろう。

数分間がとてつもなく長い気がする。

薬のない不安が、余計に痛みを増幅させているかのようだ。

「おい、大丈夫か？ 具合悪いのか？」

トイレから戻って来た忍が優子の様子に気づいて、席に駆け寄っ

てきた。

「ごめん……ちょっと……」

どうしよう……生理って言えないよ……

「腹の調子が悪いのか？ トイレ行ってきた方がよくないか？」

お腹を抱えるような彼女の姿に、忍は小声で言った。

優子はテーブルに突っ伏したまま頭を小さく振る。

忍はほんの少し思案を巡らせると、再び小さく声を出す。

「もしかして……あ、あれか？……あの日……ってやつか？」

優子は苦しそうにコクリと頷く。

もう何も思考する事は出来なかった。

「どうすればいい？ 何時もは……学校ではどうしてるんだ？」

忍はテーブルに顔を近づけて、優子を覗き込むように訊いた。

ぎゃあ、そんなに覗き込むな……

「薬飲んで……」

「薬って、正露丸か？」

馬っ鹿じゃないの。正露丸でこのお腹痛が治るわけないだろう。それで、本当に成績トップなのか？

「鎮痛剤……」

消え入りそうな声で優子が応える。

「鎮痛剤かあ。今持ってないのか？」

優子は再び小さく頷くと「買って来て……」

わああ、もうどうなってもいい。この痛みが止まるなら、どうでもいいや。

「ああ。分かった。ちょっと待ってるよ。さっきマツキヨが在ったから、俺行つて来るよ」

忍はそう言っただけで立ち上がると、店を出て行った。

アイツ、本当に買いに行っただけ？ まあ、いいや。早く買ってきて……

その時、誰か女性の声が聞こえた。

「何処か具合が悪いのですか？」

優子はやっこの思いで顔を上げると、目の前には赤い帽子にエプロンの女性が立っている。この店の店員だ。

同じ女性なら話が早い。

「生理痛が酷くて、でも、薬が無くて……」

「鎮痛剤ならどれでも大丈夫ですか？」

女性店員は優しい声で言った。

「と、とりあえずは……」

「ちょっと待っていて下さい」

女性の立ち去る足音が聞こえた。周囲の席が、少しだけざわめいているのが分かったが、優子はもう顔を上げる気力が無い。

少しすると、再び女性店員が近づいて来るのがわかった。

「薬、お持ちしましたよ。お水もありますから、飲んで下さい」

ああ、なんて優しい店員さん。渋谷の街も捨てたもんじゃないね。

優子はテーブルに手を着いて身体を起こすと、薬を口の中に入れてグラスの水を飲み干した。

「有難う御座います」

店員を見上げて優子は小さくお礼を言った。

周囲の視線を感じて辺りを見渡すのが怖かったので、再びテーブルに突っ伏した。

「少しの間こうしていいですか？」

「はい、よくなる時は遠慮しないで呼んでくださいね」

「はい……」

ああ、なんていい人。今度このお店宣伝してあげるよ。

根拠の無い宣言を、心で呟く……

店員の立ち去る足音が聞こえて間も無く、誰かの足音が近づいて来た。

息が荒れているのが分かる。

「買ってきたぞ」

忍の声だった。かなり走ってくれたのだろう、息が上がっている。

しかし優子は、既に薬にありつけた安堵で、危なく忍の存在を忘れかけていた……

### 第13話

優子の具合がよくなって無事お昼を食べた後二人は、ファーストフード店を出た。

帰り際、もう一度あの女性にお礼をしなくてはと思った優子だったが、さっきの店員が見当たらない。

というか、はっきりと彼女の顔を覚えていないのも確かだった。朧な記憶にある背格好で探してみるが、やっぱりいない。

休憩にでも入ったのだろうと思い、結局改めて御礼は出来なかった。

二人は駅前の百貨店に入り、展示場で開催されている絵画展を観る。

寄つていこうと言ったのは忍の方だった。どうやら、最初から予定に入っていたらしい。

「絵、好きなの？」

何だか目を輝かせる忍を見て、優子が訊いた。

「ああ、意外か？」

「うん。自分でも描くの？」

運動と勉強のイメージは強いが、絵画のイメージは確かにあまり無いような気がした。

美術の時間彼がどうだったか……クラスの女子の半分はそんな事は知っているのかもしれない。

しかし最近まで忍にも特に興味の無かった優子には判らないのだ。考えてみると、忍に対しての予備知識が優子にはほとんど無い。

他の女子ならば、ちよつとした好き嫌いの情報くらいは持っているのかもしれないが……

「残念ながら、そっちはからっきしでさ。だから、観るのが好きなのかな」

展示場内はヒロヤマガタや鈴木英人など、見覚えのある巨匠のイ



ラストが原画サイズの版画で沢山飾って在る。

「と言っても、普通のゴッホとかピカソなんかはよく解らないけど」  
忍は笑みを浮かべて

「五十嵐は、絵は興味ないの？　こういうイラストとか」

「うん。少しは……落書きならするけど。でも、たまにはこうしてみるのもいいかも」

そう言って身体を動かした優子の手が、忍の手に触れた。

ギャッ！　て、手が……何だか一瞬暖かった気がする。

ハッキリ言って、優子が男性の手に触れたのはかなり久しぶりだ。もちろん意図的に触ったり繋いだりした事はない。

以前に偶然誰かの手に触れたのは何時なのかすら覚えていないのだ。

弟の直樹の手さえ、最近は触れた覚えはない。

ほんの一瞬だったが、彼女は他人の体温に直接触れた感触が妙に生々しくて、相手も自分の体温を直に感じたのだろうかと思うと、とつさに声が出た。

「ご、ごめん……」

「あ、ああ。別にいいさ」

忍はそう言って笑うと

「五十嵐は、あんまり男の人と出歩かないのか？」

な…そんなこと普通訊くかあ。あたしって、もしかしてそういうの丸出し？　それってヤバくない？

「あ、あんまり……」

はつきりって中1以来あんたが初めてなんだよ。悪い？

「ま、そのうち慣れるだろ」

忍はそう言って再び笑う。

何に？　何に慣れるって言うの？　別にあんたになんか慣れなくていいんだよ。それとも慣れて欲しいのか？

二人はぐるりと展示場を歩いて出口まで来ると、フロアのベンチに腰掛けた。

優子はこぶし四つ分空けて忍の隣に腰掛ける。

「この後どうする？ 帰る？」

「えっ？」

もう、帰るの？ でもそんなもんか。別に行くところないし。

「また痛くなると、困るだろ。とりあえず薬はあるけどさ」

忍は優子を心配している様子だった。

身動き取れないほど苦しむ痛みが、あつと言う間に引いてゆく優子の姿に不思議なイメージを抱いていたのは確かだろう。

またあんな風に痛がられても、自分にはどうする事もできないという不安があるのかもしれない。

「もう、大丈夫だと思うけど……」

な、何言ってるの。まるで、あたしが帰りたくないみたいじゃん。別にそんなんじゃないのよ。高森ともっと一緒にいたいわけじゃないんだからね。

それともあれか？ めんどくさい女って思われたのか？ 高森が

もう帰りたいのだろうか……

「じゃあ、少しブラブラするか。俺も暇だし」

「う、うん……」

優子は忍の言葉に、少しだけ安心する自分を感じていた。

彼が自分を邪魔くさいと思っていないと感じて、ホッと胸を撫で下ろす。

渋谷を暫くぶらついてから新宿へ出て中央線に乗った。

後は家路へ向う一本道だ。

秋空は、火照った夕映えに緋色の雲が波の様に浮かんでいた。

暮色に近づく空を見上げて、優子の中に安堵が込み上げてくる。

もう家に帰っていい時間のような気がしたのだ。

やっと今日が終わる……夕暮れまでいれば充分だろう。

そう思うと同時に、何だか短いような長いような不思議な一日が終えようとする景色に、ちよっぴり切なさを感じる。

電車の中ではあまり二人の会話は無かった

丁度帰宅ラッシュの時間と重なって下り電車は混んでいた為、二人共ドアの近くに並んで立っていた。

優子は隣で窓の外を眺める忍にチラリと視線を向け、それから窓の方を向いた。

ドア窓に映る忍の視線が優子を見つめていて、目が合うと彼は瞳を細めて笑う。

な、何？ その安堵に満ちたような優しい微笑みは。とりあえず何か喋りなさいよ。何だか意味深で分かんないよ。

優子も窓に映る忍に向って、はにかむような笑みを送るだけだ。

ビルの向こうに沈み切る夕陽は何だか物憂げに、ほんのりと優しく雲を照らしていた。

## 第14話

湯船のお湯が大きく揺れて波立ちバスタブの淵から僅かに零れると、流れるせせらぎが心地よく浴室全体に響き渡る。

排水溝に流れる水の音が心地いいのは、おそらく浴室だけだろう。

ああああ、今日は何だか疲れたあ……

優子は全身を湯船に浸けると、バスタブに背をつけて寄りかかった。

彼女はファーストフード店での一件で、それ以前に見た映画の記憶がほとんど飛んでしまっていた。

もう、ほんと死ぬかと思った。体調の悪いときはデートなんてするもんじゃないな。うん。……ていうか今日のはデートだったのか？ いや、デートだね。ま、あたしはただアイツに付き合ってたあげただけだけどね。

優子は中学以来のデートが、なんだかずいぶんバタバタした1日になったものと、今日を思い返した。

もちろん、バタバタしたのは自分のせいなのだが……

何だか妙に胸が苦しいし、あたし今日はずっと気を使いつぱなしたったから、よっぽど疲れたんだ……

優子は再び息をついて天井を見上げる。

うっう、でもなんでこんなに胸が苦しいんだろう……身体の調子が悪い証拠なのかしら。ま、まさか、もしかこれって恋？ そうなの？ あたし恋に落ちてしまったの？

彼女は湯船のお湯を両手ですくって顔を潤す。

そして薄っすらと目を開け、どうにも苦しさを感ずる自分の胸元に視線を下げると、思わず驚愕した。

淡いグリーンのレースつきの布地が、いやカップが胸を覆ったままだったのだ。

ぎゃあああああ！ あたしブラジャーしてるううう！ な、

なんで、どうしてブラ外すの忘れてんの？　こんな事ってあるか？

優子は思わず湯船から立ち上がった。

もちろん、下着はさぶ濡れた。

パンツは脱いだのに、何故か上は着けたままだった……

ありえない……何やってんだろっ、もう。

優子は慌てて下着を外すと、浴室の扉を開けて洗濯機の中にびしょ濡れのそれを投げ入れた。

再び湯船に浸かった優子は、今度こそ安堵の息をついて目を閉じた。

これよ、これ。気持ちいいじゃん。ぜんぜん胸も苦しくないじゃん。

しかし、何だが胸の奥で何かがキュツと萎むような、ちよっぴり息が詰まりそうなもの苦しさに一瞬襲われる。

それは、高森と一緒にコンビ二へ行った夜にも感じたものだった。優子はそっと自分の心臓に両手のひらを添える。

浴室の湯気に混じって、穂のかにライムの香りが蘇った。

翌朝学校へ行くと、何時もと変わらない風景が教室にはある。

おはようと声をかけて来るのは一葉と里香くらいだし、いつもと代わり映えしない教師の授業時間が淡々と過ぎてゆく。

高森の様子も何時もと変わらない。

休み時間は男子の連中と親しく話して時折笑い声を上げる。

ただ、時折優子が視線を向けると、彼もこちらを見ているような気がした。

優子が視線を向けると向こうはそらすような気もするが、ただ偶然に自分の方角に彼の視線が向いたただけかもしれない。

だめだめ、過剰反応は禁物よ。昨日1回きりって事だっ  
り得るんだし。だいたい、アイツだって次の話なんてして無かつた  
じゃない。今朝会っても、別に普通だったし。

も、もしかして、あたしは試されたの？ 自分にふさわしいかど  
うか試されたのだろうか……そして、めんどくさい女決定？ 薬買  
いにパシリとかさせちゃったから？

そんな昼休みも大分過ぎた頃、後に人の気配を感じた。

「優子、ちよつといい？」

後から声をかけてきたのは、安西ひとみだった。

彼女に促されて、校舎裏の駐輪場まで二人は歩いた。

青空から注ぐ光は、聳える校舎に遮られて大きな日陰を作っている  
なによこの女。どうも安西に声を掛けられると、不吉な予感  
がするのよね。

「あんたもずいぶん大胆なのね」

「はあ？」

駐輪場に着くと、知らない誰かの自転車の荷台に安西は躊躇無く  
腰掛ける。

背中まである長い黒髪が、風にはためいて揺れた。

「しらばっくれて…… どういう手を使ってあんたが忍を誘い出した  
のかは知らないけど、彼に近づいても無駄よ」

優子は安西の言っている意味が判らなかった。

「あの…… よくわかんないんだけど……」

なんだ、この女。そんな訳のわかんないこと言う為にこんな  
所に引つ張り出したのか？

「ボケくっとしてるようで、けっこうしたたかなのね」

何いってんの？ これだから勉強の出来るヤツはいやなんだ  
よ。もつと率直に言えつての。ていうか、あたしってそんなにボケ  
ッとして見える？

「あたし、昨日見たのよ。あんたが忍と駅を出て行くのを」

ええええ！ な、なんでこんなヤツに見られちゃうの？ そ

う言えば、安西の家はあの駅の反対側だって、高森が言ってたつて。  
「いや、あれは……」

「ま。いいわ、別に。忍もたまには変わったもの食べたくなっただん  
でしょ」

ぎい。いいい。なにさ、人の事アボガドのサンドイッチみたいに言つて。だいたい、あんたは何様なわけ。高森がいくら人気があつても、誰と出かけたつて彼の勝手でしょ。なんで、あんたがガタガタいうのよ。

「言つとくけど、あたし中学の時忍と付き合つてたんだからね。全てを知つてる仲なんだから」

安西はそう言つて自転車から降りると、さつさと校舎に向つて歩き出した。

安西つて、高森の昔の彼女だったの………ていうか、昔なら今は関係ないじゃん。一瞬ビビツて罪悪感湧いちゃったよ。別にいいんじゃない。でも、何よ、全てを知つてる仲つて……

長い黒髪を揺らして歩く安西の後姿を見つめて優子は、何だか面倒な相手に最初に見られたものだ、深い溜息をついた。

## 第15話

「何よ、だいたい元カノに何の関係があるわけ。だいたいあんたの中学時代なんて興味ないっての……」

「優子？ 何ぶつぶつ言ってるの。何だか考え事が駄々漏れになってるみたいよ」

一葉が優子の真剣な顔を覗きこむ。

放課後の駅までの道、一葉と一緒に歩く優子の口から思わず何時もの思考が言葉になって漏れていた。

「えっ？ あ、あたし声に出てた？」

「何だか元カノとか、中学時代とか」

「あ、そう。あははは、何でもないのよ」

優子は声を出して笑ってみせると話をそらす。

「そう言えばさ、一葉ってブランドバック持ってたよね」

「うん、前に里香たちと一緒にバーゲンで買ったやつでしょ」

「いくらって言ってたっけ」

「バーゲンだったから、あたしのシャネルのバックは4万ちょいかな、里香が買ったのはもっと高かったけど」

一葉は急にそんな事を訊いてくる優子に怪訝な笑みを見せると

「確かあの時優子も誘ったけど、早起きがイヤダからって来なかったのよね」

そうだった。あたしは元々ブランドバックには興味がないから、早起きしてバーゲンに列ぶのがアホラシかったんだ。ひとつくらい買っておけばよかったのかな。そうだね、今時の女子高生はブランドバックのひとつくらい持ってないと、イケてないよね。

「どうしたの優子、ブランドバックでも欲しくなった？」

「ううん、何となくさ。1つくらい欲しいかも、とか」

「優子もブラダのお財布持ってるじゃん」

あれは、お父さんがパチンコで取ってきた二セモノなんだよ



「そ、そうだけど、財布は普段みえないしさ」

まさかバックで二セモノはイタイしね。

「最近円高とか言つて、あんまり安くないからねえ」

「まあ別に、異常に欲しいって言っわけじゃないけどさ。あたしの場合」

優子は早々に話題を切り上げると

「そ、そう言えばさ一葉、高森にあたしの携帯教えたりした？」

優子はずっと疑問に思っていた。初めて忍から掛かってきた携帯への電話。

彼はどうして自分の携帯番号を知っていたのか？ クラス名簿で調べられるのは自宅の電話番号のみだ。

「ああ、そう言えば携帯に高森から電話があつたんだっけ」

「うん、それが何だか謎でさ」

「言われて見ればどうして優子の携帯知ってたんだろ。他の娘に訊いてみようか？」

「あ、いいよ別に。たいした問題じゃないしさ……」

アホか、そんな事みんなに訊きまわつたら、あたしがバカみたいじゃん。全く事情を知らない連中は自意識過剰女って思うだろうし、だからって近況を説明するのは絶対イヤ。

「どっかで訊いたんだよ、きつと。それが、たまたま小耳にはさんで、それであたしにノート借りようと思ったのかも」

「ま、そんなとこだろうけどね」

な、なんだよ。少しは否定とかしないわけ？ 何が何でもあ

たしは、たまたまの存在なのか？

そして、優子は再び昼休みの出来事を思い出す。

「ねえ、安西つて中学の時高森と付き合ってたってホントかな？」

「ああ、そう言えば1年の時にはそんな噂あつたね」

「噂？」

チリリリン！ と自転車のベルの音が聞こえて二人の視線は同時

に後へ向いた。

自転車に乗った爺さんが、直ぐ後の路地をふらふらと横切る。とりあえず鳴らして走るタイプの爺さんらしい。

一葉は直ぐに視線を前に戻し、そして優子を見る。

「ほら、安西は私立の中学だったでしょ。知ってる人いないのよ」  
「へえ、私立なんだ……でも普通そういう所って中高一貫なんじゃないの？」

「何か理由があって、出たらしいよ。本人は家が引っ越したからって言うけど、高森と付き合ってたならそんなに遠くに住んでたわけじゃないでしょ」

「学校が違うのに、どうして二人は付き合ってたんだろ……」

「塾が一緒だったんだって」

「ふうん」

優子は鼻で頷いた。

二人で電車に揺られた後一葉と別れて駅を出た優子は、ドラッグストアの隣に在る大きな本屋に立ち寄った。

雑誌コーナーを眺めていると、ブランドバックなどが掲載された雑誌を見つけて何気なく手に取る。

高っか。こんなのバイトでもしなくちゃ買えないよ。ていうか、あたしがバイトなんて、無理に決まってるじゃん……

友達の一葉はファーストフード店でアルバイトをしている。だから自由になるお金もけっこうあるのだ。

しかし、優子は自分が知らない人だらけの中でやっていけるとは、とても思えない。接客業以外のバイトも在るだろうが、他の従業員共々結局は知らない人たちの中に入るのだ。

絶対に些細なミスを繰り返してしまうだろう……どう考えても自分が、みんなに認められる対応が出来るとは思えないのだ。

里香は家が金持ちなのか、バイトもしていないのに何時も金回り

はい。

はあ、ウチのお父さんも株で一儲けくらいしてくれればなあ。  
デートにブランドバックくらい持ち歩けるのに……

優子は思わず雑誌のページをめくりながら溜息をもらした。

ハッ、あたし何考えてんの？ また高森が誘ってくれるのを  
待ち望んで、今度はブランドバックでも持つてこじやれたカッコウ  
でもするつもり？ そんなのムリムリ。

優子はパシッと勢いよく雑誌を閉じてそれを平台に戻すと、本来  
の目的であるコミックコーナーへ向った。

## 第16話

漫画の立ち読みに夢中になっていた優子は、ふと顔を上げて入り口のガラス戸に視線を向ける。外はすっかり暗くなっている事に気付いた。

腕時計を見ると、もう6時を過ぎている。

優子は本来買おうと思っていた本を手にとって歩き出す。

コミックのコーナーは店内の奥に在って、小説や雑誌のコーナーを抜けてレジへ向う。

するとそこには忍の姿があった。

「あれ？ 五十嵐」

「あつ、い、今帰り？」

「ああ、練習再開だからな。五十嵐も今？」

「う、うん……」

優子は反射的に手に持っている本を後ろ手に隠す。

うわっ、コイツなんだか難しそうな本買ってる……あたし漫画だよ。しかもコテコテ恋愛コミック。どうしよう、今から棚に戻してくるわけにも行かないし……

忍は袋詰めの本を受け取って

「五十嵐も何か買うんだろ。レジ空いたぜ」

「う、うん……」

優子は出来るだけ手のひらで覆い隠すように、コミック本をレジカウンターへ置いた。

後に忍の気配を感じながら、そそくさとお金を払って商品を受け取る。

「帰るんだろ」

やっぱり忍は後ろで待っていた。

な、なんでわざわざ待ってるわけ？ これって普通な事なのか？

「うん……」

二人は並んで書店を出たが、忍が不意に立ち止まったので優子も思わず立ち止まる。

「俺ちよつと、叔母さんの家に寄ってくからこつち回っていいか？」

えっ？ それって、あたしもって事なのか？ 何で他に寄るところあるのにあたしを待ってるんだよ。一人で行けばいいじゃん。

優子は一瞬返事に困って、言葉を搜した。

「急いでる？」

「う、ううん。別に……」

「用事は直ぐだから、一緒に来いよ」

こ、来いよって何？ それが寄り道に付き合ってもらう言い方か？

「うん、いいけど……」

結局優子は忍と一緒に何時もとは違う通りを入った。

自宅の通りとは随分離れた路地だったが、住宅街に沿う通りはほぼ碁盤の目になっているので、方角が一緒ならそう遠回りになるわけではない。

「直ぐ先なんだ。別に遠回りにはならないよ」

忍はさり気なくそう言って微笑んだ。

どういうつもりなの？ 学校では相変わらずほとんど、いや全然話なんかしないのに、どうして外で会つと声をかけてくるわけ？ もしかして、今流行りのツンデレってやつなのか？

優子はそんな事を思いながら「別に平気よ」と笑って見せた。

「今日、安西に何か言われてたろ」

忍は歩きながら優子をチラリと見て言った。

「えっ、どうして？」

「なんか、声かけられてたからさ」

優子は苦笑して見せると「ちよつとね」

「俺の事、何か言ってた？」

忍が再び優子をチラリと見る。

「何かって？」

「いや、別に」

な、何よ。こっちがカマかけてやろうと思ったのに、もう。

安西と付き合ってたのって本当なの？

「な、なんでさ……」

なんで、あんたは教室で知らん顔なの？ どうしてあたしに

話しかけないの？

「何？」

「うつん、別に……」

そう言えば、前に高森が教室で声をかけて来た時、あたし逃げたんだっけ。だからか？ それとも、今日みたいに安西に睨まれるから？ だから、教室では控えてくれてるの？

優子はひとつ息をつくと、一端飲み込んだ言葉を思い切って再び切り出そうとした。

「あのさ……」

「ああ、ここだよ」

しかし、それを遮るようなタイミングで忍が声を出して、優子は結局何も言い出せなかった。

「えっ、何か言った？」

「うつん。何も」

優子はブルブルと大きく首を振って笑う。

「ちょっと待ってて、直ぐだから」

そう言って、忍は旧家の渋い茶褐色の門を潜って、中に入ってしまった。

優子は「ふうっ」と声に出して息をつく。

忍の入って行った旧家は、庭に大きな栗の木が聳えている、木造の立派な平屋だった。

庭の奥には石の塘路と小さな池が見える。

「こんな家、この辺にあっただ」

優子は独り語をつぶやいて、ふと通りを見た。

周囲には古い住宅が多いので、古くからある住宅街なのだろう。街路灯もまだ蛍光灯の明かりで照らすタイプだ。

しかし彼女はそこで目を留めた。

な、何やってんだ、アイツ。

## 第17話

彼女の視線の先に見えたのは、佐助を連れた直樹の姿だった。

暗がりの街路灯で僅かしか見えないが、連れているあの不自然なシルエットの犬はどう考えても佐助だ。

直樹は旧家の家を塀沿いに覗き込みながら歩いている。

優子とはつさに門扉を潜って庭に入り、雑木の陰に身を隠した。

少しして人の気配が近づいて来る。スニーカーの為足音はほとんどしないが、佐助の歩く爪音が僅かにカチカチという音を立てていた。

直樹は門扉の前まで来ると、首を伸ばすように中を覗いて再び歩き出す。

何やってのアイツ……まさか覗き？

優子は塀際の雑木の陰から直樹の姿を覗いていた。

直樹が歩き出したので、彼女も再び門の外へ出ると、旧家の先の路地を弟が入ってゆくのが見える。

めちゃくちゃアヤシイ……何やってんのよ、アイツ。

「よう、お待たせ」

優子が通りの向こうに気を取られているうちに、忍が外に出て来ていた。

「どうかしたの？」

「えっ、うつん。なんでもない」

あんな拳動不審な弟がいるなんて、知られちゃかなわない。さっさと離れよう。

忍が促すまま、優子は歩き出した。

旧家は敷地が大きい為、家の周りがぐるりと路地で囲まれている。ちょうど、先ほど直樹が出て来た十字路へ二人が差し掛かると、再び直樹がそこにいた。

「直樹」



優子は思わず声を出してから、慌てて手で自分の口を塞ぐ。

「ね、姉ちゃん。何してんだよ、こんな所で」

「あんたこそ、何同じところグルグル周ってんのよ」

優子は弟の言葉に思わず返した。

「周ってないよ」

「周ってたね。あたしさつき見たもん。さつきもここ通ってこの家の中覗いてたでしょ。イヤらしい」

「な、何で声かけないんだよ」

「あんたの挙動が異常だから、声も掛けられないじゃん」

「弟さん？」

忍が声を挟む。

「ああつ、そうだ、高森と一緒にだったんだ。しまったあ。」

「うん、弟の直樹」

優子はそう言って、同じくらいの背丈の弟の頭を叩いた。

「ね、姉ちゃんの彼氏か？」

「ば、馬鹿。何言ってるの」

優子は慌てるように、再び直樹の後ろ頭を小突いた。

「ああつ、もう、この馬鹿ガキ。だから会いたくなかったのよ。なに直球な質問してんのよ。このよく解んない関係と距離を少しは感じ取れつつの。」

「あははは、面白い弟さんだね」

忍は爽やかに笑って切り返す。いたって平静だ。

「同じクラスの高森くんよ」

優子は直樹に向かってそう言くと、忍の方を振り返って

「ご、ごめんね、変な弟で」

彼に苦笑して見せると、再び直樹の方を見る。

「あんた、ここで覗きでもやってんの？」

「ふん、さっきの仕返しよ。こうなったら恥かかせてやる。」

優子の中で悪魔の囁きが聞こえた。

「ち、違うよ、覗いてたわけじゃないよ」

「じゃあ、なんでこの家の中覗いてたの？」

直樹は顔を赤くして、困惑して見せた。

「もしかして、舞衣？」

忍が言った。

「確か、舞衣は中学二年だけど、もしかして同じ学校とか？」

「誰？ 舞衣……ちゃんって」

優子が目を丸くして訊いた。

「叔母さんの家の娘なんだ」

「何、あんたクラスメイトの家覗いてたの？ イヤらしい」

優子は目を細めて弟を睨む。

「そ、そういうわけじゃ……それに、同じクラスじゃないよ………今は」

「舞衣と親しくなりたいのかい？」

忍が再び言葉を挟んだ。

「親しくっていうか、1年の時は同じクラスでけっこう話もしたんだけど……」

直樹は、2年のクラス替えて舞衣と離れてから距離が遠ざかり、話しをする機会も失ってしまったのだと言う。

「あんた、まさかずっと佐助の散歩の時はここでウロウロしてたわけ？」

直樹は頭をかきながら小さく頷いた。

「気持ち悪う。ストーカーじゃん」

「まあ、そんな気持ちも判らなくも無いけどな」

忍は笑って直樹をさり気なく庇うと

「さり気なく、俺からも舞衣に声をかけておくよ」

「マジっすか？」

直樹の目が輝いた。

「あんたね、舞衣ちゃんがどう思ってるかで大分結果が変わるんだからね」

優子は直樹の腕を手の甲で叩いた。

「解ってるよ、そんな事」

それでも直樹は大分浮ついた調子で

「じゃあ俺、先に佐助と帰るから。姉ちゃんも真っ直ぐかえれよ。もう直ぐ飯だからな」

そう言つて、駆け出して行つた。

街路灯の先で角を曲がつた直樹の姿を最後まで見送る優子の表情が、何だか妙に頼もしい。

普段見せないような彼女の姿を、忍は静かに見つめていた。

## 第18話

「ご、ごめんね、変な弟で」

ヤバイじゃん。高森に姉弟のアホな会話を散々見られちゃったじゃん……

「いや、何だか頼ましいよ。やっぱり五十嵐もお姉さんなんだな」

「そ、そんな事ないけど……」

優子は一瞬頬を紅潮させて俯いたが

「高森は、兄弟はいないの？」

「ああ、兄貴が一人いるけど、別に暮らしてるんだ」

「そう……」

「年が離れてるからな」

その後二人は少しかだけ沈黙して歩いた。

高い塀に囲われた庭から柿木の枝が伸びているのが暗い街路灯に照らされている。

家の近所のはずなのに、あまり見覚えの無い景色は、何処か遠くへ来たみたいで不思議な感覚が彼女の心を満たしていた。

二人きりで知らない町を歩いているようだった。

優子は次の会話を探してみるが、自分から切り出すような話題なんて思い浮かばない。

な、なにか話さないよ。あんたが一緒に帰ろうって言い出したんでしょ。どうして時々黙るのよ。こういう間があたしは苦手なんだってば。

優子は、歩く度にサラサラと揺れる彼の前髪をチラ見した。

「た、高森ん家は、何時も何時ごろ夕飯食べるの？」

うわあ、めっちゃどうでもいい質問だよ。間が持たない適当加減がみえみえだっつーの。

「俺が部活から帰ると直ぐかな。けっこう時間はバラバラだけど、帰った時間には仕度が済んでるよ」

「ご、ご両親も高森を待つてくれてるんだ」

「いや、俺は何時も一人で食べるよ」

忍はそう言つて笑うと

「じゃあ、またな」

もう二人が別れる通りへ来ていた。

ぐるりと周つて違う路地から来たので、今回は優子が先に曲がる番だ。

「あ、うん。じゃあ」

優子は小さく手を上げて忍から離れようとした。

背を向けようとした彼女に忍が

「少し安心したよ」

「えっ？ な、何が？」

歩き出そうとした優子の足が止まる。

「男嫌いつていうか、恋愛には興味ないのかと思つてたからさ」

「えっ？」

ポカンと彼を見上げる優子のカバンを、忍は笑顔で指差すと

「恋愛マンガ、好きなんだな」

わっ、見られてたんだ……こ、こんなコテコテの恋愛少女マンガ読んで、夢見てる女だと思われたのか？ 違つよ、こんな恋にこがれてなんて無いんだからね。

「ま、マンガはね……けっこう好き」

優子はそう言つてからもう一度「じゃあね」

そう言つて小走りに家に向つた。

何時もの四人が集まって和やかに、時には賑やかなのが五十嵐家の普段からの夕食の風景だ。

いがみ合っているように見えて、意外と姉弟は仲がいいし、夫婦は年中仲睦ましい。

高森は、何時も夕飯を独りで食べるって言つてた。どうして

？ 父親は仕事で都合がつかないのかも知れないけど、お母さんは？  
高森って片親だっけ？ いや、たぶん違うと思う。家に帰ると食事は出来てるって事は、それを誰かが作って待ってるって事でしょ。  
共働きだとしても、夕飯を作った人が家にはいるって事よ……待ってるのは、食事だけなの？

優子のご飯を口へ運びながら、視線は中を舞っている。

「……ちゃん、姉ちゃんてば」

隣で直樹の声が聞こえて優子は慌てて視線を向ける。

「な、何よ」

「さっきの事、彼氏によろしく言っておいてくれよ」

「あんたってば、他人を頼らないと彼女一人作れないの？ ナッサケナあ」

「ナンだよ、自分がたまにいい男拾ったからって」

「何よ、拾ったてのはあ」

優子はハッと気がついて

「それにね、高森は彼氏とか、そんなんじゃないんだよ」

そうだよ。なあんにも無いんだから、彼氏のわけ無いじゃん。向こうがコクって来たわけでもないしさ。ていうか、アイツがあたしなんかにくくるかあ？

だいたい、学校でほとんど話もしないクラスメイトと付き合えるほうが不自然だよ。確かにみんなの前で話しかけられても困るけどさ、例えば体育館裏に呼ぶとか、っていうか、それもいちいちウザいか……

「でも、よく言うボーイフレンドってヤツだろ？」

「ナニ、レトロな事言ってるのよ。そんなのでも無いですう」

優子は鼻の頭にシワを寄せて、憎たらしい顔で直樹に言った。

「何だ優子、彼氏がいるなら隠さずに紹介しろよ」

父親の孝之助（ここのすけ）はそう言っ、わはははと笑って見せた。

「そう簡単に親には紹介しないわよ」

母親は孝之助に向って微笑む。

さすがお母さん、元乙女だっただけの事はあるね。

「だって、何時別れるかも知れないじゃない」

杏子きょうこはそう言って優子の方を見ると、穏やかな笑顔で「ねえ」と言った。

な、なんて後ろ向き無な発想なの？ きつとあたしはお母さんのそんな部分を丸ごと受け継いだんだわ…… だいたい、付き合っても無いんだから別れる事もないし、親に紹介するほど親しくもないんだから。

「ほんとに、そんなんじゃないんだってば」

優子は面倒くさそうに言って、ご飯を口へ頬張った。

## 第19話

翌日の学校。

優子は一葉と里香と一緒に教室の隅で雑談をしていた。

優子が気軽に話せるのは、この二人くらいだ。

他のクラスメイトも女子とはひと通り片言の会話を交わした事はあるが、何となく仲良くなれない。

一葉や里香は、他の女子とも仲がよくて、特に一葉は社交的な性格もあって同性の間では人気が高い。

ただ、男子に対してもけっこうズケズケと言葉を発するタイプだから、中には敬遠する異性もいるようだ。

優子は彼女達と小さな笑い声を上げながら、対角状の片隅で他の男子と戯れる忍の姿を視界に納めていた。

日を追う毎に、いや彼と二人の会話を交わす度に忍への興味が増してゆく。

確かに自分をどう思っているかも気にはなるが、それ以上に彼がいったいどういう環境で生活しているどんな人間なのか。

そんな事が気になるのだ。

それは、ある意味高森忍をもっと知りたいという欲求に他ならぬいのだろうが。

それでも優子は自分から忍に話しかける事はできない。

この内向的な性格が、急に変わるようならとつくの昔に変わっているだろう。

優子にとっては、再び忍が声をかけてくる時、あるいは偶然二人きりで会う時を待つしかないのだ。

\* \* \*



金曜日の放課後、優子は図書室で古い書籍の整理をしていた。本来図書委員の仕事なのだが、担任教師が図書委員の顧問で、手が足りないと言うので借り出されたのだ。

珍しくそこには舟越の姿もあった。

作業は単調だがなかなかかどらなかった。そもそも図書委員の仕事であるにも関わらず、肝心の彼女らはお喋りに夢中で大して手が動いていない。

不要な古い本を処分する為に紙紐で束ねて結わえるのだが、優子がもう10束も作っているのに、連中はまだ2〜3束しか結わえていないのだ。

「まったく、何であたしがこんな事しなくちゃいけないのよ。もう。」

近くにいた舟越は、話す相手がいない為雑談には加わっていないものの、何だかボケツとして手が遅い。

しかも結わえるのが下手で、彼が結わえた書籍の束は持ち上げられないかにもほつれそうだ。

優子は気にながらも、横目で見るだけで特に注意はしない。

「関係ないよ。あたしは自分の仕事だけちゃんとやってればいいんだ。舟越の面倒まで見れるかっての。だいたいコイツって、何考えてるのか全然判んないしさ。」

「優子は高森と付き合ってるのか？」

「ぼそりと声がして、優子は思わず顔を上げる。」

「な、何？ 誰？ 何処から声が？」

一瞬、その声が何処からしたのか解らなくて、彼女は戸惑いながら図書室を見渡す。

「俺、見たぜ」

次の声で、その声が直ぐ隣にいる舟越が発しているのだと気付き、振り返った。

「びっくりしたなあ、もう。何処から声出してんのよ、コイツ。」

腹話術でもやったら上手く行くんじゃないの？

「み、見たって、何をよ」

優子は怪訝そうに舟越を見た。しかし、彼は優子を見てはいなかった。

いかにもとかしていない髪の毛。頬とおでこにやたらと湧き出たニキビ。

優子はめったに見ない、というか別に見たくもない彼の横顔を仕方なく見つめる。

「この前の振り替えの休みさ」

「それが、どうしたの？」

ナニ、こいつ。ていうか、あたしに話してるならこっち向けよ。

「渋谷にいたろ。高森忍とさ。俺、見たんだ」

「あ、あんたも渋谷にいたの？」

なんでこう、おかしな連中にはっかり見られるんだろう……

「ああ、マツキヨにいたら、駆け足で高森が入ってきて、そのまま直ぐに出て行ったから後つけたんだ」

なんで後つけんのよ。ていうか、マツキヨであんたは何してたわけ？

「だ、だからどうしたってのよ……」

優子は少しだけ開き直っていた。もちろん、相手が舟越だからでもある。

「……安西には気をつけた方がいいよ……」

彼は、視線を下げたまま言った。優子の顔は一度も見えていない。

「どうして？」

「俺、中学の時、あいつらと同じ塾だったんだ……」

へえ……て、答がおかしいだろ。安西に気をつける理由になつてないじゃん。あんたが何処の塾にいたかなんて、はつきり言つてどうでもいいんだよ。

「そ、それが何の関係があるのよ」

「高森と安西は付き合ってたし、安西はアイツに未練タラタラだから、逆恨みされるかも……」

「あの二人が付き合ってたのって、本当だったんだ……でも、どうして別れたの？」

「安西が妊娠したのさ」

優子はその言葉が聞き違いであって欲しいと思った。聞きなれない言葉が頭の中をグルグルと取り巻いた。

に、に、に、に、ニンシンって、あの妊娠？ 安西ひとみが？ 中学生の時に？ それって、た、た、た、た、た……

「それって、た、た、た、た……」

「高森とじゃないよ」

「……？ どういう事？ だって二人は付き合ってたんでしょ？」

「だって、付き合ってたんじゃないの？」

「俺も詳しくは知らないんだけど、高森の子供じゃなかったのは確かだよ」

「彼女が浮気したって事？」

ち、中学生が浮気相手の子供を？

「さあね、判んないけど……でも、安西はまだ高森の事を好きだと思っよ」

「だから同じ高校へ来たの？」

「それは違うと思うよ。通っていた私立にいらなくて転校したのは確かだけど、この学校に来たのは偶然じゃない」

「そ、そうなんだ……」

何だかよく喋るわね。こんなに喋った舟越なんて初めて見るわ。何だか気味が悪いんだけど。

優子は手元の書籍にかけた紐を力強く引っ張ると

「どうしてそんな事、あたしに言うの？」

「べ、別に……何となく……」

げっ、な、何赤くなってるのこイツ。何照れてんのよ。キモ

イন্দだよ。

優子は小さなため息をつく、舟越の手元を見て

「あんたさ、もっと両側からちゃんと引っ張らないと結びが緩くなっちゃうでしょ、ほら」

そう言って、書籍の結わえ方を結局教えてやった。

## 第20話

優子が学校を出る頃には、既に外は暗くなっていた。

午後から曇っていた空は、何時もより早い時間に陽が暮れていたのだ。

気がついた時には舟越はもう帰ったようで、彼の姿は見えなかった。いたとしても、絶対一緒に昇降口を出たくはないが……

街路灯に照らされながら、優子は駅までの道を歩く。

どうなってるのよ、もう。部活の連中より帰りが遅いってどういうことなの？

図書室での作業が終わったのは結局5時半を回っていた。

部活は通常5時半までなので、運動部の連中も大半の生徒はひと足早く下校している。

まだ体育館には明かりがついていたのでこれから帰る連中もいるのだろうが、今現在優子の周囲に人影は無い。

さっきまで前方に見えたジャージ姿の二人組みの生徒は、路地を曲がって見えなくなった。

きつと、駅へは行かないのだろう。

途端に暗闇が荒涼な風景に思えて、ちよっぴり心細くなる。

その時、優子は不意に後ろから近づく足音を聞いた。

スニーカーのようだが、アスファルトを踏む足音が確かに近づいてくる。

何？　なんでそんな急ぎ足なの？　そんなに急いで何処に行くの？　駅だね、急いで電車に乗るんだよね。ただそれだけだよね。

彼女は心持歩くスピードを緩めて、後から近づく気配が容易に自分を追い越していけるように配慮した。

さっさと追い越してもらって、足音の姿を確認したかった。

しかし、足音は優子の直ぐ後ろまで近づくと、スピードを緩める。

な、なんで？ どうしてあたしの後ろでスピード緩めるの？  
なんで、そのまま追い越して行かないの？

彼女には後を振り向く勇氣は無かった。歩くペースが自然と足早になる。

そのペースに合わせるように、直ぐ後の足音もスピードを増した。  
う、ウソ？ 何？ 通り魔？ 強姦魔？ 大丈夫よ、もう駅は目の前だから。大丈夫。

優子は後ろの気配を感じながら、無意識にポケットの携帯電話を握り締める。

後を歩く気配はもう、直ぐ後ろにあった。

いくら鈍い優子でも、誰かの息使いを背中にぞわぞわと感じていた。

優子はいきなり肩を掴まれて、思わず息を飲み込む。全身に鳥肌が立つのを感じた。

実際は掴まれたといより、軽く触れただけだったが……

きゃあああああ！ やっぱり狙いはあたしなのね。やっぱり、細い路地とかに連れ込まれるの？ いえ、このまま振り切って逃げるのよ。駅までダッシュして、誰かに助けを求めれば助かるわ。ああ、でも、あたしの遅い足で振り切れるのか……？

（この間0.2秒）

「五十嵐」

しかし、それは聞き覚えのある声だった。

優子は慌てて振り返る。「高森」

もう、超ビビったじゃないの。肩に手を掛ける前に声出せての。怖いじゃないのよ。

「ずいぶん遅いんだな。ビックリして追いかけて来ちゃったよ」

そう言った忍の笑顔が、街路灯に照らされていた。

どうしてビックリして追いかけるの？ 意味解んない。

「び、ビックリしたのはこっちよ、もう」

「ああ、ごめんごめん。驚かす気は無かったけど、暗いからギリギ

りまで近づいて確認したかったんだ。もし人違いだったらヤダろ」  
忍は相変わらず爽やかな笑顔で

「何でこんな遅いの？」

「うん、ちよつとクラス委員の用事で」

本当はクラス委員とは関係ないんだけどね……

優子はそこで、舟越から聞いた事を思い出した。

横に並んだ彼から、思わず顔を背けるように歩く。

もう、目の前は駅だった。二人は何となく黙ったまま駅の階段を上ってそのままホームへ降りる。

「なんか、機嫌悪そうだね」

「そ、そんな事ないよ」

この朗らかな笑顔が彼の全てを覆いつくして、全てを隠しているような気がして、その笑顔の向こうが優子は気になりだしていた。

彼は本当に見た目通りの人間なのだろうか……

もう、舟越のヤツ、微妙に詳しい情報をくれるもんだから、何だかギクシヤクするじゃないのよ。

「日曜は、暇？」

「えっ？」

「明後日、またどつか行かない？」

また、予想外の時に誘って来たよ。相手の意表をつくのが趣味なのか？

優子は一瞬戸惑いの表情を見せたのだろう。

「なんか、予定ある？」

「な、ないけど……別に……」

優子は一呼吸置くと

「な、なんで……あたしを、誘うの？」

俯いたまま小さな声で訊いた。

「何でって、いちいち理由が必要なの？」

当たり前だ、バカ！ 何となく誘ってるのか？ 適当に誘ってるのか？

「そ、それって、誰でもいいんじゃないの？」

優子には勇気のいる言葉だった。

このままただ何となく彼と過ごしていれば、自然に彼氏彼女の仲になる可能性だって充分あるのだ。

「誰でもよくは、無いよ」

だからあ、その理由を言えっての。

忍は一瞬間を置いて続ける。

「実はさ、お台場のホテルのホールでやる、ケーキ食べ放題のイベントチケット貰ったんだよ。他に行く人いなくなつてさ」

なんだよ。今回は本当に他がいなかったのか……ていうか、ケーキ食べ放題？　なんてステキなイベントなの。

「誰か誘ってみたの？」

「いや、誘えるような人が思い浮かばないし、ちょうど五十嵐がいたから」

丁度なのか？　ていうか、ホテル？　も、もしや、その後は予約してるホテルに誘われるなんて事に……だめよ、まだそんな事できないよ……

優子の頬が思わず朱色に染まる。

しかし、食べ放題の後にホテルに誘うなんて事は、おそらく在り得ないだろう……

「か、考えておく……」

な、なに勿体つけてんのよ。他の人誘われたらどうするの？

高森と出かけたくないの？　あたし。

「ああ、明日は俺部活だから、夜にでも電話するよ。時間は確か……昼から3時頃までだったと思うよ。かなり有名なパティシエも参加してるって」

「う、うん……」

二人はその後、何時もより組み合つた電車で揺られて地元の駅へ向う。





## 第21話

車中の窓ガラスは、映りこんだ人混みでイッパイだった。

優子は焦点を遠くへ合わせて、外に浮かぶ住宅街の明かりに視線を移動させる。

その時電車が少し揺れ、優子の前方にいたサラリーマンがバランスを崩して彼女にもたれかかった

うわっ、オヤジ、ちゃんとつり革掴んどけよ！ こっちはつり革に届かない位置なんだからさあ……

優子はサラリーマンがぶつかった反動で、後に身体を振られるが掴まるものが何も無かった。

が、しかし、後から腰に何かが当たって彼女を支えた。

「大丈夫か？」

優子を支えたのは忍の手だった。

きゃっ、高森の手があたしの、こ、こ、こ、腰に……

「こ、こ、こ、混んでるね……」

何時もの下校時間に比べて、会社帰りなどの客で車内は混雑していた。

「そうか、俺はこの時間に慣れてるからな」

忍は優子に笑いかけると

「俺に掴まれよ」

ええええ、そ、そんなラブラブ恋人同士みたいな事できないよ。

再び電車が揺れて、腰に添えられた忍の手に身体を支えられる。

今日の電車はやけに揺れない？ スピード出し過ぎなんじゃないの？ でも、ずっと高森に支えられてるのもなんだし……ていうか、これじゃ腰に意識が集中しちゃう。

優子は仕方なく忍の腕に掴まった。

うわ、意外と硬いかも……ていうか、超ハズカシイ。

優子は周囲の客に埋もれるように電車に揺られながら、彼の腕が身体に当たる度、頬を紅潮させた。

駅に着いて電車を降りた時、優子は思わず大きく息を吸った。混み合った電車の中は何時もより暑く感じたが、それは自分が火照っていたせいでもある。

「大丈夫？」

忍が優子の肩をポンと叩いた。

「う、うん。ありがとう、大丈夫」

そう言った彼女だったが、目の前の光景に思わず驚愕する。

一瞬頭の中がトリップして、何も考えられなかった。

超ヤバイじゃん。なんでこんな最悪のタイミングなの？

目の前に安西ひとみが立っていたのだ。

忍と優子が並ぶ姿を無言で見つめている。

長い髪が風に漂い、こっそりマスカラでも着けているような彼女の長い睫毛は微動だにしない。

その姿は、優子に得たいの知れないプレッシャーを与えた。

一瞬遅れて、忍も安西の姿に気付く。

「よう、ひとみ、何処か行くのか？」

彼は優子が思っていたよりも、ずっと気さくに声をかけた。

「塾よ。あたしはあなたみたいに優秀じゃないから」

ひとみはポツリと呟くように言って、引き攣った笑みを浮かべると「ふたりでずいぶん楽しそうね」

忍に向って言った後、鋭い視線が優子を貫く。

あんたその視線、怖すぎなんだよ……

「帰りにたまたま五十嵐とあつてさ」

忍は何時もと変わらない素振りで安西に言った。昔の彼女という雰囲気は全く感じない。

「そう、ずいぶん都合のいい、たまたまね」

再び安西の視線は優子に刺さる。

本当に偶然なんだってば。しかも声をかけて来たのは彼なんだよ……その敵意剥き出しの目は止めなさいよ。

「ほ、ほんとうに偶然だよ……」

優子は彼女の視線に圧倒されながら、力なく声を発した。

「別に、どっちでもいいだろ。俺たちが一緒に帰ったって、ひとみには関係ないんだし」

な、なんでそう言う言い方するかな。誤解を大きくしちゃうじゃないの。

優子は思わず忍の顔を見上げて困惑する。

「行こう」

忍は優子の手を取って歩き出す。

ぎゃああ、手え、繋いでる……あたし。

優子は忍に引つ張られるように歩き出すと、ホームの階段を上る。

「じゃ、じゃあね」

何とか声を発して安西に小さく手を振った優子だったが、当然のように彼女は手を振り返したりはせず、刺さるような視線に変化は無かった。

忍は優子の手を掴んだまま、駅を出て通りを渡る。

ちように横断歩道を渡り終えた所で、優子はさり気なく彼の手を振り解いた。

「あ、安西って、高森と何かあったの？」

「どうして？」

「う……べ、別に、何となく……」

誰がみたって、どう考えたってあの視線は異常でしょ。何か限度を越えてるっていうかさ。

忍は何も言わなかった。しかし、優子はそれ以上訊く事ができずに、ただ忍と肩を並べて家までの道を歩いた。

家に着いて優子はふと思った。  
忍と繋いだ手の温もりを、思い出せなかった……

低い空には雲が多く、その合間から時々薄っすらと青空が覗いている。

10月に入って雲はどんどん高くなる気がしたが、昨日と同じく曇り空は別だった。

翌日の土曜日、優子は自転車に乗って駅の反対側へ来ていた。

クラス名簿の住所を頼りに、安西ひとみの家を訪ねてみようと思ったのだ。

いや、実際に彼女に会って話をしようとは思っていないが、とにかく彼女の住んでいる場所を把握しておこうと思った。

もはや、彼女の存在を意識しない事は不可能だ。

国道を少し走って、駅に一番近い踏み切りを渡ると、見慣れない住宅街が広がっている。

駅の反対側は、商店街の開発もあまりないので滅多に来た事が無い。

中学の頃は何人か友達がいたが、みんな違う高校へ行ってしまい、今では行く用事が無いのだ。

安西の住所は駅から少し離れた場所だ。

少し広い通りから路地へ入ると、一軒家の合間にアパートや小規模マンションが目立つ。

住宅街としては、優子が住んでいる場所より古いのだろう。

かなり寂れたアパートも所々に目に付いた。

住所だとこの辺りなだけで。なんかぼろい家が多いような

……

ふと辺りを見回した時、後に立っている人影に驚いて振り返った

優子は、思わず声を失った。

あ、安西？ な、なんでメガネしてるの？

「な、何してんのあんだ」

安西は黒い上下のジャージを来て、買い物袋を手を持っていた。

そして、学校ではかけていない黒縁のメガネ。

黒い雲が低く空を覆いつくしていた。僅かに見えた青い空は何処にも無い。

「あ、あの……き、昨日の事は、ほんとに偶然っていうかさ……」

「そんな事言う為にあたしの住んでる家をわざわざ探してたってわけ？」

メガネ越しの安西の目は、いつも異常に陰しく感じた。

「べ、別に探してたわけじゃないけど……」

空からポツポツと小さな雨粒が落ちてきた。

それはバタバタという民家の屋根を叩く音と共に、あつと言つ間に周囲の景色を飲み込む。

安西の立ち止まっている横に立つオンボロのアパートの石の門柱には、住所録に載っていたコーポ飛鳥という小さな札が掲げられていた。

## 第22話

忍もそうだが、安西ひとみも勉強が出来る割に、いかにもガリ弁といった風貌ではない。

確かに清楚で上品な装いだが、スカートはけっこう短いし、どうやらマスカラや色つきリップもこっそり塗っていきそうだ。

さすがに髪の毛は黒いが、艶やかなそれを何時も揺らしながら歩く姿は自信に満ちている。

親しい友人は何人かいるようだが、独りでいる事も多い彼女は、あまり誰かと戯れるのは好きではないのかもしれない。

「ご、ごめんね、なんか、お邪魔しちゃって」

外は激しい雨音だけが響いていた。

急に振り出した雨に、安西は仕方なさそうに「入る？」そう言つて優子をアパートの自室へ案内した。

赤く錆びきつた鉄の階段を上がつて通路を進むと、二階の真ん中に安西の表札が出ていた。

安西は優子にタオルを渡すと自分は風呂場で着替え、その後台所から熱い紅茶を持って来てローテーブルの上に乗せる。

六畳の和室が二間と小さな台所。そして小さな風呂場の隣にトイレがあった。

台所の片隅に洗濯機が置いてある。

「家の人は、留守なの？」

優子は髪の毛にタオルを当てながら言った。

「家の人なんていないわ」

「えっ？」

はき捨てるように言った安西に、優子は怪訝な表情を隠せなかった。

「ここは、あたし独りよ」

「ひ、独りで住んでるの？」

優子の問いかけに、安西は小さく頷いてカップの紅茶に口を着ける。

間近で見るメガネの奥の睫毛は、何時もより元気は無い。

やっぱり普段はマスカラ塗ってるんだ……

優子は思わず関係ない思考が頭を過って、それを振り払う。

それにしてもどういう事だろう。なんで高校生のあんたがこんなアパートで独りで住んでるわけ？

しかし、優子はそんな疑問を訊く事ができない。

そもそも私立中学に通っていたか安西が、こんな絵に描いたような古いアパートで暮らしている事自体に、大きな訳ありを感じたのだ。

その訳は判らないが、わざわざ不幸話を聞きだそうなんて思わないのだ。

「ひ、ひとり暮らしなんて、すごいね……」

彼女はそう言って苦笑しながら部屋の中を見渡した。

言われて見れば家族で住んでいるにしては家具が少ない。というか、家具らしいものなんて無いに等しいのだ。

普通は茶の間に在っていいサイドボードが無い。

在るのは小さな台座に乗ったテレビと、引き出しやカーテンのついた幾つかのカラーBOX。

それと、いま紅茶の入ったカップが乗っているローテーブルだ。

奥の部屋にも、ベッドと小さな鏡台意外は何も見当たらない……

しかし、小さな鏡台には幾つかのコスメと無造作に置かれたコンタクトのケース。それとビューラー。

こいつビューラー使ってるし……

「目、悪いんだね……普段はコンタクトなんだ」

優子は間が持たないので、話題を変えようと思った。

「今時、普通でしょ」



安西は視線を下げたまま、紅茶を啜る。

「うわぁ、話しの続かないヤツ。だから自分から話しかけるのは苦手なんだよ。」

二階の窓にもベランダは無かった。窓際の雨樋を伝う水の音が、やたらと響いていた。

「な、なんだか凄い雨だね……」

「天気予報見てないの？ 昼から雨の確立70%よ」

そういう答を求めて言ってるんじゃないっての。

優子は非情に居心地の悪い思いだったが、今のところ外から聞こえる雨音は止まる気配は無い。

少しの間、沈黙と降り注ぐ雨音だけが部屋の時間を埋め尽くす。

「忍と付き合ってるの？」

唐突に安西が言った。

顔は少し笑っているが、目が全然笑っていない。

優子は大きく首を横に振って、それを否定した。

「そんなじゃないよ。たまたま会っただけだよ」

「そう……別にいいけど、親衛隊もいるから気をつけるのね」

親衛隊がいるって、本当なのか？ ていうか、お前は違うのか？

「あ、安西は、どうして高森と別れたの？」

安西は静かに紅茶のカップに口をつけると

「そんな事、あんたには関係ないでしょ。男と女の間には、いろいろあるから」

そう言ってフツと笑った。

な、なんだよ、それ。関係ないならいちいちあたしを睨むなつての。ていうか、あたしをバカにしてんのか？ なによ、フツて？

「に、に、妊娠した事、あるの？」

「誰に聞いたの？」

安西の表情が陰しく変わった。

優子はいきなり口から出た言葉に自身で戸惑う。

「え、えと、誰だっけ……」

「舟越ね？ そうね？ そんな事言うのはアイツしかないし、学校で知ってるような奴で思い当たるのもアイツだけだわ」

安西は再びカップの紅茶を飲むと、乱雑にそれをテーブルに置き「あの木偶の坊……友達なんていないようだから油断したわ……あんたと繋がっていたとはね」

「いやいや、全然。あんな男とは何の繋がりもないってば……なんで勝手に繋げちゃうの。」

「ほ、本当なの？ その話し……」

「あんたはどう思う？」

し、知るか、そんな事。

「さあ……」

優子は少し俯いて首を傾げる。

すると、安西は少しだけ腰を浮かして

「あつ、そろそろ帰ってくれる？ 雨上がったわ」

何時の間にか外の雨音は止んで、雲間から微かに陽が差ししていた。

玄関先で安西は優子に言った。

「覚えておいてね、これからあなたはあたしの一番の敵だから」

「ど、どうして？」

「決まってるでしょ。三角関係なんだから」

さ、三角関係？ それって、よくドラマや漫画にあるあれか？ そうなのか？ ていうか、どういうベクトルの三角なのよ……さっきあんた、別にいいけどって言ったじゃん。

優子は言葉が出ないまま外通路に立っていたが、安西は容赦なくドアを閉めた。

バタンツと言う音で、我に帰る。

まるで魔法の国にでも行っていたような気分だった……

何しに来たんだ、あたし。

結局何の成果も無いまま、後味の悪さだけを残して優子は安西のアパートを後にすると、自転車のペダルを踏んだ。

何が三角関係よ。冗談じゃないっての、もう。

踏み切りを渡って、元来た国道に沿って駅前に向う。

ついでだから、気晴らしに駅前の本屋へ寄っていいこうと思ったのだ。

しかし、横断歩道を渡ってドラッグストアの前まで来た時、彼女は慌てて自販機の並んだ影に自転車ごと身を隠した。

顔を覗かせて本屋の通りを見る。

直樹がいた。しかも、女の子と一緒だ。

黒い髪を肩まで伸ばした、色白で小柄な娘だった。

何あれ？ ま、まさか彼女？ もしかして、この前言った高森の親戚の娘？

優子がコソコソ覗いている視線の先を、二人は仲良く歩き去って行った。

少しだけ射し込んでいた陽差は陰って、再び雨雲が空を低く覆っていた。

夕方まで降ったり止んだりしていた雨は完全に上がって、雲間には小さな月がくっきりと浮かんでいる。

優子は部屋のベッドに身体を投げ出したまま、天井を見上げていた。

三角関係という言葉が頭を埋め尽くす。

なんだか超めんどくさい。恋愛ってこういうものの？ ていうか、あたし恋愛してないって。そうだよ。安西が勝手にどう思おうと知るか。

だいたい誘ってくるのは高森の方なんだから、あたしのせいじゃないじゃん。



## 第23話

翌日の日曜日。

優子は普段あまり履いていない白いミニのワンピースに、膝丈のレギンスを履く。

上に羽織ったピンクのカーデガンは、この前一葉に薦められて買ったものだ。

こんな感じなか……

優子は、姿見の細長い鏡に掛けられたバスタオルをどけて、自分を映してみる。

スタンドの着いた姿見は滅多に覗かないので、何時の間にかタオルや制服の上着が掛かっていて用途をなさない場合が多い。

彼女は昨夜忍から掛かってきた電話に、結局OKを出した。

……別に断る理由も無い。優子はそう思ったのだ。いや、思う事にしたと言った方がいいのかもしれない。

優子は結局ピンクのカーデガンを脱ぐと、ライトグレーのZipパーカーを羽織って、小さめのメッセンジャーバックを肩に掛けると部屋を出た。

\* \* \*

「今日は、部活は無いの？」

「ああ、今週は意外と緩いんだ。練習試合が決まれば、また少しハードかな」

けっこう練習してなのに、なんであんまり強くないんだろう。他は、よっぽど練習してんのかな？

優子は忍と一緒に電車で揺られながら、お台場に向っていた。

「け、けっこう頑張ってるのに、なかなか勝てないね」

優子は苦笑しながら言う。

「そうだな、けっきょくウチなんかは凡人の集まりだしな。TOPレベルの高校は他県からも選手を寄せ集めるから、素質が違つよ」

「ああ、そうなの……」

「でも、凡人仲間じゃ、けっこう強いんだぜ。ウチの学校も」

まあ、それだけ練習してりやあね。少しは勝てないと救われないじゃん。

やたらと混雑したゆりかもめに乗ると、優子の身体は終始忍に密着しっぱなしだった。

うわっ、混んでる……きつとこういう密着した中で、二人の関係は深まってゆくのかも……

しかし、優子は火照った自分の顔となんとも言えない息苦しさに耐えるので精一杯だ。

やっと少しは喋れるようになった忍とも、再び口数少ない時間を過ごす。

目的のホテルに着くと、二人は天井の高いロビーを抜けて3階にある大ホールへ向う。

同じエレベータには、いかにも「喰うぞ」という意気込みを感じる豊満な女性が数人乗り合わせた。

優子のすぐ横に立つおたふく顔の女性は、微妙に汗ばんで何故か鼻息が妙に荒い。

この人たち絶対ケーキだ。それしか考えられないよ。絶対食べ放題だ。

優子が思ったとおり3階で彼女達も降りると、一目散にホールへ向う。

優子は思わず笑いが込み上げたが、忍がいる手前それを必死で堪える。

「高森は、甘いもの平気なの？」

「ああ、俺は意外と好きな方かな」

二人は女性たちに続いてホールへ入ると、入り口で忍が二人分のチケットを切ってもらう。

大きな丸や四角のテーブルの上には、幾つものケーキが綺麗に配置されて、シャンデリアの明かりに照らされていた。

テーブルもケーキとのコントラストを考えた色合いになって、ホール全体が甘い香りに満たされている。

な、なんかお菓子の国に来たみたい……

ふと見ると、さっきエレベータで一緒だった女性数人は、もう皿イッパイにケーキを取り始めている。

いっぺんにどんだけ取るんだよ……

「何処から行く？」

忍が優子に小皿を渡す。

家の皿とは白の種類が違うような、スノーホワイトの皿だ。

「う、うん。何処でも」

優子はそう言いながらホールの中を見渡した。

一応、好きなケーキがあれば目を付けておかなければと思ったのだ。

そうは言っても、どれも美味しそうでただ目移りするばかりなのだ……

ケーキの飾られた大皿の横には制作したパティシェやお店の名前が書かれたカードが置かれている。

ドリンクコーナーではバーカウンターが設けられてワインやシャパンも配られているが、もちろん優子たちは酒は飲まない。

大きな窓際には休憩用と思われる赤いソファが1列に並べられて、優子はアイスティーの入ったグラスを片手にその一角に腰を下ろした。

忍はコーラを持って、隣に腰掛ける。

窓は大きなカーテンで閉じられているが、おそらく3階と言う事もあってたいした景色で無い為だろう。

来た時にはそれほどでもなかったが、何時の間にかホールは人で

溢れていた。

当然だがそのほとんどは女性だ。

女同士の連れや母娘らしい感じが目立つ。

中には小ジャレたカップルもいるが、男性はここそでドリンクを片手に退屈そうにしている。

「満足した？」

忍がコーラのグラスを傾けて言った。

「う、うん。かなり……」

もう当分はケーキ食べなくても平気かも。

「ここにいる人たちは、みんな招待客なの？」

「いや、有料で入っている一般の人の方が多いと思うよ」

「高森はどうしてこんな所の招待状持つてるの？」

「ああ、親父に貰ったのさ。仕事の接待で貰ったらしい」

「そうなんだ」

優子はアイステイーを口にしながら、昨日弟が女の子を連れた姿をふいに思い出す。

「そう言えば、直樹に舞衣ちゃんの事紹介したの？」

「ああ、紹介ってほどじゃないよ、二人は元々知り合いだからね」

忍は氷を鳴らしながらコーラを口にして笑うと

「直樹くんが仲良くしたがつて、舞衣に言ったただだよ」

「ふうん、そんで上手くいっちゃうんだ」

「あれ、どうして？ あの二人上手くいってるの？」

「あつ、うん。昨日二人で歩いてたよ」

「そうか、舞衣も少し意表をつかれた顔をしてたけど、嫌そうではなかったからね」

忍はそう言つてコーラを飲み干した。

「これからどうする？」

き、キタっ！ ほ、ホテルの中でどうするって……なんか、異常に緊張するんですけど。どうするの？

「ぶらっと、シヨッピングモールでも見ようか？ それとも、観覧



車にでも乗る？」

なあんだ、やっぱりホテルは直ぐに出るんだ。でも、えっ、観覧車？

「か、観覧車？」

ていうかそれって、ふ、二人きりの完全密室じゃない。ヤバイ、かなりヤバイよ。もつか、あたしの精神力……

「とりあえず出る？」

「う、うん……」

優子はソファから立ち上がると、忍について出口へ向かった。

ふと最初に会った豊満な女性たちが気になってホール内を見渡すと、ちょうど人混みの外れに、まだ元気に食べているのが見えた。

## 第23話（後書き）

次回はいよいよ、優子の危機か……

## 第24話

外へ出ると、少し風が強くなっていた。

浜風が吹くので内陸部より冷たい感じがするが、昨日とは打って変わって青い空が頭上高く広がっている。

忍はさり気なく優子を観覧車の乗り場へ促して歩く。

か、観覧車いくのか？ 何気にあんた、乗りたいのか？ そ、

それとも二人の密室で何かたくらんでいるのか？

「か、観覧車に乗るの？」

「ああ、せっかくだし。高いところ苦手？」

「うつん、そんな事ないけど」

まあ、いいか。観覧車なんて何時ぶりだろう……確か小学校の時に西武園の観覧車に乗ったよね。

観覧車のり場には行列が出来ていた。

意外に女同士もいるし、中には男の三人、4人組もいる。

制服姿は、何処かの修学旅行生だろうか。優子から見てもなんだか初々しい。

列に並んで暫く待つと、優子と忍に順番が回ってきた。

ゆっくりと動くゴンドラに、忍は優子を先に促すと彼も乗り込んだ。

ドアが閉まって乗り場から浮き上がると、もう誰も手が届かない完全な二人だけの密室が出来上がる。

優子はシートに腰掛けたまま地面が遠のくを見て、奇妙な浮遊感に比例するように微かな不安が広がる。

はあ、これで二人は宙に浮いてるのね……何も無いよね。まさか、こんな爽やか男が突然襲って来たりはしないよね。

優子は袈裟懸けにしたカバンのベルトを思わず掴んだ。

「何だよ、大丈夫か？ 高い所大丈夫なんだろう？」

忍は向かい側の席で微笑んだ。

窓から入る陽差が彼の頬を照らして、何だか少女コミックの表紙のようだ。

「う、うん。でもさ、この観覧車大きいよね」

ちよっぴり引き攣りながら、優子も笑う。

そつだよ、これデカくない？

しかも、高度が上がる度に風が勢いを増しているのか、心なし Gondra が揺れる。

地上はどんどん遠ざかって、少し離れた場所にさっきまでいたホテルの全貌が見えた。

そして、南側の青海の先には東京湾が広がってる。

小波が午後の陽差を受けてキラキラと輝いていた。

クレイ……こうして見ると東京湾も綺麗なんだ。

水平線には何隻かの貨物船が小さく浮かんでいる姿が見える。

ていうか、何か話した方がいいのかな。でも、何を話そうか。

あ、そうだ、昨日の事。安西の事訊いてみようかしら……

優子はチラリと忍の顔を見た。

すると、彼も優子を見つめていた。

「なあ、そっち座っていいか？」

ええええ？！ そんなのダメに決まってるじゃん。なんでこ

っちに来たいの？ 充分声も届くし、会話には問題ないでしょ。

「い、いいけど、こっちに二人じゃあ、Gondra 傾かないかな？」

「大丈夫だよ二人くらい。合わせても100キロくらいだよ」

忍はそう言っただけ席を立つと、優子の隣に移動して腰を下ろす。

Gondra がゆっくりと小さく揺れた。

こいつ、あたしの体重何キロあると思ってるんだろ……

「ゆ、揺れてるよ……」

「そりゃ、揺れるさ。支点がひとつだからな」

忍はそう言っただけ微笑む。

そんな物理的な回答は要らないんだってば。

風が強いのか、僅かなGondraの揺れは少しの間続いた。

優子はお互いの肩がギリギリで触れないように、座る位置をずらす。

「優子は、好きなヤツとかいるの？」

「べ、べつに、いないけど。そんなの」

何？　どういう意図の質問？　あんたの事が好きだって言うて欲しいのか？

「じゃあさ、とりあえず付き合う？」

なんだ、そりゃ？　何サラツと言ってるのよ。コクるわけでも無く、どうしてあたしに同意を求める？　こいつヤツパリ自信家なのか？　しかも、とりあえず、なのか？

「そ、それって、あたしたち……て事」

他に誰がいるんだよ。なに訊いてんだよ、あたし。

「ていうか、ここ俺たちしかないし」

忍のあまりに普通な笑顔が、優子をより困惑させる。

「そ、そんなこと急に言われても……」

優子は少しだけ忍から身体を離すが、ゴンドラの中は意外と狭く直ぐに壁が在る。

つつか、あんたはあたしと付き合いたいわけ？　そこん所をハッキリしなさいよ。とりあえずって何よ……超失礼なんだけど。

「た、高森は他に好きな娘とか……いないの？」

「何だかさ、いないんだよなあ」

忍は両手を頭の後ろに組んで、天井を見上げる。

少し長い前髪が、鼻の頭から目尻に向かってサラサラと零れるように落ちた。

だから、あたしの事はどうなんだよ。

「あ、安西は？　彼女の事、昔は好きだったんでしょ？」

「ああ……」

忍は不意に悲しげな目をして、反対側の窓から見える景色に視線を移した。

な、なによそれ。まるであたしがタブーな質問したみたいじ

やん。ていうか、訊いちゃいけなかったのか？

「あいつ、昔はもつといい奴だったんだ……」

「でも、別れたんでしょ……？」

「ああ、いろいろあってさ」

忍は小さく微笑むと、優子の手をそつと掴んで振り返る。

ず、ずるいよ。そんな悲しい笑みで迫るなんて……て、手が温かいじゃん。ヤバイよ。

優子は身体の力が引き潮のように抜けてゆく気がした。

忍の顔が近づいてくる。

生まれて初めてのシチュエーションに彼女の鼓動が跳ね上がる。

全身の力が抜けて、身を引くことが出来ない。いや、もう既に壁  
IPPパイに背を着けていた。

それでも忍との身体の間、無意識に手を挟みこんだ。

彼の息使いを、優子は鼻の頭で感じた。特大の瞳に虹彩の輝きが見える。

つ、着いちゃうよ、口が。あたしの口に着いちゃうつてば。

優子は忍の胸に当てた手のひらを小さく握りこむと、目を強く閉じた。

超ヤバイ。でも、そろそろ経験時だね。いい加減経験していいよね。これくらい、今時誰でもしてるよね。たいした事じゃないよね。ね。ね。ね。

心の中で観念した気持ち期待の波に浸食されるのを、優子は感じた。

唇に唇の気配が近づく。

と、その時突然ゴンドラが停止した。

停止した慣性でゴンドラはゆっくりと、しかし割りと大きく揺れる。

「きゃっ、何？」

優子は思わず、目の前の忍に抱きついた。

「何？ この揺れ。ていうか止まってない？ これって止まってな

い？　なんで……？」

「な、何だろう……」

忍も優子に抱きつかれたまま思わず呟いて、窓の外の様子を見下ろす。

下のゴンドラも小さく揺れているのが見えた。確かに観覧車は回転していない。

『ただいま強風の為、観覧車を一時停止します。慌てずそのままお待ち下さい』

天井に着いた小さなスピーカーから、明るいのにくぐもった奇妙な声のアナウンスが流れた。

ゲッ、これって強風で停止するの？

## 第24話（後書き）

沢山のアクセスをいただき、大変嬉しい限りです。  
お話はこれから少しずつ動いてゆきます。



## 第25話 (前書き)

今後少し、学園モノらしく、学校行事のエピソードなどが入ります。

## 第25話

それは何処から降ってくるのだろう。

それとも、地雷のように自分でも気付かないうちに踏んでしまうものなのだろうか……

もしかしたら、相手の心が自分の心を空気感染のように少しずつ侵食して、潜伏期間を終えると、突然症状が現れるのかもしれない。それでもこれは違うのだ。そんな類のものではないと必死で否定する自分がいる。

夜空には銀色の欠けた月が煌々と輝いて、辺りの雲を照らしている。

優子は「ふうっ」と息をついて湯船に身体を沈めた。  
今日はすっかり下着も脱いでいる。

ああ、もう。今日も疲れたあ。あたしって、意外と母性本能強いのかな……ヤバかったあ。でも、もうちょつとで初体験だったのに……あと5センチ無かったよね。

優子は自分の指をそつと唇に当てた。

あんなに澄んだ悲しい瞳は始めて見たと思った。

優子は忍の悲しい虹彩の瞳に魂が吸い取られるような、微かな恐怖すら一瞬感じたほどだ。

それが彼を受け入れようとした意識の力ケラなのかは判らない……揺れも風も収まったゴンドラは、その後通常に動いて無事下まで到着した。

いちど邪魔の入った甘い空気は、再び復活する事はなかった。

それでも、帰り道に暗がりですぐに再びキスでも迫られたらどうしようと、優子は気が気でなかった。

が、何時ものように笑って別れるだけで、何も無い。

そう、次の約束もないのだ。

あいつ、どういいうつもりなんだ？ 全然読めないヤツ。  
そして優子はふと思い出す。

あつ、そう言えばあいつ何時の間にかあたしを優子って呼んでた。……えつ、何時から？ 何時から名前で呼ばれてたっけ？

「まあ、いいか」

優子は少しだけ浮ついた気持ちでシャンプーのボトルに手を伸ばした。

駅から学校までの歩道で見かける銀杏の葉が、心なしか色を変えていた。

明け方少しだけ降った雨も上がって、青い空には高々と雲が流れている。

優子が教室に入ると、一葉が手を振ってきた。  
さり気なく周囲を見渡す振りをして忍の姿を探すと、彼もこちらを見ていた。

優子は小さく笑って、直ぐに目をそらす。

一葉が近寄って来たからだ。

何時ものようにたわいの無い話などをして直ぐにホームルームが始まる。

優子は一時間目の授業が始まってから、思い出したように安西ひとみの姿を見た。

昨日は見られてないよね。大丈夫だね。

彼女が言った「敵」という言葉がどうにも不快だった。

誰かの敵になるのが平気なら、もっと自分を出して社交的になれるのだ。

内向的な性格というのは、周囲の目を過剰に気にしたり、相手の反応を気にするあまり自分を出せない場合が多い。

そんな優子を明確な「敵」と呼ぶ安西を、彼女は不快に思った。

6時間目のロングホームルームは学園祭でのクラスの出し物を決める。

もちろん、クラス委員の優子が議長で、とりあえず舟越は書記だ。そして、なんだかどうでもいいような連中のどうでもいい発言がクラスの適当な賛成意見を呼び込んで、優子のクラスはメイド喫茶を模擬店としてやることになる。

つつか、いかにも流行りに便乗した安易な出し物なんだけど……まあ、喫茶店は定番と言えば定番か……  
つて、ええつ。なんで？

優子は黒板の文字を見て目を丸くする。  
イベントの責任者が優子になっているのだ。

「とりあえず、クラス委員に責任者をお願いしたいと思います」  
最初にそう言ったのは安西ひとみだった。  
誰もそんなものやりたくないのに、直ぐに賛成意見でいっぱいになる。

その後に安西は再び声を出した。

「部活のやっていない人たちが中心になるべきだと思います。文化部の人はもちろん忙しいし、運動部も準備の為に休めるとは限らないんだし」

な、なんて差別的な意見なの？ ていうか、安西だって部活なんて行って無いじゃん。

優子は思わず安西に視線を送るが、それに答えるように安西は言う。

「あたしは手芸部の企画で忙しいしさ」

し、手芸部？ コイツそんなおいしい帰宅部に所属していたのか。普段速攻で帰って塾に行ってるくせにいいい。

結局メイド喫茶の模擬店運営メンバーは優子をはじめ、一葉、斉藤美菜、谷脇みちる、千葉鈴香、稲本由香、その他3名の全部で8名だ。

親しい里香は部活があるので加わっていない。

それと、舟越は雑用係で加わっている。クラス委員だから。

人選は極めて簡単で、他の人はみんな何らかの部活に入っているのだ。

もちろん当日や準備に参加できるものはできるだけ参加する。などと言う極めて曖昧で、いかにも参加しなくても誰も文句を言わない取り決めでホームルームは終了した。

「ねえ、メイド服ってどうするの?」

一葉が声を出す。

放課後、自然と模擬店メンバーが集まる。

「今ならいくらでもコスプレ用の服が売ってるけど、買うと高いでしょ」

みちるが加えて言った。

「やっぱ作るしかないでしょ」

美菜がそう言って笑う。

彼女はそれほど嫌そうな素振りはない。話を聞くと、洋裁が得意なのだそうだ。

「じゃ、じゃあ洋服は美菜が中心だね」

優子は小さい声でまとめる。

「予算って、どうなってるの?」

再び一葉が言った。

「予算によって、洋服も、飾りの具合も変わるでしょ」

「そうか……そうだね」

優子は思いもしていなかった事を言われて、少々動揺する。

「まだ日があるしさ、また明日考えようよ」

鈴香がそう言って、もう自分はカバンを持っている。よっぽど帰りたいたいのだ。

「そうだね、予算訊いておくから」

優子はとりあえずみんなを見渡すように言った。

各々にカバンを手にすると、教室を出てゆく。

はぁ………なんであたしが責任者なの………ていうか、やっぱりあたしもメイドになるんだろうか………

重苦しい溜息を零す優子に、意外と楽しそうな顔をした一葉が  
「帰ろう」

コイツ、意外と乗り気だな。

## 第26話

翌日、模擬店を出すクラスや部の集まりがあった。

完全なバツティングを防ぐ為の配慮だが、喫茶店、クレープ屋、カフェ等が全部で10店もある。

メイド喫茶、メイドカフェ、萌えカフェとその中の半分はメイド系を思わせる企画だ。

その他にも占いカフェやお絵かきカフェ。不思議カフェ？ なんてモノもある。

パソコン研究会ではネットカフェを持ち出してきた。

学園祭に来てまでネットカフェに入り1日を潰してしまう客は、なんだか悲しい……

模擬店などの出し物は文化部が中心で、クラス単位で出すのは全校内で6クラスのみ。

各学年2クラスと割り振られている。

その中でどうして優子のクラスは参加なのか？

答えは簡単。くじ引きで引き当ててしまったのだ。

しかも、それを引いたのは優子本人だから、もはや文句も言えない。

逆に責められなかったのが不思議なくらいだ。

そんな中で、優子が少しホッとしていたのは、やはり同業種が多い事。

当日はメイドの姿がけっこう多いから、自分たちもたいした目立ちはないだろうと一安心した。

学園祭までは2週間ある。

まだ2週間もあると、誰もが楽観的だった。

しかし、準備は進まないまま最初の土曜日まではあつと言つ間に

過ぎてゆく。

優子は模擬店のメンバーに仕方なく声をかける。

「あ、あのさ、今日詳しいこと決めないとヤバくない……かな」

「ええっ、あたし今日彼氏と出かけるんだけど」

鈴香が言った。

んなの知るか。あんたも決められたメンバーなんだから少しは考えろっての。

もちろん他のメンバーも多少はやらなければという気は在るのだが、作業は面倒というパターンだ。

「でもさ、あたし洋服なんて作れないよ」

一葉が困惑して言う。

彼女の指先が異常に不器用な事は、優子も知っている。

前にデコレーションケーキを家庭科で作ったとき、彼女がスポンジに下地のクリームを塗ったら、それだけで妙に不味そうに見えた。「あ、あたしさ、みんなの分作ろうか？」

そう切り出したのは斉藤美菜だ。

彼女の母親は縫製工場で働いている。小さな工場だが少量生産のデザイナーズブランドを作る隠れ工場だ。

その影響か知らないが、美菜は洋裁が得意で手作業も早い。家にはロックミシンも在るという。

「ほ、ほんと？」

「うん。じゃあさ、こんな感じでどう？」

美菜は携帯デジカメで撮ったサンプルの写真を見せる。

モノトーンのシンプルなメイド服だが、エプロン部分の淵や衿と裾にレースを使っているのだからいかにもそれらしい。

美菜は自分で一着すでに作っているらしいのだ。

「いいじゃん」

一葉が言った。

ていうか、いつの間に作ってんだよ。もしかして美菜って、コスプレの趣味でもあるのか？



優子も写真を見て、笑顔で頷いてみせる。

みんなもそれで納得しているようだ。

中には早く決めたくて適当に頷いている者がいるのも確かだが……  
そんな感じで美菜が衣装を担当、他の連中は週明けから教室の飾りを放課後作る事で話はまとまった。

「ねえ優子、さっそく生地買いたいんだけど。そうすれば週末でかなり造れるから」

みんながバタバタと帰る中、美菜にそう言われた優子は彼女に付き合って、さっそく帰りに生地屋へ寄る事にした。

バイトがあるという一葉と駅で別れて、優子は美菜と一緒に吉祥寺まで行く。

大きな専門店があるのだ。

店内に入ると、二人は生地コーナーへ向った。

黒い生地、白い生地といっても何10種類もある。

しかし予算が少ないから選択肢は限られている。

優子がただ眺める横で、美菜はあれこれ手触りや光が当たった時の見え具合などを丹念に吟味して選んでいた。

買い物が終えた帰り、駅前のファーストフード店でちょっとだけお茶をする。

「ねえ、優子。最近高森があんたの事よく見てたりするけど、気付いてる？」

「えっ？ そ、そうなの？ ぜんぜん、気付かなかった」

そ、そうなのか？ あいつ、時々視線は感じるけど、やつぱり見てるんだ。あたしの気のせいじゃないんだ。

優子はさり気ない笑顔を維持しながら、バジルポテトに手を伸ばす。

ていうかあんた、そんなにしょっちゅう高森の事見てるんだ。

「高森って、安西と噂あったけど、どうなんだろうっね」

美菜がカップを手にして言った。

「ど、どうって？」

「今は全然二人で話してる事なんてないし、本当に昔付き合ってたのかな？」

「さあ、どうだろうね」

いや、昔付き合ってたらしいよ。ホント。

「み、美菜も高森の事、好きなの？」

美菜は両手でココアのカップを持って、虚ろな視線で何処か上の方を見上げると

「好きっていうかさ、あいつ見てると何かこう、カッコイイ服とか作ってあげたいなあ。なんて」

そっちかよ。ていうか、あんたの趣味って何？

「美菜って、よっぽど洋服作るの好きなんだね」

「あたし、洋裁の学校に行くんだ。そして将来コスプレ用の洋服メーカーを造れたらなあって」

そういう方向か……でも、将来の目標がちゃんとあるんだ。

あんなスゴイよ。

「へえ、すごいね」

優子は美菜に笑顔を送ると、二階の窓から見える駅周辺の雑踏に視線を移した。

## 第27話

空が緋色に染まって辺りが暮色に変わる頃、二人は電車に乗った。美菜が電車を先に降りるので「じゃあ、お願いね」と手を振って別れる。

修学旅行のグループ以来、普段あまり話もしない美菜だが、改めて一緒にいると何だか気も使わないしけっこう楽だった。

既に将来の目標が在ることに、ちよっぴり衝撃を受けた。

将来どうしたいかなんて、優子はほとんど考えた事もない。

それでも来年の今頃には少なくとも高校卒業後の進路は決めているのかと思うと、何だか気持ちが鬱屈<sup>うっく</sup>する。

高森は、やっぱり大学行くんだろうな。しかも、あたしが行けないようなところ。

美菜と別れた後、再び学校最寄の駅を通って優子の家まで向う。電車が減速してホームに進入すると、複数の学生の姿が見えた。もちろん、優子の学校の生徒が多いが、他の学校や中学生、サラーマンやOLの姿もチラホラいる。

そんな景色の中で、優子は忍の姿を見つけた。

周囲の顔なんて全然見えてないのに、不思議と彼の顔ははっきりと見えた気がする。

電車の風圧を受けて、パタパタと髪の毛やボタンを開け放したブレザーがはためいていた。

あつ、そうか部活が終わった時間なんだ。

優子は改めて腕時計に視線を向けたあと、ドアに顔をくっつけて通り過ぎた彼の姿を探した。

完全に停止した電車のドアが開く。

忍がいたのはホームの中央だった。降りる駅の改札口へ上る階段がその場所に在るからだ。

優子はさっきまで一緒だった美菜に合わせて先頭車両近くに乗っ

てた為、だいぶ距離がある。

彼女は忍が乗り込むであろう車両中央に視線を向けるが、人混みで見えない。

な、なに探してんだろ、あたし。別にいいじゃん、どうでも優子はふと自分の行動が恥ずかしくなって、閉まったドアの窓から再び真正面の景色を眺めた。

電車の風圧で髪をたなびかせる忍の姿が、ちよっぴり凛々しく感じたのは事実だ。

電車が走り出して少しすると、乗客を掻き分けて誰かが近づいてくる気配がある。

「よお、何処か行つて来たの？」

手前の学生とサラリーマンの隙間から忍が姿を見せて声をかけてきた。

あたしが見えてたんだ……動体視力つてやつか？

優子は思わず心中が軽やかで晴れやかになるのを感じて、再びそんな自分が恥ずかしくなる。

少し俯いたまま上目遣いで忍を見ると

「うん、模擬店の買い物」

「ああ、そうか。やっぱりメイドの格好するの？」

そ、そんな嬉しそうに言わないでよ。

「うん、とりあえずね」

「服は？」

「美菜が作るつて。彼女洋裁得意だから」

あんたにカッコイイ服作りたいつてさ。

「そりゃ、ちよっと楽しみだな。遊びに行くよ」

「う、うん……」

ていうか、あんまり来て欲しくないつていうか……メイド服の自分が想像出来ないんだけど。

空は紺青に変わり、駅前周辺は連なる店頭の明かりが煌々満たして、住宅街には街の灯が燈っている。

優子は忍と一緒に駅のロータリーを出ると、何時ものように通りを渡って帰り道を歩く。

「ね、ねえ。あのさ、どうしてご飯は何時も独りなの？」

「えっ？」

「ほら、夕飯は何時も独りだって」

「ああ、夕飯以外も独りだけ」

そうじゃなくて。家族でいるのに不自然でしょ。て訊いてんのよ。

「な、なんで？」

「ああ、ウチ、今の母さんは後妻だからな。話すと長いけど、母親は俺の事を息子とは思ってないんだ」

「最初のお母さんは？」

「さあね。俺が小さい時に出て行ったよ」

忍はわりと明るい口調で言った。

な、何よその超ヘビー級な話は……やっぱり訊いちゃいけないのかな。ていうか、そんな事全然知らなかった……

「そ、そなんだ……」

優子はそれっきり口を閉じた。下手な事は訊かない方がいいのだと思った。

下手に相手のことを知ってしまうと、その人の重荷を自分まで背負い込んでしまいそうな気がして怖いのだ。

安西の事だって事情はよく判らないが、独りで暮らす姿を見て以来、彼女に微かな哀愁さえ感じてしまう。

「そう言えばさ、日曜日空いてる？」

国道の歩道から住宅街に入ると忍が口を開いた。

ま、まただ。どうして急に誘ってくるかな。しかも空いてる

？　とか言つて、あたしがいつつも暇なの知ってるくせに。

「べ、別に予定は無いけど。でも、学園祭の準備で用事が出来るかも」

ま、たぶんそれは無いけどね。

「じゃあさ、暇だったら朝電話くれよ」

わわわわわっ、そんなの出来るわけないだろ。あたしから電話なんて絶対ヤダ。

「で、電話は……高森がよこしてよ」

「そうか、じゃあ明日の夜に電話するよ」

「う、うん……」

はあ、それならいいや。

優子は安堵の思いで忍に手を振って別れた。

## 第28話（前書き）

少しずつ、高森忍という人間が明らかになります。

## 第28話

「あたしに触らないで！」

母親は少年に言った。

少年は差し出した小さな手を慌てて引き戻す。

……僕はお母さんと手を繋いだ事が無い……僕はお母さんに抱きしめられた記憶が無い。

少年は困惑した。

母親は拒絶を繰り返した。

自分の子供を抱けない。

自分の子供に触れない。

自分の子供を愛せない……

愛する事は努力で補えなかった……それは、こころの奥底から自然に湧き出るものだから。

いくら義務感や責任感で後押ししても、どうにもならないのだ。

少年が5歳の時に母親は家を出て行った。

……僕は人に愛される人間になりたかった。母親が僕を愛せなかったのは、きっと僕のせいだ。

だから、誰にでも愛される人間になる必要があった。

勉強も運動も誰よりも優れた完璧な子供。誰からも好かれる清い子供。

小学校も中学も、みんなが少年を見ていた。

……みんなが僕を見ていた。担任も学年主任も、友達の親さえも

……

中学の時に最愛のパートナーを見つけたと思った。

純真無垢な彼女を僕は愛し、彼女の愛を求めた。



でも違っていた。

彼女は恋という感情に溺れるだけで、愛は無かった……  
そして周りの人間は本当の自分を見ようとはしない。  
そんなものには興味はないのだ。

少年は再び優等生の仮面を被った孤独という塊の生き物になった。  
周囲から注目される視線だけが、密かな彼の心の癒しとなっていた。

実際自分でも、何処からが仮面で何処からが生身なのかも判らない……

しかし、高校へ入るとみんなが自分を見ているわけでは無い事に気づいた。

自分に興味を示さない連中がいることを知った。

……何も感じない彼女の心に、俺は入り込めるのだろうか……彼女は本当の俺をどう受け止めてくれるだろうか。

\* \* \*

結局日曜は暇だったので、優子は忍と出かけた。

まだ美菜が洋服を縫っている状態だから、自分たちには特にやる事がない。

本当は教室の飾りつけなども考えないといけないのに、あと1週間で何とかなるだろうとみんなが思っていた。

忍が行きたいと言うのに付き合っ、表参道の古着ショップへ二人は入った。

「古着好きなの？」

忍の小奇麗なイメージからはあまり想像できないが、よく見ると

ジーンズは古着っぽい。

「ああ、けっこう買うよ、古着」

忍はそう言ってジーンズの山となった棚を抜けてハンギングのコーナーを物色する。

優子は初めて入った古着専門の店内を珍しげに眺める。

薄っすらと洗剤が何か薬品のような匂いが店内を埋め尽くしていた。

奥の方には、意外とレディース商品も多い。

彼女はラメの入ったセーターなどを手にとっては、元に戻す。

ブラブラしながらキディランドにも入り、久しぶりに竹下通りなども通ってみる。

相変わらず人の頭が凄い。

途中で路地へ入ると、忍に促されるまま雑貨店に入った。

なんでこんな路地裏の店知ってたんだ……？

とある売り場に行くと、忍は迷いもせずに商品を手に取る。

「お、お香好きなの？」

「ああ、けっこう買うかな。部屋で焚くと意外と落ち着くよ」

最近はお香といっても、フルーツ系など甘い香りも多い。

優子も彼につられるように何点かお香を買ってしまう。

こんなの部屋で焚いたら、煙くならないのかしら……

店を出ると、正面で誰かが声を上げた。

「あつ、優子じゃん」

優子は目の前の二人を凝視した。

路地は影っていて、目の前にいる女性の茶色いはずの長い髪が大分黒く見えた。

「す、鈴香……」

クラスメイトの千葉鈴香は、全体的にひよる長い彼氏と一緒に歩いて来た。

「何？　なんで高森と優子が一緒なの？」

鈴香の瞳は興味と驚きでIPPYの輝きだ。

学校内で男女が付き合う場合、二通りが存在する。

1つは自他共に認める公認カップル。この場合は違うクラスや違う学年同士が付き合う場合が大半だ。

そしてもう1つは、お忍びカップルだ。

これは周囲の連中には内緒で付き合うパターンで、同じクラスや、その他知られたくない立場同士のことが多い。

何気なく何時の間にか付き合い出すパターンも、このケースになる事が多いのは確かだ。

「あんたたち、何時から？」

「ち、ち、違うんだよ。あたしたち、そんなんじゃないのよ」

「じゃあ、どうして二人でこんな所歩いてるのよ」

ああ、こんなメジャーな場所には来るんじゃないかった。ていうか、東京はこれだけ人口がいるのにどうして知り合いにバッタリ会っちゃうかなあ、もう……

「これは、その……」

「まあ、いいじゃん。そんな事」

忍が笑って言った。

「別に悪くは無いけどさ、高森って変わった趣味なんだ」

鈴香がそう言ってクスリと笑う。

そりゃあ、どういう意味だよ。

「そんな変わってるかな？」

「変わってるよ。先週だつてD組の佳穂にコクられたんでしょ？」

彼女だつてけつこう人気高いから、かなりイイ線いけるって噂だったのに」

なんだそれ？ 全然知らなかった。こいつ、そんなに頻繁にコクられてんのか？

優子は思わず忍を見上げる。

もちろん彼が校内で人気の在る事は充分知っているが、まさかコクって来る勇者がそう頻繁にいるとは思わなかったのだ。

いつの間にコクられてんの？

つまり、安西が言った親衛隊とは過去忍に振られた連中を指すの  
だろう。

親衛隊と言うよりは、彼と一線を越えて親しくする連中を妬む輩  
だ。

「へえ、優子がいるから断ったんだ」

鈴香は薄っすらと笑いを浮かべて二人を交互に眺めた。

忍は意味深な笑みで「さあ、どうかな」

ど、どうかなって、なに？ でも、確かにあたし、まだあんな

たと付き合つか決めてないんだよね……

優子は忍から視線を離せなかった。

## 第29話

少年は自分がみんなに好かれる人間になれば、母親は戻って来ると信じていた。

学年でトップの成績を取ったのは小学3年生の時だ。

その後はずっとトップを取り続けた。

5年生の時には副会長、6年生の時には生徒会長にぶっちぎりで当選した。

しかし、母親は戻って来てはくれなかった。

中学二年の時に、父親は再婚して、本当の母親には二度と会え無い事を知った。

新しい母親はいい人だった。

しかし、彼女は父親の妻あつて自分の母親ではないと思った。

それは、彼女がもたらす雰囲気からも何となく感じた。

父親は仕事が忙しかった為に、自分の息子の面倒は見なかった。

母親がいない間はずっと家政婦がいた。

給料の要らない家政婦。

それが今の、母親と言う肩書きの女性だ。

習慣と言うものは恐ろしい。

もう誰からも好かれる人間になっても仕方がないと知りながら、他の自分が見つからない。

自分はいったいどんな子供だったのかなんて忘れてしまった。

いや、物心ついた時にはもう、人に好かれようと努力していたのだ。

だからきつと、今の自分が本当の自分で、それ以外には何も無いのかもしれない。

……俺の内側って、空っぽなのかな……

\* \* \*

裏路地とはいえ、そこは店舗が軒を連ねて度々人が交差する。

少し入り組んではいるが、表参道に抜ける事ができるのだ。

コツコツと石畳を打つヒールの音が通り過ぎていった。

鈴香は再びフツと笑い声をあげると

「優子じゃあ、内緒にもしたいよね」

なっ、どういう意味よそれ。どうしてあたしと付き合うのは内緒にしたいのさ。内緒にしたいのはこっちだよ。へんなとばかり受けるのはあたしなんだから。

ていうか、付き合ってたんじゃないんだってば。

「そんな事はないけど、優子が周りに知れるのは嫌かと思ってさ」

忍は鈴香に向かって言った。

「確かに沢山妬まれそうだもんね。あたしもショックだけど」

鈴香はそう言って直ぐ

「じゃあ、とりあえず頑張ってね」

二人と二人は路地で場所を入れ替わるようにすれ違う。

鈴香の隣にいたひよる長い彼氏は、最後まで一言も声を発しない。

「あ、あ、あのね、鈴香……」

「判ってるよ、内緒にしておいてあげる。こんど何かおこれよ」

鈴香はそう言って優子に笑顔を送って立ち去った。

彼女はある意味、何処かで優子を馬鹿にしていた。

暗いというか存在が薄くて、クラス委員のくせにいてもいなくてモクラスは変わらないし、普段からそんなに親しくしていたわけでもない。

嫌いなわけではないが、まったく目立たない彼女を何処かで見下

していた。

しかし、忍と二人で歩く彼女の姿を見て、素直に女として認めたのだ。

どういう経緯があったとしても、自分で見た光景は真実なのだ。

優子は忍と二人で出かける間柄なのだ。

「そういうんじゃない……」

そういうんじゃないんだよ。ていうか、そう見えて当たり前なのか？

優子が困惑して忍を見上げると、彼はいたって平然と鈴香に軽く手を振っていた。

少しカーブした路地の先に鈴香の後ろ姿がまだ見えたが、優子と忍は歩き出した。

こうして見ると、高森忍は校内で人気の在るのは確かだが、誰もが自分の彼氏にしたいと思っているわけではないのだ。

ある者は憧れの眼差しで、ある者は知り合い、又は友達で在る事で満足している。

確かに出来れば付き合ってみたい男なのかもしれないが、校内生活を楽しむ為のアイテムなのかもしれない。

鈴香のように、他に彼氏のいる女子が「高森好き」と公言する様は、まさしくそうなのだ。

しかし、中には安西のように本気で忍を好きな女子がいるのは確かだ、優子は何時そんな連中から目の仇にされるかわからない。

そんな中、優子の心は迷っていた。

忍の心が判らないから……

自分をどう思っているのか明確に判らないまま何となく時間だけが過ぎてゆく。

自分が彼をどれだけ好きなのかも判らないし、本当に好きかも判らない。

そんなものは形や量がはっきりと示されるものではないから、もしかしたら永遠に判らないままかもしれない。

みんなは、何を基準に好きな度合いを測るんだろう……どう  
なったら好きだって証になるのかしら……



### 第30話（前書き）

中間あらずじ

忍に誘われるまま、彼との時間が増えてゆく優子は、自分の気持ちが解らない。

人を好きになるのに、度合いの基準はあるのだろうか……

そんな中、安西ひとみの一言で、優子は学園祭で出す模擬店の責任者になってしまった。

### 第30話

大きな平屋造りの軒先には、空っぽになったツバメの巣がひっそりと残っていた。

縁側の長い廊下に置かれた丸い金魚鉢に朝の光線があたって、熟した鬼灯ほおずきのような魚たちの背はウエットグロスのように輝く。

母親は何故か金魚鉢で金魚を飼うのが好きで、今時の水槽を使おうとしない。

「週末、学園祭ですって？」

「ああ、僕はあまり関係ないけど」

「やっぱり見に行った方がいいのかしら」

「別にそんなのいいんじゃない」

靴を履いてから、振り返って応える。

「……今まだだって、来た事なんてないじゃないか。」

「でも、他のご父兄とかは見に出かけるんでしょ？」

「みんながみんな、親が来るわけじゃないし」

「……どうせ、たまたま同じ学校の父兄にでも会って情報を聞いたんだろ。」

「昨日、久しぶりにほら、安西さんのお母さんと駅で会ってね……」

忍は母親に向って微笑むと、彼女の話の続きを遮るように

「そんなの気にしなくて大丈夫さ。そういうのに来ない親はたくさんいるんだから」

彼は玄関の引き戸を開けると、外へ出て陽差を頬に浴びた。

僅かな開放感が、心の中に薄く漲る。

\* \* \*

週明けの月曜日。

美菜は早速自分で作ったメイド服を学校に持って来ていた。既に3着が出来上がっているらしい。

とは言っても、これからレースの部分などの飾りを各々で着けるのだ。

放課後みんなが帰った後で、美菜は大きなカバンを開けて係りのみんなに衣装を披露した。

シンプルだが、確かにメイド服だ。

みんな珍しがってとにかく手に触れてみる。

黒い部分はサテンを使っているので、材料費の割りに高級感がある。

早速衣装の飾り付けが始まった。

レースは作り売りのモノを利用してスカート部分の裾、そしてエプロンになる部分の淵に取り付けるだけだ。

美菜に教えられながら優子と一葉など最初に充てられた連中が家庭科室でミシンを踏む事に。

「ねえ、ボビンケースって、どっち向きだっけ？」

ふと声の方を見ると、鈴香がいる。

「鈴香、今日はデートじゃないんだ」

一葉が皮肉を込めて言った。

いつもさっさと返りたがるのに、珍しく残っているからだ。

「まあね、何だか自分の男が急にシヨボく見えちゃってさ」

そう言って鈴香は優子を見る。

な、なんであたしを見るのよ。ていうか、それってどういう意味？

「鈴香の彼って、北高でしょ。けっこう背が高かったよね」

一葉の作業を手伝う美菜が会話に入る。

「背は高いけどね、顔が負けるよ」

「負けるって、だれに？」

美菜がそう言って鈴香を見ると、彼女は再び優子を見ていた。

だ、だからなんでこっちを見るのさ。自分の彼氏と高森を比べてるのか？

優子はそんな視線を返しながら、ボビンの向きを彼女に教えてやった。

優子たちは毎日居残りで模擬店に使う衣装を作ったが、他にもやる事があった。

教室の飾り付けだ。

自分たちだけメイド服なんかを着て教室がそのままでは、余計に浮いた存在になってしまう。

教室内を見合う飾りで覆う事で、何とか恥ずかしさも凌げるというものだ。

この週になると、どこも居残りして自分たちの模擬店の準備に掛かっていたので、放課後の校舎は何時に無く賑やかだった。

廊下に出ると、何時もは閑散としている風景に明かりが灯つていて笑い声などが聞こえてくる。

二つ隣のクラスは季節はずれのお化け屋敷をやるらしく、何だか妙に騒々しい。

向こうは男子が多いようで、どうやら客の脅かし方の練習をしているようだ。

男女を交えた大きな笑い声が、時折響いてくる。

優子たち衣装が完成した連中は、大きな看板の制作に取り掛かっていた。

ポスターカラーで模造紙に文字や絵を描いて木の板に貼り付け、周囲には色とりどりの飾りを立体的に着ける。

「ねえ、あんた高森とはもうしちゃったわけ？」

筆や絵皿を洗いに洗面所へ一緒に行った鈴香が、優子に小声で訊

いてきた。

優子は洗っていた絵皿を思わず取り落として、それに当たった水道の水が大きく跳ね上がる。

「きゃっ」

優子は急いで絵皿を拾うと、顔にかかった水滴をぬぐって

「そ、そんなの何もないってば。そんなんじゃないんだから……」

なんでいきなりヤツタ話に飛ぶんだよ。

鈴香は確かに日曜日にバツタり会った事を誰にも言っていないようだったが、こうして二人の関係に興味深々だった。

「しかし、高森の趣味があんたとはねえ」

な、なによ。まるで高森がゲテモノ好きみたいな事言って。あたしだってあんたと比べたってそんな変わらないレベルでしょ。ちよつと影は薄いけど……あたしだってちよつと気の効いたボキャブラリーを覚えた日にはね……まあ、いいか。

「だから、この前はさ、たまたま一緒にいただけなのよ」

「たまたまって、何よ」

「いや、だからたまたまお互い暇だったっていうか……」

優子は何枚かの絵皿を洗い終えて、水道の蛇口をひねって水を止めた。

「暇だったら一緒に出かける仲なんですよ」

「いや、でも何時もってわけじゃ……」

どうしてそんなに突っ込むのさ。どうだっていいじゃない人の事なんて。あんたは彼氏がいるんだしさ。

鈴香は洗った筆を何本か纏めて手に掴み、シュツと一振り空を切って水切りすると

「そういう二人を世間では付き合ってるって言つのよ」

「そんなの、おかしいよ」

洗面所を出る鈴香を優子が追いかけるように言つ。

「なに？ 優子は高森の事嫌いなの？」

「そ、そういう事じゃなくて……」

「じゃあ好きなんでしょ」

「そ、そんなのまだ判んないじゃん……」

「なに中学生みたいな事いつてんの？」

鈴香は少し苛立ったように鼻で笑うと

「でもさ、何気に安西とかが知ったら、あんた睨まれるだろうね」

「ど、どうして？」

優子はわざとしらばっくれて応える。

「だって、昔噂だったじゃん。安西が高森の元カノだってさ。同じクラスだとキツイね」

「そ、そういえば、そんな噂あったね……」

ていうか、とつくに睨まれてんだよ。

### 第31話

ここ数日は毎日6時頃まで残るのが当然で、優子たちは暗い中を帰るのが当たり前になっていた。

もう明日が学園祭初日の校内公開。明後日は一般公開だ。

「もう準備万端だね」

一葉がそう言っ、当日は廊下に立てる予定の大きな看板を教室の壁に立てかける。

室内は色画用紙で作った飾りでいっぱいになり、けっこう華やかだ。

テーブルは机をくつつけて使うが、その上にはギンガムチェックの布が掛けられているので、かなり可愛い装飾になっている。

「食材は明日の朝届くんでしょ？」

一葉は優子に確認する。

「うん、二日分届くから」

「しかし、ウチの男共は薄情だよ。全然手伝わないじゃん」

結局模擬店関係者以外は度々様子は見に来るものの、ちゃんと手を貸す生徒はいなかった。

確かに運動部は今日も練習があったようだし、文化部は各部の出し物でバタバタしている。

それだけに、各学年6クラスあるにも関わらず、クラスで模擬店を実行するのは全部合わせても6つなのだ。

他の模擬店は部活単位で出すと言う事だ。

それでも一般教室を使う部が入り込んできた為、今日は何時にも増して放課後の校舎は賑やかだった。

一葉がふと視線を下げると、もくもくと輪飾りを作る舟越が教室の隅にいて、彼女をチラリと見た。

「な、なによ。あんたはクラス委員なんだから、やって当たり前でしょ」

同じ存在感が無いにしても、今となつては舟越が優子を完全に上回っている。

「ちよつと、輪の大きさが全然違つてるじゃない」

舟越の作つた輪飾りを見た一葉が再び声を上げる。

いままで彼の存在同様、その作業に誰も注意を払っていなかったのだ。

かなりの量の輪飾りを船越が作つたが、大きさが全部バラバラだった。

「ほんとうだ、ちよつと笑えるんだけど、これ」

鈴香もその飾りを手にとつて見る。

「自分だつてたいしたもの作れないくせに……」

舟越がぼそりと言つて、一葉が作つた色画用紙のいびつな花飾りに視線を向ける。

「あ、あたしはそれなりに頑張つてんのよ。あんたみたいにボケツとやつてるわけじゃないし、他にも忙しかったんだからね」

「まあ、もう時間ないしさ、これはこれで大丈夫だよ」

優子が仕方なく割つてはいる。

「そうね、こんな輪飾りもいいかも」

美菜も飾りを見て言つた。

つつか、もう充分足りてるのに、なんであなたは輪飾りしかやらないの？ しかもまだ作つてるし……

優子は思わず息をつく

「舟越も、もう帰る準備しよう」

彼女にそう言われた舟越は、ようやく作業をやめて辺りを片付け始めた。

「優子、最近ちよつと強くなつた？」

そんな光景を見た一葉が、優子の肩に手を置く。

「なによ、その強くなつたつて表現は？ じゃあ、今まであなたは弱かつたのか？」

優子は苦笑しながら「な、何がよ……」



「優子は弟さんいるから、元々はお姉さんなのよ」  
美菜がほのぼのと笑って、最後まで舟越が作っていた輪飾りを壁に貼り付けた。

優子たちが校舎を出る時、もうほとんどの準備は終わっているようだったが、1年と3年のクラスにまだ明かりが着いていた。

途中で別れる連中に手を振ると、優子と一葉と美菜、それと鈴香が同じ駅まで行く。

美菜と鈴香は優子たちとは逆方向に向かう電車に乗り込んだ。

優子は車内の一葉に手を振って別れるとホームに降り立って、何時ものように駅の階段を上る。

この駅は、階段を上り切って少しで改札口があり、その先が左右の出口に向かって分かれている。

優子は改札を抜けてふと反対側の出口へ向かう通路に目が留まった。

安西だ……どうしたんだろう。

安西ひとみは年配の女性に腕を掴まれて何かを言い合っている。  
補導か？ いや、まさかね……もしかして、お母さんとか？  
そう考えて見れば、二人の骨格は何処と無く似ている気がする。  
二人が何を言い合っているのか声は聞こえてこなかった。

ただ、引つ張る女性の手に、安西は首を大きく振ったりして拒絶を露にしている。

おかしな勧誘って事はないよね。安西がそんなものに引つ掛かって立ち止まるはずないもんね。

優子が思わず立ち止まって見ていると、安西は年配女性の手を強く振り解いて駆け出し、そのまま階段の先に消えていった。

残された女性は安西の消えた先を何時までも見つめている。

その眼差しと装いに、彼女が安西の身内の人間だという事が確信できた。

人それぞれいろいろあるんだな……

優子はこの前見た、安西が独りで住む淋しげで殺風景な部屋を思い出した。

確かに安西は好きではない。

クラスでも表向きは親しげに会話を交わしているくせに、彼女に嫌悪を抱いている女子は多い。

でもそんな安西の孤独な暮らしの一面を見た優子は、どうしても彼女を本気で嫌う事は出来なかった。

安西の荒々しい気性の影には、どうしても悲しい過去が……何か大きな影が見え隠れしているような気がした。

それはなんだか、忍の笑顔の裏側に見え隠れするものに似ている気がして、胸の奥がほんの少しだけキュッと締め付けられる。

安西と絡んでいた女性がふいに振り返ったので、優子は慌てて自分が降りる方向へ歩き出した。

### 第32話

学園祭初日。

身体にムチ打つ思いで何時もより大分早い時間に学校へ来た優子は、届いていた食材を受け取って教室に入り、今日のチェックを済ませると校舎の外を眺める。

校舎の端にある正門から入ってくる生徒の姿が、なんだか虫の大量のように大勢見えた。

何時もは自分が誰かに見られているのかと思うと、何だかその光景に優越感が湧く。

「おはよう」

教室の戸を開けて入って来たのは美菜と一葉だった。

今日は体育館で直接朝礼の後3時まで解散になるので、教室へ来るのは模擬店係りの連中だけだ。

一葉はカバンから大きな目の化粧ポーチを取り出して、テーブルに置く。

今日明日は、いくら化粧してもお咎めがない。

「あたし、優子にいいもの作って来たよ」

美菜が近くのテーブルに荷物を置くと、笑顔でカバンを開けた。ゴソゴソと彼女の取り出したモノに、優子は軽い衝撃を受ける。

なっ、何……それ……

美菜がカバンから取り出したのは、カチュウシヤに三角の生地が肉厚で二つ着いたモノだった。

そっ、それは世間ではネコ耳と呼ぶ。洋服に合わせたのか、クロネコ風だ。

昨日みんなで頭につけるレースのカチュウシヤは作った。

白い清楚な、いかにもメイドが着けるやつだ。

優子も自分のを作っている。

「優子は責任者だからさ、何かみんなと違うしるしがあった方がいい

いかと思つて」

美菜はのほほんと、いかにも平和な笑みを浮かべる。

な、なんで責任者の印がネコ耳なのよ。ネームプレートとかでいいじゃん。腕章とかでもいいじゃん。ていうか、別にそんなの無くていいじゃん。

「ああ、なるほど。シャアザクの角みたいなものね」

一葉が言った。

何だよ！ 例えがおかしいだろ。あれは士官の印だよ。それが何でネコ耳になっちゃうわけ？ どういう発想なんだよ、それ。ていうか、あたしらの世代でその例えはおかしいっつーの！

「で、でもさ。これって、なんか恥ずかしくない？」

優子は苦笑することしかできない。

「何いつてるの？ だいたいメイド服着ること自体恥ずかしいんだから、別に今更変わんないじゃん」

一葉がそう言つて、美菜の手から奪ったネコ耳カチューシャを、優子の頭に取り付ける。

「ああ、似合うじゃん」

なら、あんたが着けろつての。

「じゃあ……一葉に譲つてあげるよ。これ」

「だってえ、あたし責任者じゃないじゃん」

んなの知るか。だからどうしてネコ耳で責任者を識別する必要があるのよ。それが無くても誰も困らないでしょ。

「でも優子、思つた以上に似合つてるよ。カワイイし。うん。夜中までかかつて作った甲斐あったよ」

美菜の長閑な微笑みに、何だか優子も気が抜ける。

いや……そこまでして作ってくれなくても……ていうか前から思つてたけど、美菜の笑顔つてちよつと卑怯だわ……

学園祭が始まると校内外はうるつく生徒で校舎内外は終始賑やか

になる。

体育館ではベタな演劇公演やバンドコンクールも行われて異常な盛り上がりを見せ、映像研究会はチープな自作の映画などで微妙な人気をとっていた。

模擬店の出し物は何処もそれなりの入り具合で、本番は日曜日の一般客をターゲットにしているので、それ自体は仕方がない。

ましてや、優子にしてみればメイド服姿など同じ学校の連中にはできるだけ見られたくないというのが本心だ。

「なんかさ、みんなここでここにいらなくてもよくない？」

不意に鈴香は言った。

優子のクラスのメイド喫茶はポツリポツリとお客がくるものの、たいしたものではない。そこに5人のメイドがいるのだ。

優子と一葉、そして美菜と鈴香、由香だ。

自他共に吟味した容姿の結果、自然に彼女達にメイドが決まったのだが、もちろん優子は責任者という事で例外だ。

とはいえ、優子もそれなりの容姿でなかったら、裏方にまわされていたはずだろう。

本当は全員分のメイド服を作る予定だったが、生地が足りなかったし時間も無かった。

特に一番ウエストの太い娘は、最初に除外されたほどだ。

午前中はマンツーマンで対応してもいいほど、みんなが手持ち無沙汰になっている。

しかし、当然のように形だけのメイド喫茶。

そんな気の利いた対応など思いつかないというか、だれもやりたくないのが本音だ。

だいたい来るお客といったら、同じ学校のはずなのに妙に馴染みのない連中だったりする。

他にも裏方のみの娘が3人ほどいるが、はっきり言ってやる事が無い。

「そうだね、手分けして遊んで来てもいいんじゃない？」

優子が仕方なく言うと、結局手分けして遊んでくる事が決まった。そもそもこの場を一番抜け出したいと思っているのは優子自身だった。

こんなネコ耳なんて着けてるのがあまりにも情けない。

しかしせっかく作ってくれた美菜の手前、せめて今日は着けなくいいんじゃない。とも言えないのだ。

「じゃあ、あたし出かけてくる」

最初に手を上げたのは鈴香だった。

チツ、先越された……でも、あたしは出かけ難くない？――  
応責任者だし。

鈴香やみちるの他全部で4人が最初に抜ける事になって、早速教室を出て行った。

「大丈夫かな」

一葉が少し不安げに言う。

「何が？」

「あの娘たち、ちゃんと戻って来るんでしょうね」

一葉の言葉に優子も思わず不安が広がる。

「大丈夫でしょ。校内にはいるんだしさ」

美菜の言葉に優子は胸を撫で下ろすが、とりあえずこの店が繁盛しない事を密かに願っていたのは言うまでもない。

### 第33話

午後一になって、優子にとって来て欲しくない相手がやって来た。忍もそうだが、もう独り逆の意味で関わりたくない人間がいる。

「あら、似合ってるじゃない。アホっぽくて」

窓際のテーブルに着いた安西は、優子を見上げて言った。

少し前からお客の出入りが増えて他の連中は手がいっぱいの為、優子が来るしかなかった。

ふん、どうせ笑いに来たんでしょ。

「う、ご注文は？」

「どうして優子だけそんな変なもの頭に着けてるの？　もしかして意外と趣味？」

安西はプツと笑って黒髪をかきあげる。

趣味のわけないだろ。ていうかこのネコ耳って、誰にたいして責任者を識別させてるんだ？

確かに考えて見ると、優子のネコ耳姿に責任者を認識させる要素はない。

「一応、責任者って事で……」

「ノリノリでいいじゃん」

あたしの何処がノリノリに見えんのさ。コンタクト忘れたのか？

「あ、あたしは嫌なんだけど……」

安西はチーズケーキと紅茶を注文する。

「そう言えば、ご主人様とかって言わないじゃん。あんなたち、メイドなんですよ？」

間違ってもあんたにだけはゼツタイ言いたくない。

「あ、ここは形だけだから……」

「なあんだ、もつとちゃんとしてるのかと思っただわ」

知るか、だったらあんながこの服着てみろっての。

「な、なかなかまとまりがなくてそこまでは……」

優子は苦笑して安西のテーブルを離れた。

その後も最初に出て行った鈴香たち仲間が戻って来ず、昼過ぎには意外とお店は込み合って優子たちはかなり忙しい思いをした。

教室の出入り口付近でやるはずだったクレープの販売は、結局出来ずに終わる。

ケーキや飲み物は既製品だが、クレープだけはその場で焼いて販売する予定だったのだ。

店内の注文だけは、美菜が何とか焼いていた。

2時過ぎになって店も空いた頃、先に出て行った連中の中で鈴香だけがようやく戻って来た。

一葉は何か文句を言っていたが、優子はもちろん強く言う事など出来ない。

「ていうか、舟越は何処？」

鈴香はそんな言い訳をして、一葉の言葉を回避していた。

確かに鈴香の言葉でみんな思い出したが、舟越の姿は見えない。帰りの点呼の時に担任に訊いたら、風邪で休みだそうだ。

きつと明日も風邪は治らないのだろうと、優子たちは顔を見合わせた。

帰りの点呼の後、優子たちは直ぐには帰れない。今日の後片付けと、明日本番の準備があるのだ。

そう、学園祭のイベントは一般公開が本番で、前日の校内公開は練習のようなものだ。

そこに忍がふらりと顔を覗かせる。

「あら、どうしたの？」

一葉が声をかける。

「いや、どんな様子かなって思ってたさ」

「優子なら明日の食材の確認に行ってるよ」



鈴香がうつかり声を出した。

その場にいた全員が振り返る。

もちろん、どうして優子？ という眼差しで忍を見る。

「いや、別に用はないから」

忍は軽い笑顔で手をあげると「じゃあ、頑張れよ」

そう言つて、教室から出て行つた。

……高森、優子に会いに来たの？

一葉は彼が立ち去つた出口の先を、少しの間見つめていた。

陽が大分短くなって、5時を回ると空は暮色に染まって微かに星が瞬きだす。

優子は電車を降りると雑踏に混じつて駅の階段を上る。

改札を抜けた通路で、小さな子供が駆け足で彼女を追い越す際に転び、弾ける様に泣き出した。

「ほら、泣かない、泣かない」

優子は反射的に子供の腕を掴んで起こしてやる。

彼女もしかがんで彼と視線を合わせ、膝の辺りなどを見るが擦りむいたりはしていなかった。

「男の子でしょ。痛くても少しくらい我慢しなさい」

「うるせえ、ブス！」

子供はそう叫ぶと、優子の手を振り解いて再び駆けて行つた。

親何処だよ？ ていうかあのガキ、今度会ったらゼツタイ殺す。

優子は溜息まじりで立ち上がると、ロータリーに下りる階段に向つて再び歩き出した。

階段を下りて駅を出ると彼女の前に影が立ちはだかる。

「よお」

「た、高森」

「1本前の電車だったから、待ってたよ。学校の前だと一葉とかが一緒だと思ってさ」

な、何？ 何かいかにも突然でちよつとビックリ。

「か、一葉は用事があるって、途中で別れたよ」

「そうなんだ」

「部活あったの？」

「ああ、ランニングだけ」

優子はどうして忍がわざわざ待っていたのか訊きたい気持ちでイッパイだったが、何故か訊けなくて違う事ばかり声に出す。

思った事を言葉に出来ないのがとてももどかしい。

「明日で終わりだな」

「うん。何かやつと終わるって感じ」

さり気ない会話と共に、二人は自然に歩き出す。

「明日も朝早いのか？」

「まあね、準備があるから」

「帰りは？」

「えっ？」

横断歩道の信号は青なのに、思わず優子は立ち止まる。

「青だぜ、渡ろう」

忍に促されて、優子は慌てて歩き出す。再び肩を並べる彼女に忍は再び訊く。

「明日の帰りさ。遅いの？」

「き、今日より早いのかな……片付けは月曜だし」

「じゃあ、たまには帰りに何処か行かないか？」

「か、帰り？」

こ、これってもしや、せ、制服デートってやつか？ でも、

そんなのなんだか恥ずかしい……ていうか、どうしよう。

「べ、別にいいけど」

「じゃあ、明日はこのホームで待ってるからさ、電車乗る頃メー

ルくれよ」

忍はそう言って別れ道で手を上げた。

優子は明日もメイド姿をする事に重い気持ちでいたが、放課後の事を考えると途端に心は軽くなってふわふわと浮き上がるような高揚感を僅かに感じる。

込み上げる笑顔を抑えながら、家までの路地を何となく足早に歩いた。

### 第33・5話（前書き）

今回のほとんどは、優子の友人である一葉の視点です。  
後半の一部のみ、普段の描写に戻ります。

### 第33・5話

……なあんか、最近優子の様子がおかしいぞ。

あんなにハキハキ喋ってたか？

そりゃ、あたしとか里香とはそうだったけど、他の女子とも何だかけっこう喋ってるし、鈴香とも何だか妙に仲良さそう。

だいたい、高森がわざわざ優子に何の用で教室を覗くわけ？

帰り道、学校近くの駅前で

「今日、ちよつと寄る所があるから」

そういつて優子と判れた一葉は、彼女に気付かれないように同じ電車に乗り込んだ。

隣の車両の連結部の窓から、一葉は人混みに隠れて優子を観察した。

そんな優子は別に変わったところも無く、自分がいない為一人きりで窓の外を眺めたりしている。

優子が降りる駅に着くと、彼女の後についてこっそり一葉も電車を降りる。

微妙な間隔を開けて後ろからゆつくりと優子の後を追うようにホームを歩き、誰かの人影に隠れながら観察を続ける。

……ほら、なんだか足取りが軽いじゃん。絶対おかしい。

それはたぶん一葉の思い過ごしだろうが、優子は少しだけ自分に自信を持ち始めているのは確かだろう。

異性と自然に話せる習慣がつくというのは、自分を確立させる事に役立つ。

男性は男性として、女性は女性としての自己を認識するのだ。

もちろん、優子本人はそんな自分の小さな変化に気付いていないし、忍と自然に話せるかと言えば、まだまだ未熟だ。

しかし優子の中で何かが変わり始めているのは事実で、それは本人も認識しないまま、歩き方ひとつにも微かに現れるのかもしれない

い。

一葉はホームの階段を上りきると、突然足を止めた。優子が小さな男の子を助け起こして何かを話している。

男の子はどうやらべそをかいている様子だ。さしずめ転んだのだからかと一葉は思った。

……そう言えば、彼女弟がいるんだよね。こうやって観てるとなんかそんな感じしてきた。意外とお姉さんなんだな、優子。

すると「うるせえ、ブス！」という子供の大きな声が聞こえた。もちろん、優子に言った言葉で、子供はそのまま走り去る。

……ゆ、優子……子供に馬鹿にされてるよ……それで大丈夫なのか？

そんな事を思いながらも、一葉は思わず声を殺して笑った。それは何だかよく判らないが、暖かな笑いだった。

優子が再び歩き出したので、一葉も慌てて後を追う。

駅の階段を彼女に続いて下りようとした時、優子が立ち止まっているのが見えて、一葉は再び足を止める。

踏み出した足を引っ込めて、階段を下りる手前からこっそり下を見下ろす。

と、優子の傍に黒い人影がひとつ見えた。背丈からして男だろう。……た、高森だ。アイツ、優子を待ってたんだ。何で？ あ の、二人いつたい何時からそう言う仲なの？

いや、何か用事が在るだけかもしれないじゃん。そうだよ、家が近所って言うてたし、また用事でも頼もうと優子を待ってたのかも。優子と忍が歩き出すのを見て、一葉は急いで階段を駆け下りる。

\* \* \*

日曜日の朝も優子は予定通り、何時もよりだいぶ早い時間に学校

に着いていた。

野球部が校庭で今日のイベントの準備をしている。

よく在るマス目を抜くピッチングゲームだ。

そんな校庭を横目に昇降口へ入り下駄箱を開けた彼女は、一瞬息を飲んだ。

上履きを掴もつと伸ばした手が硬直して止まる。

校庭の方から、野球部員たちの高揚した笑い声が微かに聞こえていた。

こ、こ、こ、これって、まさか、もしや……アレか？

### 第34話

上履きの上には封筒が置いてあった。

優子は思わず周囲に人影が無いが見渡す。

下駄箱の並んだ昇降口は見通しが利かないが、自分の他に人の気配は無かった。

その時、生徒が二人入って来たので、優子は動作を止めて固唾を呑む。

1年生らしい彼女達の話し声に混じった笑い声は、靴を履き替えるとそのまま廊下を去っていく。

優子は封筒に手を伸ばして、それを掴んで取り出した。

宛名も差出人もない、青い横型の封筒だ。

「今時こんなものって、あるのか？」

優子は思わず呟いた。

いや、誰かの悪戯だ。そうだ、安西かもしれない。

優子はとりあえず中を確認しようとした。

「優子、おはよう」

その声で、優子は慌てて封筒をカバンのポケットに無理やり突っ込む。

「あ、ああ。おはよう」

昇降口に入って来たのは一葉と美菜だった。

学園祭の一般公開は、それなりに人が来る。

他の学園祭とも日程がバッティングしているが、若い連中などはハシゴも当たり前なのだ。

「ていうか、ここ、客層おかしくない？」



一葉が不意に言った。

見渡せば何だがりユックを手にした男が多いし、何処で買ったのか丸めたポスターなんかも持っている。

何より、いつの間に妙な臭いが立ち込めて、さり気なく窓を開けたところだ。

「やっぱ、一部の客層に支持されるのかな……」

美菜が呟くように答えて、苦笑する。

「なんかさ、よそよそしい振りして、何気に写メとかIPPパイ撮られてんだけど……」

「仕方ないよ。スカートの中だけ気をつけよう」

一葉は美菜の言葉に小さく肩をすくめると「あの手に持ってるの、何かな？」

「あれ、きつとアニメ部で売ったポスターだよ」

「みんな持つてない？」

「何か人気アイテムなんでしょ」

「アニメ部なんて在ったっけ？」

一葉と美菜の会話に優子が声を挟む。

「同好会から、先月部に昇格したんだって」

趣味の関連か、美菜はその辺の情報に詳しくかった。

別に、アニメ部もポスターにも罪はないんだけどさ……あんなら、とりあえず髪とかせめて感じ……

空いたテーブルを片付けに行く優子にも、携帯カメラのレンズが向けられていた。

うわあ、撮ってるよ。思いつき撮ってる。あたしも、とりあえず撮られるレベルなのか？ ていうか、このメイド服がそんなにいいのか？

優子のクラスの模擬店も、客層こそ片寄ってはいたがそれなりに繁盛して、廊下際で販売したクレープもずいぶん売れた。

お昼休みは面倒なので販売用のケーキやクレープでみんな腹ごなしをして間に合わせる。

そのうち、優子はカバンのポケットに入れた手紙の事もすっかり忘れていた。

簡単な後片付けが終われば今日はもう下校だ。

イベントに参加していない連中は点呼も終了して、一足先に下校している。

優子は売り上げを持って職員室に行った帰り、一階の階段上り口で男子生徒にぶつかりそうになる。

「あ、すいません……」

ギリギリで避けた優子は思わず反射的に謝る。

あぶなっ、なにこの人……なに又ボクと突っ立ってるの？

その男子生徒は、俯き加減で優子を見ていた。

といっても、彼の方が背は高いから、結局優子が見下ろされているのだが……

なんともいえない平凡な男だ。頬とおでこに僅かなニキビ跡がある。

なんでじっと見るのよ。あたしだけが悪いわけじゃないし、ぶつからなかったじゃない。

優子は彼の視線が気味悪くて、足早にその場を去って階段を駆け上がった。

背中から「あの……手紙……」と微かに聞こえた。

手紙？ 何の事だ？ なんだあの人？

大掛かりな後片付けは、明日できるのでとりあえず模擬店の連中は解散した。

「ちよっとトイレに寄る」

一葉にそう言った優子は、カバンを抱えたままトイレに入った。さつき1階でぶつかりそうになった男の言葉を後で思い起こしたら、心当たりがある。

手紙……そうだ、今朝手紙もらってたんだ。えっ？ あの人なの？

彼女はカバンのポケットからあの青い封筒を取り出す。

ラブレターなのだろうか……だとしたら彼女はそんなものは初めて貰うので、少しだけ心がはしゃいだ。

いったい何が、どんな事が書いてあるのか……？ 優子は封筒を開けて中の手紙と取り出して開く。

『キタ

(。。(

ッー!』

な、なにコレ……？

便箋<sup>びんせん</sup>には、ちょうど真ん中辺りにそれだけが印刷されている。おそらくパソコンのワープロで書いて印刷したものだろう。

周囲に他の文字は無い。

優子は思わず深い溜息をついた。

少しでも高揚した気持ちで手紙を開いた自分が、バカみたいに思えた。

なんなのコレ……何を意思表示してんだよ。いたずらなのか？ ていうか、あの男の仕業なの？

優子は一階でぶつかりそうになった男を再び思い出す。

足早に階段を駆け上がる優子には、背中から確かに「手紙」という言葉が聞こえた。

そして、模擬店に来ていた連中からぼんやりと彼の姿が浮かぶ。それは、驚くほど掠れた記憶だが、僅かに放課後ぶつかりそうになった男と重なった。

あの人、そう言えばお店に来てたかも……

便箋に注いだ視線を下げると、末行には杉浦健也と名前が書かれ、携帯とPCのメールアドレスが記載されていた。

この難解な言葉だけで、何をどう対処したらいいか判らない。

乱雑な手つきで手紙を封筒に戻しながら、優子は思わず  
「メールなんてするか」

### 第35話

「どうしたの？ 優子」

駅へ向う帰り道、何時に無く無口な彼女に一葉が声をかける。

「う、うん。なんでもない」

優子は何だか奇妙な憂鬱に囚われながら、とりあえず笑みを浮かべた。

はあ、こういうのってどうなんだろう。一葉に話して笑い飛ばしてもらった方が気がラクかな……

そう思いながらも、何だか手紙の事はいえなかった。

一葉と別れて電車を降りると、優子は思わず立ち止まった。

身体に電気が走るように、一瞬悪寒が走りぬけた。

ヤバイ！ 高森にメールするの忘れてた。

走り去る電車の音が遠ざかってゆくホームで、人の流れに逆らうように彼女はその場に佇んだ。

優子が気配に気付いて振り向くと、ホームの階段の下から忍が姿をみせる。

「ご、ごめん」

もう、あの変な手紙を見たせいで記憶飛んでたよ。

「別にいいよ」

「け、けっこう待った？」

「いや、電車3本くらいかな」

忍はそう言つて涼しい顔で笑った。

なんだか微妙な数……

高森と優子は渋谷の街をぶらついて、ファーストフードでお茶を

して、デパートの屋上なんかもぶらついた。

やはり学園祭や文化祭だった学校が多いのか、日曜日にしては制服姿の連中が目につく。

ただブラブラと歩くような夕暮れの時間だったが、制服姿で歩く自分達に優子はなんだかドキドキした。

女子高生だけの集団に遭うと、つい注目されているような気がする。

高森を見ているのは判る。

ただ、自分が周りにどう映っているのか考えると、浮ついた気持ちの中に緊張感が過るのだ。

デパートの屋上からの帰り、二人は階段を下りると最上階のエスカレーターを使わずそのまま何となく階段を下り続けた。

裏陰の荒涼な雰囲気がなんだか二人きりの時間を強調させて、忍も優子も口数は少なかった。

話し声が周囲に反響して響くせいもあるのだろう。

しかし、3階分ほど下った踊場の手前で思わぬものを見て立ち止まる。

そこでは、制服姿の男女が濃厚なキスを交わしている真っ最中だった。

ぎゃっ、な、なんでこんな場所してるのよ。

優子は思わず忍の腕を掴んで後戻りした。

忍も一瞬固まっていたのは確かで、あの場を平気で通れる雰囲気ではなかった。

「ビックリしたな」

足音を忍ばせながら小走りに階段から離れてフロアに出ると、忍が声を出す。

「う、うん……」

あれってどう考えても高校生だったよね。あんなに……ていうか、あんな場所でおかしいって。でも、確かにひと気は無いかいやいや、もう少し場所選べよ。

優子が忍を見上げると、彼は再び固まっている様子だ。

なんだ、コイツも意外とウブなのか？　こんなに固まらなくってもさ……

優子は視線を不自然に下げる忍を見て、自分たちの辺りを見回す。すぐ横にいたショップ店員と目が在って思わず愛想笑いを浮かべる。

しかし、視線をちょっと動かすと、何時何処で着けるか疑問なほど派手な下着がずらりとハンギングされていた。

うわっ、ここって、女性用下着のフロアーだ……しかも勝負下着？

二人は足早に通路を駆け抜けて、エスカレーターの在る場所へ急いだ。

しかし、気が焦って降り口が見つからない。

通路の両サイドに流れる、下着、下着、下着。

派手なショップより、シンプルで実用的な売り場の方が余計に生々しくて、思わず優子も頬を紅潮させる。

ようやく辿り着いたエスカレーターに足を乗せると同時に、忍が小声で

「なあ、優子もこういう所で買うのか？」

「あ、あたしは通販が多いかな」

て、何答えてんの、あたし。ていうか、そんな事訊くな。

\* \* \*

なあんか、高森と歩くと疲れるよ。今日はまた変な事あったし。だいたい周りの視線が妙なのよね。不釣り合いな女だと思われてんのかな。

優子は夕食後の自室でベッドに横たわると、ファッション雑誌を

手に取る。

読者モデルが煌びやかにページを占領していた。

こんなの、プロのヘアメイクとかスタイリストが付いてるんだから、可愛くて当たり前じゃん。

その時携帯メールに着信が入った。

一葉からだった。

優子がメールを開くと、何かのサイトのアドレスが書き込んで在る。

『学校裏サイト』そう書いてあった。

「学校裏サイト？」

思わず声が出る。

優子もそれ自体はうわさで聞いたことも在るし、テレビで時々取り上げられて問題視されている事も知っている。

一葉は何処かの学校の裏サイトを見た事が在るといつていたが、優子自身は覗いた事は無い。

単純に興味が無かったから。

だから、メールに書かれているアドレスにも直ぐにアクセスしてみようとは思わなかった。

一葉のやつ、あたしがこういうの興味無いって知ってるくせに。

すると、再び携帯が鳴った。今度は通話の着信だ。

「あ、優子。メール見た？」

「うん、見たけど、何、今度は何処のサイト？」

「ウチの学校だよ」

「ウチの学校？」

思わず優子の声が1オクターブ上がる。

「見てみなよ、凄い事かいてあるよ」

「いいよ、どうせ誰かの悪口とか、在ること無い事書いてあるんでしょ」

優子は携帯を手にしたまま、再びベッドに横たわる。



「安西の事が書いてあるのよ」

「安西の？」

「アイツ、中学で凄い事になってたんだね」

一葉はいかにも人の不幸を喜ぶワイドショーのレポーターのように声を荒げて

「優子も見えてみなって」

「安西がどうしたって書いてあるの？」

「自分で見てみなよ。じゃあね」

一葉はそう言って電話を切った。

### 第36話

一葉は新しい事を発見して高揚した気持ちを、単純に誰かに伝えなかったのだろう。

優子は仕方なく、一葉がくれたアドレスにアクセスしてみる。

ダウンロード中の表示が一瞬出て、すぐにそのサイトは表示された。

確かに自分の通う学校だ。実名がしっかりタイトルに出ている。

モノトーンの殺風景なトップページだった。

管理人の名前は『モギヅ』と書かれている。

BBSの項目をクリックして、画面を開くと最新記事を見て優子は息を飲む。

『二年のA西は、私立M中学の時に高校生に集団レイプされて妊娠した。

子供は直ぐに中絶したが、それが表沙汰になるのを恐れてエスカレーター式のM学園を断念した』

「誰……誰がこんな事を書き込んだの？」

優子は思わず声に出した。

書き込み記事を投稿したのは『ヤギヅ』と名乗られていた。

『A西は妊娠がキツカケで、当時付き合っていた彼氏と別れた。

当たり前だよ。他の男の子供を妊娠した女なんて付き合つてられないよな』

これって、高森？ の事？

『A西はいきなり五人とヤツタから、どいつの子供を妊娠したのか判らなくて裁判起こしたくても立証できないらしい』

優子は胸の奥がムカムカして、ページを閉じた。

部屋の蛍光灯が少し暗いような気がして、思わず天井を見上げる。ハッと気を持ち直すと、優子は急いで一葉に電話をかけた。

「ああ、優子。サイト観た？ あれって安西だよ。あいつ……」

「一葉、このアドレス誰から聞いたの？」

優子は一葉の言葉を遮るように言った。

「他の学校の友達。こういうの好きな娘がいてさ、あんたの学校が出てるって教えてくれたんだ」

「誰か、他に教えた？」

「里香と美菜に……」

「どうしてよ」

「えっ？　だって……どうしてって……なんであんたがそんなに怒るの？」

「だ、だってデタラメかも知れないじゃん」

「いいじゃん、デタラメでも別にさ」

「よくないじゃん」

「ど、どうしたの、優子？　あんた安西と仲良くないじゃん……」

「それとコレとは関係ないよ」

優子はひとつ息をつく

「いい、一葉。もうだれにもこのアドレス教えてダメだからね」

「そんな事言っても、どうせそのうちみんなに知れるし、もう知ってる人もけっこういると思うよ」

「それでも一葉は黙ってて」

「わ、わかったよ……今日の優子、なんだか怖いよ……」

「いったい誰があれを書き込んだのか……優子はそれが気になって  
いた。」

確かに安西はみんなに好かれている娘ではないし、少々高飛車なところを気に入らない連中もいるようだ。

しかし、いままで大きなイジメも裏サイトなどの噂もないところがこの学校のいいところだった。

少なくとも優子はそう思っていた。

舟越のような何だかよく判らないキャラも誰にイジメられる事も無く、平穩に生活している。

舟越？ そう言えば、あたし、安西の昔のこと舟越に聞いたんだ。

優子は舟越に聞いた言葉を思い出すと同時に、それを知った安西が彼に対して激怒していた事を思い出す。

ま、まさかね……あれで、安西に何か言われた舟越が頭にきて……でも、なんか考えられる……

月曜日の片付け清掃は当然全員登校で、教室以外の各場所も掃除分担される。

しかし、こんな日にはこない連中は必ずいるのだ。

「ねえ、あれって本当なのかな？」

清掃中、美菜が不安げに一葉に聞いている。

あれというのは、裏サイトに書き込まれた「A西」の事だ。

「さあね。でもあれってBBSの割には外部からの書き込みが出来なかったよ」

一葉が自在ボウキを片手に言った。

他にも3年生の記事が幾つか載っていたが、それらは一葉たちの興味の対象にはならなかった。

「一葉、書き込みしたの？」

優子が割って入る。

「うん……本当なのかって、聞いただしの書き込みしようとしたら受け付けなかった」

「じゃあ、管理人だけが書き込めるの？」

「管理者と書き込みの名前が違うから、あとは、パスワードを知ってる者だけとかね」

一葉は教卓によりかかると

「なんにしても、あのヤギ斗ていう書き込み者が誰かって事。それと、管理者も近い人間でしょ。同一かもしれないけどね」

優子は思い当たる人物の名前を、この場では言わなかった。

もし彼がモギ斗かヤギ斗だとしたら、3年生の記事がどうしてあるのが解らなかったから。

しかし、今日も舟越は学校を休んでいる。

安西は別の掃除区画の為離れているが、周囲の彼女を見る目が何となく以前と違うような気がしたのは、優子の気のせいだろうか。

大っぴらには反応を露にしない。

それが、学校裏サイトを覗く者のルールでもあるのだ。

### 第37話

この日は学園祭の後片付けだけが目的なので、掃除が終われば帰るだけだ。

優子は一葉と一緒に昇降口で靴を履き替えていた。すると、後に何か気配というか殺気を感じて振り返る。

ビククリしたあ。

杉浦健也が立っていた。

しかし彼は何も言わない。優子は杉浦の襟章を見て彼が3年生だと気付いた。

彼はモジモジした表情で、薄っすらと笑みを浮かべたまま優子を見つめていた。

その視線というか、そんな空気に耐えられず彼女は声を出す。

「あ、あの……」

キモいんだよ。なんで黙って立ってるわけ？

「この前の手紙は……」

優子がそこまで言うのと、杉浦は踵を返すように身体の向きを変えて歩き去ってゆく。

はあ？ な、なに？ 何なの？ どういうんだよ、あの3年。

「優子、知り合い？」

横にいた一葉が怪訝そうに訪ねる。

誰がどう見てもおかしい状況だった。

「う、うん……ちょっとね」

「ちょっとって……？」

「う、うん」

優子は何となく手紙を貰った事を言い出せなかった。

「ねえ、舟越って、本当に風邪なのかな？」

優子と一葉はプラットホームで電車の来るのを待っている。

午前中で作業は終わってみんな帰宅なので、駅には彼女たちの学校の生徒がほとんどだ。

運動部はもう活動を始めたが、文化部は逆に一大イベントも終わってしばらく休みのところが多いだろう。

「なんで？」

一葉は優子の意外な質問に怪訝な笑みを浮かべる。

「うん……」

優子は少し思案を巡らせると

「ねえ、舟越の家って何処か知ってる？」

「知らないよ、そんなの」

一葉はそう言って笑うと

「何、あんた舟越なんかが気になんの？」

「べ、別にそういうんじゃないよ……」

「優子も何気に男好きなのかな」

一葉がボソツと言った。

「えっ？」

「うっん、何でもないよ」

一葉は優子と忍が頻繁に会っている事を既に知っている。

それでも何も言わないのは、友達として優子が何も言わないからだ。

だから、知らないふりをしてやろうと思っている。

ただ、男に興味がないような素振りだった優子が、忍と肩を並べて歩く姿は、一葉に僅かな衝撃を与えたのは確かだ。

「実はさ……」

優子が躊躇しながら渋々口を開く。

「裏サイトって、舟越かもしれないんだ」

思いつけない彼女の言葉に、一葉は振り返る。

「どういう事？」

優子は舟越が中学時代、忍や安西と同じ塾へ通っていて二人の事

を思いの外知っている事を一葉に話して聞かせた。

「でも、今まで黙ってたのに、どうして急にそんな暴露しちゃうの？」

話を聞いた一葉が訊く。

「判んないよ。安西に何かされたのかも」

「でも、舟越つて、何だかんだみんなに邪険にされてない？」

その時電車が到着して、二人はそれに乗り込んだ。

「意外とあんたが一番仲がいいのかもね」

さり気なく言った一葉の言葉は特に何の意味も無かったつもりだ。

「な、なんであたしが仲いいのよ」

「ほら、あんた最近面倒見がいいって言うかさ、前から舟越の分の仕事やってるし」

それはあの男が何時もポケットとしてるからよ。ていうか、あたしがやるしか無いじゃん。

「だってしょうがないじゃん……」

「冗談だよ」

一葉がそう言って優子の肩に手を乗せると、その話題は終わった。午後の陽差を受ける家並みがゆっくりと過ぎてゆくのを、優子は車窓から眺めた。

ふと、以前図書室の作業で舟越が頬を赤くした事を思い出していた。

ま、まさかね……そんな事ないよね。だって、いままで何も無く過ごしてきたのにどうして急にそんないるんな人に好意を持てるの？

「ねえ、ちょっと新宿行かない？」

一葉が声をだした。

「別にいいけど」

「暇だしさ、あたしバイト方だから、少しブラブラしようよ」

ま、どうせ高森はもう部活だし。やることないから付き合っ  
てやるか。



優子は「うん」と頷いて、自分の降りる駅を通過した。

日を追う毎に夕暮れ時は早くなって、5時を過ぎると空はすっかり夕闇に包まれる。

一葉と別れた優子は、独り電車で揺られていた。

あと一駅で地元の駅に着くところでふとホームを見ると、舟越の姿が見える。同じ電車に乗っていたようだ。

あいつ、何やってんだ？ ていうか、やっぱり風邪とかじゃないじゃん。こんな所ウロついて。

直ぐにドアが閉まって電車は走り出し、優子はホームを歩く彼の姿をもう一度確認する。

ここが、アイツの乗降駅なのかな？ だとしたら意外と近くに住んでるんだ。

優子は隣駅とは言え、再び駅名を確認した。

雑踏に溶け込むように駅階段を下りてロータリーに出た優子は、本屋に寄り道した。

何となくあれこれ物色して結局何も買わずに店を出ると、何だかふと思いついて以前忍と回り道した通りに目が留まり、吸い寄せられるようにそこに足を向けた。

彼の親戚の住んでいるという通りだ。今は、弟の直樹の彼女が住んでいる場所……

何故かは判らないが、何となくその通りを懐かしく感じたのだ。

暫く行ってそのまま国道を渡ると、古い住宅街の庭木から早々と落ちた枯れ葉が、歩道の隅に溜まっている。

なにやってんだ、あたし。

そんな事を思っても、もう引き返す方が遠回りになるので、次の角を曲がって行こうと思った。

その先には忍の親戚の家がある。

そして優子は、その家の前に佇む二つの影を見た。

少し離れた街路灯の光が微かに届いて、二人の人影を映し出していた。

あれって……

### 第38話

優子は通りの角を曲がろうとして思わず足を止めた。

通りの先に二つの影が、薄っすらと街路灯の光を浴びている。

確かにそこは忍が以前寄り道した家だ。

優子が静かに見つめる中で、二つの黒い影は重なった。

ぎえ……ち、ち、ちゅーしてる。こ、こんなところでちゅー

してるよ、アイツ。ありえない……

視線の先にいたのは、紛れもなく弟の直樹だ。もちろん相手は苑部舞衣だろう。

二人の影が重なる時間は妙に長く感じて、優子は奇妙な感覚でそれを見ていた。

当たり前の事なのに、弟は男なのだと今更ながらに思った。

二人の影が離れると、舞衣は何事もなかったような素振りで手を振って家の門扉を潜り、それを直樹が見送る。

優子は角を曲がって路地を歩き出していた。

いかにも慣れてたよね、あれ……けっきょく先越されたんだなあ……あの二人はきつと、本気でお互いの事が好きなんだ。だからあんなに自然にキスを交わせるんだ。

優子は自分と忍の関係が余計に判らなくなつて、それ以上考えるのが苦痛だった。

思わずトトロの歩こうマーチが頭に中に流れ出して、自分の歩調に合わせて何となく口ずさんだ。

夕飯時、優子は直樹を何度もチラ見する。

あの唇が？ あれが既に女の子のそれに吸い付いてる……信

じられない。まさかその先も？ いやいや、それはないだろ。  
でも……考えてみたら安西だって……

「何？」直樹が優子に言った。

「はっ？ 何って、何が？」

「なんかやたらとこっち見てるからさ」

「み、見てないよ別に」

「見てたよ」

「見てない」

「はいはい、もう二人共そんな子供みたいな事でいちいち言い争わないで」

母親が穏やかな口調で割って入る。

優子はフンと鼻をならして味噌汁のお椀を手にした。

「ていうか、ウチらまだ子供だと思っただけ……」

直樹は再びご飯を口へ頬張る。

「あんた、舞衣ちゃんと上手くいってんの？」

優子が気を取り直して訊いた。

「な、なんでさ」

「別に。ただ訊いてみただけ」

「姉ちゃんはどうなんだよ」

「あ、あたしは、そんなじゃないし」

「あんまりボケツとしてると、何時の間にか年とっちゃうぜ」

なっ、なによコイツ。自分が彼女とラブラブだからって、急に悟ったような事言っで。

「ボケツとなんてしてなわよ」

優子はそう言っで、味噌汁を啜った。

「母さんお茶くれ」

父親の孝之助がそう言うのが早いか「ハイ」と杏子は湯飲みを差し出す。

ウチは平和だな。高森はきつと今日も独りでご飯を食べてるんだ。そして、安西も。アイツは自分で料理もするのか……

優子は自室へ戻ると、パソコンをインターネットに繋いで、再び学校裏サイトを見た。

パソコン用の画面は紫色だった。

濃い紫色の壁紙に、白色の文字で学校名が書かれている。丁寧にダークグレーの影が作ってあった。

BBSをクリックすると、更新記事は特に無かった。

もうあまり記事は読みたくない。しかし、何か投稿者の手掛かりも欲しい。

安西はこの事知ってるのかな……

ふと見ると、記事が最初に書かれたのは、学園祭の1週間前だった。それから毎日更新されて3日間はモギ斗という名が3年生の事を書き込み、その後ヤギ斗と言う名で4日間書き込まれている。

安西の事を書いているのはヤギ斗で、モギ斗は書いていない。

二人は別人なのだろうか。

ただ、どちらも同じ学校の生徒だという可能性は高い。そして、少なくともヤギ斗が舟越だという可能性はなお高いだろう。

誰も直ぐには気付かなかっただろう。

しかし今、どれだけの生徒がこの記事を目にしているのだろうか。ふとトップページの横に設置されたカウンターが目に入る。

102528！　じゅ、じゅうまん？　そんなに沢山の人が

見てるの？

幾つかリンクは貼って在るようだが、それすら優子には聞き覚えがない。

クリックしてみると、そういった類の噂話や中傷を扱ったホームページが山のように集めてあるサイトだった。

幾つか開いてみると、他に聞き覚えのある学校裏サイトも存在している。

似たようなヤツって、何処にでもいるんだ。でも、ウチの学

校はかなり平穏だったのに……

優子の周りにはそれほどネットにハマるような連中がいなくて、安西の事が書かれた記事をどれほどの連中が目にしたか、どうにも計り知れない。

一葉だつてそれほどハマってるわけではない。

ノートに書かれた落書きのように、破り捨てたら消えてなくなるものではない……

優子はふと思いついて部屋を出ると、隣に在る直樹の部屋のドアを叩いた。

「何？」部屋のの中から、彼の声がする。

「あやし。入っていい？」

「ああ」という声で、優子は弟の部屋のドアを開けた。

### 第38話（後書き）

『トトロの歩こうマーチ』と記載しておりますが、本当の歌のタイトルは『さんぽ』です。

『歩こうマーチ』の方が、優子が何を口ずさんだのかわかり易いと思ったのでそう書きました。

### 第39話

優子は静かにドアを開けると、弟の部屋に足を踏み入れた。

「何？ 何か用？」

「う、うん。ちょっと訊きたい事あつてさ」

あつ、こいつ煙草吸つてるな。

ベッドに寝そべって漫画を読む弟に、優子は近づいた。

さり気なく周囲を見渡すが、煙草を吸った形跡は見当たらない。  
それでも、微かに臭いはしたのだ。

直樹は急に起き上がると

「なんだよ、改まつて。まさか近親相姦狙つてんじゃねえだろうな」  
バカか！　なんでそんな言葉が出るんだよ。っていうか、あたしはそんなに飢えて見えるのか？

「ば、バツカじゃないの。なんでそうなるのよ、気持ち悪い」

「だって飯の時、姉ちゃんの視線が変わったからさ」

ええっ、あたしの視線変だった？　そ、そうかな……あたし、

そんな変な目で弟の事見てたのかな？

「そ、そんなんじゃないよ。舞衣ちゃんと上手くいつてそうだなあ。  
て、見てただけじゃん」

「それにしちゃ、へんな目つきだったぜ」

こいつ、女の味を知つて、感性鋭くなったのか？

優子はベッドの横に在る勉強机の椅子に腰掛けると

「あんたさ、パソコンけっこうやってる？」

「ああ、まあ人並みだと思うけど。3日坊主の姉ちゃんよりはね」

大きなお世話だつての。あたしだって週1回くらいはネットに繋ぐわよ。

直樹はベッドの上で胡坐をかくと、手に持っていた漫画を横に置いた。

優子は椅子の背もたれに肘をかけて寄りかかる。



「学校裏サイトって、見たことある？」

「ああ、前に何度かね」

直樹は足を組み直すと

「でも、なんだか陰湿でさ。俺はあんまり見る気にならないけど」

よく言った。いかにもあたしの弟だよ。あんた。

「じゃあ、最近は覗いてない？」

「うん。全然見てないよ」

「友達は？」

「そうだな、見てるヤツもいるんだろうけど、あんまり話題にならないかな」

直樹は胡坐を組んだ自分の足首を掴むと

「ほら。なんか、ああいうの面白がるヤツって、人の不幸を楽しんでるみたいで信用できないじゃん。だから、観てもあんまり言わないんだよ。でも、なんで？」

「う、ううん。別に」

優子はそう言って立ち上がると

「この近辺の学校の話とかも聞かない？」

「別に聞かないけど、何でさ？」

「ううん、いいの、別に」

「変なの……」

直樹はそう言って再び漫画を手取るが

「あつ、まさか姉ちゃん。裏サイトでイジメにあってるのか？」

「ば、バカね。そんなわけないでしょ」

優子はそう言つと、足早に出口へ向かうが、一端足を止める。

「そう言えばさ、よくあるアクセスカウンターって、あれ、正確なの？」

「正確なんじゃないの？ アクセスに対してただカウントするだけでしょ。でも、確かスタートの数字は好きなのところから始められるから、桁は当てにならないんじゃない」

「何？ その好きなのところからって」

「カウンターを設置して1000からスタートさせれば、アクセス履歴が10でもカウンターは1010を表示するんだよ」

「えっ、カウンターって必ずゼロから始まるんじゃないんだ」

「そりゃ、だって。アクセスの少ないサイトで何時までもカウンターの累計が10とか20だったら悲しいじゃん」

「ああ、そうなんだ」

「レンタルのカウンターは確かそんなのが多いよ」

レンタル？

優子はそれは別に訊かなくてもいいやと思い、そのまま部屋のドアを開けると

「あんた、運動部なんだからタバコは止めなさいよ」

\* \* \*

優子は携帯電話メールの着信音で目が覚めた。

今日は学園祭の代休で、忍との約束も無いので寝たいだけ寝ていた所だ。

ああ、誰からだろう……ていうか、今何時だろう。

優子は布団から腕だけを伸ばして充電器に置いた携帯を掴むと、布団に入ったままの状態ですれを開く。

『昼飯一緒にどう？』

高森からのメールだった。

時間を見ると、11時半になる所だった。忍はおそらく午前中の部活が終わった所なのだろう。

ギョえ、もうこんな時間なんだ。

優子は仕方なしに布団から出ると、洋服に着替える。ふと鏡に映った顔は、寝過ぎの為に目が腫れている。

目があ……寝過ぎた……

彼女は忍にOKの返信をしてから顔を洗うと、濡れタオルで臉を冷やす。

待ち合わせは1時にしてもらった。そうすれば忍も一度家に帰れる時間だ。

家の中は誰もいなかった。

父親はもちろん仕事だし、母親もパートだ。そして弟は普通に学校へ行っている。

優子はリビングのソファに横たわって、臉に濡れタオルを当てたまま、再びウトウトしていた。

見慣れない時間のテレビ番組の音声が、何となく部屋に流れている。

そうしてどれくらい経ったのか優子にはよく解らなかったが、庭先で物音が聞こえた。

佐助が小屋から出て、動き回っている気配もする。

何だ？ 誰か来たのかな。直樹か？

優子はリビングの窓からレースのカーテン越しに外を覗いた。

うわっ、た、高森。な、なんで直接来てんの？ 待ち合わせは駆って……しかも時間、早っ。

## 第40話

優子がリビングから外を覗くと、忍が庭に入ってきて来ていた。普段黒々とした髪が陽差を受けて、やたら艶やかだった。

優子は慌てて窓を開けると

「ど、どうしたの？」

「帰りに駅向こうのたい焼き屋が始まってさ、買ってきたんだ」  
駅の階段を向こう側に下りてすぐ、秋冬だけ営業するたい焼き屋が在る。かなり人気があつて、店が始まると連日客が列んでいるのだ。

佐助がやたらシッポを降っているのは、たい焼きの匂いを嗅ぎ付けたのかもしれない。

「ち、ちよつと待つてて、今玄関に行く」

優子は慌てて玄関に回ると、髪の毛を指でササツと直して壁掛けの鏡を覗いてから一息ついてドアを開けた。

「いま、帰り？」

「ああ、今日は午前中だけの練習だからね」

なんであんたは、何時もいきなりなのよ……

優子はこの状況でどうしたらいいのか、思案を巡らせる。

や、やっぱり家に上げるべきよね。せつかく来たんだし。でも、どうするの？ 一緒にたい焼き食べてくつろぐの？

「あ、上がってく？」

優子は少々きこちなく笑って言った。

「家の人は？」

「み、みんないないよ」

ヤバツ、それってヤバくない？

「そうか、沢山買ってきたから、後でみんなにも食べてもらってよ」  
そう言って忍は玄関に入ろうとする。

や、やっぱり上がっていく……よね。

優子は一瞬気後れしながら、彼が入り易いように促した。

「お茶？ 紅茶？ 何がいい？」

優子は台所からリビングにいる忍に声をかける。

忍はソファに腰を下ろすと、少しだけ辺りを見回して

「あ、お茶でいいよ。たい焼きには日本茶がいいだろ」

「そ、そうよね。日本茶ね」

優子は普段お客用にしか使わないお茶の葉を取り出して急須に入れた。

自分の生活空間に異性が入り込むと言うのは、何だか妙な気分だった。

別に見られて困るものもないはずなのに、家中何処を見られてもこそばゆい。

「なんだか、妙に落ち着く家だな」

優子がテーブルにお茶を差し出すと、それを手にした忍が言った。

「そ、そうかな。中古住宅だけどね」

そんなの関係ないつつうの。何言ってんだあたし。

テーブルの皿には、まだ暖かいたい焼きと日本茶。それを挟んで、優子と忍がソファに腰掛けていた。

何だか奇妙な光景だと優子は思っ、喋る話題が思いつからない。

「なんか、これ食べたらお昼食べられ無そうだね、あははは」

「そうか？ これくらい平気だろ？」

正解です。全然平気で食べられます……でも一応話題ってやつよ。

「そうだね、大丈夫かな……」

優子は再び笑うと、掴んだたい焼きの尻尾を小さく齧った。

うわっ、久しぶりで食べたけど、超おいしいじゃん。

ふと窓の方を見ると、佐助が窓の下部分からレースのカーテン越しにこちらを覗いて鼻をピクピクと動かしている。

たい焼きの甘い香ばしい香りを必死で嗅いでいるのだ。

彼がせっかく買ってきて来てくれたものを直ぐにイヌにあげるわけには行かないので、優子はサイドボードの戸棚からバスケットを2枚取り出すと、窓を開けて佐助に与えた。

窓を開けると、外の空気が庭の青臭い木々の香りを運んできた。

佐助が鼻を鳴らして喜んでいるが、直ぐには口へ与えない。

「お座り」そう言っ、彼を座らせると「お手」「御代わり」

佐助もそれをやったら貰えるのを知っている、急いで順番に前足を差し出す。

佐助は変な癖があると言っ、よほど人に足を触られたくないのか、手のひらの寸前で自分の前足を止める。

普通の犬のように、相手の手のひらに乗せないのだ。

優子は何時も、ちよつと意地悪をして佐助が寸止めしている前足をムギユツと掴んでやる。

そうすると、ちよつと彼は困った顔をするのだ。それが何だか可愛いくて好きだ。

お預けをさせた後に初めてバスケットを与える。

こんな動作をしていれば、会話が少々滞ってもあまり苦にならない。

バスケットを与え終えた優子は、再びソファに戻って腰を下ろす。

「ゆ、優子さ……」

再び目の前に腰掛けた彼女に、忍が改まった声をだした。

「ハイ？」

忍の視線は何処か泳いでる感じで、優子の姿を僅かに避けていた。

「い、言い難いんだけど……おまえ……」

な、何？ 何改まって、しかも照れくさそうに。ついに告白か？ ちゃんと言っ気になったか？ それならあたしも真剣に考えるよ。

ていつか、たい焼き食べながらなのか？ それってどうなの？

「な、何？」

優子の鼓動が心なしに早くなって、胸の内側を叩いた。

忍は、意を決したように言う。

「ジ、ジパンのジッパー、半分開いてるよ……」

ぎゃあああああ！ うそお！ なんてえええええ。

優子は咄嗟に立ち上がり、後を向くと、急いでジッパーを上げる。確かに丁度半分くらいの所で、ジッパーが止まっていた。

なんでこうなの……ていうか、あんたがいきなり訪ねてくんのが悪いんだよ。もう。

首をうな垂れる優子の背中に忍は

「でも、別に中は見えてなかったぜ」

そんな変な慰め要らないのに……

それでも優子は忍の方に振り返ると、紅潮させた顔で確認する。

「ほ、本当に見えなかった？」

「ああ、内側のフラップがあるからな」

忍は笑ってお茶を口にすると

「ほとんど見えないだろ」

ほとんどって何？ 見えたのか？ 少しは見えたのか？

## 第41話

「な、何か作ろうか？」

優子は間が持たない事もあって、いやジッパーの中を少々見られたかも知れないという恥ずかしさを取り繕う気持ちもあってか、ついそんな事を言った。

「えっ？」

忍は優子を見つめると「料理できるの？」

失礼な。これでもちよくちよく夕飯の仕度はあたしがやってんのよ。

「あ、在り合せでよければ」

「へえ、そりゃあ、食べてみたいな」

忍は、優子が注ぎ足したお茶を笑顔で啜った。

冷蔵庫をあさって直ぐに出来そうなのはチャーハンだった。これなら味付けも簡単だし文句もでないだろう。

「チャーハンでもいい？」

「ああ、いいよ。チャーハンなんてできるんだ」

フツ、バカね。チャーハンは簡単なのよ。

優子は台所に立って忍と少しの距離ができると、気持ち的に余裕が出る。

忍はいつの間にかリビングの窓を開けて、佐助の頭を撫でていた。

「たい焼き喰うかな？」

「えっ、もったいないよ」

優子は、彼が佐助を構いたいのだろうと思って、さっきもあげたビスケットを数枚忍に手渡す。

「あんまりあげると、太っちゃうから」

手遅れだけどね。



「ああ、そうか」

優子は再び台所に戻った。

なんかこれって、ちょっぴり夫婦みたいなやり取りだよな。

優子は少しだけ心が躍るのを感じながら、何時もは少々重く感じる中華なべを小気味よく回した。

忍は美味しい美味しいと言いながら、優子の作ったチャーハンをたいらげた。

考えてみれば、家族以外に自分の作った料理を食べさせたのは初めてだった。それを美味しいと言ってもらえるのは、素直に嬉しい。しかも、忍に手料理を作ってあげた女性が校内にいるだろうか……もしいるとしたら、安西くらのような気がする。

安西って、料理はどうなんだろう……

優子は元々そだった事もあって、忍の容姿に特に惹かれるという感覚は無い。

確かに鼻筋は通っているし、少し切れ長で二重の目は、澄ました時と笑った時の表情にギャップが出て魅力的だ。

しかし彼といて緊張するのは、別に忍の容姿が影響しているわけではないのだ。

男慣れしていないと言うのが正直一番の原因だという事を、優子自身も判っている。

それでもやつぱり、彼の顔立ちは整っているなと思う。

そう言えば、あれどうしよう。まだ答えてないんだよな。ていうか、答が出ないんだよ……

観覧車で忍に言われた、付き合うという問いに彼女は答えていない。

さっきいちど思い出したが、小さな混乱で再び何処かへ飛んで行った。

「そう言えばさ……」

忍がお茶を飲んで一息つく、言葉を発した。

き、きたか？　こんどこそ高森も思い出したのか？

「文化祭で使った服って、どうしたの？」

「えっ？　ふ、服？」

「メイドのやつ」

それかよっ。

「あ、あれは記念にみんな持って帰ったよ」

忍とはそれからもたわいも無い話をしたが、あの事には触れる様子が無い。

「犬って、なんかいいな。俺も欲しくなったよ」

「そ、そう？　散歩とか面倒だよ」

「ランニングとか一緒に出来そうじゃん」

「直樹もそんな事言ってた。狙いは舞衣ちゃんだったみたいだね」

もう、どうでもよくなったのかな……あの事。

優子は忍がああ観覧車で言った事に触れない事が逆に、不安でならなかった。

アレが、あの時だけがチャンスだったのかな。高森はあたしに1度だけチャンスをくれたの？

いつの間にか、住宅街に小学生の声が響いてきた。

小学生が下校する時間になっていた。

「あ、俺そろそろ帰ろうか？」

忍が笑って立ち上がり「家の人、まだ帰って来ないの？」

「えっ、うん。ま、まだ……」

優子はそう言ったが、忍の身体はソファの前から横に動いていた。

えっ、本当にもう帰るの？

「あ、も、もう帰る？」

優子は忍に並ぼうと慌てて足を踏み出すが、そこにはまだテーブルがあった。

彼女はテーブルの角に左の脛を引っ掛けて躓くと前のめりになっ

て、焦ってバランスをとろうとするが、そのまま右足だけでつんのめるように前に飛び出す。

テーブルが大きく動いて、乗っていた湯飲みが倒れた。

「きゃあ！」

忍はまだ身体を半分だけ出口に向けていたので、躓いた優子が視界に入って慌てて手を差し伸べる。

優子は躓いた反動とバランスをとろうとした反作用で、勢いよく忍の胸に飛び込んでしまう。

忍の腕に両脇を抱えられる形で、彼女は体制を持ちこたえた。

うわっ、超危なかった……

が、その次の瞬間優子の唇には何かがかくつついて来てそれを塞いだ。

???

あまりに突然の出来事に思考は働かなかった。

ただ、自分の唇に柔らかくて暖かい何かがかくつついた瞬間、鼻孔にライムの香りが入り込んで、身体中に細い電気が素早く走り、全身の力が抜ける気がした。

## 第41話（後書き）

優子の唇に触れた何かは、やっぱり……？

## 第42話

優子は我に帰るように、顔を後へ引いて自分に起こった事を認識すると、顔中が熱くなった。

全身を駆け巡った電気が、頭の中でショートしたようだ。

な、な、なんでこんないきなりなの？ しかもこんな拍子に？

「な、な、な……」

「ご、ごめん。なんか咄嗟の事で俺もよく判らないんだ」

忍は優子を抱かかえたまま言った。

優子が忍に抱きついた拍子に唇が重なってしまったわけではない。顔の角度が違っていたにも関わらず、忍は彼女を支えた直後、故意に唇を押し当てて来た。

しかし、まるで自分の意に反してついやってしまったという感じだ。

優子は彼に支えられた状態で、何処を向いたらいいのか判らなくてただ俯く。

身体力が抜けて、忍が支えていないと崩れ落ちそうになっていた。

ひっくり返った湯飲み茶碗から、残っていたお茶がひたひたと床に零れている。

「お、お茶、こぼれてるよ」

忍の声で優子は慌てて身体の向きを変えると忍から離れてテーブルの布巾を掴む。

頭の中が真っ白になっていた。

何だかとにかく違う何かの動作をしようと思った。

優子は床より先にテーブルの上を拭いている。

「絨毯じゅうたんを拭いた方が、よくない？」

忍に指摘されて、慌てて布巾を絨毯に置く。

そんなに多い量ではなかったので、直ぐに水滴はふき取ったが、

その後も何だか訳が判らず優子は絨毯を布巾で軽く叩いていた。

「だ、大丈夫？」

「えっ、う、うん。平気よ。別に、そんな……も、もう高校生だしね。全然大丈夫」

「いや……絨毯のお茶……」

「えっ？ お茶？ そう言えば、の、のど渴いたよね」

「いや、零れたお茶で濡れた絨毯……」

「あ、ああ。絨毯は平気よ。どうせ安物だし」

優子は完全に舞い上がっていた……

\* \* \*

「じ、じゃあ、気をつけて帰ってね」

「ああ、じゃあ……な」

玄関を出て門扉の所で振り返る忍に、優子は再び笑顔で手を振った。

見送りが終わると、玄関ドアを閉めて急いで洗面所へ向う。

ど、どうしよう。あれってどうなの？ どうって何が？

思わず意味不明の自問自答をしていた。

優子は洗面所の鏡に向かって前かがみになり、何も変わらないその姿を見つめる。

そつと唇に触れてみるが、別に朝見たものと何も変わっていない。なんの変哲も無い、何時もの自分の顔とそこに在る唇。

なんか、あつという間だったけど、こんなモノなの？ これが、あたしのファーストキスなんだよね……

あんないきなり不意をつくような、そんなんでいいの？

自分が想像していたものとはかけ離れていた。

彼女はもつとムードに溢れて酔いしれた中で、お互いの瞳を見つ

めながらそつと交わされるのが初めてのそれだと思っていた。

しかし実際は気付いた時にはもう、彼の唇は自分の唇にくっ付いていた。

そのインパクトの瞬間がよく判らないまま事が運ばれて、それが無念で仕方がないのだ。

こんな事なら、この前の観覧車の方がムードあったよね……それでもリビングでの出来事は現実だ。しかも、これで弟に肩を並べた気がする。

優子は鏡に向って一息つく

「ま、いいか」と、声に出して言ってみた。

その時家の電話が鳴り出す。

リビングまで小走りに戻って電話を取った。

「ああ、優子いた」

それは母親だった。パート先からかけて来たのだろう。

「どうしたの？」

「洗濯ものの外に干してきちゃったから、取り込んで置いてくれる？」

優子はコードレスの電話機を持ったまま、和室の縁側を覗いた。

物干しはその前に在るのだ。

玄関ドアを開けると、物干しが在る場所は死角になるから、優子は気付かなかったのだ。

しかし、門から出入りした忍の視界にはしっかりと映っただろう

……

「ぎゃあ、あたしの下着外に干してあるっ。いつつも中に干してって言うてるのに……ていうか、高森にモロ見られてるじゃん

……

優子は思わず受話器を掴みなおすと

「お、おかあぁあぁさん……」

優子は安西の事を忍に言えなかった。

彼が裏サイトの事を知っているかは判らない。

しかし、彼に言った所でどうにもならない事は明らかだ。

モンモンとしたやり切れなさが、忍との行為に浮ついた気持ちを  
かき消す。

その夜、一葉から電話が来た。

「ああ、舟越ってあたしと一緒にの駅だったよ。全然気付かなかった  
けど」

たまたま見つけたのか調べてくれたのか、彼女はそんな情報をく  
れた。

「あ、うん。あたしも昨日の帰りにあいつ見かけた。やっぱりあの  
辺に住んでるんだ」

そうだ、そう言えば一葉が使ってる駅じゃん。

「ねえ、あんた本当は安西の何か、知ってるんじゃないの？」

「ど、どうして？」

「うん……別に」

優子は自分の知っている一部を話そうと思った。

「実はさ、安西の家に前に行った事あるんだ」

「ああ、安西って優子のウチに近いんだっけ？」

「うん…駅向こう」

安西の住んでいる様子くらい、一葉に話してもいいだろうと思っ  
た。他にも知っている人がいるかもしれない。

いや、もしかして学校にだって独りというのは内緒なのかも……

優子は一瞬の戸惑いを感じた。

「それで？ 何を知ってるの？」

再び躊躇する優子は、一葉の問いに促されて言葉を発した。

「うん、たいした事じゃないんだけど。安西って、独りで暮らして  
るの知ってた？」

「独りで？ 初めて聞いたよ。独り暮らしなんだ」



「なんかさ……この前駅でお母さんみたいな人と揉めてて、やつぱ訳ありっぽい」

「ふん。あたしなら、大喜びで独り暮らしするけど」

一葉は明るく言った。

確かに高校生の独り暮らしなんて、誰でも一度は思い描くかもしれない。

全てが自由で誰にも束縛されない生活。

気ままな時に好きなものを食べて、夜更かししようが外泊しようが誰にも咎められないし、自由に友達も異性も呼べる。

「でもさ、いつも独りなんだよ」

「いいじゃん。友達呼べばさ。でもあいつ、本当の友達いないのかな？」

「何時でもは無理でしょ？ みんなだつてそれぞれ用事だつてあるし。夜とか毎日独りでご飯食べるんだよ。夜中体調悪くても熱があつてフラフラしても、独りで乗り切るんだよ。洗濯だつて掃除だつて……」

「判つた、判つた。確かに本当に独りだと、いろいろ大変なのは確かかな」

一葉は一息つくと

「だから、優子は安西に同情してるんだ」

「別に同情とかはしてないけど……」

「うそ、だから安西に何か言われても黙って我慢してるんですよ」

いや……それは、言い返せないだけっていうか、基本アイツ苦手なだけ。

「そう言うわけじゃないけど……」

「だから、裏サイトの犯人を捕まえたいんだ」

一葉が言う事は、少しだけ当たっているような気もした。

しかし、あのサイトを見た時の不快感は、もっと違う何かのような感じも優子はするのだ。

それが正義感だとか誰かを思いやる心だとか、そんな偽善っぽい

表現では表せない何かだと思った。

「なんかさ、卑怯じゃん。ああいうのって」

一葉は電話の向こうで大きく息をついた。

「まあ、確かにね。じゃあ、明日舟越捕まえてみる？」

「えっ？ 明日？」

「また学校来なかつたら、放課後アイツの家に行ってみようよ」

一葉は何だか急にやる気まんまんで、電話を切った。

大丈夫なのかな……でも、一人より一葉がいてくれた方がいいかな。

## 第43話

久しぶりの曇り空は、朝から陽差を遠ざけて街並全てに影を落としていた。

翌日、舟越は学校へ来た。もともと存在感が薄いから、彼がいようがいまいが誰も気には留めない。

考えてみれば、学校やクラスにそんな生徒はいくらでもいる。見る方向を変えれば、全ての生徒はただの一生徒に過ぎないのだから。

しかし、この日は違っていた。

放課後、何時の間にか帰ろうとする直前のところで、一葉が声をかける。

「舟越、ちよつといい？」

「な、なに？ もう学園祭も終わったし、関係だいだろ」

一葉の不適な笑みに、舟越は警戒心を露にする。

「学園祭だって、けっきょく休んだくせに」

一葉は思わず腹に据えかねていた事を声にだした。

「おつ、舟越が女にいじめられてるぞ」

男子の誰かが声を出した。

一葉も思わず振り返って教室を見渡す。

もうクラスの半分は教室から出ていなくなっていた。

誰が声を出したかは判らなかったが、今の声で教室に残っている連中の大半が一葉と舟越を見ているのは確かだった。

もしかして、声の主は同時に廊下へ出たのかもしれない。

窓際ではバックを肩に掛けた忍が一葉を見て、優子の方にも視線を送る。

彼と目があつた優子は、なんだか忍に後押しされるように声をだす。

「か、一葉……」

彼女に近づいて、腕を掴んだ「教室じゃあ、ちょっとさ……」

その隙について、舟越が足早に教室を出て行く。

「あっ、ちょっと」と一葉は声を上げるが、まさか校舎内で追いかけるなんてするのも何だか人目を引きすぎる。

ふと見ると、安西も教室にはもういなかった。

「どうかしたの？」

忍が出口へ向う途中でさり気なく声をかけてきた。

それは、優子に言ったというより、一葉と優子の二人に言ったという感じだ。

「うん……ちょっとね」

優子が先に応える。

「ほ、ほら。アイツ学園祭の係りサボったからさ」

一葉がそう言って「高森は今日も部活？」

「ああ、何時もと変わんないよ」

一葉は忍が優子を見るかどうか、彼の視線に注意を払っていた。

「でも、一葉は元気いいから、舟越もタジタジだな」

忍は明るく笑うと「じゃあ」

そう言って優子の肩にポンツと触れて歩き出した。

「う、うん。じゃあね」

優子は片言で返す。

教室で触れられると心臓は一気に跳ね上がって、自然な素振りをするだけで精一杯だった。

一葉の視線を感じていたせいもあるのだろう。

二人きりで作った時間が多すぎて、他の友人と一緒にの時にどうしたらいいのか判らなくなっていた。

どうしたらいいのか判らないから、教室では余計素知らぬふりをする。

これから先も、あたしたちってこうなのかな……

相変わらずの曇り空は、午後になるともう夕方のように辺りを薄暗くしている。

通りに立つセンサー式の街路灯には、既に燈が灯っていた。

「ねえ、優子」

「なに？」

二人は仕方なく何時もの帰り道を駅まで歩いていった。

「裏サイトの事、高森には言っていないの？」

「な、なんで高森に言うのよ」

「だって、前に付き合ってたかも知れないんでしょ？ あの二人。あれに書いてあった別れた彼氏ってそうなのかな？」

「そんなの、解んないよ」

「安西には訊いてないの？ 家に行ったんでしょ？」

「訊いたけど……何だかよく解んない」

優子の少し投げやりな応えに一葉は軽い溜息について

「でもさ、少しは力になってくれるかも」

それは優子も考えなかったわけではない。

ただ、どういう理由で二人が別れたのかはつきりしない以上、安西の事を忍に言うのは気が引ける。

「でも、なんか部活とか忙しそうだし、言い難いのよね」

ていうか、どうしてそんな事あたしに言うんだ？ まるであたしが高森と親しいの知ってるみたい……

「それに、ほら。高森って話し難いし……一葉が言ってみれば？」

「ええっ？ あたしはだって、安西だってどうでもいいし」

なんだよそれ。

「でも、舟越を問い詰めるの手伝ってくれるって」

「それは、優子の為じゃん。それに、なんか面白そうじゃん」

本音はそれね。まあ、手伝ってくれるって言うのはありがたいけど。

「でもさ、ヤギ斗が舟越だとして、モギ斗は誰なんだろう？」

何となく一葉が呟くように言った。

「3年の事を書いてたから、やっぱ3年生つてことかな？」

「3年の記事は確かめようがないしね。舟越のでっち上げかもしれないし」

「だいたい安西の事だって、本当かどうか解んないじゃん」

「ま、ここで言っても仕方ないって事かな」

そう言いながら駅の階段に足をかけた一葉が、思い立ったように

「ねえ、舟越の家に行ってみようよ、これから」

「でも、住所録見ないと」

優子の言葉に一葉は得意げに笑みを浮かべて

「住所録、携帯のテキストに入れて来たよ」

### 第43話（後書き）

裏サイトの犯人は誰なのか？  
その目的は？

## 第44話

優子は一葉と一緒に駅を降りると、見慣れない駅前商店街の前に立っていた。

実は同じ駅を利用する一葉もあまり見慣れていないその景色は、彼女が降りる反対側の町なのだ。

舟越の住所は判っても、それが何処に在るのかはよく判らない。

一葉の住む地域とは駅を挟んで反対側なので、よく知らないらしい。

駅前にある住宅地図を二人で眺め、一葉が携帯に記録して来た住所を探した。

二人共地図を見るのは苦手というか、普段見慣れていない住宅地図に四苦八苦する。

「無いね。たぶん商店街よりけっこう先だと思っけど……」

一葉が視線を地図に這わせながら言った。

「うん……」

優子も同じく地図を眺めながら応える。

悪戦苦闘の結果、ようやく位置を確認した二人は住宅街に入った。

「この辺なだけだな」

一葉が周囲を見渡しながら、電柱の番地を確認してゆく。

すると、少し先の家から自転車が出たりと出てくるのが見えた。

「あつ、舟越だ」

一葉が思わず声を出したので、向こうも二人の姿に気付いた。

彼は二人の方向に自転車を出したが、くるりと向きを変えて反対側に走り出す。

「あつ、こら、待て！」

一葉は自分のカバンを優子に押し付けて走り出した。

小気味よい足音が一瞬で遠ざかり、短いスカートがパサパサと風で捲くれ上がる。



舟越はやたたと自転車のペダルを踏んだが、自転車は加速するまで若干間がある。

その隙に一葉は舟越の真後ろに追いついて、その後も自転車に負けないスピードで走ると、彼の襟首を後から掴んだ。

か、一葉……足、超速っ……なんで？

「待てよ、何で逃げるの？」

一葉に襟首を掴まれて仕方なく舟越は自転車を止めた。

「な、何なんだよ。こんな所まで」

優子も小走りに駆け寄った。

「ちよつとさ、訊きたい事があるのよ」

ていうか、なんで一葉、そんなに俊足なの？

直ぐ横に小さな児童公園が在ったので、優子と一葉は舟越を挟む形でそのベンチに腰掛けた。

砂場しかないとくろを見るとき、住宅地の規定で無理やり作った形だけの公園なのだろう。

「あんた、学校裏サイトの事、何か知らない？」

一葉の言葉に、舟越は顔色を変えた。

「あんたなの？」

優子にも彼の表情の変化は見て取れた。

舟越は一度上げた顔を再び俯かせて黙り込んでいる。

「ちよつと、何とかいいなさいよ。知ってるの？ 知らないの？」

一葉が彼の腕を掴んだ。

「お、俺じゃないよ」

舟越は俯いたまま言った。

「じゃあ、どうしてそんなにビビッてんの？」

一葉の言葉は少し威圧感がある。

「ねえ、何か知ってる事あったら、教えてよ。安西の事って、あんた意外に誰か知ってるの？」

優子は必然的に優しく言った。二人共ガミガミ言っても仕方ないと思ったのだ。

曇り空の夕暮れはやはり早くて、辺りはすっかり暗くなっていた。小さな公園にひとつだけ立った街灯がぼっかりと三人の周辺だけを照らしている。

「センパイが……」

舟越は重そうに口を開いた。

「センパイ？」

「センパイが、面白い事しようって」

舟越はポツリとポツリと言葉を発する。

「センパイって誰？　ウチの学校の先輩？」

優子の問いに、舟越は小さく頷くと

「でも、もういいんだ。センパイまで五十嵐がいいって言い出して……」

その言葉に優子も一葉も一瞬ギョツとして息を呑み込むと、二人で顔を見合わせる。

「い、五十嵐って、優子の事？」

舟越は再び小さく頷いたので、一葉は続けた。

「どういう事よ。優子がイイって。しかも、センパイもって？　『も』ってなに？」

舟越は親しいセンパイに、学校裏サイトの立ち上げを持ちかけられた。

立ち上げ自体はそう難しいものではないが、センパイはパソコンでゲームはやるものの他はからつきしなのだと言う。

舟越は丁度書きたいネタもあったので同意した。センパイとは、よく行く秋葉原のショップで知り合い、同じ学校という事で意気投合したらしい。

3年生の彼もまた、クラスではパツとしない目立たない存在だっ

た。

二人は何故か学校では接点を作らなかった。外でしか会わなかったらしい。

一葉は思わず溜息をつく

「どうして安西を標的にしたの？ 別に今まで黙ってたじゃない」

「黙ってたっていうか、話す相手がいなかっただけさ」

「あれって、本当の事なの？」

「半分はね。でも、半分は他のヤツラの当時の噂だよ。真偽なんて知らない。」

舟越は少しだけ顔を上げると

「それに、安西は五十嵐に何時も意地悪するだろ。学園祭だって無理やり係りにして」

「じゃあ、なに。あんた、優子の仕返しのもりで安西の事をサイトでバラしたっての？」

「機会が出来たからさ。それに実名は伏せただろ……」

「ウチの学校の二年にA西で当て嵌まんのは、安西だけだったの」

一葉が再び声を荒げた。

「じゃあ、なに？ つまり、あんた、優子が好きなわけ？」

一葉の率直な言葉に、優子は全身に悪寒を感じた。

以前、彼の態度でまさかとは思ったが、それが事実だと知って眩暈がした。

暮色にぼっかりと照らされる街灯の光が霞んで見えた。

## 第45話

舟越は同じ学校の先輩と共謀して学校裏サイトを立ち上げて、安西の過去を暴露した。

確かに半分は真偽の判らない話だ。

しかし、中高一貫の私立を途中で辞めて都立の高校に来た安西には、忘れたい過去が在るのは事実なのだ。

共謀したそのセンパイなる人物は、学園祭で優子のメイド姿を見て気に入ったらしい。

「そのセンパイって、誰よ？」

一葉の問いに舟越は「言っても知らないよ」

「知らなくても、名前言えっつの」

一葉が舟越の二の腕をパンツと叩いた。

「ていうか、優子の何処に惚れちゃったの？ 何処がいいの？」

おいおい、それって超失礼だろ……あたしだって……ていうか、あたしの何処がいいんだろ……

「そ、それより、センパイでしょ？」

優子は一葉の質問の主旨がずれているのを指摘した。

「あはは、ゴメンゴメン」一葉が苦笑する。

「杉浦健也……」

舟越は一葉の声に被せるように、ぼそりと言った。

優子は一瞬その名前でピンと来なかった。一葉と一緒に何となく頷いて彼女と顔を見合わせる。

「その、杉浦ってのがモギ斗なの？」

一葉の問いに舟越は、コクリと頷いた。

ん？ 杉浦健也？ それって、なんかすごく聞き覚えあるっていうか、見覚えのある名前だぞ。

「とにかくさ、あのサイト閉鎖してよ」優子が言った。

「どうして？ 五十嵐には関係ないっていうか、別にキミらに被害

はないだろ？」

あんな手段で、こそこそ人を貶め<sup>おとし</sup>ようとする根性が気に入らないんだよ！ 誰かに喋る勇気がないなら、ずっと心にしまっとけ！  
「いいから閉鎖しなさい」

優子はその言って舟越のベージュのジャンパーを千切れるくらいギョツと掴むと「するの？ しないの？」

「ゆ、優子、落ち着けて……」

優子と一葉は舟越の家に上がりこんでいた。

彼の部屋のパソコンから今すぐサイトを閉鎖する為だ。

ベッドと机の間には何だかよく解らないものがごちゃごちゃと置いてある。

「何これ？ ていうか、これエロゲーじゃん」

一葉が声を出すと、舟越は慌ててそれらにバスタオルを被せた。とにかく机の前に座らせて、パソコンを立ち上げさせる。

サイトを開いてパスワードを入力してログインし、削除モードをクリックするだけで簡単に全ては消えてなくなる。

当事者が操作すれば、それはあまりにもあっけなく消えてなくなるのだ。

「これでとりあえず、さっきの約束通りあんたの仕業って事は内緒にしといてあげるよ」

一葉はそう言って舟越の肩を軽く叩いた。

「前に、校庭の裏で死んだネコのお墓、作ってたろ？」

舟越がパソコンの画面を見つめたまま呟くように言った。

「ネコのお墓？」

一葉は怪訝な表情で復唱したが、優子はピンと来た。

以前、まだ夏休みに入る前くらいの頃、校庭の裏の片隅でネコが死んでいたのだ。

気付いた連中もいたが、みんな気持ち悪がってだれも知らないふ

りをした。

放課後たまたまクラス委員の用事で職員室へ行った優子は、余計な雑用を言いつけられて焼却炉に不要品を捨てに行った。

その帰りにネコの死骸を見つけたのだ。

可哀想だとは思ったが、別にお墓を作ってやったつもりは無い。土に埋めてあげただけだ。

「五十嵐だけは、黙ってお墓を作っているの見て、ちょっと萌えたんだ……」

な、なんだよ、モエタって？ ていうか、あれはお墓じゃないって。土に埋めただけだよ。ほつといたら腐っちゃうでしょ。

「いや、あれはさ、お墓っていうか……」

「なんか、けっこう地味だけど、なんかかわいいかなって」

あんたに地味って言われたくないよ！

「へえ、それで優子に惚れちゃったの」

一葉が楽しそうに言った。

「でも、杉浦センパイが目をつけちゃったし……」

舟越は真顔でそう言うと、パソコンの電源を落とした。

「あ、あのね。その杉浦センパイだけど……あたし、よく知らないし、話もした事ないし」

「でも、この前告白したって」

はあ？ 告白って、もしかしてアレか？ あの暗号文か？

「バカだね、優子はもう……」

一葉がそこで言葉を飲み込んだ。

「判ってるよ。高森の事も先輩に言ったんだ。でも、そんなの関係ないって」

「うわわわわ、あんた何いってんの。あいつとは何でもないって「あれ？ そうなの？」

舟越が振り返ると、一葉も優子を見た。

彼女は優子がどう切り返すのか、少し興味が湧いた。

「そ、そうだよ。高森とは別にたいした仲でもないし。それに、そ

の杉浦って人もよく知らないし……」

優子は何とか話題の焦点を変えようとした。

「そ、それよりさ、あんたがサイトを消したら、センパイに何かされるんじゃない？」

「ああ、仕方ないから学校側が調査を始めたから止めたっていうよ…… どうせ長くやるのはヤバイから、暫くしたら止めようって話だったんだ」

「それがいいかもね」

一葉はそう言ってから

「でもさ、あれって本当に10万ヒットもアクセスあったの？」

「ああ、あれは最初から10万スタートだよ。そんなにアクセスあるわけないだろ」

「なあんだ、そうなんだ」

優子も気にかかっていた事が判ってホッと息をつく。

「そ、それじゃあさ……」

舟越は電源の落ちたパソコンの黒い画面に再び視線を向けると、唐突に改まった声をだした。

「お、お、俺とじゃ……ダメかな」

「はあ？」

啞然とする優子を横目に、一葉は思いっきり手のひらで舟越の後頭<sup>うしろ</sup>を叩いた。  
<sup>あたま</sup>

「ありえないんだつつの。ていうか、ナニついでにコクってんだ  
「よ」

## 第46話

外の景色はもう真っ暗だった。

闇の中に住宅街の明かりがポツポツと輝くのを、優子と一葉は駅のホームに佇んで眺めていた。

一葉は電車には乗らないが、優子をホームまで見送りに来たのだ。  
「なんか疲れたね」

一葉がポツリと言った。

「う、うん。そうだね」

優子はひとつ息をつく

「一葉、足速いんだね。ビックリしたよ」

「ああ、あたし中学の時、陸上で短距離やってたんだ」

彼女は優子を見て笑いを浮かべると

「これでも二年の時には国体行っただよ」

「へえ、じゃあ、高校でもやればいいのに」

一葉の笑みが一瞬雲って、視線を遠くに向ける。

「膝がね、もうダメなんだって」

「膝が？　で、でもさつき走ってたじゃん」

「あんなちよつとくらいは平気だよ。でも、本気でやったら毎日何十本も練習で走るでしょ。それには耐えられないんだって」

一葉は軽く屈伸しながら自分の太ももを叩いて

「あああ、明日は筋肉痛かな」

優子は何時も通りに明るくその横顔を見つめていた。

誰にでも隠し持った苦悩が在るのだと思った。

こんなに常日頃明るく彼女にそんな挫折があったと知って、正直ショックを受けた。

いっつも元気な一葉にそんな苦悩があったなんて……

優子は一葉と同じに漠然とした夜の景色に視線を向ける。

少しでも、彼女と同じ景色が見たかった。



何だか自分がいかにも世間知らずで、あまりにもお気楽な人間に思えた。

普段誰にでも明るい一葉の方が、よっぽど深刻に生きているような気がしたのだ。

反対向きの電車が着いて、降り立った人の波が同時に作り出した喧騒を持ち去ってゆく。

再びホームに静けさが漂う。

「これで、安西も救われるってわけね」

一葉は、わざと明るい声をだすと

「あたし、知ってるよ」

「な、何を？」

「優子が高森とけっこう親しいって事」

うわ、やっぱり知ってたんだ……何処かで見られたのかな……

「あたし、この前少し後つけたんだ」

一葉は少しだけすまなそうにそう言う

「ほら、学園祭の終わった日」

「ああ、あの日」

優子は、一葉と駅で別れて同じ電車に乗らなかった事を思い出した。

もちろん、実際は乗っていたのだが……

「別に隠す事じゃないんだけど……」

優子はと言っているのか判らなかった。

「まあ、周りに反感買っちゃいそうだしね」

「ていうか、まだ、関係がよく解んない……ていうか、なんていうか」

優子は一葉に視線を向けずに、住宅街の明かりを見つめて言った。

「コクってないの？」

「向こうがね」

「向こうが？」

怪訝そうに優子を見て一葉は笑う。

おいおい、あたしがめっちゃめっちゃプッシュしてるとでも思っ

てるのか？

「た、高森が？」一葉が確かめるように優子の顔を覗きこんだ。

「もしかして、高森の方が優子を……？」

一葉は目を丸くしている。

ていうか一葉、それ驚きすぎだつて。

「うん……向こうが誘ってくるから、断る理由も見つからないし、何となく誘いに乗ってるうちに、一緒にいるようになって……」

「で、今は？」

「えっ？」

「最初にどっちが誘ったかより、今のあなたの気持ちはどうなの？好きじゃないの？」

優子はそんな事を訊かれて、改めて困惑した。

自分は高森忍を好きなのだろうか……それが解らない。

だからきつと、忍が自分をどう思っているかの方が気になってしまふのだ。

自分の気持ちがどうこうよりも、彼の気持ちが二人の関係をリードするのだと勝手に決めている。

周囲の目から見た位置関係が、自然と優子にそういう思考を与えたのだ。

しかし、今更積極的に相手との関係を築けと言われてもどうしていいのか判らないし、そう簡単に行動にも出せない。

「解んないよ……」

優子は力なく答えた。

## 第47話

学園祭が終わって間も無く、中間考査が始まる。

優子は意外と試験前、試験中には勉強する方だ。

その割には中盤の順位から上にはいかないのだが、下にも行きたくないのでマイペースで試験の時くらいは勉強する。

一葉は優子と大差なくて、上に行ったり下に行ったり、美菜は何時も優子より少し上で、里香は少し下のようなのだ。

とは言え、試験の成績順位というのは上位20位以外は個人にしか知らされないから、それぞれの詳しい試験結果は解らない。

ただ、忍が何時も1番なのは確かで、今回もそれを追うように安西が2位だろう。

この日、優子は1本早い電車に乗る為に、足早に家を出る。

もう直ぐ試験なので、今日から忍は朝練が無いはずだ。

駅までの道のりも、何処かで彼と出くわすのじゃないかと気が気でない。

しかし、優子は忍の姿を見かけないまま、駅の改札まで辿り着いてしまう。

こんな時に限って、逢わないもんなのかな。

優子は改札口を抜けると、振り返って周囲を見渡した。

忍どころか、知った顔なんて何処にもいない。

べつにいいじゃん。何時でも会えるんだし。

彼女は何時もよりゆっくりと階段を下りた。

後からOL風の女性がコツコツとヒールを鳴らして追い越してく。

サラリーマンも二人追い抜いていった。

電車の到着アナウンスが流れている。

ホームに電車が入ってくるのが見えて優子も少しだけ足早になるが、そんなに焦らなくても乗れるタイミングだ。

万が一逃しても、次がある。

その時ボンと肩に誰かの手が触れて慌てて振り返った。

「急がないと乗り逃がすぞ」

た、高森。

忍だった。

思わず立ち止まる優子を、追い越した忍が振り返る。

「どうした？ 早く行こう」

「う、うん」

優子も忍について小走りに駆けると、彼と一緒に電車に乗り込んだ。

ふうつと軽い息をついて忍は

「今日は早いんだね。珍しい」

そう言って笑う。

朝っぱらから、爽やかな笑顔だ。

あ、あんたに会う為にね……なんて言えるわけじゃないじゃん。

「う、うん。たまには気分転換とか思ってた」

なんだそれ。そんな理由あるか？ じゃあ、今まで一度も気分転換してないって。

「へえ、よかったよ。今日から朝練無かったからさ」

忍はそう言って、優子を見てから窓の外に視線を移した。

フフ、情報収集済みよ。ていうか、よかったって、どんな意味なんだろう……

優子は忍の横顔を見てから窓の外に顔を向ける。

胸の内側で温かい泉が湧き出るような気持ちになった。

やっぱりそうだ。高森といくとワクワクするよ……これって……そういう事なの？

でもどうして？ 彼の何にこんな気持ちになるんだろ……

優子は流れる景色の中で、何度も忍をチラ見していた。

何時もは何も感じない電車が奏でるf分の1の振動音が、やけに心に響く。

「試験勉強は、してる？」

「え？ うん。少しね」

と思いながら、たいしたやってないんだよ。

「高森は？ やっぱりかなりやってる？」

訊いてどうすんだよ。レベルっていうか、次元が違うっての。

「いや、今日からやろうと思ってるけど」

「今日から？」

「ああ、何時もそんなもんさ」

それって、さり気なく自慢か？ そんなんで学年トップ？

そりゃ、塾通いの安西も怒るよ。

「やっぱり頭の出来が違うんだ」

「そんな事無いさ。昔は俺もかなりがむしゃら頑張ってたよ。でも、だんだん短時間で集中すればかなりの量を習得できるようになったださ」

忍はそう言って再び笑う。

ステンレスのドアに跳ね返った陽差が白い歯を照らしている。

それを世間じゃ秀才とかって呼ぶんだよ。

「試験が終わったら、また料理食わしてくれよ」

「えっ？」

「家で誰かと食事する事無いからさ、俺」

ドアが開いて忍が足を踏み出したので、優子も反射的に駅へ降り立った。

「優子の家でも俺んちでもいいから、また一緒に食事したいし、お前の料理って家庭的な味がするんだよ」

「そ、そうかな……」

優子が思わず俯いた瞬間、前方の車両から降りた一葉の姿が見えた。

彼女に声をかけようか迷ったのだが

「よう、忍」

後からは忍の部活仲間が声を駆けてきた。

チツ、少しは空気読めよ。

忍は二言三言その友人と話すと優子を見て

「じゃあな」

そう言って軽く手を上げ、友達の方に身体を寄せたので

「うん」

優子はわざと足並みを崩してそこから離れた。

「あああ、せっかくあたしが気を使って声かけなかったのに」  
横から小走りに身体をぶつけて来て一葉が言った。

「知ってたの？ この電車に乗ってた事」

「うん、乗るのが見えたもん」

「べ、別にそんなの、気とか使わなくていいよ」

優子はそう言って、足早に歩き出した。

## 第48話

「ねえ、雑誌で見たセーター探したいんだけど、優子今日暇？」

放課後声をかけて来たのは一葉だ。

舟越を追い詰めた一見と、忍の事を知っているという事から、二人は以前に増して親しくなった気もする。

「あつ、あたし行く」

声を出したのは近くにいた里香だ。

彼女は小走りに二人に近づくと

「最近二人でばつかずるいよ」

「そんな事言つて、あんた最近彼氏見つけたって噂じゃん」

一葉がそう言つて笑うと、里香も笑う。

「あつ、ばれてた？」

「そ、そうなの？」

優子が目を丸くする。

ほんと、一葉つてあなどれないよ。ていうか、あたしが疎いのか？

「今日は暇でさ。付き合うよ」

里香がそう言いながら優子の机に腰掛けると

「優子も行くとしょ？」

「ええっ？ あさつてから試験だよ。少しやらないとなあ」

「そんなの夜やればいいじゃん」

あたしは机に向つてから、エンジンかかるまで1、2時間はかかるんだよ。

「でも、いま欲しいものないしなあ」

「欲しいもの持つてゐるって噂だしね」

一葉がわざと嫌味っぽい口調で言つと、里香がそれに反応する。

「ナニナニ？ 優子、何手に入れたの？」

「何でもないよ。なんにも手に入れてない」

そう言って一葉を軽く睨んで「変な事言わないでよ」

優子と忍は相変わらず学校ではほとんど話はしない。

前よりはほんの少しだけ喋る機会も増えたような気もするが、変わったというほどではないだろう。

安西とはまるつきり会話する事もなく、向こうも突っかかってくるような感じではない。

優子はさり気なく安西が会話を交わす連中などに視線が行ってしまふ。

あの娘たちはあの学校裏サイトを見たのだろうか……あの記事の事を知っていて、あんな風に普通に安西と話してるの？ それとも、意外とみんな知らなかったりして。

そんな事を考える事も多く、クラスみんなをおかしな目で見てしまふ。

優子は結局一葉と里香に誘われるまま買い物へ出かけた。

前なら平気で断っていたのに、何故か断りきれなかった。

別に一葉は気が置けないと思っっているはずなのに、どうして断れなかったのか自分でもよく解らない。

付き合いが増えるというのは、こういう事なのかとも思ってみる。二人と別れて駅に着いたのは、もう夜の8時を過ぎていた。途中でお茶なんてしたから、余計に時間をくった。

はあ、昨日もほとんどやってないから今日は少しでも数学やるところと思ったのになあ。まあ、少しは時間あるか。

優子が駅のホームに降りると、ひとつ後の車両から安西が降りてくるのが見えた。

彼女も優子に気付いたようだ。おそらく塾の帰りだろう。

相変わらず綺麗な黒髪が、弱い風に揺れていた。

優子は何となく足を止めて彼女が近づくの待った。

前々から彼女に訊いてみたい事があったから。



「なに？ 何かあたしに用？」

安西は近づいてくると、木で鼻を括るような表情で優子を見た。  
優子は少し俯いてしまうが

「あ、安西はさ、高森の何処が好き？」

「はあ？ な、何よいきなり」

「どうなのかなあ、て思つて」

「ど、どうしてあんたにそんな事言わないといけないの？ それに  
こんな所で話す事でもないでしょ」

「そうそれはそうなんだけどさ……」

優子は少し俯いた視線を上げて、安西を見た。

安西は、優子の視線の真剣さに少しだけ心がたじろぐ気がした。

優子は安西の瞳の奥を覗いていた。ホームの明かりが溶け込んで、  
思つた以上にそれは澄んでいる。

虹彩が綺麗に見えるコンタクトを使っているのかもしれないが……

安西は思わず先に視線をそらす。

周囲に視線を巡らせたあと、再び優子を見る。ゆっくりと、困惑  
の視線で。

「あんた、忍の事好きじゃないの？」

「解んない……」

優子は俯いて小さく首を振った。

「高森が解んないのよ。何を考えているか、全然わかんない……」

「そんなの、本人に訊けばいいじゃない。男の考えなんて、あたし  
ら女には理解できるわけじゃないじゃん」

「じゃあ安西は？ あんたはどうなの？」

「あたしは、訊いたって仕方が無いのよ。話は既に完結してるんだ  
から」

「それでも、高森が好きなの？」

「そうね……初めての人だから……かもね……」

安西はポツリと言った。

その瞬間、優子の胸の中にイナズマが走って、冷たい氷の柱がせ

り上がった。

それは驚くほど透明で、硬質で鋭く、心の中を一瞬でスタスタに切り裂いた。

何となく解っていた……安西と高森がそういう関係だった事は、心の何処かで気付いていたはずなのに、面と向かって聞く言葉がいかに生々しくて、一瞬で思考力を奪った。

「だから、あたしはその後に他の連中に乱暴されても、立ち直る事ができた。それが初めてじゃなかったのは、精神的救いになったから……」

安西は優子を見ると「知ってるんでしょ。学校裏サイト」

「やっぱり……やっぱり安西も、サイトの事は知ってたんだ。」

「じゃあ、アレに書き込まれた事は本当なの？」

「さあ、どうかしらね。読みたいヤツには読ませてあげるよ、別にさ」

安西は空を仰いで少しだけ涼しげに笑った。

その姿は羨ましいほどに毅然としている。

肩に乗っていた黒髪が、ゆるりと後へ落ちた。

「あのサイトは、もう消えたよ。犯人突き止めたから」

少し冷たい夜風が二人の間を吹きぬけた。

安西は再び優子を見つめると目を細めて

「突き止めたって？ どうやって？」

「それは言わないし、犯人も言わない」

優子は安西を見つめたまま「でも、完全に消去されたから。もう、何も残ってないから」

安西の左の細い眉が、ピクリと動いた。

「そんな事して、あたしに恩義を着せる気？」

「別に……そんな事思っていないよ。ムナクソ悪いから犯人を捕まえただけ。それだけだよ」

「どうせ、舟越とかじゃないの。あんなの書くヤツなんてさ」

再び空を仰いだ安西は、紺青の中に小さく浮かんだ月を見つめる。

「あんたに礼なんて言わないわよ。別に頼んでないしさ」

「いいよ別に。そんなの欲しいわけじゃないから……」

安西は優子を一瞥して、先に階段に向かって歩き出した。

流れる雲に月が覆われて、照明の届かない場所は闇に包まれた。

同じ電車から降りた人影はもう無くて、ポツリポツリと次の電車に乗る人影がホームに降りてきた。

安西は振り返って優子を見ると、わざとらしく冷酷な笑いを浮かべて

「あんた、あたしが思ってた以上にバカかもね」

その残像だけを残して彼女の足音が階段を上っていくと同時に、雲に隠れていた月が顔を覗かせて、フツと辺りに月影が注いだ。

安西の靴音が階段の先に完全に消えてから、優子はようやく静かに歩き出した。

## 第49話

中間考査も終わって忍は当たり前のようにTOPをとり、やはり安西ひとみは2位。女子では1位の成績だった。

11月に入ると校舎裏の雑草も褐色に変わって景色全体が冷涼なものに変わる。

花壇に咲いていたコスモスも、気付けば何時の間にか枯れ草になって干乾びていた。

優子は放課後、クラス委員の雑用で教材の用具室を片付けていた。それは職員室と保健室に挟まれた小部屋で、スチールの棚が幾つも並ぶだけの殺伐とした場所だ。

窓は在るが、陽の入りが悪くて薄暗い。

ちよっぴり環境に変化のあった優子も、クラス委員としてのこんな立場は変わらない。

「ちよつと舟越、ボケツとしないで早くそれしまつてよ」

「ああ、ごめん。でもさ、この漢字表記のパネルスゴイよ。知ってた？ 凸凹って正式な漢字表記だったんだね」

「はあ？」

ていうか、んなの今はどうでもいいんだよ。

「じゃあ、あたしゴミ捨ててくるからね」

優子はそう言って教材部屋を出る。

なんだかなあ。独りのほうがかえってやり易いよ。あいつなんでもかんでも興味示しちゃうし、手は遅いし全然はかどらないよ。優子が廊下に出ると、保健室の先に在る生徒相談室から一人の男子生徒が出て来た。

うわっ、金髪だよ。あんな生徒ウチの学校にいたっけ？

彼は室内に向って一礼していた。

優子はこんな時の予測が足りない。

その生徒が振り返ったら歩き出す事を予測して、少し離れてそこ

を通るべきだったのだ。

しかし、彼女は彼の直ぐ後ろを通ろうとした。

「きゃっ」

「あ、つと、わりい」

振り返りざまに歩き出そうとした生徒と優子はぶつかった。

彼女は、抱えていたダンボールは落とさなかったものの、溢れるほどに入っていた中身が少々こぼれ落ちた。

古い黒板消しやボロボロのジャンボ三角定規などが床に落ちて音を立てた。

「ああ、ごめん」

もう、後見てから歩き出せよ。

「あ、うん……」

男子生徒は、両手の塞がった優子の変わりに落ちたものを拾ってダンボールに入れてくれた。

「重くない？ 手伝おうか？」

ダンボール越しに微笑む男の髪が、サラサラと黄金色に揺れていた。

うわっ、完全金色だよ。これはいくらなんでもヤバくない？  
ていうか、だから相談室だったのか？

生徒相談室は普段、生徒の個人指導などにもよく使われるのだ。

「あ、だ、大丈夫よ。平気」

あんまり関わりたくないわ。早くここから離脱しないと。

「いいからいいから、俺が持つてやるよ。何処に運ぶの？」

彼はそう言つて、優子の手からひょいとダンボール箱を奪った。

「えっ、いや……あの……」

いいって言つてるのに、何だよ、もう。何だよコイツ。

「あ、あの……焼却炉のところに……」

うわ、言っちゃった。この金髪と歩くのか？

「焼却炉は？ 何処？」

「あ、この先の方」

優子はそう言いながら先に歩き出して彼を促す。

仕方がないので、箱から著しく飛び出ているジャンボ定規とジャンボコンパスを手を取った。

なんだ？ どうして焼却炉判らないんだろ。きつと、ゴミ捨てなんてしたこと無いんだ。そうだ。

優子が歩き出すと、それについて彼も歩き出しす。

「キミ、何年生？」

「えっ、えつと、二年……です」

「俺も二年なんだ。B組に明日から入るんだよ」

ああ、転校生？ なるほどね。でも、いきなり金髪か？

「俺、篠山雄二郎。キミ、何組？」

「あ、えつと……Cだけど」

「あ、じゃあ隣なんだね」

雄二郎はそういつて優子に笑いかける。

だ、だから何？ 同じクラスじゃないんだから全然関係ないし……

優子は無意識のうちに足早になっていた。

「なあ、名前は？」

「えっ、あ、い、五十嵐……」

「ゴツイ名前だな」

雄二郎が笑った。

ほつとけ。

「ねえ、下は、下の名前」

「ゆ、優子よ」

「そう。ゆうの字は衣偏の裕？ それともにんべんの優しいって字？」

そんなのどうでもいいじゃん。何であたしなんかに興味示してんだよ。ていうか、初対面でどんだけ喋るんだよ。

「や、優しいに子よ」

「ああ、そうなんだ」

雄二郎は終始明るく笑って、相づちを打った。

焼却炉の横には不用品置き場がある。コンクリート剥き出しの小さな建物は言い換えれば粗大ゴミ置き場だ。

優子は鉄の扉を開けると、持っていたものを小分け用の箱へ投げ入れる。

雄二郎は床に箱を置いて「これ、分別要らないの？」

「い、いらないと思うけど……」

こいつ、意外と細かいのか？ A型か？

優子はよくここへ来るが、分別なんて考えた事もなかった。考えてみれば、金属も木製もプラスチックもごちゃごちゃに置いてある。小分けの箱も実際は意味がないのだ。

しかし、業者が引き取りに来るのか、時折綺麗になくなっているので、特に問題は無いのだろう。

焼却炉は校舎の裏側にある。

少し離れた場所には駐輪場、そしてその向側は体育館の裏に面している。

もつと先には学校の裏門が在る。

優子が雄二郎と並んで校舎へ戻ろうとした時、裏門からロードウィークに出たらしきバスケット部の連中が戻って来た。

その中には忍の姿もある。

優子は咄嗟に雄二郎と距離を置いた。

「どうしたの？ 早く戻ろうぜ」

「う、うん」

ていうかあんと一緒に戻る筋合いはないし、あんとあたしは行き場所違うでしょ。

優子が忍を見ていると、彼も気付いたらしく小さく手を上げた。

うわ、こ、こんな時ってどうするの？ あたしも手え上げる？

優子は体育館の出入り口へ向う忍に向って小さく胸の辺りに手を上げて、微笑んで見せた。

「なに？ あれって、彼氏とか？」

雄二郎は少し先からわざわざ優子の所へ戻って来て、彼女の視線の先を覗き込む。

「えっ、い、いや。別にそういうんじゃない……」

優子はそう言って

「あ、ありがとう。助かったわ」と校舎の中へ足早に歩き出した。



## 第50話

翌日、優子はブラウスの上に学校指定のVネックのセーターを着てからブレザーを羽織った。

窓の外に広がる水色の高い空は、いかにも寒空だった。

そろそろブラウスとブレザーだけでは風が肌に沁みてくる。

ババシャツはまだ早いよね……でも、そろそろ出しておくか。チェストの中を覗き込む。冬物が入った場所なので、久しぶり開けた引き出しだった。

ぎゃあ、か、カビが生えてる……なんで？

白と生成り色は平気なのに、何故か黒と紺色のヤツには白い斑点が出来ていた。

優子は慌ててそれらを掴んで階段を下りると、洗面所へ駆け込んで洗濯機へ放り込む。

あたしの箆筭って、そんなに不潔なの？ ちゃんと洗濯してから入れたよね……

「どうしたの？ バタバタして」

母親の杏子が洗面所に顔を覗かせた。もうパートへ出かける準備をしている。

「な、なんかさ、あたしのシャツにカビが」

杏子が洗濯機を覗き込んで

「あら、これ洗剤の残りじゃないの？」

そう言っつて、指で白い斑点をなぞる。

「なあんだ、そうなの？」

「そうよ。そそっかしいわね」

杏子は軽い声を出して明るく笑った。

ていうか、その前にちゃんと濯いでよ……ビックリするって。

優子は朝食のパンを齧って、早々に家を出る。

何時もの事だが、直樹はもう家を出た後で、彼女は駅まで小走りだ。

駅の階段を駆け上がって改札口の手前まで行くと、前から来た男に突然声を掛けられる。

「あつ、優子じゃん」

優子はビックリして一瞬立ち止まった。

この時間、今まで知った顔になんて会った事がないのに、確かに同じ学校の制服の男だ。

それでもパツと見誰だか判らない。

それは、金色だった髪の毛が真っ黒だったからだろう。

優子はほんの少し彼を凝視して

「あつ、あんた……」

髪の毛真っ黒！　ていうか、何であたしを下の名前で呼ぶんだよ。

声をかけて来たのは、昨日の放課後に会った篠山雄二郎だった。

金髪だった頭は染めたのだろう。不自然なくらいに真っ黒だ。

時間が無いので二人共改札を抜けて足早にホームへ降りると、丁度電車が入って来た。

「か、髪、染めたの？」

電車に乗り込んでから直ぐ、優子が訊いた。

「ああ、昨日相談室でグダグダ注意されたからね」

「そんな真っ黒じゃなくても、大丈夫よ」

「でも、駅前の薬局に行ったらこの色だけ半額で売ってたから」

そういう問題か？

「そ、そう……」

優子はとりあえず頷いて見せる。

「この電車で間に合うの？」

「え、ええ。一応は」

おいおい、転校初日だろ。もっと余裕もって登校しろよ……

優子は窓の外を眺める雄二郎を見上げた。

ちやうど忍と同じくらいの背丈だろうか、そんな事を思う。

しかも、よく見るとちよつとイイ顔だ。一重の目は涼しげでいかにも今風だし、眉はカットしているかのように、きりりと整っている。

いや、あの眉は絶対カットして整えてるよ。

喉仏が妙に逞しく見えて、優子は小さく頭を振った。

高森は意外と中性的なのかな……

「よかった、優子がいて。昨日一度行ってるけど、初日の登校は緊張するしね。かといって一緒に登校する知り合いもないし。ていうか、駅同じなんだな」

なんだか男のくせに朝からよく喋るなあ。だからもつと余裕持って行けて……ああ、この男と駅同じなんだ……

「そ、そうね……」

優子は短く応えて小さく笑った。苦笑と悟られないような微妙な苦笑이었다。

駅を降りて足早に学校へ向う。

「なあ、優子は部活とか何かやってるの？」

「べ、別に何も」

「そつかあ、同じのがよかったなあ」

はあ？ 同じってなんだよ。女と男じゃあ文化部しか一緒に出来ないだろ。

優子は教室に入って自分の席に着くと、思わず息をついた。

なんか、面倒なのと知り合っちゃったなあ。今までならゼツタイあんなのと知り合わなかったのに……どうなっちゃってんの？  
しかし、それだけでは終わらなかった。

三時間目が終わった休み時間、一葉が声をかけてきた。

「ゆ、優子、誰かが呼んでるよ」

「何？ 誰？」

「知らない……見た事無い人」

「見た事無い？」

優子が教室の出入り口を振り返ると、そこには雄二郎がいた。

な、なんだよアイツ。なんなの？ ナニ休み時間に顔出してるのさ。

雄二郎は優子と目が合うと笑顔で手招きする。

優子は仕方なく彼に駆け寄ると、小声で

「なによ、何の用？」

「ああ、悪いけど現国の教科書ある？」

「はあ？」

「なんか俺、忘れたみたいでさ。借りられるような人、優子しかないし」

雄二郎がそう言つて笑う。忍に負けないほどの爽やかスマイルだ。優子は溜息をつくと、自分の机から教科書を取り出して雄二郎に手渡す。

「サンキュ」彼はそう言つて足早に戻つていった。

ヤバイよ。なんでいきなり懷かれてんの？ あたしってそんな声掛け易いタイプじゃないだろ……

「ちよつとちよつと、今の誰？ 二年生？ 見た事ないんだけど」  
一葉がさつそく寄つて来た。

周囲にいた女子も、一葉の問いに密かに聞き耳を立てる様子が判る。

「て、転校生だつて」

優子は出来るだけさり気なく言う。

「転校生？ 何組？」

「B組らしいよ」

「なんで優子ったら、もう仲良しなの？」

「な、仲良しじゃないよ。昨日ちよつと話しただけ」

優子は忍の視線が気になつてさり気なく見るが、彼は全然興味が

無い様子で、他の男子と笑って何かを話していた。

「なんか、意外とイイ男っぽいじゃん」

一葉の瞳が何時に無く輝いている。

「そ、そう？」

さすが目ざといよみんな。だから興味深々なのね……でも、アイツの正体はパツキンヤンキーってカンジよ。

授業が始まって少しすると、優子の所に小さな手紙が二つ回ってきた。

ひとつは一葉で

『さっきの男。名前教えろ！』と書いてある。

優子は一葉をチラリと見て、もうひとつを広げる。

『あんたも、じっさい男好きなのね』

うぐっ……このいかにも硬質な筆跡……安西だな。

優子は、一葉とちょうど教室の真反対にいる安西を見る。

向こうはチラリと視線を交わして嘲るような笑みを零した。

あの女、あたしのおかげでちょっとは助かったのに、マジでなんとも思っていないな……

優子は仕方がないので、一葉には雄二郎のフルネームを書いた手紙をまわした。

安西には半ばヤケクソで『モテル女は辛いよ』と書いてまわしてやる。

## 第51話

「ねえ知ってる？ 駅向こうに大きな家が出来たって」

夕飯を食べながら、母親の杏子が言った。

優子の家の食卓は、今夜も家族揃って平穩そのものだ。

「何だ、金持ちでも越して来たか？」

孝之助が箸を動かしながら応える。

「それがハンパじゃない大きなのよ。みんな公共施設ができると思ってたくらいなんだから。それが出来てみたら個人の自宅なのよ」

「そんな、デカイのか？」

「庭にこの家がすっぽり」

「そんなに？」

「しかも、二つは入りそう」

それを聞いて、孝之助の箸がさすがに一瞬止まる。

「わざわざ見に行ったのか？」

「だって、どれだけ大きいか気になるし、私もあそこには何か施設か公園が出来ると思ってたんだもの」

「ま、金持ちは何処にでもいるさ」

孝之助はそう言って、味噌汁をガブリと飲んだ。

「何処かの組長さんの自宅らしいわよ」

母親の杏子は続けた。

「く、組長って、ヤバイ組の方の？」

優子が思わず口を挟む。

杏子は頷いて笑うと

「優子も気をつけてね」

何をどう気をつけんのさ。

「ほら、姉ちゃんトロイから、ぶつかって因縁つけられたりとかさ。終いにラチられてどっかに売り飛ばされたり」

直樹が面白そうに横から口を出す。

まるで思考を読み取ったかのような言葉は、やっぱり姉弟という事か……

「バカね、そんな漫画みたいな事がそうそうあるわけないでしょ」  
優子は肘で弟の脇腹を小突いてやった。

「何処見てんだ、こらあ！ ああ？」

朝の喧騒に包まれた駅構内に、いかにも下品な声が轟いた。

うわ、何だあれ。あれがそうなのか？

優子は階段を上ったところでそれを耳にして、思わず通路の先を見た。

大柄で長いコートを羽織った後姿は、脚を大きくがに股に開いている。オールバックの髪は整髪料でエナメルのようなうだ。

その隣には少し小柄の、金髪で坊主頭の男。これまた凄いがに股だ。

いかにもガラの悪そうな男が二人、誰かに絡んでいる。

しかし、二人の男が少し動くと、その先には見慣れた制服……

ていうか、あいつ篠山？

絡まれているのは、どうやら篠山雄二郎のようだ。

優子は雑踏に紛れながら出来るだけ彼らに近づく。

「ああ、ごめん。ちょっと考え事してたもんで」

篠山は何時もの笑顔だった。微かに話し声が優子に届く。

「考え事だ？ 兄貴の肩はなあ、めちゃくちゃ外れ易いんだ。どうしてくれんだコラ？ 嗚呼<sup>ああ</sup>？」

小柄な男がガニ股の足を揺らしながら、篠山に顔を近づけて怒鳴る。

篠山は顔色一つ変えずに、制服の内ポケットから財布を取り出した。

あいつヴィトンの長財布？ ていうか、ああ……お金払っちゃうの？ それってどうなの？

優子は柱の凹凸おつとつの影に身を寄せて様子を覗のぞっていた。

しかし篠山は自分の財布から取り出した、何か名詞のようなものを差し出して

「ああ……じゃあ、後でここに連絡くれる？」

そう言つて再び笑つた。

なんだか知らないが、全く動じる様子は無い。

「ああ？　どつかの坊ちゃんか？」

小柄の男はいかにも不服そうにそれを受け取り、大柄の男が覗き込む。

が、急に直立した姿になった。

その時、構内放送が流れて、彼らの話し声はかき消された。

しかし小柄な男も遅れて直立している。かなり慌てた様子だ。

そして、二人一緒に足早に向こうの階段を下りてゆく。

何度か篠山に頭を下げたように見えたが、優子にはどういう事が全く理解できなかった。

な、なんだ？　何だつたんだろう。

優子が通路の中央へさり気なく歩き出すと、篠山も彼女に気付いた。

「ああ、優子。おはよう」

「お、おはよう……」

なんだよ、もう……高森とだって滅多に朝の挨拶なんて交わせないのに。

「相変わらず優子はギリギリなんだな」

あんたに言われたくないっての。

優子と篠山は電車を降りて駅を出ると、朝の風を切つて学校までの道を足早に歩いた。

学校の最寄駅を出ると、意外に自分たちと同じ制服姿は目に付く。学校周辺に住んでいる連中ほどギリギリに来るのだ。二人の横を、



何台もの自転車が追い越してゆく。

「ねえ、この前の彼、高森忍だろ？」

篠山はポケットに手を入れたまま、優子を覗き込む。

「えっ？ う、うん……」

なんだコイツ。早くも対抗意識でもあるのか？ 確かにあん

たの見栄えもなかなかだけど、高森は特別だよ。

「そうか。やっぱり忍か」

彼は歩きながら、軽く空を仰いだ。

優子は思わずそんな篠山を見る。

「し、知ってるの？」

「ああ、ちよつとね」

篠山は意味深に笑って見せた。

## 第52話

「俺、来週転校するんだ」

「そうなの？」

「親父が九州に転勤でさ」

「ヤクザに転勤なんてあるの？」

「遠征とかって言うてた。お袋が付いて行きたいらしくてさ」

「そうか……」

「半年しかこの学校にはいなかったけど、忍に会えて楽しかったよ」

「いや、俺の方こそ楽しかった」

夕焼けが辺りの景色を琥珀色に染めて、二人の少年の影は空き地の隅に長く伸びていた。

「他の連中には言わないで行くよ」

「なんで？」

「何か、わざわざ伝えたいヤツもないし。男子の半分は殴っちまっただしな」

「俺だって殴られたぜ」

「その分、殴り返したろ」

二人の少年は顔を見合わせて同時に笑った。

暮色に染まる空に、子供らしい高らかな笑い声が響いていた。

\* \* \*

優子は一葉と学食のテーブルで弁当を食べていた。

かなりの席数がある学食は、持参した弁当を食べに来る生徒も意外といえる。

風が冷たくなると屋上や校庭には行き難いので、教室とは別の場

所で食事をしたい生徒が、必然的にやって来るのだ。

もちろん、その場で好きな飲み物をチョイスできる利点もある。

横のテーブルにいた連中がいなくなると、少し離れた場所に篠山の姿が見えた。

「一葉さ、B組に親しい娘いる？」

優子が訊いた。

「いたら篠山の事もっと情報収集できてるよ」

一葉はそう言っぺットボトルのお茶を口にした。

優子も何度か篠山に声を掛けられて話しているが、実際彼がどんな男なのかはよく判らなかった。

「ここ、いい？」

声を掛けられて優子と一葉が見上げると、忍が立っていた。

な、なんでここで？

「いいよ」と言ったのは一葉だ。

忍は優子の隣に腰掛けると、割り箸を小気味よい音で割る。

正面にいる一葉が気になって、優子は忍に話しかけられない。

忍は天ぷらうどんを一口啜ると

「一葉は知ってるんだろ？」

「な、何を？」

「前に優子をつけてたじゃないか」

「えっ、き、気付いてたの？」

「ああ、一応ね」

忍はそう言って再びうどんを口へ運ぶ。

優子は思わず忍を振り返った。

な、なんで言わなかったのよ。あたしは全然気付かなかったのに。

「別に無理に隠す事でもないし、わざわざ言う事でもないからな」

忍は視線を食事に向けたまま言った。もちろん、一葉に向って。

「うん、それは判ってる。あたしも別に誰にも話してないし。あたし自身が気になっただけ」

なによ、二人で意気投合して。あたしと高森の事なのにおかしくない？ それって、おかしくない？

「で、二人は結局付き合ってるわけ？」

一葉、調子に乗りすぎだよ。

忍は冷たい水を一口飲むと、チラリと優子を見て

「さあ、それはどうかな？」

「へえ、二人は付き合ってるわけじゃないの？」

えっ、やっぱりあたしたち付き合ってるわけじゃないの？

しかし、今の声が自分たちの後ろから聞こえた事に気づく。

優子と忍は振り返り、一葉は視線を上げた。

そこには篠山雄二郎が立っていた。

忍は彼の姿をマジマジと見上げると、少し不安げに、いかにも自信なさそうに眉を潜める。

「おまえ、雄二郎か？」

それを聞いた篠山は「やっぱり、忍か」

二人は本人だと確認し合うと、お互いに何度も肩や腕を叩きあつて笑った。

「ちらつと見た時からそうじゃないかと思ってたんだ」

「B組の転校生って、お前か。全然判んなかったよ」

転校生だった篠山は小学校3年生の時に半年間忍と同じクラスで過ごした。

その後彼は再び転校の為、遠くへ行った。

みんなに好かれようとあらゆる努力をしていた忍と自由奔放な篠山は、学校では全く相反した立場にいた。

しかし、何故か二人は気が合った。

心の中の何処かに同じ匂いを感じたのかも知れない。

それは微かな孤独と、僅かな物悲しさ……

だが篠山は喧嘩っ早い為、転校早々クラスでトラブルを起こした。止めに入った忍も何度か彼に殴られ、そのうち何回かは殴り返している。

しかしそんな篠山の校内での暴走を止められるのは、何時の間にか忍だけになっていた。

型破りで自由な篠山雄二郎の姿を、忍は心の何処かで羨ましいと思った。

誰からも好かれ、尚且つ行動力のある忍を、篠山も密かに羨んでいた。

そんな二人は、お互いを認めていたのかもしれない。

こ、この金髪男と高森が友達？

優子には俄かに信じがたい事実だったが、一緒にいた一葉には美男二人の輝かしい姿だけが瞳に焼きつくほどに印象的だった。

## 第53話

天窓から入る陽差と水銀灯の緩い明かりが全てを照らし出し、通路のドアを開けた瞬間、独特の不慣れな匂いが彼女を迎える。

木の香りとゴムが混ざったような、ビニールレザーにも似た匂い。優子は、放課後珍しく体育館を覗いていた。

二階の校舎通路から入ってギャラリ通路の柵越しに見下ろすと、直ぐ下ではバレー部が練習している。

手すりに両手を着いて視線を横に動かすと、体育館中央がバスケット部の練習コートになっていた。

部活の際、体育館はネットで3分割され、バレー部、バスケット部、体操部が分けて使う。時々バドミントンや卓球部も使っているが、バレーバスケット部以外は週決で変わるらしい。

もちろん、優子には詳しいローションなんて解らない。

彼女はあえて中央へは足を運ばずに、端の方からバスケット部の練習を眺めた。

ネット越しになるので、尚更見難いが、あまり存在が目立つのも嫌で、バスケット部の真上には近づけない。

それに、中央には女子バスケットの娘が二人、休憩がてらに男子を見下ろしている。

忍がボールを取ったのを見て、優子は反射的に目で追った。

奥のゴールへ走る彼の姿が防球ネット越しに、コマ送りの映像のように細切れに動いて見えた。

忍がスリーポイントを打ち込んだ所で、笛が鳴って休憩に入る。ちょうど見学していた女バスの連中も下へ降りてゆく。

それを目で追っていると、何時の間にか下のコートに忍の姿が見えなくなっていた。

あ、あれ？ 何処いったんだろ……外に出たのか？  
すると背後に気配を感じると同時に声がした。

「よお、珍しいな。優子が見に来るなんて」  
忍がすぐ後にいた。

「う、うん……」

うわ、あたしに気付いてたのか？

「どうしたの？ 何か急な話とか？」

「べ、別にそう言うわけじゃないんだけど」

優子がそう言って手すりに背を着けると、忍は彼女の正面に立って壁に寄りかかった。

正面に向き合って話す事はあまり無いので、彼女は思わず俯き加減で視線を泳がせる。

天窓から注ぐ光の柱が、彼の身体の左側だけを細く照らして、その情景に優子は思わず胸の奥がピリピリと痺れる感じを受けた。

「し、篠山って何時の友達？」

「ああ、小学校3年の時にちよつと」

忍は彼との経緯を簡単に話して聞かせると

「どうして？ 篠山の事気に入った？」

な、なんでそういう言い方するかなあ。それに、その逆だつてば。

「そんなわけ無いじゃん」

「優子こそ、なんで雄二郎の事知ってたの？」

うわっ、そうだよね……ふふ、気になる？

しかし、忍は直ぐに「まあ、別にいいけど」

な、なんで？ 何で別にいいの？

「いや、あの、仮登校日に廊下でぶつかりそうになって……」

優子も篠山との経緯を話した。そして、彼が使う駅が自分たちと一緒にだつて事も。

「ああ、そんなんだ」

忍は嬉しそうに微笑んだ。

「あれ？ 忍は何処行つた？」

下のコートからそんな声が微かに聞こえると、忍は小走りに通路

を真ん中まで移動して

「おお、今降りるから」

「何やってんだ？」

「ああ、ちよつとな。直ぐ降りる」

忍はコートの間と言葉を交わすと、咄嗟に屈んだ優子の前まで駆け足で戻って来た。

「今度の土曜日、映画でも行こうよ」

「えっ、う、うん」

「じゃあな」

そう言つて2、3歩駆けて再び彼は振り返る。

「雄二郎はさ、基本イイ奴だから心配しなくてもお前に手は出さないさ」

忍は軽く手を上げると、再び駆け出して階段の在る先へ姿を消した。

き、基本つて何？

手すりの隙間から下を覗くと、彼が直ぐに走って来るのが見えて、仲間と共にコートへ散って行った。

4時過ぎだと言うのに、外はもう暮色で西の空には雲に隠れた夕陽が僅かに空を染めていた。

優子はひとり校門を出て駅へ向う。

最近比以前に比べても一葉などと一緒に帰る事が多いが、それでも何となく一人の時はあるし、それをなんとも感じないのは今も変わらなかった。

駅の入り口に数人の高校生の姿が見える。

女子は優子と同じ制服だが、男子はまったく知らない制服を着ている。



階段の脇に股を広げてしゃがむ連中の姿は、どうにも威圧感がある。通る人にはいい気分ではない。

それでもよく見る光景なので、優子もさり気なくその前を通ろうとした。

「おい、あの女じゃね」

「ああ、かなりたいした事ねえじゃん」

そんな話し声と共に嘲るような笑い声が聞こえた。

なにになに……まったく、こういう連中って不愉快なのよね。

それでも、優子の視線は駅の階段。彼らと目を合わせるのは危険だと知っている。

「五十嵐優子」

三人の男の誰かがそう言った。

優子も思わず振り返る。

「あんた、五十嵐優子なんだ」

三人の真ん中男だった。

「ほら、やっぱりそうだろ」

「意外とブスじゃね？」

「高森忍って、趣味変わってるらしいからさ」

三人が交互にそんな会話を交わしている。

な、なにこいつら。あたしに絡んでるの？

足を止めた優子の前で、三人の男はゆっくりと立ち上がった。

「なあ、俺たちと遊ばない？」

左の男が優子の腕に手を伸ばしたので、彼女は反射的に振り払った。

「あれえ？　なんだよ。内気でシヨボーイから楽勝だって言ったの、誰だ？」

「千賀子じゃねの？」

誰よ、チカコって？　あたし知らないよ。

「いいじゃん、ちよつとぐらい遊んでくれたってさ。若いうちにいろんな経験積んでおいた方がよくね？」

今度は右端の男が優子の腕を掴もうとして、それも払いのける。しかし、三人は確実に優子を階段の上り口から遠ざけてゆく。

な、なに？　もしかしてあたし超ピンチってやつ？　こいつら何？　高森を知ってるの？　ていうか、あの女は何？

男の後ろに視線を向けると、最初からいた女子2人はずっと同じ位置に立ったままこちらを見ている。

どう考えてもこの事態に関係無くはないだろう。

優子は暮色の空の下で、できるだけ彼女らの容姿を記憶した。

「ちよと、向こうに行こうよ」

階段の上り口は何時の間にか遙か遠く見えた。

それは、実際の距離だけでなく、危機的状況から来る距離だ。

「ちよつと、やめてください！」

優子は三人の手を何度も払いのけた。

線路沿いのフェンス横にある物置きの壁に優子の身体は追い詰められていた。

なんかあたし超ヤバくない？　どうしよう……ここからどうやって逃げよう……

## 第54話

優子は線路沿いのフェンス横にある物置きの壁に身体を押し付けられた。

どう考えても横に飛び出て逃げ出す隙はなさそうだった。

優子はカバンの中の携帯電話を掴もうとしたが、逆にその右腕を思い切り掴まれた。

イッタアイツ

しかし、彼女は声に出さなかった。代わりに

「止めて下さい！」

そう言って、男を睨んだ。

超ヤバイよ。あたし、やられちゃうの？

優子の脳裏に一瞬安西の姿が浮かんだ。

安西もこんな目に遭ったのだろうか……いや、もしかしてもっと恐ろしい目に遭ったのかもしれない。

中学の頃の安西は知らない。それでもあれだけ毅然とした彼女の事だ。何があっても誰にも屈しないだろう。

そう考えると、優子の心にはほんの少しだけ勇気が湧いた。

彼女は思い切り男の手を振り払うと、一か八か横に飛び出した。

しかし、残念ながら優子の運動神経はさほどよくは無い。

一瞬だけ男と距離が離れる気がしたが、直ぐに端の男に肩を掴まれると、そのまま物置の影に連れて行かれそうになった。

やっぱ、ダメじゃん。

その時パツと一瞬、周囲の景色が白い閃光に包まれた。何かが強く光って三人の男は振り返る。

「ちよつと！ あんたたち、そこでなにやってるの？」

優子は何が起こったのか判らなかったが、その声が何処かで聞き覚えのある誰かだという事は判った。

「離しなさいよ。今写メ撮ったよ。警察呼ぶよ」

三人の男が僅かにバラけると、少し離れた場所に声の主が立っている。

優子は正面から光を浴びたので、目が眩んでよく見えなかったが、視線の先には間も無くその姿が浮かんた。

「あ、安西……」

「優子？」

安西は誰かが絡まれているのを見て止めただけで、それが優子だとは知らなかった。

「おい、携帯取り上げろ」

三人のうち二人が素早く安西に駆け寄って掴みかかった。

「ちよつと、離しなさいよ」

二人がかりでは、安西も身動きとれない。

携帯を取り上げようを腕を掴まれ、もう一人の男は彼女の髪の毛を掴んだ。

「ほら、さつさと携帯離せって」

「やめてよ。離すか、バァカ」

「指折っちまうぜ」

男の一人は、力ずくで安西の指から携帯を剥ぎ取ろうとする。しかし、安西は携帯を離さなかった。

直ぐ先で安西が揉みくちにされながら、堪えている。

「安西！」

優子が駆け寄ろうとするが、残った一人が立ちはだかる。

「彼女は関係ないでしょ」

「写メなんかとられたら、洒落になんねえし」

男は優子に再び詰め寄ると

「どうせ女二人じゃ、何もできねえよ」

そう言つて気持ちの悪い顔で笑った。

坊主頭で眉は薄く、左耳に二つもピアスをしている。

「何が目的なの？」

「さあね」

再び男は優子に近づく。彼女は反射的に後ろへ下がった。

これって、やっぱり引き続きピンチ？

「女二人って？」

その時、男の背後で再び聞き覚えのある、誰かの声。

優子が男越しに覗くと、そこには篠山が笑っていた。

見方よっては爽やかだが、優子にとっては何だか気の抜けるような微笑。

さらにその後には、アスファルトに這いつくばってピクピクしている男が二人見えた。

既に篠山にやられたのだ。

その場にしゃがみ込んだ安西は無事のようにだった。

「篠山……」

優子は思わず安堵の笑みを零した。

優子の前の男が、不意をつこうと振り返りざまに篠山に飛び掛る。

「てめえ、誰だよ」

優子は篠山の危機を感じて、一瞬息を呑んだ……

が、篠山はスルリとそれをかわし脇腹に容赦の無い蹴りを一発、

そのまま顔面を二発。

ボクサーのような綺麗なワン・ツウだ。

そして再びボディーに膝蹴りを喰らわす。

「別に、普通の友達だけだ」

篠山が手足を止めると、男は崩れるように倒れた。

な、なに、コイツ。漫画みたいに強いじゃん。

優子は一瞬篠山に見入るが、直ぐ我に帰ると急いで安西に駆け寄る。

「大丈夫？」

「だから忍に関わるなら気をつけろって言ったじゃん」

そ、そんなの知るか。こんなリアルな出来事だなんて思わないよ。

「で、でも。コレってそうなの？」

優子は思い出したように、駅の階段入り口にいたはずの女子を探すが、もう何処にも彼女たちの姿は見えなかった。

「何で安西がこんな時間に？」

三人は駅のホームに降りて同時に息をつくと、珍しく優子が先に言葉を発する。

「手芸部の部長になっちゃってさ。今日は引き継ぎがあつたのよ。まさか男に絡まれているのが優子とはね」

安西はわざと大きく溜息をつく

「そうと知ってれば、知らん顔して通り過ぎたのに。ああ、損した」

なつ、ムカツク。でも、携帯は離さないでくれたじゃん。

「で、でも、ありがとう。証拠の携帯離さないでくれてさ」

「バツカね。落としたら壊れるでしょ。だから離したくなかっただけじゃん」

む、ムカツク。超ムカツク！ マジ、ムカツクっ！

しかし、それが本心でない事は、もちろん優子も判っていた。

「二人共凄いなだな」

二人の横で、篠山が他人事ひとじのように言った。

まるで、何も無かったかのような笑顔だ。

というか、あんたが一番凄いなと思うんだけど……

「し、篠山はどうしてこんな時間に？」

「ああ、転入試験の補習でさ」

はあ？ そんなの聞いたこと無いんだけど…… 転入試験に補習なんてあるか？ 普通は転入できないんじゃない？……

「ところで、この人誰よ？ もしかして隣のクラスの？」

安西が怪訝に篠山を見て言った。

優子が紹介しようとするが、篠山は握手を求めるように右手を出

して

「俺、B組の篠山雄二郎。B型。ヨロシク」

なるほど、B型なのね。言われて見ればお気楽か……ていうか、血液型なんて誰も聞いてないって。

安西は篠山の差し出した手を一瞬眺めたが、軽く彼の顔を見上げると

「さっきは有難う、助かったわ。あなた、凄く強いよね」

そう言って、篠山の手を掴む。

そうだ。篠山ってめちゃくちゃ喧嘩慣れしてるよ。やっぱ、元ヤン？

「まあ、それぐらいしか取り得がないし」

篠山がそう返すと、二人は思わず笑顔を交わした。

優子は、そんな安西の笑顔を始めて見た気がした。

安堵に満ちて、少し照れたような優しい笑顔だった。

ていうか、安西……あたしが助けてあげた時はお礼が言えなくて、コイツにはそんな笑顔で言えちゃうのね……

## 第55話

「なあ、夕飯ウチで食わない？」

土曜日、優子と忍は銀座マリオンに映画を観に行った帰り、電車の中で揺られていた。

「えっ？ ゆ、夕飯？」

「ああ、たまにはいいだろ？ まあ、ウチのお袋の料理は、家庭的な感じはあまりないけど」

中間調査が終わった日、忍は再び優子の家へ来た。彼女は忍にオムライスを作って食べさせた。

それは優子の得意料理の一つだが、ごく一般的なものだ。

それでも手料理と言うのは各家庭で独特の味付けがあったりして、他人には新鮮に感じたりする。

忍の母親の料理はレストランのような安堵な味付けを得意とする。だから余計、ちよっぴり癖の在る優子の料理に家庭感を感じるのかもしれない。

「で、でも、急にお邪魔しちゃ……」

「大丈夫さ。ウチにはお袋しかないし、ほとんど顔だつて合わせないよ」

夕飯なのに、顔を合わせないって……ああ、そうか。高森は何時も独りで食べるんだっけ。

「うん……」

優子は小さく頷いた。

既に、緊張から来る動悸が始まっていた。

大きな檜の門を潜ると玄関までの石畳が続いていた。

両脇は綺麗な玉砂利で、その上に突き出た小さなランプが石畳とその周囲を転々と照らしている。



明るい時にこの家の前をあまり通らない優子は、忍の家の詳細な姿を知らなかった。

家の回りは高い垣根と塀で覆われているので、平屋作りの家は外からほとんど見えない。

麻布に在る料亭のような、大きな引き戸を開けて玄関に入る。

靴を脱ぐ上がり口の先に、年配の女性が立っていた。

「いらつしゃい」

そう言つて微笑む女性は、十中八九忍の母親だろうと優子は感じながら頭を下げる。

「こ、こんばんは。は、はじめまして」

「こんばんは」

そう返した忍の母親は

「お帰りなさい」と忍の方を向く。

優しそうな笑顔だが、何となく旅館の女将のようだと、優子は感じた。

「ただいま」

「珍しいのね、忍さんがお友達を連れてくるなんて」

優子は二人の会話を聴きながら、聞こえないふりをした。

し、忍さん？ 親子なのに『さん』付け？ 確かに生みの親じゃないけどさ……

優子は忍と一緒にキッチンまで歩く。

洋風のキッチンテーブルに、装飾のある背もたれの高い椅子。

家の造りは純和風だが、所々に洋風の匂いがする大正時代のような雰囲気は、何処かで見覚えがある。

なんか、はいからさんが通る。みたい……

忍と向かい合わせに座るが、テーブルの幅が広いので妙に彼が遠くにいる。

と、遠くない？ 何だか向かいの高森が遠くない？

「俺、優子の隣に اینجاか？」

優子の不安な視線を感じたのか、忍はそう言つて笑った。

「あ、大丈夫よ、別に」

何が大丈夫なんだよ。

母親はほとんど料理を運んでくる。

どうやら今晚は中華のようだ。

これって、まさかフカヒレ？

優子は最初に運ばれたスープを覗き込む。

「食べよう」

忍に促されて、優子は小さな声で「いただきます」と言った。

その後に運ばれてきたマーボやエビチリは解るが、中央に置かれた大皿に乗る鳥を薄く切った料理に優子はいやあんな否応無く視線が行く。

「北京ダック？ これって北京ダックか？ 家の夕飯に出るか？ 普通。」

夕飯の最中、料理を運ぶ以外で忍の母親が顔を出す事は無かったし、もちろん同じテーブルには一度も着く事も無かった。

まるで給仕さんのようだと思つてしまった。

確かに終始笑顔で愛想はいいのだが、やっぱり母親の匂いはしない。

何故そう感じるのか、優子は考えていた。

母性……そう、母性の愛を感じないのかもしれない。義務感やサ―ビス精神から来る類の笑顔なのだと思つた。

食事の後、忍に促されて優子は縁側の長い廊下を歩いた。

ガラス戸の向こうには間接照明で照らされる小さな庭園と池がみえる。

廊下の突き当たりのドアを開けて、忍は優子を促す。

彼女は少しだけ躊躇した。

男の子の部屋なんて、弟の直樹の部屋以外に入つた事はない。

入つた瞬間、予想通り爽やかなライムの香りがした。彼のイメージ通りだ。

これってお香？ コロン？ それとも高森本人の匂い？

部屋の中は妙に片付いて、直樹の部屋とは大分雰囲気は違っていた。タバコの臭いもしない。

弟の部屋にもベッドは在るのに、何だかクラスメイトのベッドを目の当たりにするのは不思議な気分だ。

この部屋の中には、高森忍のプライベートがギッシリと詰まっている。

優子はあまりジロジロ見てはいけないと思いますが、周囲を盗み見る。

「座れば？」

「う、うん」

ていうか、何処に？ テーブルのどっち側に座ろうか……まさかベッドについてわけにはいかないよね。それ、ちょっと危ないゾーン？

優子は小鼻が膨れるのを堪えながら、テーブルを回りこんでとりあえず窓際にペタリと腰を下ろした。

意味も無く、今日着けている下着はどんなものだったか、半ば反射的に記憶を巡らせた。

## 第55話（後書き）

申し訳ございません…

多忙の為、次回の更新は週明けになると思います。

## 第56話

優子は低い視線から、忍の部屋を軽く見回した。

もつとマジマジと眺めたいが、なかなかそんなマネはできない。  
大きな本棚には小説とか新書の学術的な書籍などがビッシリと入っている。

あたしの本棚とは大違いだよ。あれ、全部読んだのかな。

逆に、漫画本は無いのかと視線を巡らすが、何処にもそれらしき物はない。

「高森って、漫画とか読まないの？」

いきなりそんな話題かよ。

「ああ、押入れに在るよ」

自分のベッドに軽く腰を下ろした忍は、直ぐに立ち上がって押入れの片側の戸をあけて見せた。

下の段に小さな本棚が在って、漫画の単行本が並んでいる。

「安心した？」

忍は戸を閉めながら、そう言って笑う。

「えっ？ う、うん。漫画も読むんだね」

ドアが外からノックされて、忍が応えたと母親がコーヒーを運んできた。

それらをテーブルに乗せる給仕のような母親に、優子は作り笑顔で軽く頭を下げる。

忍の母親は、柔らかに微笑むと

「どうぞ、ごゆっくり」

優子にそう言って、部屋を出て行った。

優子は忍をチラリと見る。

母親との関係は、想像以上におかしなものとして彼女の目に映った。

「学校でさ、みんなと話が合わないだろ」

母親がドアを閉め終わると、忍は先ほどの続きを話し始めた。

「みんなと？」

「漫画とか、アイドル雑誌とかさ。そう言つの見てないと友達と話が弾まないじゃん」

「そ、そう？」

そんな事考えて本とか買った事ないよ。やっぱり、高森もちよつと変わってる？ でも確かに、こんな難しい本を読んでるヤツなんて、なかなか高校生にはいないよね。

「ああ、コーヒー、いや優子のはココアにしてもらったよ。冷めないうちに飲もう」

忍はそう言いながら、今度は彼も床に腰掛ける。

優子はココアにミルクと砂糖を入れると、カップにそつと口を着けた。

「この前、篠山さんに助けられちゃった」

「雄二郎に？」

「学校の駅前で変なのに絡まれてさ……」

優子はこの前の出来事を簡単に話した。

黙っておこうと思ったが、篠山から話を通るかもしれないの言っておいた方がいいだろうと思ったのだ。

ただ、女生徒がいた事は話さなかった。

余計な心配はかけたくない。

「そうか……近くに誰かいなかった？」

「だ、誰かって？」

「いや、いいんだ。別に」

忍はコーヒーを口にする

「雄二郎は意外といいヤツだろ」

「ま、まあね……意外とね」

優子は思わず苦笑した。

「それから……その時安西も助けてくれたよ」

「安西が？」

それも言っておいた方がいいと思った。彼女が苦手だからと言っても、やはり感謝の気持ちはある。

相手を知らずに助けた事自体、彼女には普段見せない確かな正義感があるのだ。

忍は身体をズラしてベッドに寄りかかると

「そっか……」

そう言っただけに笑う。

それだけ？ 安西に意外な正義感が在るのを高森は知ってるんだ。そうだよ、きっとクラスの誰も知らない安西を、高森は知ってるのよね。

「安西は何か言ってた？」

「えっ、何かって？」

優子には忍の意味深な問い掛けが判らない。

「何処の学校の連中だった？ 優子に絡んだヤツら」

「判らない……この辺では見ない制服だったよ」

「たぶん、吉祥高校かも」

忍は僅かに天井を見上げた。

学校名は聞いたことが在る。しかし、他校と全く交流の無い優子には、その学校の制服を思い描く事はできなかった。

「何で吉祥？」

「前に……ちよつとあつてさ。トラぶった人と親しい連中が吉祥高校なんだ」

「トラぶったって？」

「そのうち話すよ」

忍はそう言っただけで優しく笑うと、コーヒークップを手を取った。何だかその笑顔につられて、優子はそれ以上訊かなかった。

「本当に、送らなくて大丈夫？」

「うん。だって直ぐそこじゃん」

優子は結局何も無いまま忍の部屋を後にした。

長い廊下を歩いて玄関を出ると、大きな門扉まで来た。帰りの際は、母親の姿は何処にも見かけなかった。

まるで忍が独りで住んでいるようで、この家屋は優子の家のように人の気配で満たされてはいない。

門の外まで見送りに出て来た忍が笑顔で手をあげる。

「じゃあ、おやすみ」

「う、うん。お、おやすみ」

優子は小さく手を振ると、頬が熱くなるのを感じて少し足早に歩き出した。

はあ……なんか、変にドキドキしたよ。何も無かった……でも、何かあっても困るけど……でも、キスぐらいはいいのに……

空を見上げると、頭上に満月が輝いていた。

岩群青のような雲が浮かぶ沈黙した景色は、まるで時間が停まっているようだ。

彼女は通り道の公園の横まで来た時に、ふと視線を止める。

小さな公園のベンチに直樹と舞衣が座っているのが、僅かな水銀灯に照らされて見えた。

何かを話しながら笑みを浮かべる2人の肩と肩の間には、僅かな空間がある。

優子は何故かその隙間に安堵した。

横に佐助がいる所を見ると、散歩がてら家を出たのだらう。

そう言えば、この頃直樹は土曜日になると夕飯の後などに佐助の散歩に行っている。

彼は、食後の運動などと言っていたが……

そう言う事か。アイツもよくやるよ。

優子は自然にこぼれる笑顔で2人を見ると、声をかけるでも無く素知らぬ顔で通り過ぎた。



相変わらず時を止めるような月影が、辺りを静かに照らしていた。

## 第57話

11月も下旬になると、朝に頬を叩く風がいつそう冷たく感じるようになり、駅までの徒歩がやけに遠く感じるようになる。

それでも優子は、玄関から出た瞬間の張り詰めたような冷たい空気が少しだけ好きだった。

暫く経つとやっぱりただ寒いだけなのだが、家を出た一瞬の冷たい風は何処か清楚で、自分の心までもがちょっぴり清められる気がする。

\* \* \*

優子は一葉と学食へ行った帰り、二つの校舎を繋ぐ渡り廊下で一人の女生徒とすれ違う。

一瞬自分に視線が刺さった気がした。

あの女、前に駅で絡まれた時に一緒にいた奴。のような気もするんだけど……

既に優子の記憶は朧になっていた。

優子は振り返って彼女の後姿を見つめるが、やはり今ひとつ確信が持てなかった。

あの日他校の男子生徒に襲われた事は一葉にも話していない。

安西も篠山もその辺はおそらく誰にも言わないだろうと、根拠の無い確信があった。

以前なら想像するだけで面倒くさそうな出来事が、今は優子に降りかかってくる。

しかし、実際その場に立ってみるとどうと言う事はない。

その証拠に、彼女はあまり深くは考えていなかった。

いろいろ気になる事は多いが、それを常時考えるような事はしないのだ。

それは優子の単純さなのか、十代である為の柔軟性なのかは判らない。

少し先で、隣にいない優子に気付いた一葉が振り返る。

「どうしたの？ 優子」

「うっん、何でもない」

彼女は小走りに一葉に追いついた。

5時間目が始まる直前、教室のドアから篠山の顔が覗いた。優子は何だか久しぶりに彼の姿を見た気がする。

それに気付いた忍も軽く手をあげたが、立ち上がったのは安西ひとみだった。

手には数学の教科書。

な、なんで？ どうして安西が篠山に教科書貸してるの？

安西に手渡された教科書を手に篠山は頭をかく仕草をしている。いかにも安西に何かを言われている様子だ。

安西が誰かに教科書貸すの、初めて見た。

「ねえねえ、安西が篠山に教科書かしてるよ」

口の中で飴玉を転がしながら一葉が言った。

「う、うん……」

優子は頷く事しか出来ない。

な、何かあったの？ あの2人。どうしちゃったんだろ。

「あああ、今度はあたしが安西に睨まれるのかな」

一葉はそう言って、座っていた優子の机からボンと足を着いた。

「えっ？ どうして一葉が睨まれるの？」

「バカねえ、あたしだって篠山ちよっと狙ってるよ。優子と並ぶにはそれしかないじゃん」

な、なんであたしに対抗すんのさ。ていうか、そんな理由で

相手選ぶなよ。

「そ、そうなの？」

「うん」

一葉が明るく応える。

それが冗談なのか本気なのか、優子には判別できなかった。

それにしても、篠山と安西……普通だったら教科書なんて、昔なじみの忍に借りるのが自然の姿だろう。

もしくはやっぱり、この学校で最初に知り合った優子。一度貸している事もあるし。

それなのに安西に教科書を借りるというのは、やはり何か在るような気がした。

確かに安西が篠山と上手くいけば、忍とのしがらみも消えるかもしれない。

しかしそんな事よりも、何処か孤独な安西に微かな光が注いだような気がしたのは確かだ。

放課後、一葉は掃除当番だったので優子は先に独りで昇降口まで来ていた。

「一緒に帰ろうぜ」

背中から声が聞こえて優子が振り返ると、篠山が立っている。

まあ、暫くほっといたから、たまにはいいか。

しかし、その隣には安西ひとみの姿があった。

ゲッ、な、なんで安西が？ て、やっぱりそう言うことなの？

思わず視線を泳がせる優子に安西は

「無理やりよ。別にあんた達と帰りたいわけじゃないからね」

うわっ、別にそこまで言わなくてもさ……

何だか判らないうちに、優子は安西と篠山と一緒に駅まで歩いた。

三人は違和感丸出しで歩く。

「二人って、もしかして仲悪いの？」

篠山が何でもない事の様に明るく訊く。

「な、なんでよ」

安西が振り返った。

「いや、さつきから2人は会話しないからさ」

「別に仲良くないだけよ。話す事もないし」

あたしだって、別に話す事なんてないさ。ていうか、仲が悪  
いんじゃないくて、相性が悪いんだよ。

「じゃあさ、これから俺んちに来ない？ 二人共」

な、何でそうなるんだよ。どうして安西と二人で行くのか？

アンタと安西だけでいいじゃん。あたしいらないじゃん。

「な、何であたしも？」

優子はとりあえず声を出した。

「あれ？ 優子はこの後何か用事とかある？」

どうしてそんな訊き方するの？ そうそう用事のある日常な  
んて送ってないつつの。そんな訊き方されたら断れないじゃん。

「いや、別に……ないけど……」

「じゃあいいじゃん。暇なんですよ」

まるであたしが暇人みたいじゃん。

「あたしは塾があるから……」

安西が言葉を挟んだ。

チッ、自分だけ忙しい人生送ってると思うなよ。

「じゃあさ、また今度って事で……」

そう言いかけた優子の声に安西が声を被せる。

「だからちよつとだけね」

行くのか、安西……行きたいのか？ 今こそあたしを邪魔に  
しろよ。あたしは別に行きたくないんだよ。

## 第57話（後書き）

大変申し訳ございません。

多忙と体調不良の為、少々更新ペース遅れます。

それでも読んでくださる方々に大変感謝いたします。

## 第58話

優子は安西と篠山と一緒に何時もの駅で降りるが、出口は何時もとは別だ。

自分の家とは逆方向だが仕方がないと、半ば観念して歩く。

階段を下りて駅を出ると直ぐ、見慣れない風景の横にたい焼き屋が在った。

「あ、ここのだい焼きだろ？」

「そうよ、買ってく？」

安西……なに、気のきく事言ってるのさ。あんだ、直ぐ帰るんだろ。

安西と篠山の会話は、どう考えても以前に交わしている話しの延長線上にあった。

優子は周囲の景色を眺めながら、古びた小屋の前で二人が買い物するのを待った。

駅の反対側は特にロータリーなどは無く、三人は線路沿いに少し歩いて住宅街に入る。安西の家の方角とはまた逆方向だった。

駅からは少し歩くが、そうたいした距離ではない。しかし三人で歩く道のりは、優子にだけは遠く感じた。

左に一回、右に一回曲がって少し行くと、立ち並ぶ住宅の向こうに大きな屋根が見えた。

あ、あれってお母さんが言ってた大きな家かな。てことは、篠山の家はヤクザの近所？

家並みの向こうに見えた屋根が次第に近づくと、通り沿いの塀は何時の間にか統一されたモノに変わっている。

その塀の向こうは既に、大きな屋敷の敷地なのだ。

本当だ。お母さんが言ってた通り、嫌味なほどデカイよ。

優子はさり気なく塀の向こうに微かに見える建物の屋根を見つめた。

不意に篠山は立ち止って

「ここ」そう言った。

ここ？　ここって？　ここって、ここ？

目の前には大きな扉。電柱のような門柱には、確かに『篠山』の苗字が掲げて在る。

優子はさらにその上に視線が停まった。

なんだアレ……あれって、防犯カメラ？

大きなボックス型の屋外用監視カメラが、ゆっくりと首を振っている。

ハリウッドスターの豪邸紹介みたいなテレビ番組で、優子は同じようなものを観た気がする。

篠山は大きな扉の横にある小さな、と言っても普通の大きさのドアを開けて2人を促した。

優子は思わず安西と顔を見合わせる。

安西も篠山の家を見るのは初めてなのだろう。

し、篠山……あんたいったい何者？

「ずいぶん大きな家なのね。お父さんは何か事業でも？」

安西が訊く。

バカッ、どう考えても普通の大きさじゃないだろ。カタギの大きさじゃないって……安西、気付けよ。

優子が躊躇するのを横目に、安西は扉の敷居を跨いだ。

「ああ、親父の会社が成功してさ。昔住んでいたこの地に引っ越して来たってわけさ」

篠山はそう安西に微笑んでから

「どうしたの？　優子も入りなよ」

会社って何よ？　キャバクラのシノギか？　そ、それともまさかヘルスか？

「う、うん……」

優子は多少引き攣った笑顔を篠山に向けると、清水の舞台から飛び降りるような気分で、彼の家の敷居を跨ぐ。



こんな時になつて、直樹の言つた『売り飛ばされる』なんて言葉が頭を過つた。

いくらなんでも、それは無いよね……

「さあ、どうぞ」

篠山は二人の後に門を潜つて二人を奥へ促す。

門を抜けると芝生と玉砂利が敷かれた、大きな庭園が広がっている。

左右には石の大きな塘路。

左の奥には大きな池と何だか解らない岩のように見えるやたらと大きな庭石。

隕石でも落ちたのか？

安西は軽く辺りを見渡しながら歩くが、優子は思わずその景色に立ち止まる。

竹を連ねた仕切りの向こうには、テレビでしか見た事のないような大きな外車が停まっている。

あれって、リムジン？ ていうか、駅前の角曲がれるのか？

優子と安西は少し、いや暫く歩いて玄関へ辿り着いた。

ふと見ると、右の奥にも玄関のような物が在る。

優子がそれをジツと見つめていると、篠山が気付いて

「ああ、アレは親父専用なんだ」

「はあ？ お父さん専用の玄関？ 何だよそれ……」

「お、お父さん専用のが在るの？」

「ああ、親父は仕事に行くときと帰る時はあそこから出入りするんだ」

篠山はそう言つて笑つと

「ゴルフに行く時は、ここの玄関を使うけどね」

何それ？ 意味判んない。やっぱ普通じゃないよ。

「へ、へえ、そうなの……」

優子は不可解な気分で、とにかく笑つた。

安西が先に玄関の前に立つと、いきなり戸がガラリと開いた。

ま、まさか、じ、自動？

しかし、さすがにそんなわけは無い。

妙に背の高い女性が出てきて、思わず安西も見上げる。

デカツ！ て、誰？ 女性SP？ 今時は女性もありえるよね。

戸の高さが180センチだとすると、それよりほんの少しだけ低い感じが……黒いミニスカートに白いフェイクファー、いや本物のファーのボレロを着ている。

モールのカットソーの胸はV字型に大きく開いていた。

「あら、お帰り」

背のデカイ女性がそう言って笑い、優子と安西に視線を這わせる。

「ああ、ただいま。姉さん、また出かけるの？」

「うん。ちよつとね」

僅かに篠山を見下ろす。もちろん、ヒールを脱げば篠山より少し背は低いのだろう。

ね、姉さん？ お姉さんなの？ デカくない？

優子は盗み見るように彼女を何度も横目で見上げた。

「あんまり遅くなるなよ」

「あんたに心配されたら、あたしも終わりだね」

石畳に小気味よくヒールが鳴る。

やたらに色気のある足取りを優子は視線で追ったが、安西の視線は家の中にあつた。

## 第59話

玄関の敷居を跨いで優子は思わず頭上を見上げた。

天上が高かった……6角形に組んだ小さな籐の傘を持つ照明が3つ釣り下がっていて、天窓から注ぐ明かりに浮かんでいた。

優子の部屋ほどある広い玄関の隅には、トラの剥製が置いてある。動物園では見かけるが、個人では剥製であってもそう簡単に入手出来る物ではない。

「ちよつと、アムールトラってワシントン条約で規制されてなかったっけ？ 剥製なんて作れないはずよ」

安西が篠山の肩を叩いた。

「ていうか安西……何だよアムールトラって……なんで、コレがアムールトラだって判るの？ あたしにはトラなんてみんな同じに見えるつつうの。普通はトラで括るだろう……だいたいアムールって何処よ。アンタの知識もおかしいって。」

「ああ、それはここの建築祝いに貰ったみたいでさ。買ったわけじゃないんだよ」

篠山はそう言って笑うと

「親父が寅年でさ」

とりあえず優子は、二人の会話を素通りさせた。

トラの剥製くれる知人て何者……？

廊下を二度曲がると庭が見える廊下が続いていた。庭が見渡せる長い廊下は純日本家屋の基本なのだ。

よく見ると、池の中央に踏み石が置いてあつて渡れるようになっている。

篠山が促すまま、優子と安西は二階に上がる階段まで来ていた。  
「あら珍しい。お友達連れ？」

三人の背中から声が聞こえる。

「ああ、ただいま母さん」

篠山がそう言いながら振り返ると、その先に人の姿が見えた。

和服？ 何で和服？ 極道の妻だから？

篠山が母さんと呼んだその女性は、黒地に丹頂鶴の舞った着物を纏っていた。

日本髪を結わえて背は高く、柔らかい物腰で立っている。

歳は優子の母親と変わらないくらいに見えるが、何処か修羅場を潜り抜けたような独特の臭いというか雰囲気醸し出す。

鼻筋がツンと高く通って、僅かに瞳が茶色い。しかし、優しい笑顔だ。

ていうか、外人？ いやハーフ？ じゃあ、篠山はクウオーター？

「ああ、学校の同級生。安西さんと五十嵐さん」

篠山は二人を母親に紹介した。

優子は俯き加減で小さな会釈をするが、安西は

「はじめまして。お邪魔してます」

そう言って頭を大きく下げる。

長い黒髪が背中て弧を描いてしまった。

おいおい、安西……超礼儀正しくない？

優子はいかにも自分が粗雑に映るような気がして、せめてもっと深く頭を下げればよかったと思った。

ビックリしたのは篠山雄二郎の部屋だけが完全な洋間だった事。

いや、おそらくあの姉の部屋も洋間だろう。あの姿に和室は想像できない。

二重サッシの外側は濃いブラウンだが、内側は白かった。

床一面のフローリングに、黒革のソファ。壁際には古いコカコーラの赤い冷蔵庫が置いて在る。

「うわっ、部屋に冷蔵庫？」

優子は自然に目に入るモノにいちいち驚く。

目の前に在る木目調のテーブル。その天板は中央がガラス面で、その中にジッポライターが売り物のように並んでいる。

やたら古びている物はベトナムジッポだろう。

「何でこんなに沢山ライター？」

優子が思わずテーブルを覗き込む。

「それ、俺のコレクションさ。ほとんどがビンテージや限定品なんだ」

「あんた、タバコ吸ってるの？」

安西が言葉を挟む。

「いや……まあ、人並みかな」

人並みってなんだよ……そんなにみんな吸ってるのか？ あっ、直樹も吸ってるか……

「ダメよ。これからは国際的にも喫煙者は肩身が狭くなるんだから」  
安西はそう言って、ソファのひとつに腰掛ける。

問題はそこじゃない？

「優子も座れば」

篠山に促されるが、彼女はここでも何処に座ろうか迷ってしまう。

安西の隣？ まさか篠山の隣は無いよね。

「ほら、なにモサツと立ってるの？ 座りなよ」

安西がそう言って自分位置を少しずらしたので、優子も仕方なくそこへ腰を下ろす。

篠山は壁に設置されている電話の受話器を手にとると

「飲み物何にする？」

「な、内線電話で注文？ ていうか、じゃあアノ冷蔵庫は何？」

篠山の家は一般庶民には驚く事ばかりだった。

優子から見れば忍の家も充分驚いたが、篠山の家はその次元を超えていた。

そして何より落ち着かない。

それは忍の部屋にいる時のドキドキ感とは違って、何だか自分が場違いな所にいるような、そんな気分だった。

「篠山の家って、何だか凄いね」

篠山の家を出た帰り道、優子は仕方なく安西と歩いていた。

「成功者の家って感じね」

安西はポツリと応える。

「や、やっぱ、あれかな……親分とかだからかな？」

「親分？」

「だって、アイツのお父さんヤクザの組長なんですよ」

優子は胸の内に据えかねていた事を思わず言った。

安西は意外なほど穏やかに笑うと

「昔はね。そうだったらしいよ」

「昔？」

「あんた知らなかったんだ。篠山のお父さんはシノテックの会長よ」

「シノテックって……格安パソコンの？」

「今は液晶テレビやブルーレイディスクもやってるし、今度携帯電話に手を出すらしいよ」

あ、安西チヨウ詳しすぎ……じゃあ篠山は、今はヤクザの子供じゃないんだ。ていうか、前はやっぱりそうだったんだ……

「なんか、凄いね……商才があるんだ。篠山のお父さん」

「ほら、大企業の幹部なんてみんな黒い繋がりがあるのが普通だから、有利なんですよ」

「有利？」

「だって、もともとその黒い側で権力があつたんだから」

それってどうなの？

しかし、優子はとりあえず篠山の家が現役のヤクザで無い事に安

堵した。それでもやっぱり、あまり来たくはないと思った。

## 第60話（前書き）

中間あらずじ

優子は忍に誘われるまま、その仲を特別なものへと変えていった。

そんな時に転校生に気に入られて付きまとわれる。

しかも、彼は忍の知り合いで、元ヤクザの息子？

優子の周りは、喧騒に満ちていた。



## 第60話

優子はバーバリーのマフラーを首に巻いて、学校指定のPコート  
を羽織った。

玄関を出た瞬間、吐いた息が白く凍った。

昨日とは次元の違った冷たい空気に思わず肩をすくめる。この冬  
一番の寒さだった。

12月に入り、今日から期末試験。

そしてもう直ぐ優子の誕生日でもある。正確には明後日。12月  
6日が彼女の十八才の誕生日だ。

試験の真っ只中に誕生日を迎える彼女の場合、翌日のテストの事  
で頭がイッパイで誕生日を堪能する余裕が無い。

母親は去年もケーキを用意はしてくれたが、それらを半ば義務的  
に食べたら後は勉強だ。

学年で真ん中をキープする為には、それなりに頑張らなければい  
けない。

中学の期末試験はもう少し後なので、直樹は優子以上に料理を堪  
能しているようだが……

そして試験が終わればもう学校は休みだ。

憂鬱な要素はまだ在る。

休みになったら、なかなか忍とは会えないかもしれないと優子は思  
っていた。

教室にいれば必ず彼が視界の何処かに入ってくる。

言葉を交わす機会もあるし、彼から誘われるチャンスも多い。何  
も無くても自然に存在する空間は何時も共有しているのだ。

しかし休みに入ったら……もちろん、忍はメールもくれるだろう  
し、何処かへ行こうとも誘って来るだろう。

しかし、それ以外は顔を合わせないのだ。

意味も無く彼の顔を見る事ができないし、自分の姿も彼の瞳には

映らない……

優子はそんな事を考えるのが嫌だった。

今までは学校が休みになればそれだけで嬉しかったはずなのに、何時の間にか忍の姿を見ない日は何だか物足りなくて、ちょっぴり淋しかったりする。

恋人同士なら……休みの日も毎日会っのかな……

優子は門扉を出てひとつ白い息を吐くと、何時ものように歩き出した。

「ねえ、高森は知ってるの？」

早々と試験が終わって帰り支度の中、一葉が優子に声をかけて来た。

「何が？」

「アンタの誕生日よ。もう直ぐでしょ」

それなんだよ。アイツ、あたしの誕生日知ってるのかなあ……でも、自分から言うのも変だよな。もっと前に言っておけばよかったのかな。

「さあ、知らない」

優子はサラリと応える。

「あたしがさり気なく言っただけよ。」

何処がさり気なくなんだよ。二日前にわざわざアンタが言ったら、何だかこんたんミエミエじゃない？ そんなの絶対イヤっ。

優子はカバンを手にして「い、いいよ別に」

さり気なく忍の姿に視線を送ると、彼は男友達と何やら盛り上がっていた。

アイツ、男連中と何楽しそうに話してるんだろ……

優子と一葉が教室の出口に向って動き出すと、忍はそれに気付いたらしく二人に軽く手を上げて見せた。

「何か、それらしい素振りとか見せた？」

階段を下りながら一葉が言った。

「素振りって？」

「だから、何か欲しい物ない。とか訊かれてない？」

全然訊かれてないよ……そんな気配があれば苦労しないって。

「別に、そんなのないよ」

「じゃあさ、やっぱ知らないんじゃない？」

「いいよ、知らなかったらそれで」

「あんたも素直じゃないね」

一葉はそう言って笑うと、軽く身体をぶつけてきた。

昇降口で安西を見かけた。

アイツ、篠山と待ち合わせだな。

優子はわざと素知らぬ振りでそこを通り過ぎる。もちろん、向こうも素知らぬ振りだ。

「ねえ、安西って本格的に篠山に乗り換えたの？」

昇降口を出てから、一葉が身体をくつつけて来た。

「何だよ？」

「だって今のアレ、どう考えても帰りの待ち合わせでしょ？」

「知らない。それに何よ、乗り換えたって」

「だって、ずっと高森忍に一途だったんでしょ？ 安西はさ」

「一途……そう……なのかな。でも、気の合う人って一人じゃないしさ。それに……高森と安西は一度別れちゃったわけだし」

優子は何となく無理に安西を庇うみたいで、何だかうなじがこそばゆかった。

「あれかな？ 優子にかなわないって思ったのかな？」

一葉は楽しそうに笑った。

えっ？ そ、そうなのか？ でも、そう言う事なのかな？

「まさかぁ。あの女があたしに叶わない事なんて無いじゃん」

優子は冗談っぽく笑って「まあ、笑顔はあたしが上かな」

「アンタ、安西の弱み握ったとか？」

「まさか。アイツ弱み見せないじゃん。どうせ篠山の押しが強かったんじゃない」

優子は、どうしてか零れそうな含み笑いを堪えて、空を仰いだ。

篠山という時の、安西のちょっぴり優しい笑みは、優子から見れば少し滑稽なのだ。

一葉は少々残念そうに「篠山って、変わり者だしね」

肩に掛けていたカバンを背中に背負い直した優子は

「安西も変わってるからちよっどいいのかもね」

一葉もカバンを背中に背負うと、ストラップをパチンと弾いて

「アンタと高森も充分変わってると思うけどね」

## 第61話

夕飯はケーキ。いや、ケーキ以外の料理だってもちろんあった。フライドチキンにお寿司。

18本のローソクに火を燈して部屋の明かりを消すと、食卓は淡いオレンジ色に染まる。

父親の孝之助が、自慢のクラシックハーヴで短いハッピーバースデーを奏でる。

この時ばかりは、彼が家族からちよっぴり脚光を浴びるひと時だ。何処か懐かしく、何故か胸の奥がキュンツとする瞬間。

いろんな事があった十七歳が終わった……十八歳……ほんの少しだけ大人の仲間入り。

さり気なく男の子と出かけるようになった日常は、ふと思うと自動的に何処か現実離れしているが、重ねたデートは紛れも無く現実だ。

夏までは思いもしなかった日常。

少し大人になった自分には、これからどんな事が待っているのだろっ……

そんな思いが優子の心の中を通り過ぎる。

「姉ちゃん、早く火消せよ。俺、腹減ったよ」  
直樹が言った。

「まったく、人がせつかくちよっぴり感傷に浸ってるのに。」

優子は18本のローソクをほぼ一気に吹き消した。

みんなで拍手をすると、父親の孝之助がすかさず電気を点ける。この瞬間、何時もの食卓に帰る。

「優子も、もう18かあ」

孝之助が目を細めて、しみじみと言った。

「何だか小学校から変わらないわよね、この娘」

母親の杏子がそう言いながらケーキを一端テーブルから退ける。

小学から？　せめて中学頃からって言うてよ。ていうか、胸だつてちよつとは大きくなつたし、身長だつて伸びてるって……

「そんな事無いよ。あたしだつて、いろいろ成長してるんだから」

「そう言えば、最近ちよつと女っぽくなつたな」

孝之助は茶化すように言つて、軽い笑い声をたてた。

直樹はテーブルの料理を次々に口へ放り込む。

「まあ、姉ちゃんにとっては怒涛の年だったしな」

なんだよ怒涛つて？　確かに男の子とこんなに接近して日常を送るようになったのは初めてだけどさ……ていうか、アンタに言われたくない。

「何？　怒涛つて？」

杏子は少しテーブルに身を乗り出し、興味に満ちた視線を優子に送った。

何処か見透かしているような母親の視線……何も言つてはいないが、はたして何処まで知っているのだろうか。

お母さんは、何か気付いてるのかな……お父さんは全く知らないだろうな。あたしが高森とキスした事とか……

「な、何も無いよ。別に怒涛な事なんて無いんだから」

優子はそう言つてフライドチキンに齧りついた。

直樹はジュースを飲みながらまだケーキを食べている。

優子はあまりお腹をイッパイにしてしまつと眠くなるので、そこで部屋へ戻った。

明日の分のテスト勉強が残っている。

机の前に座つて息をつくつと、つい携帯電話を掴んで着信を確認する。

何も無い……そんなの着信ランプで直ぐ判るのに、わざわざ携帯を開いて確認する。

やっぱり一葉にそれとなく言ってもらえばよかったかな……

あたしの誕生日。

その時、携帯にメールが着信した。

き、来たっ！ て、何コレ……

着信は忍ではなかった。彼からの着信は液晶に名前の表示が出るのだ。

メールを開くと、篠山からバースデーメールが入っていた。

なんで篠山？ ていうか、どうしてアンタがあたしの誕生日知ってるのさ。意味ないんだよっ！

優子は思わず深い溜息をついて、仕方なく教科書を広げた。

ノートを広げてテストに出る箇所をチェックするが、どうにも身が入らない。

すると、再びメールの着信だ。

た、高森だ！

液晶に忍の名前が表示された。優子は急いでメールを開く。

『誕生日おめでとう！ 今、ちよつと時間ある？』

あるある、めちやくちゃ時間作るよっ

優子は思わず、主人を待ちわびたビーグル犬のようなスピードで返信してしまった。

しまった……何時も3分以上経ってから返信してたのに……

まあ、いいか。

再び返信が届く。駅前の公園で待ち合わせをする事になった。

忍は最初、裏の小さな公園を待ち合わせに選んだが、あそこは直樹が舞衣と会うのに使っている。

姉弟そろって同じ公園では、何だか情けない。

優子はジャージから急いで私服に着替える。一瞬下着をチェックする自分に、思わず呆れた。

下着は関係ないつつの……

そう思いながらも、結局お気に入りの物に着けかえる。

時計を見ると九時半を過ぎていた。

足音をけして素早く階段を下りると、玄関へ出る手前で母親に出

くわす。

「あ、ああ……ちょっと出かけてくるよ。直ぐ戻るから。勉強もあるしさ」

「こんな時間にミニスカートで？ 外寒いわよ」

「あ、そ、そうね。でもタイツ履いてるし……」

優子は思わず苦笑すると「コート着てるから、これで平気」

杏子はたたんだ洗濯物を抱えながら目を細めて笑う。

「ゆっくり出てらっしゃい。勉強なんて徹夜でもすれば何とかなるんでしょ」

「いや……徹夜はしたくないけど……」

「う、うん」

優子は玄関のドアを開けると小さな声で「行って来ます」  
父親には気付かれなかった。



## 第62話

小走りに国道へ出て、後は普通の歩調で歩きながら息を整える。息切れさせて彼と会うのはみつともないと思った。

普通に歩いているはずなのに、早い鼓動が収まらない。

ヤバイ。めちゃくちゃドキドキする。

優子は歩きながら、何度も深く息を吸った。

駅前の国道まで来て横断歩道を渡ればもうロータリーだ。その向こうに公園が在る。

水銀灯に照らされた公園に佇む人影が既に見えていた。

優子は忍の影を見て、久しぶりに緊張した。

横断歩道の信号が青に変わると、優子は思わず小走りに駆け出す。

ロータリーを横切って公園の入り口まで来ると、彼女の息使いに気付いた忍が振り返って軽く手を上げる。

優子は白い息を吐きながら自然に笑みを零した。

「そんなに急いでこなくても大丈夫だったのに」

彼女を見て忍が笑う。

だって、待ってるのが見えたらつい急いじゃうじゃん。

石畳の敷かれた公園の四方には木製のベンチが幾つも置かれている。

そのひとつに二人は腰掛けた。

肩と方の間には、やっぱり微妙な距離。

「これ、プレゼント」

忍が紙袋からそれを取り出して優子に差し出す。

彼女が異性からプレゼントを貰うのはコレが初めてだ。しかも、相手は高森忍。

心の準備はしていたが、胸の鼓動は再び跳ね上がる。

「あ、ありがとう……別に、よかったのに……」

「そんなわけにはいかないだろ。でも、危なく知らないまま通り過ぎるところだったよ」

や、やっぱり知らなかったのか？　じゃあ、一葉が？

「だ、誰かに訊いた？」

忍は鼻の頭を人差し指で軽く撫でると

「安西がさ……メールで教えてくれたよ」

「あ、安西が？」

「ああ……でも、コレで貸し借り無しだ。って言ってたけど。何？」

「えっ？　貸し借り？」

あれか？　学校裏サイトの時の一件か？

優子はわざと首を傾げて笑った「さあ……な、何かな？」

ベンチに座って何分過ぎただろうか……

二人はポツポツ話をしては短い沈黙の繰り返しだ。忍も少しだけ何時ものリズムでないような、そんな感じは優子にも判った。

ど、どうしよう……何だか何時もと違う雰囲気……これって、何だろう。

身体がわけも無く火照っていた。

冷たい夜の空気に微かに香る忍の爽やかな匂いに、優子は何時よりも何故か敏感に反応した。

電車が到着して、駅から人波が流れ出るのを背中で感じながら会話を続けるが、優子自身も何かを待っている。

な、なに……あたし何を待ってるの？　これ以上何を期待するのさ。

「そろそろ帰ったほうがいいかな？」

忍がそう言って立ち上がった。

「う、うん。そうだね。勉強しなきゃ」

優子もはにかんで立ち上がる。

「寒くないか？」

忍は自分が首に巻いた赤いフリースのマフラーを取ると、優子の首に巻いた。

よかったあ、マフラー巻いてくるの忘れて。

「あ、ありがとう……」

二人は静かに歩き出した。

駅から出て来た人の波は消え、穂のかに街路灯の明かりだけが辺りを照らし出す。

本屋の隣のレンタルショップの明かりだけが煌々と街の灯を残していた。

「今度また、映画行く？」

横断歩道を渡りながら忍が訊く。

「うん。いいよ」

「じゃあ、試験が終わったら」

「うん」

「少し先だけど、クリスマスはどうする？」

どうするって？ 何？ 何するの……？

「う、うん。どうしようか……」

「何処に行く？」

「う、うん。いいよ」

クリスマスって、普通何処行くの？

優子は唾を呑み込んだ。

「じゃあさ、考えておいて」

「えっ？ あたしが？」

「たまにはいいだろ。優子の行きたい所へ行こうよ」

そ、そんなの判んないよ……やっぱあれ？ デイズニート

ートか？ それともお台場？

「判った。じゃあ考えておくね」

歩きながらの方が少し話し易かった。が、しかしその分時間は早

く過ぎてゆく。

もう何時もの別れ道まで来ていた。

「マフラー有難う」

優子がそう言いながら自分の首に手を掛けると

「ああ、いいって。これはお前にやるよ」

忍は優子の手をそつと押さえた。

彼の冷たい指が優子の手を刺激して、低アンペアの電流のようにそれが全身に行き渡る。

その瞬間、彼の唇は優子の唇を捕らえた。

フレンチな一瞬のキス。

しかし、優子はあまり驚かなかった。何処かでこんな瞬間を待っていたのかもしれない。

鼻の奥にツンと広がる微かな甘い香りは、高森忍の唇の匂い……

伏せた視線を上げて、忍を見つめると

「あ、ありがとう」

忍は何時もの笑顔を優子に注いで

「じゃあ、また明日な」

そう言いながら少し後ろへ下がると、優子が手を振るのを確認してから踵を返して歩き出した。

はぁ……緊張した……

優子は自分も向きを変えてから、深く息を吐いた。

静寂した清らかな空気の中で、心の真ん中がジンと熱くなった。

## 第63話

低い灰色の空が頭上に広がり、今にも氷雨が零れ落ちそうな気配があった。

テストも今日を含めてあと二日。

優子は休みに入ったら忍とあまり会えない憂鬱から僅かながら開放されていた。

触れ合う身体の一部は、何日分もの彼を心に貯蓄できる事を知った。

その分また会いたくなるけれど……

しかしこの日、高森忍は学校に来なかった。

「高森どうしたんだろうね」

一葉が声をかけてきた「優子、何か知ってる？」

「ううん、知らないよ」

テストの日に休むなんて……昨日、寒空の下で待たせちゃったから、風邪でもひいたのかしら……

「昨日会えたの？」

「うん……夜に会った」

優子は昨夜の事を、ごく簡単に一葉に話して聞かせた。

「そう、よかったじゃん」

一葉はそう言って笑うと「やっぱりちゃんと知ってたんだね」

いや、知らなかったらしい。しかも、安西に救われちゃった

よ……

「いや……うん。そうだね」

優子は少し曖昧に応える。

「ねえねえ、何貰ったの？ 高森ん家ってけっこうお金持ちなんですよ」

一葉はそれが訊きたかったのだろう。興味深々だ。

「そ、そんなの、内緒だよ。それに、お金持ちなのは、親だよ」

「まあ、そうだけどさ」そう言つて一葉は

「昨日は、何でもなかった？ 彼」少し怪訝に言つ。

「別に、普通だったよ」

優子のほうが、よほどわけが判らない。

「でも変ね。高森が試験日に休むなんてさ……安西なら、何か知つてるかな？」

一葉は真顔で優子の机に寄りかかった。

「どうだろう……」

優子もチラリと安西を見る。

そうしているうちに、一時間目のテストが始まった。

優子は何度も忍の机に視線を向けたが、いないのは確かだ。いくら見つめたって変わりはない。

ホームルームの時に担任が高森の欠席を告げた。

今回のテストはついに一位の座を降りるのかと、僅かに教室はざわめいた。

女子の口からは、微かに心配の声が聞こえた。

しかし何故？ 優子の頭を疑問だけが過る。

今まで優子を知る限り、彼がテスト中に休んだ事はない。いや、普段でもほとんど病欠などないと記憶している。

もちろん、以前は彼の事など全然気にかけてはいなかったが、クラス委員の仕事をしていると欠席者に気を配る事も多いのだ。

考えても仕方ないよ……

優子は小さく息をついて、答案用紙に目を移した。

\* \* \*

三時間のテストが終わって優子は帰り支度をしていた。  
ふと人の気配を感じて顔を上げる。

「忍、何か言ってた？」

安西が目の前に立っていた。

「はあ？ どうして？」

昨日のアレの事か？

優子は笑顔を作って「あつ、昨日の事……ありがとう」

「そうじゃないってば」

安西は眉間にシワを寄せて、少し険しい表情をした。

「今日の事よ。忍、優子に何か言ってた？」

「今日？ な、何も」

優子はカバンのジッパーを閉めながら「風邪かな？」

「あんたって、ほんっとお気楽でのかに生きてるのね」

安西は髪を振って優子の前から立ち去ると、そのまま教室を出て行った。

なによ……なんであたしがお気楽？ それと高森の休みと何の関係があるのさ。

安西が教室から出たのを見て、一葉が寄って来た。

「どうしたの？ 久しぶりに安西になんか言われてたね」

「知らないよ。生理じゃないの？」

優子はそう言って立ち上がると「帰ろう」

駅で電車を待つ間のほんの少しの間、優子はやはり安西の言葉が気になっていた。

なんであたしがお気楽でのかんなのさ。確かに当たらずも遠からずだけどさ……それと、今日高森が休んだのと何の関係が在るって言うの？ 意味わかんない。

「優子、高森にメールしてみた？」

隣で一緒に電車を待つ一葉が言った。

「えっ、ま、まだしてない」

「してみなよ」

「うん、判ってるよ」

ホームに入る電車の騒音にかき消されながら、彼女は応えた。

優子は地元の駅で降りると直ぐに、忍宛にメールを打つ。

しかし、家に帰るまでに返信は無かった。

途中、直接彼の家に寄ってみようとも思ったが、結局真つ直ぐ自宅へ帰ってきてしまった。

近いからと言って、直ぐに家を訪れるのは何だか馴れ馴れしいよな気がした。

優子は部屋に上がってベッドに腰掛けると、暫くそのまま彼からの返信を待つ。

風邪、酷いのかな……あのお母さんはちゃんと看病してくれるのかしら。あたしたちの関係は、何処まで馴れ馴れしくできるんだろう。

優子は立ち上がると制服を脱いでジーンズに着替える。

一度ベッドに横になったが、とりあえず机に向って教科書を広げた。

ジャージではなくジーンズを履いたのは、何時でも外に出られるように。

優子は忍の家を見に行こうかと何度も思ったが、結局日が暮れるまで机に向っていた。



## 第64話

「忍、何処に行つてたの？」

目の前に忍が立っていた。

「ああ、悪い。ちよつとハワイまで用事でさ。急用だったんだ」

忍は何時のも爽やかな笑顔だ。黒髪がそよ風ではためいている。

何故か風景は真つ白に飛んで、優子自身も何処にいるのか判らない。

「急用つて……期末試験は？」

「一度ぐらい出なくても平気だろ。今までずっと一番だったんだ」

「それもそうね」

優子は何故か納得して笑った。

.....

.....

頬に冷たいモノを感じて優子は目を覚ました。

しばらく気が散つて手のつかなかった勉強も、二次関数を解き始めると不思議に集中できるようになった。

公式さえ頭に入れば、たいがいの問題は解ける。

ただ、応用問題の場合、どの数値を何処に当てはめるか間違えると、全く違う答えが出てしまう。

授業でチェックした応用問題を何度も繰り返し読み返す。

が、しかし……何時の間にか寝てしまっていた。

早い時間に勉強を始めると、何時もの事だが……

「ぎゃあっ」

慌てて顔を上げる。

うわあ、ヤバイ。教科書にヨダレが……

優子はティッシュを取り出して、教科書の開いたページをふき取

った。なんだか、ふやけてしまっている。  
ふと顔を上げると部屋の中は暗かった。

机は専用のスタンド照明が燈してあるので、暫く気付かなかった。  
外から入る陽の光は全く無くて、窓の外は漆黒だ。

立ち上がって部屋の照明を点けると、ガラス窓の中には部屋と自分  
がもうひとつ浮き上がる。

カーテンを掴んで窓の外を見ると、どの家も台所の電気が点いて  
いる時間で、何時もより住宅街が明るく見えた。

再び忍の事が頭を過る。

変な夢見た……高森は、明日は来るのかな……明日も来なか  
ったら、家に行ってみよう。

優子は行動予定を明日に先延ばしする事で、今日の不安を吹っ切  
ろうとした。

明日行こう……そう思う事で、今日はそのまま家にいようと思っ  
た。

後でもう一回メールしよう。

優子はそんな予定を頭の中で組み立てると、少しだけ気持ちが楽  
になった。

カーテンを閉めて机に向うと、再び数学の問題を解きだす。

その時、ガチャリと部屋のドアが開いた。

「姉ちゃん、タカノモリ開発がM&amp;M;Aだっさ」

いきなり優子の部屋のドアを開けたのは、弟の直樹だった。

何だか異常なほど慌てた様子で、いかにもただ事ではない。

しかし優子は

「ちよつとあんた、ノックくらいしなさいよ。なによM&amp;M;  
Mって」

「M&amp;M;Mじゃねえよ、M&amp;M;Aだよ。吸収合併だよ。  
M&amp;M;Mはチョコだろ……」

優子は椅子から立ち上がって、入り口に立つ直樹に歩み寄る。

「それが何？ 何の吸収合併よ。あたし忙しいんだから」

優子は高森の事で何とか平静を保っていたものの、言葉を交わせばつい不機嫌になって弟に当たってしまう。

「タカノモリ開発って、高森さんとこの親父さんの会社だぜ」

直樹は一步踏み出して言った。

高森の父親は、輸送からファンドまで取り扱う大手総合商社タカノモリ開発の社長だ。

直樹は忍の親戚である舞衣から聞いて、ある意味優子以上に彼の父親の仕事を知っている。

「そ、そうなの？」優子は思わず立ち止まる。

「姉ちゃん知らないのか？」

「し、知らないよ、高森のお父さんの事なんて」

「でも、買収だぜ」

「買収？ 合併でしょ？」

「たいていは、強い方に買収されるから合併するんだよ」

直樹は唾を飛ばす勢いで話す「株式の強制獲得だから、ヤバいぜ」

なんでコイツこんな詳しいの？ スポーツ馬鹿かと思ってたのに、現社が得意なのか？

「そうなんだ……でも、それが何よ」

優子には直樹が慌てている意味が判らない。会社の吸収合併なんて、最近よく聞く話だが、だから何だというのか。

株がどのと言われても、彼女にはピンと来なかった。

「バカだな、吸収されたらその幹部はたいていクビか降格だろ」

「クビ？」

「当たり前じゃん。トップは一人なんだから」

「じゃあ、高森のお父さんは？」

「会社に乗っ取られるんだぞ。失業じゃねえの。それこそ、元社長の居場所はないだろ」

苛立った直樹は、優子の横をすり抜けるように部屋へ入り込んで、小さなテレビを点けた。

少し遅れて報道が始まったチャンネルを探す。

「こら、勝手に入るな」

優子はそう言いながらも点いたテレビに視線を奪われる。

『大手タカノモリ開発がシノテック社に買収！ 既に70%の株取得！』

そんなテロップが出ている画面の向こうで、ずらりと並んだスーツの大人たちが何かを話していた。

「なに？ どういう事？」

優子はテレビの画面に近づいた。

シノテック？ シノテックって……篠山のところの会社だ。どうして？

「合併とか提携とか言っても、結局は乗っ取りだよ」

直樹がテレビ画面を見つめたまま

「シノテックは今年になって、やたらと他社を吸収して膨れ上がってるんだ」

乗っ取り……

直樹は優子を振り返ると「高森さんは、大丈夫なの？」

優子は応える間も無く白いダウンを驚掴みにすると、部屋を飛び出して階段を駆け下りる。

「優子、出かけるの？ もう直ぐご飯よ」

今日は母親のパートが休みだったので、夕飯の仕度を全てこなし  
ていた。

「ちよつと出てくる」

優子は台所に向って声をかけると同時に玄関を飛び出した。

重圧な凍て雲が空を覆っていた。

彼女は路地を走って忍の家に急いだ。冷たい空気の壁が頬を叩く。  
小さな公園の向こうに確かに在るはずの忍の家を見つめて優子は  
走る。

胸の奥がドキドキした。

それは、昨日の高鳴りとは全く別の種のも物だった。真っ黒な不安  
と恐怖が全身を包み込んで背中がゾクゾクした。

なんで？ どうして……？ いったいどういう事なの？

優子の足が停まった忍の家の前。

門扉の明かりは消えていた。

優子は恐る恐る大きな扉を開けた。

そこには一切の明かりは無く、人の気配も感じない。その先の奥行きに向って静寂と闇だけが静かに佇んでいる。

そこには誰も住んではない……

家屋はただの黒い塊になっていた。

優子の荒い息使いだけが響き渡る闇に冷たい雫が零れ落ちてきて、あっと言う間に彼女と地面を濡らしていった。

## 第64話（後書き）

春企画参加のため、更新ペースが多少落ちます事をご了承ください。  
最低でも週1〜2回は更新予定です。  
琥珀色の風は後半へ入ります。

## 第65話

ドライヤーから煙が上がった。

「うわっ」

優子は慌ててそれを洗面所に放り投げる。

な、なにコレ？ 壊れた？

まだ半分しか寝癖を直していないのに、ドライヤーが突然白い煙を吹いて停まった。

優子は寝癖直し用のミストを多めに髪の毛に撒布すると

「もう……ついて無い事ばかり……」

大きな溜息をついた。

電車に乗り込んでふと時間が空くと、頭の中を埋め尽くすのはやはり彼の事。

また明日って言うたくせに……また明日って言ったよ。

最終日のテストはボロボロだった。

昨晩は、あの後ほとんど勉強が手に付かなかった。

早い時間にやった数学以外、比較的得意な現国が日程にあったのは、少しだけ幸いしていたが……

テストが終了した教室では、帰りのお茶する場所やカラオケに行く算段などの会話が飛び交っていた。

明日からはもう学校が休みだから、みんなの気は一気に緩んでいく。

忍の父親の仕事を知っている者で昨夜のニュースを観た者は、忍が休んだ理由を察しているだろう。

しかし、その誰もがそんな話題は口にはしなかった。

優子は気を使って近寄る一葉を振り払うように廊下に出ると、隣の教室に向った。

それを見た安西が、小走りに後を追いかける。

優子はB組の戸を開けると、無言で教室へ足を踏み入れた。

見知らぬ連中の視線が、彼女を追った。

優子は脇目も振らず篠山雄二郎の席を目指す。彼は丁度カバンを手にした所で、優子に気付いて軽く微笑んだ。

「優子、どうしたんだ？」

優子は硬い表情を崩す事は無かった。

「どういう事？ どうして高森のお父さんの会社を買収したのよ」

「そ、それは俺の関知する事じゃないぜ」

篠山は困惑した笑みを浮かべる。

「高森は何処？ アンタのせいで高森がいなくなったじゃないの」

優子は篠山の両肩を強く掴んだ。

「そんな事言われてもな……俺にはオヤジの会社の事は判らないから……」

篠山は苦笑するしかない。

「ちよつと優子。何やってるの？」

後から安西が駆けつけて、優子の肩を後から掴んだ。

優子はそれを振り払う。

「アンタ、高森の親友じゃなかったの？ 小学校からの友達でしょ。

親友の家族を路頭に迷わせるような事をして、平気なの？」

「優子！」

安西は、さらに強い力で彼女の肩に手を掛けて、振り返らせる。

「篠山だって、ただの高校生なんだよ。高校生の子供が父親の会社の買収事に意見できると思う？ それで何かが変わらと思う？」

優子は唇を噛み締めた。

そんな事、言われなくても解ってるよ。解ってるけど……誰に何を言えばいいか判らないじゃん……

「判ってるよ……あたしはどうせギリギリまで何も知らなかったお気楽者だよ」

優子は安西の手を荒っぽく振り払うと、小走りに教室を出た。



教室に戻ると、ひと気はほとんど無かった。

一葉が優子の席で彼女を待っている。

しかし、優子はそれを無視してカバンだけを掴むと廊下に向って歩き出した。

一葉は黙って優子を見送った。

「優子……」

優子が昇降口へ降りると、一人の女子生徒が彼女の前を塞いだ。俯いて足早に歩いていた優子は、誰かの足元が視界に入って慌てて立ち止まる。

顔を上げると、前に会った女だった。

駅前で他校の男子に絡まれた時、そこにいた女。間違いない。何故だか、今回は確信できた。

あの時男の誰かがいった『千賀子』という名前も思い出した。

「忍もこれで終わりね。もう、だれも彼の傍にはいられない」

女は冷ややかに笑う。

優子は困惑した視線で彼女を見ていた。

「あなた、千賀子さん？」

「あら、あたしの名前知ってるんだ」

彼女は白い歯を見せて笑った。

「高森に恨みでも在るの？ 今度の事も何か関係が？」

「まさか、会社同士の事でしょ。そんなのあたしに何とかできるわけじゃないじゃん」

彼女は冷ややかで鋭い視線を優子に浴びせると

「あたしを振ったバチが当たったんでしょ」

「そんなの逆恨みでしょ」

「逆恨みでも何でも関係ない。上級生であるこのあたしがコクッた

のに、それを断って……だから、その後忍に近づく奴はあたしが壊してやるんだ」

千賀子はそれまで自分からコクツた事などなかった。

何時でも男が寄って来るだけの容姿は持っている。

だけど、高校入学当初から飛びぬけた輝きを見せる忍に惹かれて、自分から言い寄った。絶対の確信を持つて。

しかし、その確信は砕かれた。千賀子は自分のプライドを傷つけた忍を許せなかったのだ。

だから、中学の時の男友人達に頼んで忍に近づく女の子に密かに嫌がらせや乱暴をしたりしていた。

それは、忍と上手く行きそうな娘ほどエスカレートする。

なにこの女。オカシインじゃないの？ そんな事して虚しくないのか？

「どいてよ。アンタなんかに構ってる暇ないから」

優子は千賀子の横をすり抜けて、下駄箱の靴を取り出し履き替えると、足早に昇降口を出た。

## 第66話

「篠山、忍に連絡は出来ないの？」

「ああ……」

「心当たりも？」

「ああ、俺だつてニュースを見るまで知らなかった。お前の方が気付いてたんだろ？」

「あたしは、もしかしたら。ってお母さんに聞いていただけだし、こんな急に事が運ぶとは思ってなかったよ。もつと前振りとかがあると思つたし、忍までいなくなるとは内心思つてなかった」

安西は篠山を見上げて「電話とかしてみた？」

「直ぐにかけてみたけど、アイツの携帯は通じないんだ」

篠山もさすがにどうにもならないと言つた様子で、両手を軽く上げて見せた。

「何処に行ったのかしら……忍」

「さあな……一家心中はないだろ」

安西は篠山の脇腹を肘で突いて睨む「縁起でもない」

しかし彼女も実際そんな事はないだろうと思つた。

あの家族には絆を感じない……中学の時に会つたきりだが、今もそれは変わらないだろう。

そういう家族は一家でどうにかなる物ではない。

あの父親なら、おそらく家族がバラバラになる事はあつても、誰かを道連れにはしないだろう。そして、あの母親も。

篠山も安西もそんな考えは同じだった。

安西の家庭もバラバラだ。

それは自分が原因なのだが、自分に非が在るわけではない。父親は彼女の妊娠を許さなかった。相手が乱暴した犯人連中だという事で、尚更安西をせめた。

安西ひとみには居場所がなかった。

だから家を出た。

あの親の傍で暮らすより、全てを一人で迎える独りの生活の方がいくらかましなものだった。

母親は今年の夏ごろから彼女と連絡を取ってくる。

時には家の近くまで来て、会うこともあった。

母親は帰ってきなさいと言う。

しかし安西は知っている。父親は自分を許していない……うわべは家族を装っても、そんな家に帰るのはまっぴらだった。

どうって事ないわ……家族と離れて暮らす事なんて平気よ。忍だつてきつとやっていける。

そんな安西でも、忍の居場所だけは気がかりだった。

\* \* \*

腐食したコンクリートのような空。

重圧のある雲が頭上を埋め尽くして、昼過ぎになると白い雪が舞い降りてきた。

弱い風に煽られて、ヒラヒラと揺らいだ幾つもの雪輪が地面に落ちては消える。

試験休みに入って二週間。

忍の居場所は判らないままだし、優子にはそれを調べる術も無い。何度か一葉に誘われて街へ買い物へ出かけたが、どこか気乗りしないまま虚ろぐのような一日を彼女に付き合わせるのは悪いと思った。アレから何度も忍の家に行ってみた。

優子にはそんな事しかできない。もしかしたら、ちょっと出かけてただけで、あの家に忍が戻って来るような気がしたから。

しかし、彼の家は明かりひとつ燈る事も無い黒い塊のまま、何も変わりはない。

やっぱり、そうだ……お母さんが言った通りだった。何時ど  
うなるかなんて判ったもんじゃない。傍にいて思っても、何時そ  
れが無くなるか判ないんだ。

優子は薄暗い部屋の中から、雪の舞う窓の外を眺めた。  
向かいの家の屋根が、ほんの少しだけ白くなっていた。

よかった……お母さんに紹介しなくて。告白とか、付き合う  
とか、曖昧なままでよかったんだよ。どうせ、消えてなくなるんだ  
から……

彼女はアスファルトに落ちて消える雪を見つめていた。

車通りのない裏路地はすっかり白くなっていた。  
昨日から降り出した雪……12月にこんなに雪が降るのは珍しい  
事だ。

うわあ、何でよ……ウンコふんだ……雪でわかんなかった……  
……ていうか、誰だもうつ！ 犬の散歩の後始末しろつつの……  
優子は歩道脇の積もった雪に、お気に入りブーツの踵を何度も  
擦り付ける。

よかった、雪があつて。キレイにとれそうだ。

靴底を丹念に雪で拭くと、彼女は思い出したように目的の場所へ  
向って歩き出した。

優子は踏み切りを渡って駅向こうへ来ていた。

図書館の近くにある喫茶店の隅で、人を待つ。

入り口ドアの開く音がして、彼女が視線を注いだ先からその相手  
は現れた。

ハードウォッシュのジーンズにブラウン系のショート丈ダウンを  
羽織った安西が、足早に近づいてくると無言のまま優子の席の正面  
に座る。

「ご、ごめんね、何か呼び出して」

優子はそんな彼女を上目遣いでチラ見した。

「別に、暇だからいいけど」

安西はそう言っ、カカオカフェを注文すると、黒縁のメガネを指で軽く触った。

休みの日は篠山と出かける事でもないと、相変わらずコンタクトはしないのだろう。

優子は結局諦め切れずにいる。

今更諦める事は出来なかった。

何か忍に関する情報はないか、我慢できずに安西に連絡をとった。

「忍の居場所は？」

安西が短く問いかける。

「やっぱり……判らないよね」

優子は視線を下げた。

「何？ あたしに訊こうと思ってたの？」

「だって、何かあたしより知ってそうな気がして……」

「あたしが知るわけないでしょ」

な、なによ。こっちが下手に出てると思って、高飛車な……

ていうか、もともとか。

「連絡くれるとしたら、あたしよりアンタよ」

そう言った時、安西にコーヒーが運ばれて来た。

優子は視線を上げて、安西を見つめる。

安西は自分の言った言葉が当たり前だというように、出されたばかりのカカオコーヒーのカップを手にとると、そっと口に着けた。

## 第67話

「高森って、よくハワイに行ったりしてた？」

優子は唐突に訊く。

「ハワイ？」安西は口からカップを放して、眉を潜めた。

「なんでハワイ？」

訊き返す安西に、優子は思わず言葉に詰る。

居眠りしてたら夢に出て来た。なんて言えないよね。

「いや……何となくさ」

「行った事はあるだろうけど……まさか、海外に行っていないでしょ」

安西は思わず苦笑する。

な、なによそのバカにしたような笑いは……あたしだって実際そうは思っていないつつの……

「そ、そうだよ。それは無いよね」

一瞬の沈黙が流れた。

窓の外の景色は白さを増す一方で、図書館の敷地のポプラの枯れ枝も白樺も、既に雪を被っている。

「篠山にも訊いてみたよ」

安西は、再びコーヒーを口にして

「何だかんだ言っても、男同士だからさ。連絡取り易いと思って」

「そ、そうなんだ……」

優子は再びテーブルに視線を下げると

「あたし、篠山に酷い事言っちゃったのかな」

安西は小さく声を出して笑った。

な、なんでそこで笑うんだよ。あたしだって反省くらいするよ。

相変わらず上目遣いにチラ見する優子に安西は

「大丈夫よ、篠山はそんな事気にしないでしょ」

優子は少しホッとした。

いま篠山に一番近いのは、安西だ。彼女が言うのだから、間違いないような気がして、気持ちが安らぐ。

「篠山の家ってね、自分が干渉を受けない代わりに、親の事に口出しするのもご法度なのよ」

「そ、そうなんだ……」

「でも、さすがにアイツも何か言ったらしいよ」

安西は水の入ったグラスを揺すって氷を鳴らした。

「気付かなかった？ あの日、篠山の左の頬に痣があつたの」

「き、気付かなかったよ」

「お父さんに利き手で殴られたって、ブツクサ言ってた」

「そうなんだ……ごめんって、言っというて」

優子は再び視線を落とす。

「だから、アイツは優子の事は気にしてないって」

安西は再びグラスの氷を揺らすと「とにかくさ、待つしかないよ」

そう言っ水を一口飲む「退学届けは出てないし、学校へ戻る気はあるんだろうから」

「でも、期末試験の半分休んで大丈夫かな……」

優子の心配を他所に、安西は再び笑った。

「ずっとトップだったのよ、彼。追試でも何でも直ぐに受けさせてもらえるよ」

雪は少し小降りになったようだ。

かなり水を含んで、もう時期雨に変わりそうな気配がする。

「転んで怪我しないですよ。あんた、そそっかしいんだから」

傘を広げながら安西が言った。

そんな事、言われなくなつて判ってるよ。変なものの踏んだけど……

安西は雪雲を仰いで「ちゃんと前見て歩きなさい。今のアンタは下ばかり見てるからさ」



そ、それって励ましてるのか？ でも、下も見た方がよくない？

「うん。ありがと。じゃあ」

優子も傘を広げた。

二人は一緒に喫茶店を出ると、お互い別々の方角に向って歩き出した。

\* \* \*

翌日、優子は一葉と里香の三人で久しぶりに映画を見に行った。帰りは買い物などもして、少しだけ有意義な一日を過ごす。

安西に会って、何だか心が安堵した。

ちよつと悔しいけど、忍をよく知る安西と話して、彼女の言葉で何となく勇気付けられた気がする。

優子が電車を降りて、駅の階段を下りるとき、外の景色にふと視線を止めた。

階段のロータリーに面した壁面ははめ殺しの窓ガラスになっている。

その先に見える人混みの中に、あまりに待ちわびた姿を見たのだ。た、高森だ。

ロータリーを行き交う人波の向こう。その姿は既に国道の横断歩道を渡っていた。

後姿だったが、優子にはひと目で判った。彼女は反射的に駆け出す。

階段を上って来たサラリーマンと危うくぶつかりそうになって、避けた拍子によるめいた。

体勢を整えながら急いで階段を駆け下りて、駅を出ると彼の姿を探した。

ロータリーを駆けて、国道に出て再び周囲を見渡す。

胸が高鳴っていた。

息切れ以上に、心臓の鼓動は胸を叩いた。

確かにいたよ。あれは高森だ。絶対彼の姿だった……

優子は白い息を吐きながら、暮色の中で彼の姿を探した。

しかし、それは何処にも見えない。

錯覚？　あまりの思い込みで錯覚だったのか？　そうだよ、もしいたとしても暗くて見えるはず無い。あたし、ヤバくない？

優子は肩を落として国道を渡ると、力無い足取りで家に向った。

歩道の隅に残った雪解け跡が凍って、踏みしめるとバリバリと音を立てた。

## 第68話

夕飯の食卓は明るい。

自分の家では何事も無く時間が過ぎてゆく。優子の心を曇らせる全てが、家の外での出来事だ。

「最近ずっと元気ないようだけど、何かあった？」

茶碗を持った母親の杏子が、少し心配そうに優子に訊く。

優子はハツとして笑顔を作ると

「別に。なんで？」

「そう。だったらいいけど」

「なんだ、何か悩み事があつたら言いなさい。お父さんたちだって、伊達に親をやつてゐるわけじゃないんだから」

父親の孝之助は少し真顔でそう言つと

「まあ、少しは伊達だけだな」

「かなり伊達じゃねえの」

直樹が味噌汁を啜りながら言う。

「こら直樹、それは言い過ぎよ。お父さんだって、何かの役に立つかも知れないじゃない」

杏子が笑う。

何かつて、なんだよ……

「大丈夫よ。あたしは別に何でもないんだからさ」

優子はムリにご飯のお代わりを要求した。

直樹はそんな姉の姿をチラ見するが、何も言わずにご飯を口に頬張った。

\* \* \*

冷たい空は澄み切って、窓の外に明るい三日月が大きく浮かんでいた。

小さな星の瞬きが見える。

優子がベッドに身体を投げ出して漫画を読んでいると、部屋のドアを誰かがノックした。

「姉貴、起きてる？」直樹の声だ。

「うん。起きてるよ」

優子は返事と同時にベッドの上に起き上がった。

直樹は静かにドアを開ける。

「どうしたの？」

立ち尽くす直樹に、優子は立ち上がって歩み寄る。

「今、ちよつと出れる？」

「今？ 何処に？」

直樹は少し息を呑むと「いいから、出れる？」

「もう、１１時だよ」

「とにかく、出れる？ ダメ？」

何だか直樹の目が真剣そのものだ。

な、なによ。あたしを何処に連れて行く気なの？ 行き先ぐ

らい言えよ。

「わ、判ったよ、行くよ」

優子は部屋着のジャージにそのままダウンジャケットを羽織ろうとする。

「あつ、あのさ……着替えた方がよくない？」

「はあ？ なんで？ そんな遠くに行くの？」

優子は動きを止めた。

「いや……そんな遠くじゃないけど。外寒いからさ、ジーンズ履けば？」

言われて見れば寒いか……そうだね。ジャージは寒いよね。

「じゃあ、ちよつと待ってて。今着替えるよ」

優子がそう言うと、直樹はドアを静かに閉めた。

「何処行くの？」

「いいから」

優子は直樹について、住宅街を歩く。

夜の冷たい空気が全てを凍りつかせているかのようで、二人の小さな足音だけが響いていた。

暫く歩いて角を曲がる。

そして、再び反対側へ曲がって、また曲がる。

ん？ この辺見覚えある……舞衣ちゃんの家の方角だ。

優子が気づいた時には、既にその家の近所まで来ていた。

逆方向から来たので、気付くのが遅れた。

ま、まさかコイツ。舞衣ちゃんと喧嘩でもして、あたしに仲裁頼むってんじゃないでしょうね。そんな余裕なんだよ、あたしは。「ちよつと直樹。あたしそんな余裕ないよ」

「はあ？ 何の余裕だよ」

直樹が立ち止まる。

「舞衣ちゃんの家に行くんでしょ」

「ああ。やつと気付いた？」

「ず、ずっと前から気付いてたけど言わなかったただだよ」

直樹は小さく笑うと、再び歩き出す。

しかし、優子は動かなかった。

振り返った直樹は戻って来て、彼女の腕を引っ張る。

「ちよつと、なんであたしが舞衣ちゃんの家に行くのよ。理由を述べなさいよ」

「いいから。来れば判るって」

直樹はとにかく優子の腕を引っ張って歩いた。

彼は舞衣の家の門扉の少し手前で止まると、携帯を取り出して彼女にコールする。

何であたしがこの寒空の下、アンタに付き合う筋合いがあるのさ。自分の事でイッパイだつつの。

優子は両手で冷えた身体を摩って空を見上げる。

この夜は、とにかく星が綺麗だった。

直樹が電話を切るが早いのか、門扉の行灯が燈って、誰かの姿が見えた。

優子もその気配に視線を向ける。

舞衣ではない……身長も髪の毛のシルエットも全く違う。

淡い山吹色の明かりに浮かぶ黒いシルエット……一瞬彼の爽やかなライムの香りさえ届いた気がした。

それが優子に懐かしさと安堵をもたらしたのは確かだった。

## 第69話

住宅街の時間は止まっていた。

いや、優子は今まで止まっていた自分の時間が動き出すのを感じた。だから、周囲の時間が止まってるように感じたのだろう。

それと同時に、胸の奥から熱い何かが沸き立ち、溢れてきた。しかし彼女の足は前に踏み出せない。

黒い影がゆっくり近づいてくる。

「姉貴、貸しだぜ」

小さくそう囁いた直樹は静かに後ずさりして、路地を曲がった陰に消えた。

「こ、こんな所にいたの？」

やっと言えた言葉だった。

どうして、どうしてこんな近くにいて、教えてくれなかったの？

言いたかった言葉が溢れて、喉元で渋滞を起こしていた。

「ああ……ちよつと家がごたごたしてたから。連絡取れなくてごめん」

忍の笑顔は変わらなかった。

自分の誕生日の夜に見た、あの笑顔。

それまでも何度も見てきた、ム力つくほど綺麗で優しい笑顔だった。

優子は何も訊けないまま、立ち竦んでいた。

心の奥から湧き出たような熱い涙が、頬を伝うのだけは判った。

恥ずかしい……人前で泣いた事なんて、小学校の時にプールで転んで頭から血を吹いた時以来無いのに……

優子は無言で頬に伝う涙を右手で拭った。

忍は自分の手を差し出すと、彼女の左頬の雫を拭う。

飛び込んでいいの？ 彼の胸に飛び込むんだよね、こんな時

って。

しかし優子の足は動かなかった。  
ただ、黙って彼に頬を撫でられた。

「よかった……無事で……」 呟くように優子は言った。

「ごめん、心配かけたね」

「ハワイに行ったのかと思った……」

「ハワイ？」

「ううん、何でもない」

優子は大きく首を振って、涙目のまま笑った。

「期末試験は？」

「昨日、受けてきたよ」

忍はそう言って髪をかき上げると「さすがに今回の1番は安西かな」

二人は街路灯の在るところまで歩くと、並んで塀に寄りかかっていた。

お互いに顔をよく見たいという気持ちに変わりは無かった。

「じゃあ、明日の終業式は来る？」

「それはちよつと……」

「どうして？」

「まだ、ちよつとね。でも、冬休み明けには学校へ行くよ」

「そう……」

優子は少し俯いた。

それを見た忍は「デートは出来るよ。イヴは出かけよう」

「ほんと？」

「行き場所決めた？」

「何処でもいいよ。丸井の屋上でも」

優子は真剣に言ったつもりだったが、それを聞いた忍が笑い出して、彼女もつられて笑った。



冷たい空気は苦にならなくなっていた。たぶん心の中が火照った  
せいだ。

「お父さんは？」

優子は落ち着いて、やっとまともな事を訊く。

忍は小さく首を振ると

「わかんないよ。俺の方が先に家を出た。後の事はわかんない」  
彼は空を仰いだ。

「でも、心配するなって言ってた。だから、大丈夫だと思うよ」

「そうなんだ……」

優子は眉を潜めて再び俯いた。

「お前が落ち込む事ないだろ」

「でも……」

「俺はオヤジと離れる事も、あの家から出る事も何とも思っていないよ。母さんと離れる事もね」

忍は優子に気を使うように明るく笑って見せた。

「暫くはここで厄介になるよ。舞衣に勉強も教えられるしね」

そう言って、舞衣の家の塀を見上げる。

弱い風が辺りを通り過ぎてゆく。

優子は小さく肩をすくめた。

「寒くない？」

「うん、平気。でも……直樹のやつ、何も言わずにいきなり引っ張  
ってくるからマフラー忘れた……」

彼女の不平な呟きに、忍は再び笑った。

優子は今のこの瞬間が夢では無い事を祈った。

少しでも長く、時間がゆっくり過ぎればいいと願った。

三日月の囁くような明かりと星の瞬きが、今夜は彼女の為にほん  
の少しだけ時間を止めてくれるような気がした。



## 第69話（後書き）

「琥珀色の風」をお読み頂き、有難うございます。

現在、春企画参加作品「放課後のプリズム」を連載中です！

<http://ncode.syosetu.com/n7719d/>

## 第70話

12月24日

鮮やかな花火が、夜空を染め上げた。

優子がかつて見た事の無い光景に、完全に気後れする。

イヴの夜のデイズリーリゾートは、どのアトラクションも2時間待ちが当たり前。

考えているうちに列はどんどん伸びるし、人混みでこんなに広いはずの通路が通り難いのも初めて。

もちろん、最後に来たのは中学の卒業記念だから、かなり久しぶりだ。

「ね、ねえ。これじゃあ何にも乗れくない？」

「仕方ないさ。今日はここにすることを楽しむしかない」

忍はそう言って笑った。

みんながそう考えれば、乗り物空くんだけどなあ……

優子は打ち上げられた花火を見上げた。

右も左も幸せそうな笑顔で溢れている。

雑踏に押し潰されそうな中で、ただ賑わいを堪能するのが精一杯だった。

うわっ、チューしてるっ。ていうか、みんな感覚麻痺してる

……

人混みを気にしないで抱き合うカップルはここそこにいる……しかも、かなりの数。

かと思えば、ファーストフードの店の前で、子供が大声で泣き出した。

そんな光景を見るだけで、なんだか余計に疲労が増して、優子と忍は早々にそこを出てしまった。

しかも浜風が異常に冷たくて、とにかく過酷だった。

あの中で賑わいに加われる連中は、ある意味スゴイと思った。

こ、こいつら何が目的でここに来てるの？ 何でこんな人混みで抱き合えるのよ……

「何だか疲れた……」

優子はゲートの外へ出ると、近くのベンチに座り込む。

「さすがに俺も疲れた」

忍は近くの自販機で熱いココアを買ってきて隣に座る。

まあ、あんたというのは何時も疲れるけどさ……でも、会わないとまた一緒にいたくなっちゃうんだ……

優子は彼の差し出したココアを受け取った。

プルタブを引いて、一口飲む。

「ねえ、前から訊きたかった事があるんだけど」

「何？」

忍はそう言いながら、自分を買った缶コーヒーを口にする。

「あたしの携帯電話の番号って、どこで知ったの？」

「携帯番号？」

「ほら、初めてあたしに電話くれた時」

忍は笑って星空を見上げると

「ああ、あれか」

な、何よ。言いなさいよ。

「で……どうして？」

「優子、前に携帯落としたろ？」

そう言えば、夏休み前に一度落とした。ていうか、学食に置き忘れた。

「そ、そう言えば、そんな事あったけど……」

「あれ、拾ったの俺さ」

「そ、そうなの？」

優子は一瞬納得した。

ん？ て、いう事はあたしの携帯勝手に覗いたのか？ 盗み見？

「で、でも、それって、あたしの携帯覗いたの？」

「ん……まあ、ちよつとな」

忍は再びコーヒーを口にすると

「でも、誰の携帯か確認するのにオーナー情報を見ただけだよ。他は見てない」

「で、でもそれって先生が見れば済むじゃん」

「まあね。でも知りたかつたんだよ」

忍ははにかみながら周囲を見渡して「優子が忘れて行ったのを見てたから」

見てたのか？ だったらその時声かけるよ。ていうか、それってどういう意味？ そんな前からあたしに興味があつたのか？

優子は、忍の無邪気とも取れる笑顔に何も言えなくなった。

自分に興味があつたと言われて、悪い気はしない。

これが舟越だったら、もっと怒っているに違いないだろうが……

「まあ、何がキツカケになるかは判らないって事さ」

忍はそう言つて、優子の肩に手を触れた。

12月31日。

年の瀬末日。優子の携帯が鳴った。

表示番号には見覚えが無い。

「もしもし……」

優子は警戒心を含んだ声を出す。

「あつ、五十嵐？ 舟越だけど」

舟越？

電話の相手は舟越だった。すっかり存在を忘れていた……

「な、何？ どうしてあたしの携帯知ってるの？」

「そんなことより、大変なんだよ。一大事だ」

舟越は慌てた口調で言つた。

何が大変なんだよ。アンタから電話が掛かってきた事自体、

一大事だつつつの。

「な、何？」

「高森を見かけたよ」

その言葉で、優子は拍子抜けした。

なに今更いつてんのよ。もう何度も会ってるんだよ。

しかし今の段階では、教師意外に彼の消息は知らなままなのだろう。

忍の話しによれば、冬休み明けにさりげなく学校へ復帰する予定との事だ。

「そ、そうなの……」

優子は苦笑しながら、とりあえず初耳の振りをする。

「それでさ、何処で見かけたと思う？」

どうせ、駅近辺とかじゃないの？

「ど、何処で？」

「五十嵐の住んでる駅前だよ。意外と近くにいるんじゃないか？」

めちゃくちゃ近くにいるんだよ。もう知ってるんだから。

「そ、そうなんだ。なるほどね。へえ……」

優子はとりあえず驚くフリなどしてみるのが……

「なあ、これから一緒に探してみない？」

「はあ？」

どうしてあんと一緒に探さなくちゃいけないのよ。ていうか、そんな必要ないんだってば。

「い、いいよ。別に……」

「俺だつて、五十嵐の役にたちたいと思ってるんだ。僕にだってキミを見守る事ぐらいできるよ」

それ思い過ごしだよ……つつか、それどつかで聞いたセリフなんだけど……ブライト？

「いや、別にいいのよ。そのうち出てくると思っから……」

「そんな投げやりになっちゃダメだよ」

なつてないつつの。

「と、とにかくさ、いいのよ。ありがとう。気持ちだけ受け取っておくよ」

優子はそう言って電話を切った。ありがとうの気持ちは本当だった。

途端に、街の喧騒が耳に戻ってくる。

「誰？ 電話」

隣で忍が言った。

「あ、ああ……な、直樹。弟の直樹だったよ」

彼女は笑いながら「バカな電話でさ」



## 第70話（後書き）

「琥珀色の風」をお読み頂き、有難うございます。

現在、春企画参加作品「放課後のプリズム」を連載中です！

<http://ncode.syosetu.com/n7719d/>

## 第71話

な、何で？ 何でこんな事になるの？

優子は安西のアパートの小さな部屋で、忍と一緒に並んで座っていた。

小さなテーブルを挟んだ向かい側には、篠山の姿もある。

近くの神社に忍と初詣に行ったら、篠山と安西も来ていたのだ。

しくじった……もつと遠くへ行くべきだったんだ。あたしとした事が、安西と同じ場所へ初詣に行ってしまうなんて……

新しい住宅街が出来る以前から在るその神社は、意外に大きい。図書館の先を少し行くと小さな丘が在る。

何時もは閑散とした場所だが、鳥居の入り口から出店が並んでいた。

石段が延びる先は林に囲まれた平地になっていて、再び大きな鳥居を潜る。

古びた神社を取り囲むように出店が立ち並ぶそこは、参拝者も多く人混みで溢れていた。

何人かの同じ学校の連中を見かけたが、気付かれず、又は知らない振りで通り過ぎる事ができた。

それなのに、安西とは鉢合わせをするかのように、本当にバッタリと出合った。

もはや知らない素振りなど出来る状況ではなかった。

「あけましておめでとう」

安西はすかさず言った。

こんな時でも彼女は冷静だ。

4人で東屋に座って話しをしているうちに篠山が言った。

「これから安西の家で飯食うんだけど、お前らも来ないか？」

彼にしてみれば氣を使っただと思う。

自分の家には招く事は出来なが、安西の家なら忍も大丈夫だと思

ったのかもしれない。

もしかしたら、安西と忍の事を知らないのかもしれない。  
相変わらずアパートの敷地に在る枯れ木が、魔女の邸宅のように  
物寂しげに佇んでいた。

でも……

優子は安西の部屋に入って直ぐに気付いた。

篠山は幾度と無くこの部屋に来ている……

ていうか、あたしがこの前来た時の物寂しげな雰囲気が無い  
じゃん……

何だか部屋の中が明るい。

畳の上にはグレーの絨毯が敷かれ、小さな茶箆筥も在る。

カップもグラスもやたら増えてない？ ていうか、全部二人  
分ないか？

優子は正座をして周囲を見渡していた。

「ハイ、どうぞ」

安西は3段の重箱を出してきて、テーブルに広げた。

お、お節？ 安西、お節作れるの？

「すげえな」

篠山がそう言って割り箸を割る。

「いま、お雑煮作ってるから」

安西はそう言いながら、小さな台所を行き来する。

「あ、あたしも何か手伝おうか？」

「あら、優子も料理できるの？」

安西が振り返って笑う。

料理ぐらいできるつつの……お節は判ないけどさ……

「優子の料理は、意外とうまいよ」

忍が言った。

「へえ、俺も食べてみたいな」

安西の鋭い視線を他所に篠山は無邪気に笑って、伊達巻をくわえ  
る。

「じゃあ優子、お餅焼いてくれる」

安西の声に優子は立ち上がりながら

「お餅どこ？」

「ああ、冷蔵庫に入れて在るよ」

篠山が応える。

あ、あんた、餅のありかまで知ってるのか？

優子は台所で小さな冷蔵庫を開けた。

優子は台所にある小さなオーブントースターで餅の焼け具合を見ながら、奥の部屋で談話する忍と篠山の姿を何度も見る。

何のわだかまりも感じない、以前と変わらない二人がそこにはあった。

優子は安西に背中を突かれて振り返る。

「餅、やばいよ」

「あつ……」

優子は慌ててトースターの扉を開けて、餅を取り出した。

うわっ、ヤバ……黒くなってる……

膨れ上がった餅は、片面がガリガリに硬くなって焦げている。

「それ、あんた食べなさいよ」

安西は小さな声で、冷たく言った。

陽が暮れる頃、優子と忍の二人は安西の家を後にした。

篠山が出入りするあの部屋は、もう孤独の砦ではなかった。

忍に思いを寄せながら過去にすがって生きていた頃に比べると、

安西はふつくらしとした笑顔を見せるようになった。

忍との過去にすぎるといふ事は、結果として自分の過去も忘れられないという事なのだ。

今の安西は、閉ざされた長い孤独からちよっぴり解放されたのか

もしれない。

優子は何故だかそんな事にホッとして、古い塀の向こうのアパートを振り返った。

「どうした？」

忍が声をかける。

「うん、何でもない」

優子は少し先で止まった彼に小走りで追いつくと

「高森は、安西の部屋に来た事あったの？」

「ああ、前に一度だけね」

「そっか」

澄み渡る寒空を見上げる。

「何時とか、訊かないの？」

忍は優子を見つめた。

「別に、いいよ。何時でも」

優子は白い息を吐きながらそう言って笑うと「今年はいいい年になるといいね」

忍はそんな彼女を見つめて「ああ」と応えた。

## 第72話

連日晴天が続く空は、冬風にさらされたように何処までも澄み渡っていた。

試験休みを含めれば充分長い冬休みも、年が明ければ1週間ほどで終わる。そして明日から始まる3学期は、忍が学校に復帰する日でもある。

忍は直ぐに部活にも復帰すると言つので、優子は彼の弁当作りをかつて出た。

安西なんかに負けてられない。お節なんて作れなくなつて、お弁当くらい作れるんだから。

優子は駅前のスーパーに買い物へ行き、ついでに本屋に寄つた。久しぶりの本屋で、彼女はついつい時間を費やしてしまう。ふと顔を上げると、外は暗くなっていた。

ヤバ、帰らなくちゃ。

慌てるように店を出ると、誰かにぶつかりそうになる。

「あ、すいま……」

優子はその相手を見上げて「舟越……?」

「ああ、五十嵐か。ビックリした」

「ビックリしたのはこっちだよ。何してるの? こんな所で」  
舟越は頭に手を当てると

「いや……高森の居場所を探そうかと……」

こいつ、まだ探してたの?

「あ、ああ。そうなの……」

ていうか、高森もかなり外に出歩いてるし、あたしとだつて出かけてるのに、それに出くわさない方がおかしくない?

「あ、あのね、舟越……」

優子は何だか舟越が気の毒に思えて、一瞬言葉を呑み込む。  
舟越はそんな彼女に気付かず

「このまま高森が出てこなかったら、どうする？」

「はあ？」

「だから、もう二度と彼に会えなかったら……そしたら、俺、待ってるよ」

いや……待たなくていいから……全然眼中にないから……

「あ、あのね。高森は、明日から学校に来るって」

「連絡あったの？」

舟越は目を丸くして言った。

散々出かけてるつつの……

「う、うん。あった。連絡来たよ」

「どこに住んでるって？ 家には誰もいなかったぜ」

家に行ったのかよ……

「あ、なんか、親戚の家に暫くお世話になるって」

「そうか……じゃあ、蘭辺って所だなきつと」

そんな事まで知ってるのに、なんで肝心の事が判らないんだよ……調べ方おかしくない？

「よ、よかったな。じゃあ、俺も安心したよ」

舟越はそう言って、駅の方へ歩き出す。

「あ、舟越」

優子は思わず彼を呼び止めると

「心配してくれて、ありがとうね」

「あ、ああ。いいって」

舟越は店頭の明かりに照らされて頬を紅潮させると「じゃあ」そう言って、再び足早に歩き出した。

優子は夕飯の仕度とは別に、明日の下ごしらえをする。

あっ、高森って、嫌いな物あるのかな？ 訊いとけばよかったな。

その時、外にサイレンの音が聞こえた。何処か遠くで犬が吠えて

いる。

佐助はサイレンの音に反応しないので安心だが……

優子はフライを揚げながら外の夜気に耳を傾けた。

リビングのテレビの音で最初は気がつかなかったが、しだいにサイレンの数が増えて、しかも何だか近い。

消防車だ……何だかやたら数が増えてる……近くで火事かな？

そして、救急車やパトカーの音も入り混じって、外はいっそう慌しくなった。

\* \* \*

忍は舞衣のお供で彼女の通う塾へ行つて来た。

彼が暫く勉強を見るため、受講する教科を減らしてもらって来たのだ。

駅前の国道を歩いてくると、本屋の向こうの空が紅く染まって真っ黒い煙が立ち昇っているのが見えた。

「すごい……火事じゃない？」

舞衣が言った。

路地に入れない消防車が、本屋の脇に止まっている。風に乗って焦げクサイ臭いがした。

手前の路地を入ったが、ひとつ先の十字路まで行くと燃えている家屋が見えた。

「ちょっと見て行こうよ」

舞衣がそう言って、真っ直ぐ通り過ぎようとする忍を引き止める。黒々とした煙にオレンジ色の火の粉が、バチバチと音をたてて竜のように紺青へ立ち昇る。

表通りよりも野次馬は少ないが、先には消防車と救急車が停まっていた。



路地から遠巻きに見る野次馬の脇をすり抜けるように、舞衣はどんどん前に進んで行った。

「あんまり近づくと危ないぞ」

先を行く舞衣に忍が声をかける。

そう言いながらも、二人は群がる人垣の方へ歩いた。

全焼は免れない状況だろう。

周囲の消防車は、両隣の家屋に燃え広がらない処置をしているように見えた。

その時野次馬の人波が割れて、救急隊によって担架が運ばれてきた。

呼吸器を着けた婦人が何かを叫んでいる。

「まだ中に……子供が中に……一人いるんです」

救急隊員は「大丈夫です」とだけ言っ、彼女を宥める。

もう独り担架で運ばれてきた。

「子供が、まだ下の子がいます。助けてくれ……」

「大丈夫です」救急隊員は同じ言葉の繰り返しだ。

忍は小さな群集を割って前に出た。

消防隊員が慌しく動き回っていて、炎の熱が頬を照りつける。手前にいる警官が野次馬を入れないように、周囲に注意を促していた。担架が再び運ばれる所で、それが忍の前を通り過ぎる。

薄い毛布で包まれた担架を忍が覗き込むと、どうやら子供らしい事がわかった。

しかし、子供はもう一人いると両親は言っていた。

「もう一人の子供は？」

「ああ？」

救急隊員が言った。

「子供がもう一人いるはずだって」

「判らない。救出したのはこの子で最後だ」

「もう一人子供がいるはずだつて」

忍は繰り返した。

「こっちは自分の持ち場で精一杯だ」

その時、二階の柱の一つがガラガラと音を立てて崩れ落ちた。

警官も振り返って、一瞬固唾を呑む。

「もう一人いるはずなんですけど」

忍は一番近くにいた消防士にも声をかける。

「もう中には入れない」

消防士が放水位置を指示しながら振り返った。

「子供がもう一人いるんですよ」

「無理な物はムリだ。もう倒壊寸前だ」

警官が近づいて身を乗り出す忍を制したが、彼はその制止を振り切って消防士へ近づく。

「忍くん。やめて、危ないよ」

舞衣が後ろで叫んだ。

「危ないから下がちなさい」

消防士が言った「ベストはつくしている」

炎の熱が、全身を照りつけた。

四方から放水する飛沫が跳ね返り、忍の身体を濡らした。

既に家屋は二階建てに満たないものへと化している。

しかし、彼の耳には何かが聞こえた。業火の吠えるような音に混じって、確かに聞こえたのだ。

忍は僅かに家屋に近づいた。

「声が聞こえました」

「あ？」消防士は消火の指示に忙しい中で応える。

「キミ、危ないから下がちなさい」

警官が再び近づいてくる。

「中にいますよ」忍は必死で訴えた。

「無理だ。もう手遅れなんだ」

消防士も彼を野次馬の人垣に押し戻そうとするが、忍はわざと消

火放水の飛沫を浴びた。

「やめろ、下がれ。何を考えてる」

忍は家屋に向って後ずさりする「声が聞こえたんだ」

ひとつ息をつく、彼は狂った業火の中へ向って一気に走り込んで行った。

「停まれ、やめるんだ！」

消防士が叫んだ。

彼を捕まえようとした消防士と警官の手が、上着に掠って同時に空を掴んだ。

から揚げと、白身フライとハンバーグと……卵焼きは必須だよな。

あんまり多いと、部活で走るしなあ……

優子は明日の朝使う弁当箱を取り出してレイアウトを思い描き、幸せそうな笑みを零した。

## 第73話

「姉ちゃん、駅前でスゲー火事だぜ」

外から帰って来た直樹が、台所に入って来て優子に声をかけた。

「サイレン凄かったもん。やっぱり近くだったんだ」

「一軒マル焦げ。ていうか骨だけってカンジだね」

直樹はそう言っただけで冷蔵庫からオレンジジュースを取り出すと、グラスにあけて

「この辺まで焦げクサイ臭いがするよ」

「そう言えばそんな臭いがした」

優子はお玉を持ったまま「あんた、わざわざ現場見てきたの？」

「だって、ほんと駅から直ぐ近くだったよ」

「しょうがない野次馬ね」

彼女は弟をチラリと見て肩をすくめた。

直樹はリビングのソファに腰をおろして「ご飯まだでしょ」

「もう少し。あんた、カバン部屋に置いて来な」

「うん……後で」

その時直樹の携帯電話が鳴る。

「おっ、舞衣だ」

直樹はわざと声に出して携帯を開いた。

「まったく……」

優子は溜息混じりでリビングに背を向けると、味噌汁に豆腐を入れた。直樹が舞衣と何を話しているのか、まったく耳に入らなかった。

炊飯器のランプが緑に変わって、ご飯が炊き上がったのが判った。彼女が後に気配を感じて振り返ると、何時の間にか間近に直樹がいる。

「うわっ、ビックリした……何よ、気配消さないでくれる」

「ね、姉ちゃん……大変だ……」

直樹の顔色は蒼白だった。口から泡でも吹きそうな表情で立っている。

「どうしたの？　もしかしていきなり振られた？」

優子の冗談にも彼は反応しない。

「姉ちゃん……」

「な、何よキモイわね。言いたい事あるんならはっきり言いなよ」  
直樹は二度続けて息を呑み込んだ。

「高森さんが……」

なんで……どうして……あたしの生活はもつと平凡だったじゃない。誰にも干渉されず、何も起こらないありふれた日常の繰り返しだったじゃない……

なんでこんなに次々といろんな事が起こるの？　どうしてそっとしておいてくれないの……

優子は集中治療室の扉の前で、ドアに爪を立てて首をうな垂れた。

『面会謝絶』その文字が、事の重大さを物語っていた。

優子は忍が運び込まれた救急病院へ、直樹と一緒に来ていた。

「あたしがいけないんだよ。あたしが火事見て行こうなんて言ったから……」

舞衣が自分の両親の前で肩を震わせて泣いていた。

「大丈夫、大丈夫よ……忍君は正義感が強いからね」

母親がそう言って、舞衣の背中を摩った。

「姉ちゃん……いったん戻ろう。治療はまだ大分かかるし、俺たちはここにいても何も出来ないよ」

「うるさい！」

優子は直樹を突き飛ばした。

「姉ちゃん……」

「ごめん……先に帰ってて。少ししたら、あたしも帰るから……」  
優子はそう言って、近くの長椅子に腰掛けた。  
病院の廊下には、すすり泣く舞衣の声と看護師の足音だけが響いていた。

\* \* \*

擦れた薄雲が、虚空に浮かぶ。  
あまりにも澄んだ空は、寒々としていた。  
終業式が終わって生徒が教室へ揃うと、担任教師の口から忍の事が告げられる。

「高森は今日から学校へ復帰する予定だったのだが、昨日の夜に大きな怪我を負ってしまった」

担任が生徒を見渡すように言う。

「怪我って？」

誰かが訊いた。

「昨日あった大きな火事は知ってる者もいるかもしれない。取り残された子供を助け出したのは、高森だ」

「スゲーじゃん」

「アイツ、さすがだよ」

「忍くんらしい」

そんな声が教室を満たした。

優子は何も言わずにそれを聞いていた。

何処が凄いのか。けっきょく自分は重症で、いったい何が残るの？ 人の為に自分を犠牲にまでして……

優子は唇を噛み締めると、耳を塞いだ。

「怪我、酷いんですか？」

「質問したのは安西だった。」

「かなり酷いらしい……」

担任教師はいたわしい素振りで視線を下げるが、直ぐに顔を上げ  
「しかし、命に別状ないそうだ」

ムリに微笑んだ。

「どうして連絡くれなかったの」

安西が言った。

「そうだよ、どうして知らせてくれなかったの？」

一葉も近づいて来た。

ホームルームが終わると、優子の回りに何人かが集まって来た。

「言ってどうなるの……」

「どうなるも何も、こっちにだって知る権利があるわ」

安西が机を叩いた。

「こっちは知りたくなかった。ていうか、そんな知らせなんか来て  
欲しくなかったよ」

「起きてしまった事をどうこう言っても仕方ないでしょ」

安西の言葉を他所に、優子はカバンを掴むと足早に教室を出て行  
った。

### 第73話（後書き）

「琥珀色の風」をお読み頂きありがとうございます。

この作品は、暗さと明るさのギャップが激しいです。  
また少し、アップダウンがあります。



## 第74話

「先生、高森君はどんな状態なんですか？ お見舞いに行っても平気ですか？」

安西は耐え切れず、職員室へ来ていた。  
直接担任に訊けば済む事だ。

「今は面会できないらしい……」

担任は回転式の椅子ごと彼女の方を向いて、膝の上で両手を組み合わせた。

「命には別状ないって……」

「ああ、それは大丈夫だそうだ」

「何処を怪我したんですか？」

「左半身と左の顔に重度の火傷を負ったらしい……しばらく集中治療室だそうだ」

担任はそう言って、いかにもぬるそうなお茶を啜ると溜息に混じった声を零した。

「人を助けたって言うのに……」

安西は困惑して眉を潜めた。

「顔……ですか」

「ああ、かなり酷いらしい」

担任は再び湯飲みに口を着けると「暫くは、会うのはムリだろう」

\* \* \*

高森忍の姿の無いまま始まった新学期は、あまりにも空虚に過ぎてゆく。

優子の存在は何時の間にか彼と親しくなる以前に戻っていた。

口数は減り、一葉や里香意外とはほとんど話しはしない。もちろん、用事が無いからでもあるが……

優子が学校帰りの道を歩いていると、後から足音が追い上げてきた。

「優子、待つてよ」

一葉が駆けて来て、優子の肩を叩いた。

「最近独りが多くない？」

「前からよ……」

ちよつと不機嫌そうに、優子はボソリと呟くように言う。

「そんな事言わないでさあ」一葉は苦笑して彼女に並んだ。

「優子、高森の病院には行ってるの？」

「行っても仕方ないんだよ。会えないんだから」

「まだ面会できないの？」

「うん。まだ身内しか入れないみたい」

「そっか」

一葉はそう言って、カバンを抱え直す。

冷たい風が二人の身体を吹き抜けて、同時に首をすくめた。

優子は何度か忍の病院へ行ってみたが、会う事は出来なかった。

舞衣に聞いた話によると、顔はほぼ全て包帯で巻かれて会話は出来ないらしい。

考えてみれば、そんな彼の姿は想像できないし、見るのも辛い。

「はあ……」

駅のホームに降りると、優子は椅子に座って溜息をついた。

ずっと変わらない景色がそこはある。

学校へ通いだして以来ほとんど変わらない風景……自分はどれ程に……いや、自分に関わる人たちにはどれ程の変化があっただろう。

「一葉は、また陸上やりたいとか思ったりする？」

優子はふいに言葉を発した。

ゆっくりとした動作で、一葉も優子の隣に腰を下ろす。

「ううん。どうかな……あんまり思わない。今はね」

「今は？」

「陸上が出来ないって聞いた時は、名残惜しかった。それだけで自分の世界は終わるような気がした」

一葉は遠くの空を見上げて、少しだけ目を細めた。

「でも、たいした事なかったよ。そんな事は意外とちっぴけな事だつて判ったし、走らなくても楽しい事はいっぱいあるし。優子を追いかけるくらいは出来るしね」

「そっか……」

「持つてるものを手放すのは辛いけど、手放してみると意外と平気だったね」

一葉はそう言って笑うと

「だからさ、あんまり臆病になるな」

優子は彼女を見つめた。

一葉の笑顔が少しだけ大人に見えた。

\* \* \*

熱い炎が燃え盛って、周囲を取り巻いていた。

そこはまるで地獄の業火だ……

彼は行けると思った。

いや、そんな事は考えずに飛び込んだのかもしれない。考える暇なんて無かった。

彼には確かに聞こえたのだ。

燃え盛る家屋の中から、小さな子供の泣き声が……

中に入ると、思ったよりも煙が凄くて視界はきかなかった。

走り抜けて子供を捜すなんて出来ない……しかし、もう後戻りは出来なかった。

微かに聞こえた泣き声が、確かな物に変わっていたから。

音を立てて燃え盛る炎は悪魔の叫びのようだ。

自分の背丈の火柱を初めて間近で見た。

濡れたN3Bが、アツというまに熱くなった。

タイタンクロスは燃えない……本当だろうか……

このN3Bは本当に防火能力があるのか……彼には確信なんて無かった。ただの宣伝文句かもしれない。

それに、いくら上着が燃えなくなつて、髪の毛もジーンズも焦げてしまう。

フードをかぶって、足早に炎を掻い潜るしか術は無かった。

早くもフードを縁取るコヨーテの毛はチリチリ音を立てて焦げていた。

姿勢を低くしてバンダナを口に当てると、いづらか呼吸がラクになる。

ジャケットを買った時にオマケでポケットに入れてよこしたバンダナが思いもかけず役に立った。

幸いな事に、子供は1階の和室にいた。いや、そこが和室かどうかなんて判らない。

ただ、リビングではないのでそう思っただけだ。

二間続きの仕切りの襖は完全に燃え切ろうとしている。紅い炎の先に真つ黒な仏壇が見えた。

子供は手前の部屋に倒れて泣いていた。何歳くらいなのかは判らない。

3歳か、それとも5歳か……とにかく抱えて部屋を出なくてはならなかった。

部屋の天井が崩れそうになって、垂れ下がった天板が逆流する滝のように煙を上げていた。

荒れ狂う炎はまるでオレンジグミのように綺麗で、気を抜くと見とれてしまい、吸い込まれそうだ。

彼の脳裏には不安ばかりが過る。このまま出られないと思った。入らなければ良かったと思った。

何処を走ったかなんて判らない。

家屋の中を抜ける風に乗って、炎は生き物のように蠢いた。

何か熱い物が左の肩にぶつかったのが判ったが、彼は構わず走った。

本能が出口へ導いたのかもしれない。それとも、天使が導いてくれたのか……

視界が開けた瞬間、全身に痛みが走った。

何かが崩れて自分の上に落ちてきたのが判った。

微かに見えた消防士に向って、忍は抱えていた子供を放り投げた。上手く渡ったかは判らない。

記憶はそこで途切れ、自分は死ぬのだと忍は思った……

いや……次に意識が戻った時、死んだ方がよかったと思った。

## 第75話

自分にはもう何も無い。

いままで自分を際立たせていたのは、自分自身の努力の成果だと思っていた。

それを自負する事で、再び頑張る事ができた。

しかし、少し違っていたようだ。

容姿というモノを考えなかった。

生まれ持ったものだから、別段意識した事はないのだ。いや、判っていた事だ。

自分に近づく女性たちが自分の容姿に引かれてやってくる事を、前から知っていたではないか。

だから、優子に声をかけたのだ。

彼女は自分の容姿に興味がなさそうだったから……

しかし、そんな試すような事が出来るのも、所詮この姿があったから。

身体はいい。

洋服で何とかなるだろう。

しかし、左半分の顔はどうにもならない。

形成手術を繰り返し返せば元通りになるらしい……しかし、今は両親のいない身でそんな代金が払えるわけも無い。

ここに入院する医療費だってバカにはならないだろう。

これくらいなら、園辺さんたちが払ってくれる。

しかしそれ以上を求める事はできない……

もう自分には何もないのだ。

きっと優子も離れてゆくだろう。

この顔を見れば……

忍はシミひとつ無い病院の白い天上を眺めながら、毎日同じことを繰り返し考えた。

\* \* \*

1月も末になると、風は上空の寒波に煽られて凍てつく景色をセラミックのように冷たいモノへと変える。

放課後、優子が通りを歩いて駅前まで来ると、車道に車が停まった。

甲高いホーンが短く二度鳴って彼女を呼ぶ。

優子は何だか判らずに反射的に振り返るが、そこに在るのは見覚えの無い車。

いや、見覚えはある。

そこに停まっていたのは、テレビや雑誌で見た事があるイタリアの高級スポーツカーだったから。

跳ね馬の黄色いエンブレムが輝いている。

歩道側のドアが開くと、ペタンコなその車内から長身の男が出て来た。

優子も見えた事があった。バスケ部の3年生……中村輝だ。

以前、一葉に付き合ってバスケ部の紅白戦を見た時に、華麗にコートを走っていたのが印象的だ。

優子は無言で彼を見上げた。

忍や篠山よりも大分背が高い。

「やあ、五十嵐優子さんだよね」

「は、はい……」

彼は自分の車に寄りかかると「どう？ 最近元気ないみたいだけど」

「どう？ て、何？ ていうか、アンタと話すの初めてなんだけど……」

「高森の彼女でしょ？」

真冬の陽射しに、彼の白い歯が光った気がした。

「いや……彼女っていうか……」

「何気に有名だよ。キミ」

有名？ あたしが？

「高森が入院して落ち込んでるようだし……」

中村はポケットに手を入れると

「気晴らしにドライブでもどう？」

だから……なんでほとんど初対面のあんたとドライブするのよ。

「いや、あの……けっこうです」

中村は部活をやっていた頃より伸びた髪をかき上げて

「噂通り、謙虚なんだな」そう言って笑った。

いやいや……誰だって初対面の男の車には乗らないって……

ていうか、今時は乗るの？

「フェラーリに乗る機会なんて滅多にないよ」

中村は、わざとらしくおどけて見せる。

「あ、あたし車はよく判んないし……」

「でもさ、塞ぎ込んでばかりじゃ疲れるでしょ？」

優子は彼の後にある腰ほどの高さの車を眺めた。

周囲の景色を取り込んだ黒いボディは、まるで熔けかけのキラメルのように艶やかだ。

中村輝……一葉から噂は聞いたことが在る。

3年生の中で一番人気の彼は、人当たりもよくて女の子に優しい。

悪い話は全く聞いたことが無かった。

もちろん、一葉自身も直接話をした事はないのだろうか……

優子は周囲を見渡してから、空を見上げた。

「ね、少しドライブしよう。帰りは送って行くからさ」

初対面の篠山雄二郎よりは好感が持てたのも確かだったが、何だか腑に落ちない胡散臭さが漂っている。

しかし……優子はやはり、心のどこかで気分転換を望んでいたの



かもしれない。

中村輝は絶妙なタイミングでそれを突いて来たと言えるだろう。

「じゃ、じゃあ、少しなら……」

ていうか、こいつも金持ちボンボンなんだ……うちの学校って、お金持ちの子供多いのか？

優子は再び周囲を見渡すと、辺りに同じ学校の生徒がいない事を確認して、車の右側に回りこんだ。

中村は素早く右側に回ってドアを開けてくれた。

車内を見下ろすと、かなり地面に近い場所にシートがある。

「最初にお尻から」

中村が促した。

優子は言われたように、お尻からシートに潜りこむ。そう、乗り込むと言うより、潜りこむ感じた。

「きゃっ！」

思った以上に実際の座面は低くて、尻餅でも着くようにストンツとシートに着座すると、思わず両脚が開いて浮き上がった。

彼女は慌ててスカートを抑えて足を降ろす。

うわっ、ヤバイ。いまパンツ見えた？ 見えたよね？

彼女は紅潮した顔で上目遣いに中村を見上げる。

「大丈夫？ 足、中に入れて」

中村は普通の笑顔でそう促す。いかにも慣れている感じた。

優子はゆっくりと両脚を車内に引き込んだ。

## 第75話（後書き）

何時もお読み頂き、有難う御座います。

もう暫くお話は続きますので、宜しくお願いいたします。

## 第76話

「カバン、後に置いて大丈夫だよ」

車が走り出すと、中村が言った。

「あ、大丈夫です」

優子は警戒が完全に取れず、持ち物を手放す気にはなれなかった。

「免許、何時取ったんですか？」

「俺は5月生まれだから、取ってからずいぶん経つよ。夏休みも友達と車で出かけたしね」

優子は話を聞きながら車内を見渡す。

タン色のスウェード張りのダッシュボードなんて、国産車ではありえない事だ。

「寒くない？ ヒーター強くする？」

「あ、大丈夫です」

国道の景色が低い視線で流れてゆく。

何だか不思議な光景だった。

だいたい、走る車の右側に乗っている事自体、妙な気分だ。

「これ、先輩の車なんですか？」

「まあ、一応、オヤジと共用って事になってるけどね」

何が共用だよ。お金なんて払ってないくせに。

「そ、そうなんですか……」

優子は彼に気付かれないように苦笑する。

甲州街道に出て車線が広くなると、微かに加速Gを感じた。

背中で甲高い独特の乾いた音が唸る。

少し行くと、前方は急に空になった。高速のランプが上がったのだ。

えっ？ ど、何処に連れてくの？ 何処行くの？

「あ、あの……どうして高速に乗るんですか？」

「お台場行こうよ。高速の方が速い」

優子は中村の横顔を見る。

合流車線で車は再び加速して、本線に入ると同時に前方の車を追い越した。

「ほ、本当にお台場？」

「ああ」

中村は口角を上げると「それとも、他に行きたい所ある？」

「い、いえ、別に……」

優子はシートバックに背中を着けて、フロントガラスに見える景色を眺めた。

ビルの中腹を潜り抜ける光景は、地上の風景とは違っていた。高い建物が近くに見えて、蒼い空は小さく見えた。

特に話す事なんて無いし、何を話せばいいのかも判らない。

「静かだね」

中村がチラリと視線をくべる。

「高森とは何時から？」

「何時からって？」

「何時から付き合ってるの？」

「いや、だから付き合ってるのか、そんな感じとはちょっと違って……」

「じゃあ、付き合ってるの？」

なんでそこにこだわるんだよ。アンタには関係ないつつの。

「いや、そういうわけでも……」

優子は困惑して笑みを零す。

東京タワーが左に見えたが、なんだか中村の陰になってよく見れなかった。

浜崎橋ジャンクションを抜けて海沿いに出ると、左前方に大きなアーチが見えた。レインボーブリッジだ。

優子はそれを見て、密かにホッと息をつく。

「ほら、ちゃんとお台場に向ってるだろ？」

「えっ？」

「心配そうな顔してるからさ。さらわれたでしょう。みたいな」  
「そ、そんな事……無いですけど」

芝浦ジャンクションを抜けて橋に入ると、中村は再び加速する。どんどん加速して車線変更すると、前方の車をごぼう抜きした。路面に描かれた文字が、読む間も無く車の下に滑り込んでゆく。優子は異常な加速度に思わずスピードメーターを覗き込むが、目盛りが細かくてよく見えない。

目を凝らすと、針が180キロを越えている。

「ちよつ、ちよつとスピード出し過ぎじゃないですか？」  
「怖い？」

そういう問題じゃないだろ！

「いや、ちよつと怖い」

中村はアクセルを緩めた。

乾いた唸りを上げて、エンジンブレーキが後ろから身体を引っ張る。

「わりい、この時間にしては空いてたからつい」

つい出すようなスピードか？

優子はただ苦笑して見せた。

しかし、ついアクセルを踏めばあつと言う間にそんなスピード領域に飛び込む車なのは事実だ。

直ぐに景色が開けてゲートが見える。

中村が僅かにハンドルを切ると、車はETCのゲートにノーズを向けた。

減速する車を何台か抜き去った。

ゲートがみるみる迫ってくる。

えっ？ あのゲートってそんなアクティブに開くのか？ スタ  
ーウォーズの自動ドアみたいに瞬時で開くのか？

「あ、あの……あのゲートって、こんなスピードで通れるんですか？」

「さあ……」

中村はあまりも明るく笑った。スピードが今以上に落ちる気配が無い。

スピードメーターは50キロを指してる。

さあ……。って何？　ていうか、みんな凄くスピード落としてるじゃん。こんなスピードでこの場所走ってる車なんて無いじゃん。

優子は中村の横顔と迫り来るゲートを交互に見た。

ピピッと何かの音がした。

「ちょ、ちよっと？」　優子が声を出す。

ETCに感応したゲートが開き始める。が、あつと言つ間に車の鼻先はその前方まで出ていた。

優子が想像していたよりは速い動きでゲートは上がったが、どう考えても完全に開き切るタイミングではない。

優子は思わず首をすくめる。

首から上を頭ごと刈り取られる思いだった。

頭上でビュウツと音がした。

車高が低い為に、車のルーフはギリギリで開きかけのゲートの下を抜ける。

「ほらっ、抜けられたろ」

中村が声を上げて高らかに笑った。

こ、こいつ頭おかしいのか？

優子は首をすくめたまま、彼の横顔を恐る恐る見た。

背中の後ろで、再びエンジンが軽やかに唸った。

## 第77話

フェリー乗り場の近くで車を止めて棧橋から海を眺めた。  
遠くに成田空港が見え、その先には川崎の工業地帯が怪しい光を  
発している。

微かに見える沢山のクレーンが西日の影になって、まるで東京湾  
から上がってきた黒い怪獣のようだ。

「どう？ 海って気持ちよくない？」

ガードレールに寄りかかって、中村が笑う。

西日をふんだんに浴びる彼の顔は、確かに二枚目だった。

優子は棧橋の淵まで行って海面を覗き込む。

思ってたほど汚くないんだ……

少しだけ海中が見えた。

彼女は視線のピントを移動させて、水面に映る自分の顔を見つめ  
た。

波間に揺られてフニャフニャに歪んだ顔は、今の自分の心境を物  
語っているような気がして、何だか親近感が湧いた。

中村が後から海面を覗く。

「何かいた？」

「うん……ヘタレな女が一人いた……」

中村は大きな声で笑った。

「ホント、噂に聞いた通りだな。五十嵐優子は」

優子は顔を上げて中村を見る。

あたしの噂って、いったいどうなってんの？ 謙虚じゃない  
の？

「ど、どんな噂？ さっきは謙虚だって……」

中村はやつと笑いを納めると

「ああ、謙虚でちよつと暗そうだけど、意外と強くて面白い」

な、なんか複雑な人格……

「そ、そんな複雑じゃないです、あたし」

中村はジャケットの内側からショートホープを取り出して咥えた。

た、タバコ？

「た、タバコ……」

「ダメ？」

「い、いえ……」

ていうか、ダメに決まってるじゃん。あたしがイイとかいっても日本国憲法でダメなんだよ。

中村は咥えたタバコにクラシックジッポーで火をつけると、慣れた素振りでフツと一息吸い込んでそれを吐き出した。

浜風に乗って、白い煙は海の方こうへ消えてゆく。

浮かんだブイの上で休んでいた力モメが、影色のまま飛び立つのが見えた。

「誰だつて、複雑だよ」

「はあ？」

「人格なんて、みんな複雑だろ」

あ、ああ。人格の話が続いてたのね……

「そうかな……」

「そうさ。俺だつて爽やかスポーツメンを気取る反面、タバコも吸うし、ハンドル握ればスピードに魅了される」

やっぱ、スピード狂か……

「そ、そうだよ。いろんな面を持つてるのが普通よね」

「そうそう」

中村はタバコの煙をくゆらせながら笑う。

「でさ、今日の俺はちよつとナンパ」

「はあ？」

いや……あんた、会った時から充分ナンパに見えるけど……

「帰り、どっか寄ってかない」

「はあ？」

優子はたちまち困惑して「ど、どこかって？」



「俺ももう直ぐ卒業だしさ」

いや、それって答えになってないって……

空が緋色に染まって、夕陽が雲に隠れた。雲の淵がオレンジ色に輝く。

「ま、いいや。とりあえず車に戻ろう」

優子は車に近寄る。例によって彼がドアを開けてくれた。

親切だと思ったが、もしかしてドアノブ周辺に傷を付けられたくないのかもしれない。

「あ、あの……」

優子は車に乗り込む前に「まさか、帰りはホテルとかつてコースは無いよね……」

中村の眉がピクリと動いて、笑顔を作る。

やっぱり……

「あたし、そんな気無いから」

優子は少し後ずさりすると「あたしには、そんな軽い人格はないから」

「でも、まだなんだろう？」

「はあ？」

「初めては高森と。なんて思ってる？」

「べ、別にそんな……」

「だけど、アイツのアプローチも拒んでんじゃないの？」

優子の胸に何か突き刺さった。

「そ、そんな事……だって、ちゃんと付き合ってたじゃないし」

中村は侮蔑<sup>ぶべつ</sup>な笑いを浮かべた。

「付き合つとか、付き合わないとか、そんなの気にしてたらキリ無いじゃん」

そうか、この人はこういう人なんだ。最初に感じた僅かに不審な雰囲気はコレだったんだ。

「そんな事、あんなたに関係ないし」

優子は踵を返して歩き出した。

「おい、どうやって帰るんだよ。駅までけっこうあるぞ。ゆりかもめ超混んでるぞ!」

中村の声に、彼女は振り返らなかった。

容赦の無い夕暮れの海風は、優子の背中を冷たく叩いていた。

## 第77話（後書き）

第77話をお読み頂き有難う御座います。

春企画：放課後のプリズム【完結済み】

まだ読んでないかたは急げ！ いや、急がなくて大丈夫です……  
おすすめ作品

【時速メロスの速さで】<http://ncode.syosetu.com/n7892d/>

【空におちる】<http://ncode.syosetu.com/n7953d/>

【あさぎいろの空】<http://ncode.syosetu.com/n7692d/>

他にも沢山の作品が人気を集めて連載中です！！  
是非、ご覧下さい。

## 第78話

優子は見知らぬ景色の中をひたすら歩いていた。

ゆりかもめの駅って何処……？

遠くにビルが見えるが、まだ大分ありそうだ。モノレールの軌道は見えるのに、その駅が判らない。

視線の先にフジテレビのビルも見えるが、それは尚遠い。というより、広大な暮色の土地に巡る高架線と高層ビルが、距離感を消していた。

ずいぶん歩いた気がするのに、何だか景色が変わらない。

優子は街路灯の照らす片隅で、携帯電話を取り出すとアドレスを流して観覧した。

篠山の名前で止まる。

「あいつ、何か乗り物持つてるのかな。お抱え運転手とかいないのかしら」

呟きながら優子は、ダメ元で篠山の携帯にメールを出す。

着信を確認しないまま、携帯をカバンにしまった。

車通りは思った以上に少ない。

ここが東京だなんて一瞬思えなくなつて、時折周囲を見渡した。

太陽はもう見えなかったが、西の空には薄っすらと明るさが残っている。

高架の下は真っ暗だったが、街路灯が多いので闇に包まれる感覚はない。

ただ、東京湾はもう暗幕に包まれて何も見えなかった。棧橋の街灯と対岸の明かりが微かに浮かんていた。

優子は何だか疲れて、自販機の明かりの前に屈みこんだ。

カバンを胸に抱える。

何だか動けなかった。体力よりも、気力が無い……

高森、どうしてるかな……もう病院はご飯たべたろうな……

一人部屋だから、やっぱりご飯は一人なんだね。

何だか無性に恋しさがまして、うずくまるように膝を抱えた。すると、交差した通りの向こうから明かりが近づいて来て、反対側の車線に停まった。

優子はふと顔を上げて、それを見つめる。

一瞬篠山かと思った。が、違う。

中村の車だった。

水銀灯の明かりをギラギラと反射した黒いボディが、車道に止まっていた。

中村が降りてきて、軽やかに大股で道路を渡ってくる。

「ここにいたんだ。探したよ」

優子は立ち上がらなかった。

「行こう」

「いいよ」

「どうして？ 送ってくよ」

「いい……」

「何処にも寄らないって」

「放っておいて……」

優子は遠くの暗闇を見つめた。

「そんな事言わないで、帰ろう」

中村が優子の腕を掴むと、彼女はそれを振り払う。

「高森だって、真意なんて判んないんだぜ。アイツがお前にどうして近づいたか……」

優子はハッと彼を見上げた。

「どういう意味？」

「アイツだって、さっさとやりたいと思ってるって事さ」

「高森はそんな奴じゃない」

「じゃあ、どんな奴だよ。お前は高森をどれだけ知ってる？」

優子は息を荒くして中村を見上げた。

「アンタよりは知ってるわ」

「勝手にしろ！」

中村は一端立ち去ろうとした。

優子は半ばホッと息をつく……が、少し離れた所で中村は再び優子に駆け寄るとムリヤリ腕を掴んで立ち上がらせた。

「痛いよ、何よ。放してよ！」

「お前、どういう神経してんだ？ 俺が誘ってやってるって言うのに」

中村輝のもうひとつの顔が現れた瞬間だった。

いや、コレが本当の顔なのかもしれない。

「高森なんかと付き合っていい気になってんじゃねえぞ」

優子は中村に後ろから羽交い絞めにされると、そのまま引き摺られた。

アスファルトを削るように、ローファアの踵が歩道にすれる音がした。

すごい力……あたしじゃ叶わないよ……全然ダメだよ。

そう感じながらも、彼女は身体をよじる事をやめなかった。

その時暗闇に凄い轟音が轟いた。

何処か遠くからそれは聞こえていた。

暴走族？ 今時？ こっちに近づいてる。こうなったらゾッキーでも何でもいいから助けを求めなくちゃ……

轟音は確かに近づいてくる。

小さなライトの光軸が直線道路の先に見えた。

中村もあまりの音にその方角を見るが、優子を抱えた手には相変わらず力が入っている。

「放してよ。あんたは結局こういう男なんだよ！」

優子の声が大きくなったのは、轟音が直ぐそこまで近づいていたから。

ふと見た時、光はすぐ近くまで来ていた。

バイク……やっぱりバイクの音だ。

その光は勢いよく歩道に乗り上げると、そのまま二人の方に向っ

て突っ込んでくる。

ヘッドライトの光の大きさに比べて、車体はデカかった。

「な、なんだ！」

中村は優子を放して、後に飛んだ。

「痛っ」

いきなり解放された優子は、前に崩れるように膝を着く。

その二人の間に割り込むようにバイクは急停車した。

メタルに光るV型エンジンの地を這うような振動は、周囲の夜気までも振るわせた。

「何だよ、呼び出しておいて知らない男といちゃついてんのか？」

優子は前かがみになったまま、振り返った。

B3ボンバージャケットを着た男が、ヘルメットにゴーグル姿で彼女を見下ろしてる。

「し、篠山？」

篠山はゴーグルを外すと「チョー寒むかったぜ」

そう言って、両手をすり合わせながら笑った。

「なんだお前？」後に下がっていた中村が彼に近づく。

「あんた、誰？」

篠山が振り返る。

中村はムツとした顔で

「お前、二年の転校生だな。高森と仲がいいとかっていう元ヤンだろ？」

彼は小さく笑うと「ウチの学校、バイクは禁止だぜ」

「へえ、フェラーリはいいんだ」

篠山も言い返す。

「チッ、シノテックの御曹子か……結局高森んとこまで吸収してさ」  
「悪いけど俺には関係なくてさ」

優子は立ち上がると

「そつだよ。子供に親の仕事は関係ないよ」

「さんざん親のスネ齧ってるのに？」

中村が嘲るように笑う。

「アンタの車も、自分で買ったとは思えないけど？」

篠山がそう言っと、中村の顔が真っ赤になった。

水銀灯の下でも、はっきりとそれがわかった。

中村が息を荒げるのを堪えて威圧感むき出しで詰め寄ると、篠山は相変わらず笑顔のまま

「わりいけど、俺、けっこう強いよ」

彼の軽く握った拳をチラリと見て、中村の足はそこで止まった。

殴り慣れた拳は丸みをおびると言う……篠山の拳はまさしくそれだった。

「元ヤクザの親父がいると強えよな」

吐き捨てるように中村は自分の車に向かって歩いて行くと、速やかに乗り込む。

路面に大胆なブラックマークを残したフェラーリ360モデナは、甲高く響き渡る音と共にあつと言つ間に見えなくなった。



## 第79話

周囲の景色が、優子には明るく見えていた。

さつきまでの暗たんとした闇に燈る無機質な街路灯も、何だか湾岸に咲くイルミネーションに見える。

「篠山、バイク乗ってたんだ」

「まあ、今時はね」

篠山はそう言って

「親の金だけだな」予備のヘルメットを優子に差し出しす。

「これ、跨ぐの？」

「バイクだからな」

「パンツ見えちゃうじゃん」

「夜だから平気だろ」

「お抱え運転手とか、いないの？」

「なんだよそれ。そんなのいないよ。テレビの見過ぎだって」

篠山は笑って優子を後へ促す。

「安西は？」

「はあ？」

「安西はこの事知ってる？」

「なんで今、安西なんだよ」

優子は一端跨ったバイクを降りた。

篠山は苦笑して「アイツも知ってるよ。言ってきたから」

篠山との事でまで、安西とイガミ合いたくは無い。それ以前に、今の優子には彼女とイガミ合う気力も根性もないのだ。

彼の返事を聞いて、優子はハーレーの小さなシートを再び跨いだ。  
「ていうか、このヘルメット……安全第一て書いて在るんだけど……」

……

優子は手に掴んだ黄色いヘルメットを眺める。

「安全なんだろ」

篠山が振り返る。

「違うでしょ。これってドカヘルじゃん。工事現場のオヤジが被るやつじゃん」

「そうなの？ どうりで安いと思った」

そう言って笑う篠山の頭に優子は手を伸ばした。

「それと交換してよ」

「しょうがないな……」

彼は渋々自分のジェットヘルを優子の頭に被せると、自分がドカヘルを被った。

「当たり前じゃん。普通乙女にドカヘル被らせないよ」

優子はぶつぶつと呟くと「なんか寒そう……」

篠山の腰を掴んだ。

「だから、寒いつて。ていうか俺、その寒い中往復なんですけど」

「いいじゃん、たまにはさ」

優子は笑って彼の背中を軽く二回叩いた。

古い革の匂いが叩いた数だけ彼女の鼻孔に届いた。

篠山は肩をすくめてバイクをスタートさせると、歩道から降りて反対側の車線にUターンした。

加速すると、冷たい風が頬を叩く。

優子はその冷たい風が、何だか楽しく感じた。

果てしない距離に見えた道路をあっと言う間に駆け抜けて、遠くに見えた水銀灯の淡い光が後へ飛んで行った。

「寒いっ！」

「バイクは風と一帯になる乗り物だからな」

「このバイク、うるさすぎ！」

「ハーレーはこういうもんなんだよ」

交差点を曲がって大通りを走ると、高層ビルの谷間を抜ける。

優子は、まだ明かりの燈るビル郡を見上げた。

「なんかさあ」

「ああ？」バイクの爆音で聞き取れない。

「なんかさあ！」

「なんだよ」

「地面から眺めるビルって、いいよね」

「はあ？」

篠山は少しだけ振り向きながら、アクセルを開けた。

レイブリの連なる照明の下を駆け抜けると、寒さを忘れるほど清々しくて優子は夜空に視線を巡らせる。

右手に東京タワーが煌々と聳えていた。

「篠山、東京タワーだよ」

「別に、珍しくないだろ」

「そついう問題じゃないの！」

優子は少し前かがみになると「ゆっくり行こうね」

「俺は安全運転だから大丈夫だよ」

優子は彼から身体を離すと「ウソばっか」

周囲を走る車との仕切りは無い。

360度の有視界は、光と音を一体化させた。

星は見えないけれど、溢れる光の中で彼女は晴れやかに上空を見つめる。

聳える橋の支柱にゆっくりと点滅する航空警告灯が、幻想的に紅い光を放って優子の瞳に滲んだ。

## 第80話（前書き）

【中間あらずじ】校内トップレベルのモテ男、高森忍からの突然のアプローチで、優子の学校生活は変化してゆく。

優等生安西ひとみとの確執と学校裏サイトへの介入……謎の転校生篠山祐一郎との奇妙な関係。

しかし、忍の父親の会社が篠山の父親の会社に吸収され関係は複雑に……

さらに追い討ちをかける忍の大怪我は、優子の心をズタズタに切り裂いた。

## 第80話

時は確実に流れていた。

泣いても笑っても、同じように時は刻まれて当たり前前に過ぎてゆく。

空虚になった心をすり抜ける風は、まるで野原をかける木枯らしのようで、何時の間にか気がつくとき間は流れてゆく。

優子は何時からか空を見なくなった。

見上げる虚空の景色に、何も感じなくなった自分が嫌だった。

それでも家と学校の時間は何も変わりなく過ぎて、新しいやるべき事も迫ってくる。

そして食事時になれば、やっぱりお腹は減る。

この日は国民的恒例行事と言う事もあって、一日中学校の空気は雑音に満ちていた。

その為か、放課後の閑散とした佇まいが、優子にはやたらと安堵をもたらす。

「ねえ、俺傘持ってるけど、五十嵐は？」

「は？ 傘？」

物理の実験レポートの束を掴んで、優子は隣で同じくレポートの束を抱えた舟越に振り返った。

なんで傘なのよ。今日は晴れてたじゃん。

「持ってないよ」

舟越は窓の外を見ていた。

優子もその視線に習うように、今度は窓に視線を移した。

「うそ……」

外は真っ白な雪が横殴りに降っていた。

ほんのついさっきまで青空が広がって、西に大きく傾いた太陽の陽も注いでいた。

それなのに、何時の間にかあの暗い景色は吹雪いて真っ白に霞ん

でいた。

「凄い雪……」

校舎の直ぐ外に植えられた赤松の枝が、片側だけみるみる白く色を変えてゆく。

「朝の天気で夕方は雪だって言ってたよ」

舟越は優子を見て笑った。

「最近天気予報見てなかったよ……いつも晴れだったじゃん」

優子とはにかく仕事を済ませようと、理科実験室の先にある準備室へ入った。

6時間目にあつた物理の授業のレポートを、クラス分集めて放課後の準備室へ運ぶ。

今日も、クラス委員の仕事として舟越と一緒に。

「ああ……なんか、外は最悪だね」

優子の呟く独り言に舟越は

「俺、傘持つてるよ」

「貸してくれんの？」

「えっ……いや、そうじゃなくて」

「じゃあ、ダメじゃん」

優子はそう言いながら、理科実験室を出た。

教室にはもう誰も残っていなかった。

少し前にはまだ男女の喧騒がうごめいていた校舎も、急変した天候に急かされたように人の姿は消えている。

階段ですれ違ったクラスメイトが、外の天気到大騒ぎしながら駆けて行ったのが最後だろう。

優子は手早くカバンを掴むと

「じゃあね、舟越」

そう言つて教室を出る。

「いや……あのさ……」

舟越は優子の後を追いかけた。

足早に階段を下りる優子に追いついた彼は

「傘、一緒に入ってかない？」

「はあ？」

優子は、思わず立ち止まる。

しかし、再び足を前に出して「冗談でしょ」

「な、なんでさ。いいじゃん、雪まみれよりさ」

雪まみれでいいって。アンタとアイアイ傘なんて、想像できない。

優子は無言のまま足早に階段を下りると、昇降口へ急ぐ。

ほの暗い昇降口の外はすっかり雪景色で、駐輪場の横に倒れた自転車は一回り大きくなっていた。

優子は溜息をつきながら靴を履き替える。

「なあ、入っていきなよ。別にいいじゃん」

優子は靴を履いて再び外を眺めると、息をついて舟越を振り返る。

舟越は傘を手に微笑んでいる。

優子はさらに溜息が込み上げてきた。

「そんな事しても、何もないよ」

「別に、何も期待してないって」

仕方なく舟越と駅まで来て電車の乗った優子は、何時も降りる自分の駅を通り越した。

「あれ？ 降らないの？」

「う、うん。ちょっと用事」

優子は、相変わらず雪の振りそそぐ外の景色を見つめたまま言った。

「高森の病院？」

「うん。今日行ってみようって思ってたから」

「でも、今日は天気がさ……」

「いいの、決めてた事だから」

「あつ……」

舟越が顔を上げる。

「何？」

「いや……なんでもないよ」

舟越が降りる駅は次に迫っていた。

「俺も付き合おうか？」彼は電車が止まる間にそう言った。

「いいよ。ごめん……ほつといて……」

優子は愛想笑を浮かべようと思ったが、出来なかった。

「じゃあ、この傘もって行っていいから」

彼は優子の手首に無理やり黒い傘を引っ掛けて、急いで電車を降りる。彼女はわざと舟越の姿を目で追う事はしなかった。

降り注ぐ雪が、何だか何処か知らない町に來たような錯覚を起こさせた。

もうひとつ先の駅を降りると忍が入院している病院がある。

駅を出ると、幸い雪は小降りになっていた。

路面に積もった雪が、風に舞って白い波に見えた。

優子はカバンの中を確認してから駅前の花屋で少量の花を買った、傘をささずに病院までの道を歩き出した。

2月14日……冷たい路面を踏むその足取りは、今までに無いほど重く感じていた。



## 第81話

白い床と壁は寒々と続いていた。

優子は形成外科病棟の階段をゆっくり上がって行った。

エレベーターであつと言う間にそこへ到達する事が怖かった。

ナースステーションの横を通り過ぎてすぐの四人部屋。高森忍は1週間前、一人部屋からそこへ移ったのだ。

一人部屋と違ってドアが開放された四人部屋は、入り易いと思った。

しかし、優子は病室の手前で立ち止まったまま、そこから先に行けない。

看護師の足音がパタパタと横を通り過ぎてゆく。

息を吞んで足を踏み出した。

頭だけを病室に入れて中を覗き込む。四人部屋といっても使っているベッドは二つらしいのは先週来た時と変わらなかった。

手前の二つは空きベッドになったままで、その奥に年配の男性が見えた。

彼女は以前にも一度ここまで足を運んでいる。

しかし、その時はこの場所で引き返しているのだ。

奥のベッドに身体を起こしていた男が、優子の気配に気付いて軽い会釈をくれたので、彼女も慌てて頭を下げた。

問題は、もうひとつのベッドだ。周囲をカーテンが囲んでいた。

優子はゆっくりと病室に入ると、閉ざされたベッドへ近づいた。

カーテン越しにベッドサイドに立つ。

「た……高森……」

少しの沈黙があつた。

「優子か？」

近づく気配を感じていたのか、彼は静かに応える。

「うん……」

「来なくていいって伝えたけど、聞いてない？」

冷たく刺々しい声だった。

優子は忍の容態の経過を舞衣に訊いた時、当分病院には来ないで欲しいと言う彼の言葉も一緒に聞いていた。

だから、以前の病室から数えて病院にも病室の前にも何度か来たが、結局途中で引き返しているの、忍と言葉を交わすのは彼が入院してから初めてになる。

「聞いてたけど……来ちゃったよ。気になってさ……」

「気にしなくていいよ。」

忍はサラリと言った。

「気にするよ……」

優子は小さい声で呟くように言った。

「ねえ、カーテン開けてくれない？」

出来るだけ笑顔の声を無理に発する。

再び沈黙があつた。

「……それは出来ない」

「ど、どうして？」

「どうしても……」

優子はもう何を話していいのか判らなくなっていた。

「お花買ってきたよ。外は雪でさ。超寒かったよ」

「じゃあ、早く帰ったほうがいい」

「……そ、そういうつもりじゃ……」

優子は一瞬俯いた顔をあげると、ベッドサイドの棚に置かれた花瓶を掴んで

「お花替えてくるね」

花瓶に水を入れながら、優子は小さな溜息をついた。

やっぱり来ない方がよかったのかな……ダメダメ、せっかく来たんだからちゃんと対面しなくちゃ。

優子は再び病室に入ると、花を生けた花瓶をベッドサイドの棚に置いた。

自分のカバンの中に手を入れて、リボンのかかった包みに触れる。と、とりあえず渡さなきゃ……

「優子……」

「な、なに？」

「俺の顔が見たいか？」

「う、うん。見たい……かな」

「ほんとうに？」

「う、うん。もちろん……」

忍は勢いをつけてカーテンを開けた。

上から注ぐ蛍光灯の明かりに、彼の姿はぼっかりと、しかしはっきりと浮かんでいた。

しかし優子は彼の顔を見て、思わず後にたじろいでしまう。

し、しまった……反射的に驚いてしまった……そんなつもりじゃないのに……

忍は、顔の包帯を半分以上はほどいていた。

ほどいた長い包帯が、彼の身体を伝うように膝元へ零れている。左の眉も、睫毛も無かった……もちろん左半分は髪の毛も無い。

そして、頬が赤い牛肉のように光沢を発していた。

怖くはなかった……しかし、優子は思わず両手を口に当てて、後へ下がってしまったのだ。

持っていたスクールバッグが落ちて床に音を立てた。

想像以上の怪我の酷さに驚いたのだ。

忍は直ぐにカーテンを閉めると吐き捨てるように

「帰ってくれ……」

「ご、ごめん……ちよつと驚いただけだよ。べつに……」

「別に、なんだ？」

優子は言葉を呑み込んだ。

こんなじゃ、チョコ食べられないじゃん……

「別に怖くないって？ 気持ち悪くないって、言いたいんだろ？」

カーテン越しの向こう側が、彼女には遠く感じた。

「そ、そんな……そんな事思っ てないよ」

「帰れっ！」

「高森……」

優子はカーテンに手を触れた。

「帰れ！ もう来るなっ！」

彼女はビクリと身体を震わせて、カーテンから手を放した。

忍が怒鳴ったのを初めて聞いた気がした。

怖かったわけじゃない……なのに、優子の瞳からは何故か涙が零れ落ちた。

忍に気付かれないように、優子はカーテンから少し下がって口を塞いだ。

落ちたカバンをそつと拾い上げる。

白い床に、沈黙した雫が滴り落ちた。

「もう、来ない方がいいよ」

忍は何時もの落ち着いた声で言った。

それが逆に優子には決定的な言葉に聞こえて、気づいた時には階段を駆け下りていた。

大きなロビーを駆け抜けて正面玄関からイッキに外へ出ると、駐輪場の庇の中に入って立ち止る。

外は再び降り出した雪で、真っ白に染まっていた。

陽射しのない夕暮れは夜のように暗く、雪山のように全ての景色は荒涼として蔭っている。

音もなく降り注ぐ雪は、雪女の呪いに呑み込まれたかのように全てを覆い尽くして沈黙させた。

あたしの心みたいだ……

優子は透明なアクリルの屋根越しに空を見上げる。

しかし、大半は積もった雪で屋根は覆われて、まるで雪崩に埋もれた遭難者のような気分だった。

やっぱり来るんじゃないかった……

カバンの開いた口から手をいれて、リボンのかかったチョコレートを掴む。

優子は大きな溜息と共に、手前の自転車に寄りかかる。か……

何だか安定が悪かったのか、その自転車は彼女の体重に負けて奥側に向って倒れた。

うわっ、なんだ、なんだ？ ナニナニ、何で？

優子は慌てて自転車を押さえようとするが間に合わなかった。

既に体重は後方にかかりきって、持ち直す事はできない。

こんな暗たんとした気分の中で、俊敏な行動が取れるわけも無い。

自転車は奥の自転車をなぎ倒すように倒れた。

すると、その隣の自転車も倒れる。

ぎえっ、ヤバイ！ ダメダメ、とまってっ！

自転車はみるみる将棋倒しに隣の自転車に折り重なった。

ドミノ崩しのように連鎖の波を広げると、10数メートルある駐輪場に並んだ自転車は見事なくらい全て倒れた。

ありえない……なんでだよ……もう……

優子は最初に倒れた自転車の上にひっくり返ったまま、横たわる車輪の群れを眺めていた。

## 第82話

はあ……ついてない。まるで昔のあたしだ……ていうか、昔の自分て何？ 昔も今も、あたしはあたしじゃん……

優子は渋々立ち上がって一番手前の自転車に手をかけた。

痛っ……脚いたい……

自転車にぶつけた脚が痛んだ。

改めて車輪の群れを見つめる。

こんなにイッパイ直せないよ……ていうか、ひとつはあたしの責任だけ残りはこの自転車の責任よね。ちゃんとスタンドが口ツクして無かったのが悪いんだよ。

優子はとりあえずひとつ目の自転車だけ引き起こした。

このまま帰ろうか……超面倒じゃん。普通こんなにイッパイ一気に倒れるか？ ありえないよ。ぜったいあたしのせいじゃない

……

「大丈夫かい？」

突然直ぐ横で声がした。

優子が慌てて振り返ると、男が一人、隣の自転車に手をかけた。

雪が足音と気配を消したらしい。直ぐ横に来るまで全然気付かなかった。

「あっ……はい……」

優子は苦笑いを浮かべて男を見た。

高校生とかではない。

大学生……いや、そうとは限らないが二十歳前後くらいだろう。何だか判らないが、そんな大人の香がほんのりと漂っていた。

男は笑顔のまま次々に手際よく自転車を起こしてゆく。そんな彼の姿を見た優子も、慌てて他の自転車を起こし始めた。

「コレで最後だ」

男はそう言つて、最後尾で倒れていた自転車を引き起こす。

「しかし、派手に倒したね」

「す、すいません……」

優子は小さく縮こまつて首をうな垂れる。

「でも、偉いよ。普通逃げるぜ。こんなに倒しちゃったらさ」

逃げようか考えてたらあんたが現れたんだよ……

「いえ……はあ……」

彼女の方は言葉が出ない。

「しかし、よく降るなあ。今日は」

男は駐輪場の底から空を見上げると

「キミ、入院中の彼を見舞いに来た娘だろ？」

優子はハツと顔を上げて男を見つめる。

「お医者さん、ですか？」

彼は声を出して笑つた。何だかずいぶんあっけらかんと笑う男だと、優子は思った。

「いや、違うよ。僕は大学のボランティアサークルで、ちよくちよくこの病院へ来るんだ」

「ボランティア？ ですか」

「ああ。身障者の子供や、小児ガンの子供に紙芝居や人形劇をみせたり、話し相手になつてあげたり」

こんな若いのに、そんな人いるんだ……

「キミ、先週も見かけたからさ……もつとも、先週は入り口で帰つてたよね」

優子はどう応えていいのか判らずに、降り注ぐ雪を見つめた。

「僕は、杉原一真すぎはらかずま。よろしく」

宜しくつて言われたつて……何をよろしくなの？

杉原は笑つて優子を見ると「君の名前は？」

「あ、あたしは、五十嵐優子です」

「あの彼は、顔中包帯巻いてたね」

「見た事あるんですか？」

「ああ、何度かね。治療室でもチラリと姿を見たけど、酷い火傷だね」

「ええ……火事場で子供を助けたんです。でも、自分は焼け落ちた残骸の下敷きになって……」

優子は俯いて、白い地面についた自分の足跡を眺めた。

「そうか……偉いんだな」

杉原は優しく微笑んだ。

「あの怪我……治るんでしょうか……」

優子は思わず第三者である杉原という男に助言を求める。

「整形手術が必要かもね。それに、火傷の治療はかなり辛いって聞いたことあるな」

「辛い……んですか？」

「焼けた皮膚をたわしみたいな物で擦って落とすんだ。新鮮な皮膚が再生し易いようにね」

「たわしで擦る？ 患部を？」

「酷い激痛に耐えなきゃいけない……」

彼はそう言ってから、優子を見下ろして

「でも、彼なら大丈夫だろうね。勇敢なんだろう？」

「だといいいんだけど……」

その時、離れた場所から声が聞こえた。

「一真、行くぞ。どうしたんだ？」

大学サークルとやらの仲間らしき連中が、駐車場の出口付近で車を停めていた。

杉原は振り返って「ああ、今行く」

優子の肩をポンと叩いた。

「また会うかもしれないね。じゃあ」

彼はそう言って雪の中を軽快に走ると、駐車場の出口に止まっていたミニバンに乗り込んだ。

優子は舟越に借りた傘を玄関の傘立てに置きっぱなしにしていた



事を思い出して、慌てて駆け出した。

優子が帰宅すると、弟の直樹も既に帰っていた。台所からはもう直ぐ出来上がる夕飯の匂いがしている。

彼女は二階へ上がると、直樹の部屋のドアを叩く。

優子が彼の部屋に入ると、直樹はチョコレートを口にしていた。舞衣に貰った物だろう。

「あんた、夕ご飯前に食べて大丈夫なの？」

「だ、大丈夫だよ。全部いっぺんには食わないから」

優子は彼に近寄ると大きな包みを渡した。

「何だよ……？」直樹が訝しげに訊く。

彼にも包みの中身は何かが想像はついたが、どう考えても弟用にしては大きさがおかしかった。

「あんたにあげるよ」

優子は座っている直樹の足元に包みを置くと、何も言わずに部屋を出た。

## 第82話（後書き）

次回 第82'5話

久しぶりに一葉の言葉で綴るお話です。

第82・5話（前書き）

今回は、全て一葉の心の声です。  
普段見えない、友達の視線で優子の姿を描いています。

## 第82・5話

最近優子の様子がおかしい。

確かにちよつと変わった娘だし、周りの知らない誰かから見たら、前からどこかボーっとして掴みどころが無いように感じるようだけど……

でもあたしには判る。

ポケットとしているようでも、あたしのさり気ないボケにツツコミを入れる隙の無さは彼女の持ち味だ。

でもやっぱり最近はどこか上の空で、何だか笑顔もほろほろと淋しく見える。

ふと気付いて見ると、ゴミ箱や掃除用ロッカーを無心で眺めていたり。

無理も無い……

学校へ毎日来る生活は、それでなくても意外とパワーが必要なのに、それにくわえて苦悩や苛立ちを心の隅に隠し持って生活しているのだ。

あたしもそんな時期があったから判る。

ただ、あたしの場合は全部自分自身の事だったから、自分の中で少しずつ消化して消してゆけばよかった。

でも彼女は、相手があつての事だ。

あたしの次に日常を共にしていた高森忍が、あんなことになってしまったのだから。

しかたがない……

きつと彼女自身、嫌々付き合っているフリをしているうちに、何時の間にか彼をかけがいのないヒトと考えるようになったんだ。

前に訊いた時はまだ何もないって言ってたけど、もしかしたらも

うキスぐらいはしてるかもしれない。

でも、もうしそんならちよつと嬉しい。

だって優子はどこか冷めていて、男子を男として見ようとしないところがあったから。

最初はあたしも高森の事ちよつといいって思ってたけど、やっぱりあたしが見るのは彼の華麗な容姿だけで……

でも優子はたぶん違うと思う。

二年になったばかりの頃の席は、優子の斜め後ろに高森がいた。なのに彼女ったら全く高森に興味を示さないし、ちつとも話さない。

席の遠かった桜井美登里なんて、宝の持ち腐れだって密かにばやいてた。

でもまさか、高森が斜め前にいる優子を何時も見ていたなんてホント信じらんない……

奴は彼女の何処に惚れたんだろう。

本当に惚れてるのか、悪戯の一環なのか最初は疑ってたけど、どうも高森自身も本気らしい。

いや……冗談のつもりが本気になったのかな？

あまり大勢と関わらない優子は周囲から誤解されてる部分も多いけれど、本当は無口でもノリの悪い女でもなくて、ごく普通の楽しくてカワイイ女の子だから。

きつと高森もそれに気付いたのかもね。

だから凄く気になるんだ。

普段あまり自分の事は言わない優子だけに、笑っていても虹彩の奥にはどこか悲しげな光が見え隠れしてるの……

でも、あたしから何かを言ったりはしないよ。

彼女はそう言うの好きじゃないって知ってるから。

もしかして、最近何だか心を交わしちゃったっぽい安西ひとみも、優子のそんな部分に気をきかせてるかもね。

彼女はもともと頭イイから、そう言うの感じ取るのも早いかも。

ほら、今も知らないフリして教室の対角距離から少しの間優子を見ていた。

昔はやたらキツイ女だと思ってたけど、最近はちょっぴり優しいな眼差しを見かける。

そういえば、安西は最近クラスで話す友達増えたかも。

それともやつぱり、同じ男を好きになったりすると気持ちが共鳴しちゃうのかな？

あたしが安西と共鳴しないのは、きっと篠山を本気で好きだったわけじゃないんだ。

なんだかこうして考えてると、あたしってもしかして本当の恋をしてないのかなあ。

何だか二人が羨ましいよ。

でも、本気で恋するって事は、本気で傷つく覚悟がないとね……

あたしにはそんな覚悟はないし。

なんだかんだ言っても、優子も安西もエライよ。

高森の容態もよく判らないし、今はただ友達として優子を見守るしかないけれど、何かあれば……あたしが応援できる時が巡って来たら……きっと背中を押すよ。

だって何時も傍にいて何もしてあげられないなんて、やつぱ辛いじゃん。

だからって何時も気遣うフリするのも、ちょっと違うと思うし。

今はできるだけ何時も普通にバカ話しかして、気分を紛らわす事しかできないけど……

本当は里香のほうがバカ話しは得意なんだけど、あの娘はマジ彼に夢中でそれどころじゃないしね。

でもそんなノロケ話を聞くと、それはそれで優子も気が紛れる

のかもしれないから、里香も貢献してるのかしら。

こんな事考えてるあたしも、ちょっとおかしいのかな……

教室を眺めると、何時ものうつろいだ午後の陽射しに溶け入るような雑踏が、何時もと変わらずに響き渡っている。

その片隅から近づいて、彼女はゆるゆると笑って時々自分から声をかけてくる。

「一葉、どうしたの？ ボーっとしてさ」

ほら、一見は普通なんだけどさ。

……ていうか、あんたに言われたくないよ。優子。

第82・5話（後書き）

いつも読んでいただき有難う御座います。  
次回から本編に戻ります。



### 第83話

二月の末、優子は何時に無くソワソワした。

忍が1回目の形成手術をする事が決まったらしいのだ。

彼とは一度会ったきり優子は病院へ行かなくなった為、手術の事は舞衣に聞いた。

最近忍についての事は、直樹を経由せず舞衣が直接優子の携帯に電話をしてくれる。

ただそれは、直樹が直接伝えて欲しいと舞衣に言ったからだ。

少しでも人伝でなく、出来るだけ忍に近い身内から伝えてあげたいと思ったからだ。

優子は忍が形成手術を受けて少しでも傷が癒えたなら、再び会えると思っていた。

優しい笑みで自分を見つめ、またのりくらりとした感情を表に出さないような曖昧なアプローチで自分を誘ってくれると信じていた。

あのミデアムレアのような彼のアプローチは、今思えば過剰なプレッシャーもなく心地よくさえ思えた。

経過が順調なら、来週の予定らしい。

優子は学校へ行ってもどこかソワソワして落ち着かず、何か違う事で気を紛らわせようとしたが、それすらもままならない。

里香の彼氏の話を聞いてみたり、一葉のたあいもない流行の洋服や人気アイドルの話を聞いてみたりしても、やっぱりどこか上の空で頭の中には留まらない。

そんな日々を過ごすうちに、あつと言う間にオペの日は訪れた。

その夜、舞衣がわざわざ優子の家を訪れる。

忍の怪我の原因について未だに責任を感じている彼女が僅かでも

出来る事は、彼と優子の橋渡しなのだ。

直樹の部屋で床に腰掛けながら、三人でコーヒーを飲む。

「とりあえず手術は成功だって言っていました」

「そう……よかった」

舞衣の言葉に優子は安堵の息をつくが……

「でも……少なくともあと二回は手術が必要だって」

「そうなんだ……」

「でもさ、逆に言えば手術を重ねればちゃんと治るって事でしょ？」

二人の重い表情に、直樹が言葉を挟む。

「うん……」

優子も舞衣もなんとなくおざなりに頷く。

「次は経過を見てからだって」

「そうだろうね」

優子の不安は数知れなかった。

このまま3学期を全て休んだら、進級でないんじゃない？……でも、成績がいいから大丈夫なのかな……

いったい彼の姿が元通りになって学校に復帰するのは何時の事なのだろうか……

優子はそんな予想もつかない先が、不安で仕方がない。

「気長に待つしかなんだろうね」

それでも優子は舞衣に気を使って、明るく言った。

彼女だって責任を感じて不安でイッパイのはずだ。

とにかく、全快する事に希望を膨らませるしかないのだと思った。

「そう言えば、今日佐助の散歩に行ったら、垣根の隙間から出て来た猫が佐助の顔にいきなり飛びついてさ」

直樹が、明るい話題を提供しようと切り出す。

「佐助の顔に猫が？ それヤバイよ」

優子が言った。

佐助は猫が苦手だ。

何故かは判らないが、猫より犬の方が強いという基本概念を知ら

ないみたいで、昔からそうなのだ。

だから、猫を見ると動作が止まって、それが通り過ぎるのを待つか、気付かないフリをしてやり過ごす。

「ああ、だから佐助は急に走り出したの？」

舞衣が笑った。一緒にその場にいたのだ。

佐助の顔に飛びついた猫は再びジャンプして、直ぐ横の家のガレージの脇を通って姿を消した。

ビックリして気が動転した佐助は、脇目もふらずに一目散に走り出した。

「佐助はね、たぶん犬の容かたちをした別の生き物なのよ」

優子はそれが真実であるかのように、背筋を伸ばして言う。

「別の生き物って何だよ？」

「そ、そんなの知らない」

直樹が呆れ顔で肩をすくめる。

舞衣は、二人の姉弟の会話を聞いて、再び声を出して笑った。

「今日は有難うね」

玄関先で、優子は舞衣に言った。

「機嫌のいい時を見て、優子さんの事言ってみます」

「うっん、いいよ。あたしの事は言わなくて……」

優子は今の忍の心に触れる事が怖かった。

それが間接的とはいえ、複雑な彼の心情の中に入り込む勇氣は無い。

「きつと、忍くんも気を落としてるから……本当は優子さんと話したいんだと思う……」

「うん……ありがとう」

優子は舞衣に笑顔を見せると

「別に、あたしも辞めたわけじゃないからさ。チャンスを覗うよ」

ていうか、あたし何言ってるんだろ……これじゃ、まるであた

しが彼にラブラブみたいじゃん……

「判りました」

舞衣が小さく微笑む。

月影に照らされた雲がゆつくりと動いていた。

何だか久しぶりに見上げた夜空は澄んでいて、鮮やかに浮かんだ月面の模様が見える。

「あんた、ちゃんと送ってきなよ」

優子は直樹に向っていった。

「今更大丈夫だって」

直樹はそう言ってニットキャップを頭に被る。

優子が「じゃあね」と手を振ると、舞衣も笑顔で手を振って庭を出て行った。

黒く艶やかな髪が揺れていた。

二人の姿を目で追いながら、優子は玄関に入る。

庭先にいる佐助も、舞衣と直樹の姿をゆらゆらとシッポを振って見送っていた。

自室へ戻ると、ベッドに腰掛けて彼女は考えた。

うっかり出たさっきの言葉……

何時のまにか忍に追いかけられる日常が当たり前になって、突然それを失ってしまった。

そしてあの日々はもう戻らない……

そう思うと、彼に追いかけられたあの頃が懐かしくて遠い日々の幻想のように脳裏に蘇える。

もう戻らないのだから……あの曖昧で複雑で、オレンジの皮をむいた時に香るような甘酸っぱい思いは、もう出来ないのだろうか……

そんな事ない……忍はぜったい元にもどるよ。

あまり考えないようにしていた事を改めて思考すると、暗たんと

した未来と果敢なげな思い出だけが頭を過る。

しちやえばよかったのかなあ……

何故か胸の奥が、苦しくなった。

まるで肺が萎んでゆく気がした。

優子は忍の事を考えて、初めて目の奥が熱くなった。

自分でも何だか判らないうちに、ほろりと雫が零れ落ちて、慌てて頬を拭った。

## 第84話

久しぶりに雨が降った。

天気予報では雪に変わりそうだと言っていたが、結局雨のままだった。

凍えそうな大気から零れ落ちる雨は、氷のように透き通って全てを冷たく呑み込む。

次の日、陽が暮れる頃、優子は久しぶりに佐助を連れて散歩に出た。

前日の雨に濡れて部活をした為か、直樹が熱を出して寝込んでいる為だ。

雨上がりの冷えた路面を、佐助は力強く蹴って爪音を響かせる。

相変わらずよく走るよ。犬が寒さに強いつてのはホントだね。

優子はダウンジャケットに身を包んで犬を追いかけた。

直樹とはどのコースを歩くのか知らないが、優子と佐助は以前と変わらないコースを通った。

佐助はリードを持った相手で、自分が歩くコースを見分けて自然にそちらへ行くらしい。

前日から降り続いた雨が上がったばかりの空はまだ雲がひしめいて、その隙間から微かに月のシルエットが覗いていた。

ぼんやりと浮かぶ銀色の月の上を、薄雲が流れていた。

ぐるりと路地を廻ると、以前高森の住んでいた家の前を通る。

大きな敷地は暗闇に紛れてひっそりと潜むように沈黙していた。

街路灯の明かりを浴びた檜の大きな門扉は、何だかずいぶん古くなった気がした。

こんなにボロかった？ 家も、主を失うと急に古臭くなるのかな……

優子は立ち止まって門柱を見上げた。

佐助が先へ行こうとするので、彼女も再び歩き出す。

先にある公園の中で、優子はポケットから犬用ジャーキーを数本取り出して佐助に食べさせた。

一本を3等分して少しずつ与える。

佐助は指先で摘んだジャーキーを咥える時も、ゼツタイに人の指を噛んだりしない。

正確に言えば、あま噛みして探りながら巧みにジャーキーだけを口にするのだ。

だから、どんな持ち方でおやつを与えても、人を傷つける事はない。

何時だったか、優子がまだ小さい頃、佐助は彼女が指で摘んで差し出したビスケットを咥える時、誤って彼女の指ごと齧ってしまった。

小学生だった優子は痛みと驚きで泣き出した。

佐助は慌てて口を離れたが、優子の泣き声は止まらなかった。

血が出るほど噛んだわけではなかったが、鋭い犬歯が当たった恐怖と確かな痛みでとにかく驚いたのだ。

襲われると思ったかもしれない。

佐助は困ったような、申し訳ないような表情で尾をダラリとさせて、彼女の膝の周りをウロウロした。

優子の泣き声に、何時ものん気な母親も足早に縁側へ来た。

「どうしたの？ 優子」

「佐助が噛んだあ」

鼻水を流して優子は泣き叫んだ。

母親は優子が怪我をしていないか確認すると

「佐助は間違っただけだよ。優子に噛み付くはずないじゃない」

彼女の足元にビスケットが落ちていたのを見て、母親はだいたいの状況は予想がついた。

自分も時々間違っただけとやられる。

母親は何も言わないから、佐助は自分の失態に気付かなかったの

だ。

しかし、それ以来佐助は人の指と食べ物をしつかりと探りながら  
噛むようになった。

もともと仔犬をあま噛みで運ぶ犬は、かなりの微調整ができる。  
人差し指と中指の間に隠すように挟み込んだジャーキーも、佐助  
は巧みに舌先なども駆使しながら指を傷つける事無く上手に掠め取  
ってゆく。

優子はジャーキーを与え終わると、最近ホームセンターのペット  
用品売り場で見つけたペット用スポーツドリンクを取り出して、佐  
助に与えた。

耳をペタリと寝かせて飲む。

もちろん走ったから喉が渴いているのだろうが、彼が耳を寝せる  
のは美味しい物にありついた証拠だ。

そんなに美味しいの？ これ。

優子は佐助の頭をグルグルと撫でる。耳がピクピクと動いた。  
久しぶりの一緒に散歩だから、今日は大サービスだ。

「そろそろ行こうか」

優子の声で、佐助は再び目的を思い出したかのように歩き出す。  
彼女は一度だけ振り返って、公園の植木の向こうに見える闇を見  
つめた。

雨に濡れた雑草の露が、街灯に照らされて微かに白い光を放って  
いた。

「ああ、疲れたあ」

散歩を終えた優子は、佐助に餌と水を与えてリビングへ戻った。

「どうしたの、優子。その格好……」

「はあ？」

母親がマジマジと見るので、彼女はその視線を辿るように自分を  
眺める。



「なんだ、最近はそんな模様が流行ってるのか？」

父親が笑ってお茶を啜った。

優子が履いていたグレーのジャージと上に着た白いダウンには、右半分の肩から足首にかけて、見事なほど綺麗に点線が描かれている。

まるで、ここで切ってください。という感じの切り取り線のようなのだ。

うわっ、なにコレ？

「佐助にやられたわね」

母親は、以前雨上がりの散歩に出かけて同じ模様を付けられて帰ってきた直樹を知っていた。

「こうなるって知ってたら、行く前に行ってよ」

ふと髪を触ると、小さな土の塊が指に触れた。

全然気付かなかったが、泥跳ねは髪の毛まで飛んでいた。

犬の跳ね上げた雨上がりの細かい泥水を、後ろに行く優子は全部受けていたのだ。

彼女は愕然として息をつく

「お母さん、タオル！」

急いでダウンの汚れを濡れタオルで拭き始めた。

## 第85話

忍の手術から5日が経った頃、優子は再び彼の入院している病院の前にいた。

大きな白い建物に、蒼空そうくうの光が映りこんでいた。

彼女は正面玄関の前に佇んで、窓に映る雲を見上げる。

「あれ？ キミ……」

声がして振り返る。

この前会った大学生。杉原一真が立っていた。

「彼、退院したんじゃないの？」

「えっ？」

優子は声にならない声を上げた。

「いや……一昨日来た時、彼の病室の前を通ったけど……彼の姿は無かったから」

優子は杉原の顔をポカンと見上げていた。

「いや……散歩か検査にでも出たのかな？」

杉原も自分の言った事に自信が持てなくなって、思わず頭をかく。最近病室の入り口に名前を出さない事も多い。

「そうですか……」

優子は何と返していいのか判らずに、困惑した笑みを見せる。

「行って見て来れば？」

「えっ、ええ……」

この人、一緒に行ってくれないかなあ……ていうか、それは無いよね……全然関係ない人なんだから。でも、頼んだら行ってくれそう。

しかし、仲間が彼を呼んでいる。

「あ、じゃあ、頑張つて」

爽やかな大人の笑顔だった。

何を頑張るんだよ……

優子は大きなバンに駆け寄る杉原を見送ったあと、ひとつ息をついて玄関の自動ドアをくぐった。

「いなくなった？」

優子は思わず声を上げた。

病室にいない忍の事を看護師に聞くと、最初は誤魔化そうとしていたが、若い看護師が渋々口を開いたのだ。

「何処に？」

「それが判れば苦労しないんです……」

新米らしい若い看護師はそう言って困惑すると、虚ろに床を眺めた。

それもそうだよね。

優子は一階の玄関口まで出て、携帯で舞衣に連絡してみる。

「ああ……とうとうバレちゃったんだ……」

舞衣の困惑している顔が、優子には思い描く事ができた。

「知ってたの？」

「うん……でも、病院から報告があったのも昨日で……」

「何時から？」

「2日前の朝にはいなかったって……あたしも術後に会ったきりで……」

舞衣の声は、何時もよりだいぶ小さい。

優子は溜息混じりに「何処行っただろう……」

「それが判れば苦労しないんですけど……」

舞衣の言葉に、優子は思わず苦笑した。新米看護師からも聞いた言葉だ。

「思い当たる所は連絡してみたんですけど……あまり公にも出来ないから……」

舞衣は深刻そうに続けた。

「そうだよね……」優子も思わず頷く。

「優子さん、どこか心当たりは無いですか？」

「あたしは……ごめん……全然ないかも……」

結局忍の行方の検討はつかないまま、優子は電話を切った。

駅へ戻る足取りは一層重かった。

どうして彼はそう何度もあたしの前から消えるの？ 近づいて来たのは向こうじゃん……

会えなくてもあそこで治療を続けて頑張る忍の姿を思い描けば、ある意味それで満足していた。

しかし……何処にいるか判らない今、何をどう思えばいいのかも判らない。

何れ、忍は本当に消えていなくなってしまうのではないだろうか。本当は、彼は元々存在していないのでないだろうか……

優子はそんな馬鹿げた事まで考え始めてしまう。

もう直ぐ2年生最後の期末試験がある。

忍は何とか参加してくれるような気がしていた優子だが、何処にいるかも判らないのでは試験の受けようも無い。

まさか、学校に姿を現すとも思えなかった。

心なし暖かい陽射しを感じながら、それ以上に少し冷たい風が優子の身体をすり抜けてゆく。

優子は忍が姿を消した事を誰にも言わなかった。

いや、言えなかったのだ。

大騒ぎになる事態を知っていながら、自分の口から先走って発する事は出来ない。

何処からか情報が漏れるのを待った。

誰かから伝わった言葉で、みんなが忍を気にすれば彼の行方は判るかもしれない。

しかし、学校内ではそれに携わるような噂は聞かなかった。

何か自分の知らない事態が起きていて、忍は別に消えたわけじゃないのかもしれない。何か得策があって彼は姿を消したのだろうか  
と、優子は思った。

少しでも好転するような事態を考えたい。

でも、そんなはずは無いのだと、自分で自分にツツコミを入れて  
しまう。

そんな虚しい思いを繰り返すうちに、3年生の卒業式は行われて  
3日後には期末試験が始まろうとしている。

夕暮れの時間が何時の間にか大分遅くなって、西日はどこか暖かい  
光の小波を注いでくるが、今の優子にはそれは届かなかった。

## 第85話（後書き）

いつもお読みいただき有難う御座います。  
ラストに向って話しは動いております。

## 第86話

カーテンの外は静かな闇に浮かぶ月光が、帳とばりの白道はくどうに沿ってゆっくりと動いていた。

机に向ってウトウトしていた優子の携帯電話が鳴った。

彼女は口から零れそうになっていたヨダレを慌てて拭くと、直ぐ横に置いていた携帯を手に取る。

『ああ、姉貴？ 俺』

直樹の声だった。

『どうしたの？』

『今さ、忍さんっぽい人見かけたんだ』

直樹の口から出たその言葉に、一瞬なんの事だか頭が混乱したが、『忍』というワードに反応して、優子の寝ぼけた脳内はあつと言う間に覚醒せしめる。

『何処で？』

『表参道なんだけど……』

『表参道？』

表参道……って、原宿の表参道？

まだ少し、優子の思考は寝ぼけている。

『ああ。でも……』

直樹は言葉を濁す。

『何？』優子はそれに苛立った。

『デッカイバイクに乗ってたよ』

『バイク？』

高森もバイクの免許持ってたのかな？

『ハーレーってヤツじゃないかな。裏路地から出てきて、そのまま大通りを走って行ったよ』

『確かに高森だった？』

『たぶん……フルフェイスのヘルメットを被ってたけど、路地から

出て来た時はシールドを上げてたんだ……左頬はガーゼで覆われてたし、忍さんの眼だったよ」

直樹の口調は多少曖昧だったが、その中には彼なりの確信が見え隠れしていた。

「どうして表参道？」

『そんなの知らないよ』

どうして忍が表参道などをうろついているのか……？ しかもバイクで。

優子にはいくら考えても判らなかった。

「ていうか、あんたこんな時間にそんな場所で何やってるの？」

『あつ……いや、ちよつと舞衣と買い物……』

時計を見ると8時を過ぎていた。

優子は小さな息をつく

「高森を見たのって何時？」

『少し前……7時過ぎくらいかな』

「暗いのが高森って判ったの？」

『姉ちゃん、都内はけっこう夜でも明るいんだぜ』

直樹はやゆしたように嗤う。

そう言えば都内の大通りは、この辺の住宅街とは比べ物にならないくらい明るいよね……

「そ、そんな事判ってるよ」

『確信はないけど、とりあえず伝えようと思ってさ』

「……うん。ありがとう」

優子は携帯を握りなおすと「あんまり遅くならないように帰ってきなよ」

バイク？ 免許はともかく、バイクなんて何処から持ってきたの？ いくらなんでもそんなの買えるわけないし、まさか盗んだりもないよね……いや……もしかしてヤケになって？ いやいや、



高森に限ってそれはないよ。

優子は直樹の電話の後、ベッドにひっくり返って考えていた。その間に母親が帰ってきた物音が玄関からリビングへ入り、間もなく台所で夕飯の仕度が始まったようだった。

父親の直ぐ後に直樹も帰宅して、いつも通り家族で夕飯を食べると優子は再び自室へ戻ってベッドに腰掛けた。

両親は明日からの試験勉強をしていると思っているだろうが、優子自身はそれどころじゃない。

頭の中に何かが引っ掛かって、それを小さな靄が覆っている。テレビを点けると、夜中のバラエティー番組が流れていた。

ゲストの趣味に番組ホストが付き合うという最近よくあるものだ。知った顔の俳優は、大きな公園の駐車場に大きなバイクで乗り付けていた。

踏ん返り返った姿勢で跨るバイクの前輪は、前方に突き出て、陽射しを浴びたシルバーポリッシュのエンジンが、ギラギラと輝いている。

『俺はもう、いまハーレーひと筋っすね。他に趣味はないっすよ』  
テレビの中の男が言った。

ハーレー……そうだ、あれがハーレーだ……

優子は直樹が言ったバイクの名前ではピンとこなかったが、テレビに映ったそれを見てハッと思い出した。

自分の身近にハーレーを持っていたヤツがいる。

篠山だ……篠山が高森に貸したんだよ。ゼッタイそうだ。

優子は勢いだけで篠山の携帯電話をコールした。

『何だよ、こんな夜中に？』

「あんだ、今バイクある？」

『はあ？』

「バイクよ。あの大っきなやつ」

『あ、在るよ……どうしたんだ？ 急に』

「じゃあ、明日見せて」

『な、なんだよイキナリ。乗りたいのか？』

「えっ……う、うん。乗りたい。だから、明日の放課後乗せて」

『いや……実は今修理に出しててさ……ほら、外車は壊れ易いから』  
苦笑する声が聞こえる。

「……高森にバイク貸してんじゃないの？」

『な、なんだよ。それ……』

「今日、あたし見たのよ」

優子は直樹から聞いた事を、そのまま自分に置き換えて言った。

『見たって、何を？』

「高森がアンタのバイクに乗ってた」

『な、何かの見間違いだろ……』

明らかに声は動揺している。

やっぱりそうなんだ。篠山は何かを知ってるよ。

「とにかく、明日の放課後篠山の家に行くからさ」

篠山はあからさまに溜息をつく

『ああ……判ったよ』

## 第87話

放課後、篠山は安西を待たずに逃げるように校舎を後にすると、足早に駅へ向っていた。

「篠山！」

後からパタパタと足音が迫ってくる。

彼には振り返ることなく、それが誰なのか判っていた。

「ちよつと、なにさつさと帰ってるの？」

優子は命イッパイ走ってやっと追いついた篠山に、息を弾ませながら言う。

追いつかれては篠山も、観念するしかなかった。

「いや……そ、そうだ。すっかり忘れてたよ」

「嘘つき」

優子は篠山が走り出して逃げないように、彼のカバンの端を掴んだ。

\* \* \*

「やっぱりね」

優子は声を出して、少しキツイ視線を篠山に浴びせると、マックのプレミアムカフェを一口啜る。

「苦い……」

「こ、ココアの方がよかったんじゃないか？」

「マックにココアは無いでしょ」

何とか話をそらしたい篠山に、優子はピシヤリと返す。

途中の駅で何故か下車した二人は、駅ビルのファーストフードショップに入って顔を突き合わせていた。

篠山らしくないモジモジとした表情が続いたが、「怒らないから、正直に言ってよ」と優子が言うと、渋々語りだす。

昔よく、直樹のウソを暴くときに使った言葉だ。

「で？　どうして高森にバイク貸したの？」

優子は胸の前で両腕を組むと、威嚇いかくの意味で胸を張った。

「いや……少しの間貸してくれって……」

篠山もコーヒーマグを一口飲んだ。ポテトを摘んで口に押し込む。

「おかしいでしょ。入院中の高森にどうしてバイクなんか貸すの？」

「それは……」

「何よ？」

篠山は再びポテトを摘んだ。

「治療にも息抜きが必要かと思っただけ……」

「だって、術後間も無くじゃない……感染症とか起こしたらどうするの？」

舞衣からの受け売りだった。

この前電話で話した時「術後間もないのに、ばい菌が入って感染症にならなきゃいいんだけど……」と彼女が言っていたのだ。

優子は組んだ腕を解いて、苦いコーヒーマグに砂糖を加えた。

「アイツだって辛いんだ。いろいろあったし……1つはウチの親父のせいだけ……」

篠山はコーヒーマグに手を添えて続ける。

「俺も火傷の事を知った時には驚いたよ。ひとみ……安西が暫くそつとしておけって言うからコンタクトはとらなかったんだ」

「じゃあ、病院を抜けてからあんたの所に？」

「ああ。いきなり来てバイクを貸させて」

「それで、黙って貸したの？」

優子に睨まれて、篠山も今更罪悪感が湧き出るものの、間違った事はしていないと思った。

「だから、アイツには今、息抜きが必要なんだよ」

「彼は今何処にいるの？」

優子の視線は篠山を捕らえて離さない「知ってるんでしょ？」  
篠山は口へ入れたポテトを少しの間無言で噛んでいたが、それを飲み込むと渋々口を開いた。

\* \* \*

「お前、明日の勉強いいのか？」  
「別にいい」

二人は都心まで出て山手線に乗ると、原宿駅で降りた。表参道を少し歩いて直ぐ、左手に表参道ヒルズが見える。

篠山に促されるまま、優子は手前の路地を奥に向って入った。

高い建物が陽差を遮って、ほの暗い通りが続いていた。

篠山の家で持っているアパートが、この裏路地の奥に在るらしい。そして、その空き部屋の一室を高森忍に提供しているらしいのだ。父親には黙って、篠山が管理不動産に分けを話し、鍵を借りたのだと言う。

「そんな事して大丈夫なの？」

「ああ、去年の春に俺が家出した時も協力してくれたオヤジなんだ。子供の時から知ってる仲だから」

アンタも家出経験者かよ……ていうか、子供の時からって、今も子供じゃん。

「でも、使っていない部屋なんて、電気や水道は？」

「一ヶ月だけ出してもらったよ」

優子は篠山の行為が悪友ゆえの善意に思えて、それ以上何も言えずに思わず肩をすくめる。

何でそんな事に気を回してんのさ……自分が家出経験者だから、高森の気持ち判るのかな……ていうか、その不動産屋ってもしかして、組系？

優子はすまし顔で歩く、篠山の顔を思わず見上げる。

路地を暫く歩くと、開けた駐車場があった。

その向こうに古びているが、小奇麗な鉄筋モルタルでできたアパートが在る。

「あそこだよ」

篠山が腕を前に突き出して指で示した「でも、いないみたいだ」  
「何号室？」

優子は点々と明かりの零れるアパートを見上げる。

陽が沈みかけて、部屋には電気を燈す時間なのだ。

一階に6部屋の二階建てなので、全部で12世帯ある建物だ。

建物の横には通路に通じる洋風のエントランスがセリ出ている。

「204号室」

篠山が言った部屋を端から数えて確認すると、確かに明かりは点いていなかった。

「何処に行ってるの？」

「そこまでは俺も知らないよ。バイクも見当たらないから、何処かへ出かけてるんじゃないか？」

優子は大きく息をついて辺りを見渡すと、再びアパートを見上げた。

安西のアパートに比べたら大分立派な建物なのに、夕暮れに浮かぶその風景は何処か寒々としていた。

## 第88話

忍が居るはずのアパートで優子は暫く待ったが、彼は何時まで経っても戻ってくる様子がなかった。

明日の試験勉強を全くしないわけにもいかない。

優子は篠山にも促されて渋々自宅に帰ってきた。

しかし、当然勉強なんて手につかない。

開いたノートに視線を落としても、文字を読む気になれなかった。息抜きが必要……篠山の言葉が頭を過る。

今の高森にとって、あたしは息抜きで会える相手にはならないんだ……

カーテンの僅かな隙間から月の光が微かに注いで、カーペットに細い閃光を映している。

エアコンの室外機がカタカタ鳴っている音だけが、静まる夜気に響いていた。

試験の中休みに土日が入るのは、意図的なものだろう。

土曜日の午後、優子は再び新宿へ出ようと思っていた。

明日があると思うと、今日は勉強なんてする気にもならない。

少し前に気晴らしで買った、ハードウォッシュのローライズデニムを履く。

ん？　なんかキツイ……いやいや、こんな感じだよな。

試着の時には気にならなかったが、以外にタイトなデザインで下半身の線がでる。

優子は姿見用の鏡の角度を変えながら、何度も自分の後姿をチェックした。

S L Yのニットパーカーの下は、ユニクロで買ったチエニックだが、彼女にしては上から下まで久しぶりに気を配ってみた。

革……で出来たような合皮のシヨルダーバッグを肩に掛けると、シヨートブーツを履いて玄関を出た。

母親はパートに出た後だし、直樹は相変わらず部活に励んでいる。佐助だけが何かモノ言いたげに、優子を見つめていた。

「なに？ 文句在る？」

優子は佐助にそんな言葉を投げかけると、門を開けて通りへ出る。陽射しが降り注ぐ部屋は暖かったが、通りへ出ると少し風が冷たく感じた。

駅の横断歩道を渡ると、背中から車のクラクションが短く二度鳴った。

嫌なシチュエーションだと思い、優子は素知らぬ不利で足を速める。

再びクラクションが鳴った。

何だか知らないが、ごく平凡なフ抜けたクラクションの音色だったので、優子は周囲を見渡す振りなどをしながら、振り返る。

「やっぱり！」男の声がした。

オンボロの白いバンが止まっている。

助手席の窓から顔をつき出していたのは、忍が入院していた病院で何度か会った大学生、杉原一真だった。

「あつ、こ、こんにちは」

優子は咄嗟にペコリと頭を下げる。

「あ、俺、ここで降りるわ」

杉原はそう言って車のドアを開けると、仲間に手を上げてそのまま降りてきた。

「はあ？ 何で降りるの？ あたし、別に何も言ってないよね。丁度降りるところだったのか？」



「いや、また会いたいと思ってたんだ。今、暇？」

そんなに暇に見えるか？

「いや、あの……」

優子は迷っていた。

実は彼女も、杉原ともつと話してみたいと思っていたのだ。

しかし、これから行く所がある……が、別に待ち合わせでもないし、約束があるわけでもない。

「す、少しなら……」

優子は思わず苦笑する。

「そう。よかった。車降りちゃったし、どうしようかと思った」

ていうか、そういう事だったら、降りる前に訊けよ。

優子はちよっぴり大人の香りがする杉原を見上げて笑った。

二人は何となく歩き出して、線路沿いの国道を当てもないのに進んでいた。

「何処か、出かけるところだったんじゃないの？」

「えっ、ええ。ちよつと……でも、別に約束とかはないから」

年上の男といたら、父親が学校の先生くらいしか並んで歩いた事なんてなかった。

そう言えば、この前連れまわされた中村輝も年上だが、アレは既に問題外だ。

しかし、優子は思いのほか自分が落ち着いている事に気付く。

以前から感じていた事だ。

彼の存在は、何故だか優子の心を落ち着かせる。奇妙な緊張がないのだ。

それとも、彼女なりに男慣れしてきた証拠なのだろうか。

「あの彼、どうした？」

「あ、ああ。ええ……」

優子は思わず俯いて言葉を濁す。もちろん、高森忍の事だ。

「訊いちやマズかったかな？」

杉原はそれほど長くない前髪をかき上げた。

「あつ、いいえ。何処かへ行っちゃったみたいで……」

「何処か？」

「脱走したみたい……」

優子は、杉原を見上げて、わざと笑ってみせる。

杉原は少しだけ沈黙して<sup>そら</sup>髪を見上げた。

優子の言った事に、特に大きな驚はないようだった。

彼女もつられて、顎を上げる。

薄雲が視界の隅に僅かに漂うだけの、<sup>そつくう</sup>碧空が広がっていた。

「たぶん……」

杉原が呟く。

上を向いてるせいか、優子にはよく聞こえなかった。

「え？」思わず聞き返す。

「たぶん、少し疲れたんじゃないかな。少し、休みたいんだよ」

「休みたい？」

入院してるんだから、充分休んでるんじゃないの？ でも、

そう言えば篠山も同じような事言ってた。

杉原は優子を見下ろした。

何時でも包んでくれそうな、包容力が全身に漲るような笑顔だ。

優子は思わず頬が熱くなるのを感じた。

「入院ってさ、外の人から見るとダラダラ楽そうに見えるけど、患者にしてみたら働いているくらいしんどいものなんだ」

「しんどい？」

「ああ。毎日決まった時間に検温して、その日によって検査、検査、また検温。辛い治療だってある。その合間に、これまた毎日決まった時間に食事。個人の意思は問題じゃない」

杉原は大学のサークルでボランティアをしている。

いろいろな病院を廻って、小児ガンに苦しむ子供や高齢者の重病患者に幾度となく接している。

彼らに共通して欠落しているのは、毎日の検査や治療、決まった食事以外の娯楽や安らぎなのだ。

普通に生活していれば、仲間や友人たちとの関わりの中で、楽しさを経験する。もちろん、嫌な思いだつてするけれど、心から笑うような出来事も少なくない。

しかし、病院の中にはなかなかそう言つた出来事はないのだ。

重病患者の仲間は、同じく命にかかわる病に侵された者が多い。現実の苦悩から逃れられないのだ。

杉原は、簡単にそれを優子に話して聞かせた。

「だから、紙芝居や人形劇をやるの？」

「ああ。逃げ出したい気持ちだが、少しでも安らぐようにね」

杉原の笑顔に、優子も笑みを返す。

「なんか、凄いな」

優子は杉原の言葉で、初めて忍の抱える苦悩に少しでも共感できた気がした。

そして、そんな事を考えられる杉原一真を、改めて大人だと思つた。

もちろん自分に比べたら大人なのは当たり前なのだが、あと二年で自分もこないかにも大人な考えが出来るようになるのだろうか

……

他人の事を、そこまで考えられるようになるのだろうかと思つた。しかし……つい歩き過ぎてもう直ぐ隣の駅に着いてしまう事を、

優子は言えずにいた。

## 第88話（後書き）

次回も杉原一真とのエピソードです。  
お楽しみに！

## 第89話

「ご、ごめんなさい……あたし……」

優子は杉原の腕の中で呟くように言った。

\* \* \*

線路沿いの国道は、途中で踏み切りを渡るが、県道が線路に沿って続いていた。

それをブラブラ歩いていた二人は、隣駅に着いてしまった。

「あつ、隣駅まで来ちゃったね」

歩道脇の金網越しに駅のホームが見えて、杉原も気付いた。

遅くない？ 意外と話好きなのか？

優子は苦笑しながら「そ、そうだね」

「ど、どうしようか？」

杉原が、初めて苦笑する。

どうする？ って、アンタが声かけて来たんじゃない。

とりあえず二人は、駅前のカフェに入る。

ハードロックカフェに似た看板だが、アートロックカフェと描いてあった。

「悪いね、急につき合わせちゃって」

「うん。全然平気」

優子はテーブルに出されたばかりのミルクココアをそつと啜る。

「でも、アレだね。女子高生って、もっと意味不明の言葉で喋ると思ったら、普通なんだね」

なんだよ、意味不明って……同じ日本人だつづうの。

「相手によつて、ちゃんと変えてるよ。みんな」

「そつだよな。俺たちだつて、そつだもんな」

「そつなの？」

「敬語とタメ語だつて、そつだろ」

あつ……あたし、敬語使つてないよ……年上なのに。

「あ、あの……敬語の方がいいですか？」

優子はココアの入ったカップを両手で包み込む。

瀬戸のマグカップから手のひらに伝わる温もりは心地よかった。

「あつ、いや……そつじゃないよ。例えば、仕事場とプライベートじゃ話し方も言葉も違つて事さ。キミとは友だちだから、敬語は  
いらないよ」

「よかった。やっぱ女子高生だ。とか思われたら、なんか嫌だし」

「嫌なの？」

杉原は、少し困惑した笑みを零して楽しそうに言った。

「嫌つていうか……なんだか、何も考えずに生きてるみたな言われ  
方がイヤ」

真剣な顔で主張する優子に、杉原はハハツと声を出す。

そ、そんなおかしな事言つてる？ あたし。

「直ぐに解るさ。キミが悩みを抱えてる事も、それを吹っ切ろつと  
頑張つて笑顔を探して取り出すようにしてることも」

杉原は自分の小さなカップに入つたコーヒーを口にして

「少なくとも、俺にはね」

優子は、その言葉がもの凄いいスピードで、一瞬の瞬きと同時に心の奥まで沁み入るのを感じた。

何かが胸元に競りあがつて来る気がして、言葉は出なかった。

誰にも言っていない自分の、自分なりの苦悩。

この数ヶ月、人知れず彼女は彼女なりに苦悩してきた。

心の中を見透かされているような羞恥心と同時に、人の温かさを  
感じた。

これなんだ。この人といてなんだか落ち着くのは、こういう事だったんだ。これって、なに？

優子の瞳は僅かに潤んで、窓から入る陽射しに輝いていた。瞬きしたら何かが零れ落ちる気がして堪えた。

「俺、大学で精神医学とか専攻しててさ。病院に出入りしてるせいもあって、人の心についていうか、感情に敏感なんだ……」

「それって、ラッキー？」

「いや……常に顔色を見てしまうつて言うか、こころの奥を考えてしまう」

だよね……

「で、でも、何だかホッとする」

優子は目を細めて、鼻の頭にシワを寄せて笑った。

「ホッとする？」

「杉原さんというと、ホッとするよ」

優子は自分でもちよつと可愛いかな。と思うような笑みを返してみた。

特に意味は無い。

自分の苦悩をすくい出して見据えてくれたお礼だ。

「俺も、ホッとする」

はあ？

「えっ……？」

「最初に逢った時から、なんだかホッとする娘だなんて思ったよ」

な、なに言い出すんだよ。

杉原はコーヒーを飲み干して、隣に置いてあった水をグイッと口に入れる。

「だから……」

もう一口水を飲んだ。

「いや、彼氏もきつと、キミのそんな所が好きなんじゃないの？」

「か、彼氏じゃないんです。別に……」

杉原は白い梅の花を思わせるような、澄んだ笑顔で優子を見つめ

ると

「そうか」

優子は彼の視線を避けるように、ココアのカップを口に着けた。

「そろそろ出ようか」

「あ……うん」

レジで会計を済ませると、二人はカフェのドアを抜ける。

3段ぐらい低い段差になって通りの歩道へ出るのだが、優子は2段を越えて安心してしまった。

「きゃっ！」

3段目の小さな段差で、ブーツの靴底がゴロリと横を向いて、身体バランスを崩す。

杉原は慌てて彼女を支えた。

長くてガツシリとした腕が、意外とか細い優子の肩を包む。

転ばないように優子の身体を引きつけると、自然に彼女は杉原の腕の中に納まった。

「ご、ごめんなさい……あたし……」

優子は上目遣いに杉原を見つめる。

一瞬、時間は停まったと思えるほど辺りは静寂に包まれていた。

空気は静かに、ゆつくりと動いている。

彼の息使いが聞こえた。

優子は確かに高鳴る自分の鼓動を聞いた。

が……

「あははははっ、キミ、そそっかしいんだな」

そう言われると思ったよ……



## 第90話

「マジで！」

試験の休み時間、一葉が叫ぶ。

周囲の何人かが振り返ったのを見て、彼女は慌てて口をふさいだ。  
週が明けて、期末考査は続いていた。

「マジで別れちゃったの？」

確認するように再び問う相手は、里香だった。

優子も興味津々で、彼女たちの話しに聞き入る。

「だって、あんなにラブラブだったじゃん」

「うん……それがさ……怒ると怖くて……」

「怖い？」

「最近機嫌が悪いと殴られる」

優子と一葉は同時に目を丸くした。

「殴る？」

一葉は優子と顔を見合わせてから「手で？」

「うん……グーで」

「グーで？」

再び大きな声がする。一葉と優子が同時に声を発した。

グーで女を殴る男なんて、ホントにいるんだ。

「最低だね」

優子はポツリと言う。

「そうだよ、最低だよ。そんな男はとつと別れて当然」

一葉は少し興奮気味に早口になる。

「やっぱそうだよね……でも、普段は優しいんだよ」

「それはまやかしたよ」

「まやかし？」

「女を征服しようとするまやかし。普段は優しくして、俺がこんな  
にお前の事を思ってるのに……て感じなんでしょ」

「そうなの？」

一葉の言葉に、優子が声を出す。

「そうかも……」

里香は少し俯いて笑った。

ほんの一瞬だったが、優子は里香のそんな淋しげな笑みを始めて見たと思った。

その時チャイムが鳴って、深刻な話もあつと言う間に終わりを告げ、彼女たちの頭は試験問題を解くために仕事を始める。

優子は解答用紙を半分埋めた時、チラリと里香の背中を見た。

不思議なくらい平気で問題用紙に視線を落として、悲しげな面影は既に皆無だ。

おそらく、それが彼女のキャラなのだろう。

そのステージで気持ちを切り替えるスイッチが在るのだ。

里香がシャーペンを咥えて天井を仰ぐのを見る。

あれは別れた男に苦悩してる姿じゃないな……どう見ても、因数分解が解らなくて苦悩してる顔だ。

優子はクスリと小さく笑うと、再び問題用紙に視線を落とした。

放課後、久しぶりに安西が優子に声をかけてきた。

「忍、篠山のバイクで家出したんだって？」

「いや、家出っていうか、病院だから脱走……」

「しょうがないなあ……」

窓際の机に寄りかかって、安西は外を眺めた。

久しぶりに見る安西の横顔は、白くて透き通って……優子には何だかそれが、新鮮な野菜でも見ているような瑞々しささえ感じた。

「で？ 見つかったの？」

優子は黙って首を横に振る。

「住んでる場所は聞いたんでしょ？」

今度は首を縦に振った。

「安西も聞いたの？」

「訊かないよ。あたしは」

安西は小さく笑った「だって、それはもう、アンタの役割じゃん」  
篠山は、忍が病院を抜け出した事と、自分が彼にバイクを貸してしまった事だけを安西に話した。そして、それが優子に知られて行方を聞かれた事も。

安西は篠山の話す事だけを静かに聞いた。

後は優子がどうするかだ。自分には何もできない。

彼女はそれを判っていた。

「ねえ、篠山は安西の事叩いたりする？」

「はあ？ なに、それ」

「怒った時とか、喧嘩した時とか」

安西は優子の方に身体を向けると「そんなわけないじゃん」

黒髪をかき上げる。

「あたしはアイツを叩くけどね」

それを聞いて、優子は吹き出した。

「篠山、喧嘩強いんだよ」

「そんな事知ってるよ。でも……」

安西は少しだけ言葉を切って息を吞むと、優子から視線を外す。

「でも、篠山は喧嘩が強い事を男の象徴だとは思ってないよ。誰かを守る時、自分を守る時の手段だって知ってるのよ。だから、それ以外で誰かを叩いたりしないよ」

安西は少しだけ照れくさそうに校庭を見つめたまま言った。

篠山の事、そんなに知ってるんだ。もう、なんでも判っちゃうんだ。

優子は何だか知らずに笑みが零れた。

「何よ？」安西が振り返る。

「な、何が？」

「いま、笑った」

「笑ってないよ」

「ゼツタイ笑った」

昼の陽射しと開放感にうつろぐ試験の終えた放課後。

部活の無い校庭も校舎も閑散として何処か寂しげに沈黙しているのに、二人の時間は暖かく緩やかに過ぎて行った。

## 第90話（後書き）

次回更新はゴールデンウィーク明けになると思います。

## 第91話

試験の間、優子は帰りにそのまま表参道まで行って、2時間うつき、それから家に帰って翌試験の勉強をした。

彼は何時もいないまま、出会う事は無かった。

一日中張り込みたいけれど、試験が終わるまではそうも行かない。試験が全て終わった日、一葉と里香がカラオケと買い物へ行こうと優子を誘う。

彼女も少し息抜きがしたいと思ったし、明日からいくらでも忍を探せると思うと、小休止のつもりで二人に付き合うことにした。

渋谷まで出てカラオケをした後、暫くブラブラしていた三人だが、マックに入って他愛無い話が飛び交う中で、里香が唐突に表参道に行きたいと言った。

「オーブン以来行ってないからさ。久しぶりに行こうよ」

表参道ヒルズの事だ。

半日一緒にいて、他愛無い話を積み重ねた事で気持ちが無時もより開放されたのか、優子もついでのように突然切り出す。

「実はさ……今高森って、表参道にいるみたいなんだ……」

「はあ？」

一葉が声をだす「高森は病院でしょ？」

「実はさ……」

優子は自分でも納得していない事実を話して聞かせた。

高森が一度目の形成手術の後、病院を抜け出して姿を消した事。どうやら、篠山の家が所有しているアパートに隠れている事。

「なんで言わなかったの？」

一葉はコーラのカップを手で潰す勢いで言う。

「だ、だってさ……なんて言ったらいいか判らないし、あたしも何だかわけ判んなくて」

「じゃあ、早く行ってみよう」

「一葉、それは無いよ」

里香が言った「表参道までは一緒に行っても、高森の隠れてるアパートにあたしたちが行くのはマズイって」

「そ、そうか……」

一葉はコーラの残りを、音を立てて啜ると

「とにかく向おう」

そう言って立ち上がった。

優子は二人から離れて、高森のアパート。正確には彼のアパートではないのだが……そこへ行って見る。

しかし、ヤツパリ高森の姿も気配もそこには無かった。

いったい何処に行ってるんだろう。本当にここに隠れてるの？

優子は別行動の友人たちが気がかりで、アパートの周りをぐるりと廻ると、その場を後にした。

「どうだった？」

一葉と里香の待つ場所で合流する。言葉を発したのは一葉だ。

優子は小さく頭を横に振って、わざと明るく笑う。

「やっぱりいなかった」

「そうか……」

三人は明治通りと表参道が交差する歩道橋を登って、西の空に沈みかけた太陽を眺める。

高層ビルの黒い影の谷間に、オレンジ色の夕日が浮かんでいた。

優子は手すりに片手をかけると、もう一方を前方に突き出して宙を掴む。

手が届きそうなほど、夕陽が大きかった。

一葉も手すりに腕ごと絡めるように、身体をくっつけた。

「楽しい試験休みも、優子には苦難だね」

「そうでもないけど……」

「優子も新しい男捜せばいいのに」

里香が背中の手すりに寄りかかる。

「あんたと優子は違うの」

一葉が里香の腕を押した。

ビルの長い陰は、街並に逸早く暮色を忍ばせ、車道を行き交う車にはヘッドライトがポツポツと灯り始めていた。

後を行き交う同じ年頃の声が、高い笑い声と共に過ぎてゆく。

「あつ」優子が小さく叫んだ。

「なに？ どうしたの？」

一葉は優子に振り返ると、彼女の視線を追う。

「あのバイク……」

「バイク？」

歩道橋の直ぐ下の車道に、信号待ちで停まったアメリカンタイプ  
の大型バイクが見える。

そのアイドリングは、周囲の喧騒から秀でた音を奏でていた。

「あれ、高森だ」

「うそ？」

一葉が首を伸ばして覗き込む。

「ゼツタイ高森よ。あれ、篠山のバイクだもん」

「ああ、言われてみれば篠山らしい音がしてるかも」

一葉と一緒に、里香も身体を返して車道を見下ろした。

「優子、行かないの？」

「そうだよ、あんた、早く行きな」

一葉が優子の腕を取る。

「えっ、で、でもさ……」

「バカ、早く行けって」

一葉は彼女の身体を手すりから剥がすように腕を引っ張ると、背  
中をバンと叩く。

「早く、信号変わっちゃうでしょ」

一葉はモタモタしている優子の腕を掴んだまま走り出した。

サラリーマンと肩が触れて「あ、ごめんなさい」と言いながら、



意識はそれどころではない。

「早く、早く！」

階段の手前で優子の腕を放し、背中を再び叩いて強く押す。交差する信号が黄色になって、右折の矢印が点灯する。

「早く走れ。早く！」

優子は一葉に後押しされて、階段を駆け出した。

「もっと速く走れ！」一葉の声が再び背中を押した。

肩に掛けたスクールバッグを握り締めて、優子は一段とびで階段を駆け下りる。

階段を上ってくる人波を掻き分けると、それらの視線が行き過ぎる彼女を追った。

不完全燃焼で燻されていた想いが、唐突に湧き上がって真っ赤に燃え上がる。

鼓動が跳ね上がって、激しく胸を叩くのは走っているからではない。

想いに決着をつけたい……いや、そもそも想いに決着などつけられるのだろうか……

ローファアの踵が、足から外れそうになって浮き上がった。膝上丈のスカートが、走る風で舞い上がる。

歩道を横切るとき、信号が青に変わるのが見えた。

優子は止まらなかった。

以前の彼女なら、諦めて立ち止まったかもしれない。

しかし、今の優子には彼と歩んだバックボーンと、背中を押してくれる友人達がいる。躊躇する事無く、そのままの勢いで車道へ飛び出して、停止線の最前列にいた忍のバイクの前に飛び出た。

ダダダッと、ハーレーのエンジン回転数が上がった。

唸りを上げたバイクは走り出そうとしたが、直ぐにブレーキを掛けて止まる。

沈むフロントホークと一緒にグッと前方に揺れたヘルメットが、優子を見つめた。

「忍！ 高森忍！」

優子は肩で大きく息をしながら、周囲の喧騒に掻き消されないように、仁王立ちのまま精一杯叫んでいた。

心臓が張り裂けそうなほど騒がしい動悸を奏でて、バイクの騒音までも飲み込む。

ヘッドライトの燈した車の群れが傍らを次々に流れて、優子は光の帯に包まれた。

## 第91話（後書き）

何時もお読みいただき有難う御座います。

加筆・修正の調整にもありますが、あと2話で完結予定です。

渦巻く展開にお付き合いくださる読者の方々に、大変感謝いたします。

## 第92話

ビルのミラーガラスに映り込む夕陽が、姿を消そうとしていた。煌々と燃える炎が、闇に溶けてゆくようだ。

忍はバイクをゆっくりと歩道脇に寄せて停めた。

イグニッションをオフにしてエンジンを停止させると、幻聴が途切れたような一瞬の静寂の後に、街の雑踏が割り込んでくる。

「無茶するなよ。危ないだろ」

紅いイナズマが描かれた黒いフルフェイスのヘルメットを被ったまま、シールドだけを上げる。

優子は彼を呼び止めたものの、その後の言葉が出なかった。

激しく息を弾ませる呼吸は、まだ収まっていない。

夕陽が消えても、空には横道光が残り火を燈している。

「どうして……」

優子は言いかけた言葉を呑み込むと大きく息を吸って

「そろそろ、病院にもどろ」

穏やかな口調が、自然に口から出る。

一瞬で選んだ言葉だ。

しかし、忍は視線を僅かにそらす。

通りの向こうで、タクシーがクラクションを鳴らす音が聞こえた。正直、優子には何故忍が逃亡したのかは、まだ理解できない。

杉原の言った言葉は理解できるし、それによって忍の苦悩を僅かながら共感できた。

しかし、姿をくまます行動は理解出来なかった。

篠山が言った、休息の意味も靄のかかる山頂を眺める感じだ。

それでも彼のキズの痛みは、理解できる。

自分だって、顔の半分が火傷で醜くなってしまったら……今の自分とびきり美人だとは思わないけれど、やっぱりそうになったら生きるのが辛くなると思う。

何処まで完治するか解らない不安と毎日直面して日々を送るなんて、やっぱり耐えられないかもしれない。

今の彼には支えてくれる家族もない。

それでもやっぱり、優子は忍に怪我の治療をして欲しい。

何処まで快復するのか全く解らないけど、とにかく元気になって学校へ戻って来て欲しいのだ。

それが一番の彼女の願いだ。

バイクのシートに座ったままの忍へ近づいて、優子は腕を伸ばした。

彼女は忍の顎にかかったヘルメットのストラップを外す。

「前に篠山におそわったから、解るんだよ」

忍は何も言わなかった。

ただ、顎紐に添えた自分の指先を見つめる優子を見ていた。

彼女は彼のヘルメットを力いっぱい持ちあげる。

焼けた髪の毛も、大分生えてきていた。

焼けていない部分はそれに合わせて少し切ったようだが、毛先は全く揃っていない。

「ボサボサだったから、適当に自分で切ったよ」

優子の巡らす視線に、忍は少し不揃いの髪の毛をクシャクシャとかいた。

「言ってくれば、あたしが切ってあげたのに」

彼女の言葉に、忍はようやく笑顔を零した。

「お前、そんなの出来ないだろ」

「失礼な、アンタが自分で切るよりは上手に出来るよ」

彼女はそう言って、さり気なく彼の髪の毛に手を触れた。

顔の左半分は相変わらず痛々しく、目の上と頬にガーゼを貼っている。

綺麗なガーゼも、自分で交換したのかもしれない。

視線は優子の方が上にあって、僅かに忍を見下ろせた。

久しぶりに、彼を間近に感じた。

他愛ない会話は、長くは続かなかった。

それでも、優子は今までに無く忍を愛おしく思った。

それが母性なのか愛情なのか、そんな事は自分でもよく判らないし、解る必要はないと思った。

もつと彼に触れたかった。

彼の温もりを感じたかった。

息使いを共有したかった。

「あたしは……」

言葉を呑み込む優子を、忍は微かに見上げていた。

耳の奥で自分の鼓動が響いてくる。

それは、忍も同じだったかもしれない。

「あたしは、忍の外観に惚れたわけじゃなんだからね」

優子は初めて自分からキスをした。

唇に集中した意識は、彼の温もりも息使いも、その全てを熱く捉えた。

頬に貼られた大きなガーゼから、微かに消毒液の匂いがする。

街の雑踏は暮色に浮かぶ光の時間に変わろうとしていた。

優子と忍の姿を誰も振り返る者などいない。

歩道橋の上から二人の友人だけが、熱い視線で見守っていた。

「バイクの免許持ってたんだ」

「いや……」

「無免許？」

「交通法規は知ってるよ。後乗ってくか？」

「止めとく……」

## 第92話（後書き）

次回、最終話です。

## 最終話（前書き）

最終話です。

おそらく、いままで全話を読み重ねて下さった方と、飛び飛びで読んで下さった方は、全く感じるものが違うかもしれません。

ラストの感じ方は、優子の積み重ねた生活を知る分量に比例いたします。たぶん……



## 最終話

病院へ戻った忍の怪我は、順調に快復した。

忍が子供を助けた火災現場の家は、シノテックの子会社の幹部社員宅だった。

忍の高額な治療費は、彼が救った子供の親が全面的に負担する事になり、二度の形成手術が無事行われた。

そして、三度目は今までの術後の傷を消す手術だったそうだ。

篠山の父親が何かをしたか誰にも判らないし、篠山も何も言わない。

ただ、深謝しんしゃの意を表す為に一度だけ顔を出したきりの両親が、急に息子の命の恩人うやまを敬い出したのは確かだ。

治療の経過の合間を縫う様に、忍は春休みの学校へ通って補習を受けた。

出席日数はギリギリだったようだが、こんな時、日頃の成績がモノをいうらしい。

ほとんどの生徒が新しいクラスに馴染んだ4月の終わり、忍はみんなに遅れて新学期を迎える。

彼は新しい携帯電話を持つと、真っ先に優子にメルアドと番号を教えた。

優子は彼の識別着メロに、トトロの挿入歌『さんぽ』を選んだ。

ずっと『步こうマーチ』とか勝手に名前を付けていたが、少し前に一葉が無料着メロサイトからダウンロードしてくれてよこしたのだ。

「步こうマーチって名前じゃないんだね」

「そうらしい……」

一葉も優子につられて、勝手な名前で覚えていた。

忍が進級して初登校した朝、優子は後ろから彼を見ていた。

彼がその日から登校すると判っていたから早めに家を出たら、同

じ電車だったのだ。

しかし、彼女は忍に声をかけなかった。

校庭の端に植えられた小さな桜並木は満開で、風に舞う花びらが何処か果敢なく優子の目には映った。

忍の左の眉はまだ少し無くて、左右の長さを調整して眉ペンシルで描いていた。

一部の髪は焦げて無くなったが、頭皮は火傷していなかったので、綺麗に短くカットしてそろえると、なかなか見栄えがイイ。

短髪にすると、綺麗に通った鼻筋が際立つ。

頬には微かに傷跡が残っているが、時期それも消えるようだ。

何だか新宿にいそうなホストっぽい。なんて言う連中もいたが、それがまた彼の人気を引き立てた。

傷を負った悲しい過去を持つホスト。そんな哀愁漂うイメージだろうか。

\* \* \*

ゴールデンウィークも過ぎ去って、三年生最初の間置審査が始まる頃、抜けるような青空に吹く風は、もう充分に初夏の香りがした。

連休後に始まった高校総体に沸き立つ中で、忍は完全に学校へ溶け込み、部活最後の大会でスターティングメンバーとして試合に出場した。

何事も無かったかのよに、彼のまわりには他校の女子が群れを成す。

遠い……あの人は遠くにいる。きっとコレが正確な距離なんだよ。

試合会場の片隅で、優子はゲルマニウム灯の淡い光源を見上げ

る。

時間は確実に流れて、高校生活の新しいページは捲られた。

「優子、最近高森と全然会ってないんじゃないの？」

帰りの駅で、一葉が言った。

里香は失恋一ヶ月で新しい男を見つけ、ゴールデンウィークは幸せ満開だった。

「うん……なんかさ、やっぱりクラスが違うと距離は離れるのかな……」

優子は少し伸ばして明るく染め直した髪をかき上げる。

三年生になった優子は、忍とは別のクラスになった。

安西とも離れて、彼女とはもう全く会話を交わす機会はない。

篠山は相変わらずで、クラスが違っても廊下で会うと声をかけてくるが……

暫く前まで一緒に過ごした連中も少しずつ距離は離れて、別々の時間を過ごす事が当たり前になった。

強風に煽られて制止したゴンドラの匂いも、寒空の下で観た花火の果敢なげな彩りも

ハーレーで走り抜けたレイブリの降り注ぐイルミネーションも……  
今は蒼い虚空の果てに霞む、幻想的な白い月のようだ。

それでも一葉との仲は、まったく変わらない。

再びクラスも同じになった。

やっぱり、教室が同じっていうのは特別なんだ……何時も同じ空気を共有する事は、何にも変えられない貴重な事なんだ。

最近優子はそんな事を思う。

自分から忍にキスをした時に、彼への思いは完結したのかもしれない。

もちろん入院中は何度も見舞いに行ったが、退院してから逆一緒にいる時間は減っていった。

忍は部活にも復帰し、ペースを戻すのに大変そうだった。

光る汗を迸らせて自分を取り戻そうとしている彼に、優子はあえて近づかなかった。

彼の邪魔にはなりたくなかった……

限られた高校生活の時間は、瞬く間に進化を遂げる。

そして、人の縁というのは必ずしも明確な境界線が在るとは限らない。

同調して交わって、もう離れられないと思っていても、気付いたら何時の間にか遠く手の届かない場所へ離れている場合もある。

「まあ、春は別れの季節って言っしね」

一葉はわざとおどけて、でも優しく笑った。

「そうなの？」

「前に、そんな歌なかった？」

「しらなあい」

なんだかわけも判らず、二人同時に声を出して笑う。

どうでもよかった。

どうでもいい事に頭を使って、笑いたかった。

そうしないと、何時でも心は萎<sup>しお</sup>れて涙が零れそうだった。

「ねえ、どつかでお茶して行こうか」

電車に乗り込んだ時、一葉が言った。

二人は隣の駅にあるミストに寄り道して時間を費やす。

定期を持っているから、途中何処で何度乗降を繰り返しても平気なのだ。

目先の持て余す時間はいくらでもあった。

「優子は進路どうするの？」

「映画の字幕とかやりたい」

「あんた、英語全然ダメじゃん」

「やっぱ、ダメかあ……」

優子は想像できた彼女のリアクションに苦笑した。

「でもあんた、意外と奇跡とか起こせる素質があるのかもね」

一葉は少し真面目な顔で言うと、シヨコラドーナツを片手に笑いを零す。

なんだよ、奇跡って……高森忍か？

「じゃあ、一葉は？ どうすんの？」

「あたしは……どうしようかなあ」

一葉は窓の外を遠く見つめた。

そんな現実的な会話が、どこか仕方なしに口から出てしまう時期に入っていた。

再び電車に乗って帰路につくと、先に降りる優子に一葉は何時ものありふれた風景に囲まれて手を振る。

「じゃあね」

何時ものありふれた笑顔だ。

でもそれは、いかにも穏やかな日常を象徴するものに他ならない。優子も何時もと変わらない、ありふれた笑顔を返す。

時間は通り過ぎるものなのか……それとも訪れるものなのか。今の時間を貴重だと……だったと、彼女たちが感じるのはまだまだ先の事だろう。

今はただ、次々に迫り来る時間の波を掻い潜るのが精一杯だ。時にはぶつかって溺れかける事もあるけれど……

夕陽が紅色に雲を染め上げて、それが街並<sup>くれない</sup>全てを淡く照らしていた。

走り去る電車を振り返らずに、優子は駅のくすんだ階段に右脚を乗せる。

琥珀色に染まる暖かい風は、プラットホームを吹き抜けて優子の後ろ髪を揺らすと、そのまま遠くへ飛んでいった。

電車のノイズが遠ざかると、辺りには人波の残像とごく僅かな雑踏だけが残っていた。

優子はふと気付く。

カバンに入れたままの携帯電話が、お気に入りの曲を奏でいること  
とに……

E  
N  
D

## 最終話（後書き）

最後まで読んでくださった方に、大変感謝いたします。

かなりコメディー色の強い前半で喰い付いた読者の方は、思わぬ暗い展開に驚いて離れてしまったかもしれない（苦笑）。

これはラブコメではありません。

ただ、個人に降りかかる苦悩の分量を、上手く書けたか自信はありません。

後半は次第に描写文が増えて、慌てて減らしたりする事も、しばしば（苦笑）。

中盤、安西の家庭やその他について、あえて深入りしない部分もありました。

とにかく、少しでも覗いていただいた方、最初から最後まで読んでくださった方々全てに感謝いたします。

有難う御座いました。

tokujirou

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0077d/>

---

琥珀色の風

2010年10月8日13時19分発行